異界転生譚

紅工房

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異界転生譚

【Ｎコード】
Ｎ９５３５Ｗ

【作者名】
紅工房

【あらすじ】
基本的に原作はぶち壊すもの的なノリでやっていく、転生もののＳＳ。
好き勝手に妄想垂れ流しながら書いていくので、「大丈夫だ、問題ない」な方以外は戻るを推奨します。
もう、例によって例の如くオリ主です。チートです。厨二病です。

「チートで転生で厨二病か。その旨をよしとする！」

という方以外はやっぱり戻るを推奨します。

一応、台詞の時にキャラ名が表記されています。台本っぽい書き方に抵抗のある方は再三ですが戻るを推奨します。

あと、筆者は基本的にハッピーエンド好きなので滅多にないと思いますが、誰が死んでも怨むなよ？

最近の一言

ギャグが難しい

転生。始まり。説明。（前書き）

全ての始まり。
物語前夜話的な。
プロローグですらないです。
だからまだオリジナルキャラクターしか出ません。

転生。始まり。説明。

――曰く、世界とは常に分岐を繰り返し、無限に広がっていく。

――曰く、その中であぶれてしまった世界を外史と呼び、現実と違う歴史を刻んでいく。

――曰く、神様は暇らしい。

「あーうー、あーだーだー」

喋れないって滅茶苦茶不便！記憶継承も楽じゃないねこんちくしょう！！

俺の名前は鵲　雅也。二次元大好き妄想大好きな、所謂オタクだった人間だ。無職のフリーターで、細々と趣味の小説を書いたりしながら深夜のコンビニで働いていた。そして厨二病という不治の病にも犯されていた。ここ重要。

そう。あれは今の俺になる前の話だ。

少しだけ、語らせてくれ。

◇

いつも通り、俺はコンビニの店頭に立ち、深夜だから結構暇を持て余していた。

少ない客脚。来ても買ってくのは酒とか酒とか酒とか近藤さんと

かタバコとか酒とかだ。

近藤さんの時は大抵心の中で小さく笑うか、憤慨しながらレジの仕事を全うする。リア充死ね。氏ねじゃなくて死ね。

とまあ、そんな感じでいつも通りの生活を送っていたんだがな。何の悪戯か、現れたのさ。

神「私は神である」

雅也「……おかえれくださいませー」

どう考えたって不審者です。本当にありがとうございました。そう思っていたのさ、当時の俺は。いや、今思い出しても不信感バリバリの電波でしたけどね。神「えー、この度は大変申し訳ございませんが、鵲雅也様には死んで頂くことになりました」

やる気の感じない口調と共に、突如として突きつけられる銃口。種類はわからないが、とりあえず拳銃がそこにはあった。

神様が何故にんなもん持っているのか疑問だが、当時の俺の反応は。

雅也「は？」

だったわけで。黒光りする銃身にどうせ偽物だろうと怯えず、眉を顰めていた。

神「つーわけで、死ねおやぁぁぁぁあっ！！」

撃たれた。死んだ。スイーツ（笑）

◇

次に目が覚めると、そこはまた可笑しな空間で。銀河みたいなのが無数に渦巻く宇宙に立っていたんだよな、俺。　はっ、となり辺りを見渡せば俺以外誰もいなくて、何となく手の甲を確認したわけさ。

普段、俺は明晰夢を見るために寝る前は必ず菱形のマークを手の甲に書いていた。夢の中でそれをして、そこにマークが無かったら夢だと意識出来るからだそうだ。

だから見た。確認した。そこには、マークがあった。

雅也「夢じゃない、だと……？」

なんということでしょう。これは夢じゃないらしい。って信じられるかぁぁぁあっ！！

雅也「第一に俺バイトしてただろ！寝る前じゃねぇし無かったら現実だろ俺！冷静になれ畜生！！」

というわけで、冷静に考えるとここは夢の世界。なんというか、我ながら厨二病だなと思う。再度見渡して得た感想が、「原初の渦の集まりか」、だし。

？？？「あながち間違ってないぞ？ここは全ての魂が集まる場所、

ある種の終着にして始発点だからな」

突然背後から聞こえた声に振り向くと、そこには俺をぬっころしてくれた神様がいた。白髪、ロング、ワンピース、姉御みたいな口調。

雅也「死ねおやぁぁぁぁあっ！！」

神様「なんだとぉぉおっ！？」

とりあえず、真っ先に行ったのは跳び蹴りによる奇襲。夢とはいえ、自分をぬっころした相手だ。蹴り飛ばしたくもなる。

が、奴さん驚きながらも瞬間移動みたいな消え片して避けやがった。

雅也「チィィイッ！！」

神様『いきなりなにをするんだ。意外と君は外道だな。一応、私は神である以前に女だぞ？』

俺が悔しがっていると、反響する声だけを出して自称神様が呆れたような口調で尋ねてくる。

雅也「生憎、俺は落ち着きがなく我慢弱くてな。ついでに加えるならば、男であろうが女であろうが気に入らない奴はぶん殴れる性分だ。更に言えば、卑怯や姑息、小難しいことが大嫌いな男と来ている」

神様『長々とご苦労。しかし、君が今やったことは卑怯や姑息な手

ではないのかな？』

雅也「どの口が言うか。最初に拳銃をぶっ放したのはあんただろうに」

神様「違いない」

自称神がそう言うと同時にふ、と突然の浮遊感を身に受ける。

足元を見れば巨大な手が俺を持ち上げていて、その後視界を埋め尽くす程巨大な自称神の頭が姿を現した。

なに、釈迦如来なの？

神様「さて、ここからが本題だ。私が君を殺したのにはわけがある」

雅也「き、聞こうか……」

夢の中、というのにさっき浮遊感で酔ったらしい。乗り物には弱いからな、俺……。

神様「説明する前に、君はこれが夢だと思っているようだ」

雅也「は？」

いきなり、自称神がそう言い放つと俺の体を乗せていた手が握られる。

途端、少しずつ圧迫されていき俺の体に激痛が走る。そして、最終的には嫌な音を立てて潰された。

……筈だった。

神「どうだ。シンプルに痛みを与えてみたのだが、現実だと悟ってくれたかな？」

雅也「……胸糞が悪い。そして気持ちも悪い。体が再生するのをまさか本当に見ることになるなんてな」

神「君は今、魂だけの存在だからな。私の力で痛覚だけを与えてやったが、肉体は無い。その体は言わばイメージだ。もし仮に君を本気で殺すには、魂を消滅させなければならん」

――無論、私なら造作もないがな。

続けてそう呟き、ニタリと口元を吊り上げる神の表情は、悪神ではないのかと疑う程に歪だった。

神「聞こえているぞ。ここは私の空間、モノローグにも気を付けたまえ」

雅也「あまりメタな発言は慎んで頂きたい」

神「そう言うな、私は神だ」

最初に出会った時の台詞と同じだと思えない程に、今は信憑性のある言葉だな。

神故に純粋に、神だから無垢な考えをお持ちのようだ。先程の歪な笑みも、無邪気だからこそなのかもしれない。

神「さて、戯れもここまで。そろそろ本題に入ろう」

ここで神は、話題を元の路線に戻すつもりみたいだった。

俺も腹を括ろう。夢ならば覚めろ、と言いたいが先程の激痛に未だ胸に残るイガイガとした気持ち悪さがこれが現実であると伝えてくれる。

神「君には私の。いや、私達の暇潰しに付き合ってもらう」

雅也「は？」

不鮮明この上ない発言に、俺は耳を疑った。

暇潰し？そのために俺は殺されたのか？

神「なぁに、それだけではないさ。君は波長が合うんだよ、あらゆる世界とね」

雅也「波長？」

思わず尋ねる。神「ここ、全ての終着にして出発点である原初の渦から発生し、幾千幾万数えるなど大抵無理な数字にまで膨れ上がった全ての世界に、君は入り込めるということさ」

雅也「……とんだ素晴らしい能力が持ったものだな」

神「それが君という『魂』の性質さ。肉体があれば効果を成さないものだがね」

あまりのスケールの大きさと突拍子もない説明に、俺はひきつる。

原初の渦。アカシック・レコード。真理。全ての始まり。そこから繋がる世界全てに俺は行ける、ということか。

神「そして、その能力は私が意図して作り与えたわけではない。突然現れた、という所か。生まれ変わる先が全ての世界どれでも大丈夫、なんてのをされると選別する天使達やその管轄の神が困ってしまうし、混乱の元になってしまう。だから私は、君をわざわざ殺してまでここに連れて来たわけさ」

雅也「……俺はつまり、イレギュラーなんだな」

神「その通り。魂を消滅させるのは簡単だが、それだとあまりにも君が救われない。私は神だ。自分の子供を救い出した上で問題を解決する義務と責務がある。まあ、悪人だったら真っ先に消すがね」

笑う神。怖いわ。

神「さて。君のイレギュラーだけを消す手だては既にわかってはいる。転生回数だ」

雅也「……回数、か」

神「何回かはわからんがな。ただ、そう多くはないと思う。そしてこれからの転生は、君の記憶を全て継承した形で行う。死んだ後一々説明するのも面倒だ」

面倒とか言うな。傷つくわ。

しかし、記憶を全て継承か……。つまり、俺の２０年ちょっとの人生とこの体験を持っていけるのか。強くてニューゲーム。人生イ

ージーモードも行けるのか。

神「察しがいいな。だが、それと同時に体感時間は何百年となる。先に言っておく、拒否権はない」

……おい、ふざけんな悪神。それってある意味拷も。

プチ。

神「そろそろ神への敬意くらい見せたらどうだ」

雅也「こ、断る……。俺は、ノーと言える、日本人だ」

2度目の再生。畜生、2回も死ぬ痛みと感覚を味わうとは。

神「今更だが、精神は太いな。壊れないとは」

雅也「死ぬほど辛いぞ」

実際だったら死んでますがな。

まあ、我慢弱いが精神の硬さなら自信はある。十年以上苛めを耐え抜いた男、それが俺だ。

神「では、そろそろ転生の時間だ。ランダムで行くぞ」

そう言って楽しそうに、俺が潰れないように手を握り締め、神様は腕を振りかぶる。

神「ま、色々と特典は付けてやるさ。よし。無限の彼方へ！さあ行

くぞ！！」

雅也「バズライトいやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！！」

成長。記録。少年へ。（前書き）

短め。
恋姫無双編としてのプロローグ。
生い立ちが難産だった……。しかもこれで良いのか超不安です。

成長。記録。少年へ。

俺の名前は鵲雅也。それは俺の魂に残る名前だ。今は姓は【趙】名は【幻】字は【守殻】と今の両親に名付けられた。そして真名は【雅也】。真名という時点でなんとなく、それだけで嫌な予感はしていた。

そして、その予感は直ぐに的中してしまう。

姉だ。俺には姉がいた。名を姓を【趙】名が【雲】字は【子龍】。真名は【星】。

察しの良い諸君等ならわかると思うが、この世界は恋姫無双だ。赤ん坊の頃にそれが判明した時は両手を上げて「イィィィィィイヤッホォォォォォォオッ！！」と喜びたいくらいの気持ちで勢い良く立ち上がり、頭が重くて転けた。

両親の前でそんなことしたもんだから、大喜びされた。産まれて半年しか経っていないのにもう立った。これは世に響く武将になるだろう、と。

実際はまあ、俺という自我があるからある体の程度は制御が利く。歳が2つになる前には、言葉もなんとか発することが出来た。

字もちょくちょくと覚えていたし、5つの頃にはちょっと難しい本を読むことだって出来た。字もすらすらと書けた。見た目は子供、頭脳は大人とどっかのバーローみたいな幼児が爆誕していたのである。

我が父上は、普段は穏やかに農夫をしながらも文学や兵法を嗜ん

でいたらしく、字を書き本を読む5歳児の俺には将来文官になるべきだな、と笑って言い姉者に勉強を教えながら色々と教えてくれた。

一方我が母上は、優しいながらも過去に武将として仕官していたらしく、俺や姉者に調練と色々やってくれた。最初こそ辛かったが、人間慣れとは恐ろしいもの。俺はいつの間にか邑の中で身内以外に敵無しという状態になってしまった。姉者はやはり槍の扱いに長け、俺はと言えば双剣だった。でも姉者と母上には勝てなかった。そして姉者も母上には勝てなかった。母上つえー。超つえー。

そして我が姉者、趙子龍こと星様はやっぱりというか、掴みどころのない飄々とした人だった。

俺より1つ歳上の姉者は俺の憧れであり、俺よりも全てを前へといく人だった。俺が1歩近づけば、姉者は3歩前へ進む。俺が2歩近づけば姉者は6歩前へ進む。からかわれてムカつくことも慌てることもあるが、そんな姉者は俺の憧れであった。

光陰矢の如しと言った所か、月日が進むのは極めて早く、俺は優しくて尊敬する家族に囲まれて幸せな日々を送っていた。

俺が幼年期から少年期に変わる頃に、平和な日々は少しずつ崩れ去ろうとしていた――。

成長。記録。少年へ。（後書き）

趙家の息子、という設定に落ち着きましたが色々考えての結果でした。他はテンプレですがね。

他の案は

1．関平なのに関羽の義理の弟。一緒に旅をする……これは関平の字が不明なので止めました。

2．周倉で盗賊だっしゃぁぁぁあっ！！……ぶっちゃけ色々思いつかなかｒｙ（大車輪戦法で駆逐されました

3．思いつかないなら別世界にすればいいじゃない……恋姫がやりたかったんだ！

そんな感じです。

趙雲。趙幻。姉弟として。（前書き）

少年時代編。
趙姉弟の絆。
チートと言えるチートはまだまだ出て来ません。

趙雲。趙幻。姉弟として。

荊州の田舎邑。辺りは緑豊かな自然に囲まれ、田畑をするに適した平地であり、近くに小川が流れる。そんな穏やかで平和な邑に俺が産まれた。

盗賊に襲われることもなく、重税が掛かっているわけでもなく、ちょっと世情に遅れてるけど俺はこの邑が大好きだ。

俺の名前は趙幻。姓は【趙】名が【幻】字に【守殻】。真名は【雅也】。ちょっとばかし他の人間と違う普通な少年。

武力、子供にしちゃある。知力、子供にしちゃある。身体能力、子供にしちゃある。好きなモノ、母上の料理。

違うっていう意味を説明すると、俺は前世の記憶を引き継いでこの世に生を受けた事。んなこと、誰も信じてくれるわけがない。だから普通の少年。

ちなみに、この世界がゲームの恋姫無双って事を知ってるっての も普通じゃないか。ま、今はこの世界が俺にとっちゃ現実だし、リアルなんだ。不満はない。

???「雅也ー。どこにいるんだー？」

っと、日向ぼっこがてら森林浴してたら姉者のお出ましだ。

子供ながらに美しいとさえ思える凛とした輪郭、引き締まった肢体。可愛らしくも透き通ったクールな声。

我が姉者、趙雲子龍様が俺を探しているみたいだな。木の棒を持ってるようだが、自主鍛錬が終わったのだろうか。

趙幻「姉者ー。ここだここっ！」

趙雲「またここで昼寝か？雅也も好きだな」

からかうように、クスクスと姉者が笑う。

趙幻「違うよ、日向ぼっこ。ついでに瞑想もね。ここは静かだから丁度良いのさ」

ここで鳴る音らしい音と言えば、小川のせせらぎか風が木々を揺らしたざわめきぐらいだろう。それが逆に落ち着かせてくれる。

本来なら瞑想を主体にしなければ我が母上に怒られそうだが、まあ良いだろう。

姉者に軽く弁解しながら、俺は立ち上がる。

趙幻「それで、俺に何の用かな？我が姉者」

趙雲「うむ、あまりにも暇なのでな。少し稽古をと思ったのだ。どうかな？我が弟よ」

うへ、稽古の誘いか。

趙幻「あいわかった。じゃあ、早速家に戻ろう」

趙雲「うむ。私は広場で待っていよう」

◇

父「また稽古かな？精が出るね、雅也」

家に戻り、自分の使っている部屋から木刀を2本持ち出す。

それから居間に行くと、柔和な笑顔を浮かべた父上に声を掛けられた。

俺はそれに肩を竦め、わざとらしくおどけて見せる。

趙幻「姉者からのお願いですから。あ、父上。後で孫子の続きを貸してくださいね」

そう言えばと思い、兵法書の続きをお願いする。

父上の蔵書には沢山の兵法書といった勉強道具が沢山ある。

半分は読んだが、もう半分はこれからだ。5才の頃から目を通してはいるが、理解しながら読みたいのでこれがなかなか捗らず今に至る。

これで半分。やっと半分。後半分。

正直、検知や自治、治水や政といった事には興味はないが始めてしまったからには全部読みたいものだ。

俺は落ち着きがなく我慢弱い男だが、1度決めたことはやり通す。

それが例え苦手でもな。

父「わかった。稽古、ほどほどにね」

自分の部屋へと戻って行く父上に礼をして、外で待つ姉者の元へと俺は駆ける。

玄関口から外へと飛び出せば、家の前にある広場に姉者が木の棒を杖代わりに抱えながら立っていた。

趙幻「姉者悪い、待たせた」

趙雲「女を待たせるとは、罪深いな。弟よ」

趙幻「だからごめんって」

わかっているのに俺をわざとからかうか。見た目はロリなのに妙に艶めかしいんだよな、姉者は。

趙雲「ふふふ、冗談だ」

趙幻「姉者の冗談は心臓に悪いんだよ」

互いに得物を構えつつ、軽く談笑。

さーてさって、頑張りますかな。

‡星ｓｉｄｅ‡

趙幻「姉者の冗談は心臓に悪いんだよ」

苦笑しながら呟く我が自慢の弟。

それから1度息を整えると、両手の木刀で独特な構えを取る。

体を小さく揺らしながら水平に向け、左腕を中段に、右腕を上段に。そして、身に纏う空気も変質する。

雅也は一本気な男だ。そしてそれを自分でよく理解している。

落ち着きがなく、我慢弱く、姑息を嫌い、卑怯を嫌い、正々堂々を良しとする。そういう所が姉である私にとって自慢なのだが。

趙幻「往くぞ姉者っ！！」

趙雲「来いっ！！」

雅也の攻撃は激しく、奮い立つ程のモノだ。何より初速があり、手数も多い。

私はそれを越えるが、時々追い抜かれたのではとヒヤヒヤする事もある。

趙雲「ハィッ！ハィッ！ハィィィッ！！」

迎撃。速さを選んだ三連続の突きを放ち、雅也の動きを牽制する。

初撃、回避。二陣、払い。三段目、横へと跳んで回避。

趙雲「シッ！」

槍本来の恐ろしさは点を穿つ突きではなく面を払う凪ぎにある。

私は稽古用の棒を雅也に向けて凪ぐと、彼は上へと跳躍してそれを避けた。

が、甘いな。弟よ。

趙雲「もらった！」

趙幻「チィッ！！」

決まると思った空中への突きだったが、身を捩る勢いで振るわれた木刀に払われてしまった。

流石だな。それでこそ我が自慢の弟よ。だが、何度も払えると――。

趙雲「思うなっ！！」

ゴッ、という鈍い打撃音が鳴る。

だが、それは私の突きが雅也の体を捉えた音じゃないことを手応えで理解していた。

趙雲「恐ろしいな、弟」

趙幻「紙一重だったさ、姉者」

弟の時々見せる剛胆さと精密な見切りには驚かされる。

交差させた双剣を使い、空中で迫り来る棒を叩き落とし、先端を地面に向け押さえるか。

私以上に未熟な弟。だが、その潜在的に潜む力には光さえ見える。

雅也は原石だ。武、文、どちらにも通じれるある種の天才なのだと、昔から家族の中で評価されていた。

趙幻「姉者、ここからは俺の距離だ！！」

趙雲「笑止っ！」

双剣で棒を押さえられてはいるが、それは雅也が武器による攻撃が出来ないことも意味している。

弟はそれをわかっていて、敢えて突撃してくるようだ。

双剣が棒から離れる。右へと小さく跳び、棒を短く持ち突く。受け流されるが、そのまま連続で突きを撃つ。

趙雲「どうした雅也！このままでは勝つなど到底無理だぞ？」

趙幻「その無理を、更なる無理でこじ開ける！！」

突きを何度も撃つ中で、雅也の雰囲気が受けから攻めへと転じるのを感じた。

無理に無理を通してこじ開けるとは、また奇っ怪な事を言う。

しかし、雅也の表情は真剣そのものだ。出来ると確信し、負担を省みず攻め入ろうとするその姿勢は愚かしくも清々しさまで覚える。

その時に隙があるのだがな、雅也には。

隙有り、とここでトドメをさしてもいいがそれはそれで気が引ける。

せっかく母上がいない雅也と2人っきりでの稽古なのだ。ふふ、ここで終わらせるなど勿体無い。雅也との撃ち合いは楽しいのだ。何より、雅也を感じられる。

この時間こそが姉弟としての、武芸者を目指す者としての、最高の触れ合いなのだから。

‡雅也ｓｉｄｅ‡

姉者が槍を短く持っている分リーチはないが、やはりこの高速ラッシュの中懐へと飛び込むのは無理か。

そもそも受けるので精一杯な現状だ。どう入り込むか……。

と、悩んでいれば姉者の表情が緩んだ。

趙雲「どうした雅也！このままでは勝つなど到底無理だぞ？」

あ、そりゃねえよ姉者。にやけながら言うなや。その余裕、頑張って無くさせようじゃないか！

趙幻「だったらその無理、更なる無理でこじ開ける！！」

あ、まだにやけてる。コッチは必死だってのに。いいや、ならそのまま慢心しててくれ、姉者。

左手に入れる力を更に強くし、渾身の力で姉者の棒を上へと払い撃つ。

趙雲「っ！！」

急に俺が攻めへと転じ、武器を狙ったのが意表を突けたのだろうか。

姉者は放さなかったが棒の先端は、俺ではない虚空を向いていた。今がチャンスっ！！

趙幻「切り捨て……！ごめ――」

趙雲「油断したな」

双剣を振り上げた瞬間、鳩尾に何かがめり込む感覚。肺が機能を停止し、俺は一時的な呼吸困難に陥る。

俺の体にめり込んだものは、つま先。つまり姉者の蹴りだ。

趙雲「バカは来る、とは言ったものだな。油断をしたか？慢心したか？ん？ん？」

趙幻「……けほ。姉者の言うとおり、んんっ、武器ばかりに目が行って油断しました」

趙雲「……。わかっているなら大丈夫そうだな。全く、全力で落ち込むか」

そりゃあ落ち込むよ。勝てると思って、基本を忘れたのは完全な俺自身の落ち度だ。どうしようもない。

趙雲「まあ、何だ。元気出せ。まだまだ暇だし稽古を続けよう。姉として、私はお前にも今以上強くなってもらいたいしな」

趙幻「うん、ありがとう姉者」

姉者は、俺が落ち込むといつも元気付けてくれる。普段は飄々としてるけど、根はしっかりした優しい人なのだ。

俺だって男だ。強くなりたいし、姉者を、母上を超えたい。そして何時か……。

趙雲「雅也は真っ直ぐ過ぎるな」

趙幻「？誉め言葉と受け取ろう」

クスクス笑う姉者がそうではない、と言った気がするが良く聞こえなかった。

何か俺、おかしなことを言ったかな。ま、気にしててもしょうがないか。

そしてそれからも俺は姉者に稽古を付けられ、一度も勝てなかった。

夕方くらいに鹿を担いだ母上が帰宅、乱入して来て俺と姉者はボコボコにされた。

少年時代、人生という名の冒険はまだまだ続く。

趙雲。趙幻。姉弟として。（後書き）

趙家強さ表

母＞＞＞星＞雅也＞＞＞＞＞父

趙家賢さ表

父＞＞＞星＝雅也＞母

両親のいいとこ取りが2人だったりの設定。

後2～3話は少年時代編の予定。

超幻。修行。居合い抜き。（前書き）

雅也の個人的な修行の一面。

超幻。修行。居合い抜き。

未だ平和の続く日々、俺の体に刻まれた無数の傷痕は母上や姉者との修行で得た、成長の証。

最初こそ、これ子供にやらせるか普通！というものだった。

森の中に放り込まれ、野生をつけろと1ヶ月近くサバイバルもした。体力を付けるためと、岩を担いで走り込みを延々とやらされた。筋力を付けろと、めちゃくちゃなトレーニングをやらされた。

今となっては良い思い出だ。姉者もまた俺と同じ修行をしたらしいが、その跡も見えない。

未だ追いつけない背中。だが、焦る必要はない。俺は姉者と同じにはなれないのだ。

だから、せめて、俺は俺の武を極めたい。

文を疎かにするつもりはないが、姉者が武芸者を志しているのは知っている。

……そして、その未来も。やがて名を馳せることも知っている。

だからこそ、その隣に居たい。その背中を守りたい。その武と競い合い高め合いたい。何時か、その武を超えたいのだ。

俺が出来るのは工夫と修行と勉学。姉者と共に居るには武将になるべきだと思っている。

姉者の弟が勉学も出来ず、武を誇示出来ず、弱いなんて言われたくない。

故に、励む。俺の武道を貫く為に。

◇

静まり返った林の中、竹が群生する場所。俺は母上から頂いた一振りの青竜刀を腰に、中腰に構えて目前に生える1本の竹を見据える。

精神を集中させ、無駄なモノを視界の外に流し、頭の中の邪念を全て排斥し、体の力を抜く。

居合い抜き。俺が好んで行う修行の一環だ。

まあ、本物の居合いなんざやったことないから自分のイメージと記憶の中の映像の見様見真似だし、今持っているのは青竜刀。本当なら日本刀が欲しいけど、んなもん有るわけないしな。ここは中国。後漢の時代。

趙幻「ちぇすとぉぉぉお！！」

中腰に備えた青竜刀を、竹に向かい打ち抜く。

前傾による体重移動により得た加速で深く踏み込み、体を柔らかくしならせ腕を振り抜いた。

すっ、と竹を通る刃。我が青竜刀が太陽に反射し、煌めく。

直後、一歩遅れて竹がズレた。そのまま自重で後方へと倒れていき、轟音が響いた。

小鳥たちが驚いたのか、空へと飛ぶ。いや、悪いね本当に。

趙幻「まだ、時間が掛かるなコレ……。戦場で使えないよなぁ」

ふと思い付き、瞑想も兼ねた精神鍛錬として取り入れた居合い抜きだが、無我の境地へと入るには無駄が多かった。

全身を程よく緩ませ、リラックスした状態じゃないと使えない。

漸くこのレベルまで引き揚げる事に成功したが……。ま、あわよくば、という話なのだがな。

技術を補う工夫は有るに越したことはない。居合い抜き、対単戦で一撃必殺となり得る技。

示現流もありかな。とか思っていたけど俺は二刀流なのだ。長く振り回すに辛い得物を持つ気にはなれなかった。

趙雲「私に隠れてコソコソと何をしているかと思えば、良いものが見られた」

趙幻「あ、姉者！？」

趙雲「抜刀術か何か、と見受ける。しかし、綺麗で真っ直ぐな太刀筋だった。雅也らしさ全開だな」

手を叩き、いきなり現れた姉者が驚く俺をよそに感想を述べた。
切り捨てた竹の切り口を見た姉者は、クスクスと微笑みながらこちらへと歩み寄って来る。
趙雲「それにしても、凄まじい気迫と集中力だったぞ雅也。驚かせようと近づこうとしたら、逆に私が圧されてしまった」
趙幻「そ、そう？」
趙雲「邪魔をしたら斬られる。そう思う程にな」
無心で竹にのみ意識を向けていたから、それはどうかと思うけどね。
でも、今確実に姉者は俺を誉めていた。それが嬉しくて嬉しくてたまらない。
趙幻「ありがとう姉者。でも、戦いの中で使うにはまだまだ修行が足りないかな」
趙雲「そうなのか？」
趙幻「ああ。あの状態……明鏡止水に入るまで自分を持って行くのに色んな工程があるんだ。だから、それをもっと短く、素早く状態にまで持って行けて初めて、戦いに使えると思う」
青竜刀を片手に、俺は姉者の方を見ながら説明する。
多分、動かない相手だからこそ今は出来るのだろう。俺は我慢弱く落ち着きのない男だ。目の前に獲物が居ればその前に切りかかっ

てしまうだろう。

それに、人間は動くのだ。明鏡止水、先の段階になるにはもっともっと己を成長させる必要がある。

趙雲「もしそれが完成したならば、私など雅也に勝てなくなるな」

趙幻「謙遜しすぎだよ姉者。その頃には姉者だってもっと強くなっている筈さ」

姉者は強く、天賦の才がある人だ。これから成長し、どんどんどんどん強くなる。

趙雲「ふっ、確かにな」

そう言った姉者の視線は、どこか遠い所を見ている気がしてならなかった。

‡星ｓｉｄｅ‡

何時もの場所にいなかった雅也を探してみたら、竹林の中で何やら腰に青竜刀を当て、身構えていた。

また奇っ怪な事を、そう思い呆れながら驚かしてやろうと近付けば、そうはいかなくなった。

身に纏う空気が異常だったのだ。

この感覚、似たようなものを放つ人物に覚えがある。

母上だ。稽古の中、一度だけ母上に本気を見せてもらった時があったのだが、その時に見せた凄まじい殺気と雅也の纏う空気は似ているのだ。

だが、違う所もある。母は明らかな敵意と殺すという思いが篭められた殺意によるトゲトゲしい殺気だった。

雅也のそれは、威圧感……いや、覇気に近いな。気迫とも言える。凄まじい集中力から来る、空気の変質。

なんということだ、私がまだ到達出来ていない場所に、雅也が立っていたのだ。

弟に先を越された事に悔しく思う反面、嬉しいとも思えて私は雅也から目が離せなかった。

その時、雅也の覇気が向かい側にある竹に向く。

何をするのか、興味津々になりつつ眺めて居れば、雅也の姿が一瞬にして竹の前へと移動した。

趙幻「ちぇすとぉぉぉお！！」

流れる様な動きから繰り出され、瞬時に振り抜かれる青竜刀。

私は目を疑った。斬った後、数瞬の間を置いて竹が後ろへと倒れたのである。

趙雲（なんと、雅也の武はここまで成長していたのかっ！）

たまに雅也が居なくなる事があった。そうか、この修行を行っていたのか。

趙雲（姉に隠れて強くなるとは、雅也め。恨むぞ）

何故恨むかはさておき、雰囲気が何時も通りに戻った雅也にそろそろ声を掛けよう。

まったく、あれを極めたなら雅也の武は天下に轟くこと間違いない。こ奴は恐らく謙遜するがな。

趙雲。別れ。目標。（前書き）

結構駆け足。

色々足りないけれど、姉弟の絆を書きたかった。それだけ。どうか御容赦を。

趙雲。別れ。目標。

あれから二年が経ち、俺の少年時代も終わりを迎えようとしていた。

体の造りもどんどん男らしく変わり始め、姉者もまた女らしくなってきた。

趙幻「ハァッ！！」

趙雲「甘い！」

俺の振るった右手の木刀を姉者が弾き、その勢いを利用した左手の木刀による回転斬りも槍の持ち手に阻まれる。

筋力、集中力、精神力、技術、勉学、それぞれ成長した俺だったが、姉者にはかなりの確率で敗北を喫していた。

趙雲「ふっふっふ、相変わらず真っ直ぐで読みやすいな雅也」

趙幻「俺は我慢弱く落ち着きのない男だ。そして卑怯と姑息な手が大嫌いと来ている。俺の矜持、しっかりと果たして見せよう！！」

右手の木刀を腰布に差し、左手の木刀で鞘にしまう様な動作を行い、中腰に姉者を見据える。

趙雲「来るか。だがっ！」

趙幻「我が奥義、十嵐座武（トランザム）ッ！！」

二年前に姉者に見せた居合い抜きも、漸く実戦段階に入り始めていた。

姉者曰わく、稽古中だと気迫不足に加えて粗が出ているらしいが、何とか集中力の引き揚げには成功しているが完成には程遠いらしい。

だが、形には出来た。今はそれを更にレベルアップさせるだけだ。

趙幻「切り捨て……！」

趙雲「はぁぁぁぁあっ！！」

趙幻「ごめぇぇぇぇぇんっ！！」

今日も今日とて、邑はまだまだ平和だった。

◇

先ほどの結果を伝えるならば、俺の負けだという事を宣言しよう。

居合いを避けられ、木槍を脳天に入れられたのだ。完膚無きまでに叩きのめされたと言っても過言ではない。

勿論、その後畑仕事から帰ってきた母上にみっちりガッチリと叩かれ、叱咤され、心身共に姉者と共に疲弊し切った所で稽古という名の調練は終了した。

それでも姉者が母上に勝つことも間々あった。姉者は最近、かなり力を付けて強くなっていた。

母「雅也、あなたの武はあなたの性格をはっきり出していて良いとは思う。だけど、その武は人を殺す武ではなく、まさしく訓練の武なの。それをしっかり覚えておいて」

最近、母が口を酸っぱくして俺に呟くそれ。噂では近隣の邑にまで盗賊が現れたと聞くが、原因は恐らくそれだろう。

俺は毎回あいわかったと了解の意を示すが、母はその度に何とも言えない表情を浮かべていた。

趙雲「雅也、入るぞ」

趙幻「姉者、どうかしたか？」

その日の夜、夕餉を食べ終えた後俺の部屋に、珍しく声を掛けて姉者がやってくる。

俺は読んでいる本を閉じ、机に置くと入って来た姉者に何用かと尋ねた。

趙雲「お前には単刀直入に告げよう。私は、旅に出る」

俺は絶句した。姉者が旅に、という事は旅をしながら武芸を磨き、仕官する相手を探すって意味だからだ。

前々から母上や父上と相談している姉者を見たことがあったし、偶然内容を聞くこともあった。

そういえば、姉者と母上で小さな盗賊組織を退治したとも聞いて

いる。

つまり、そういう事なのか。時期が来たと。

趙幻「寂しくなるな」

趙雲「なんだ。てっきり『聞いていないぞっ！姉者っ！！』もしくは『行くな、姉者！俺を置いて行くな！』か『ならば俺も着いて往く！答えは聞いてない！！』と言うと思っていたぞ」

姉者の中の俺像が何なのか気になる所だが、まあ外れちゃいないわけで。

趙幻「たしかに姉者が居ないと嫌だが、もっと嫌なのは『俺が姉者の妨げ』になることだ。姉者が決めた道。俺は黙して応援する」

趙雲「雅也……」

俺の考えを姉者に伝えれば、なんと姉者が目元に涙を浮かべていた。

俺は何故だ何故だと慌てると、姉者がクスクスと笑って俺の体を抱き締めた。

趙雲「嬉しいのだよ。私は弟に愛され、理解され、背中を押して貰える。これほど雅也の姉で良かったと思った日はない」

趙幻「姉者……」

趙雲「雅也よ、もし良ければ私のわがままを聞いてくれ」

趙幻「わがまま？」

珍しく塩らしい姉者の更に珍しい発言に、俺は確かめる様に言葉を発し、問う。

姉者はああ、答えると俺の目をしっかりと見つめ、真剣な表情を浮かべていた。

趙雲「母に勝て。武を付けろ。知を磨け。そして、何時でも良い。私を追い掛けて来い」

武人としての片鱗が表情に出し、人を惹きつける魅力を声に込め、俺に告げる。

趙雲「この趙子龍、やがて飛躍し名だたる武将となるだろう。何年掛かっても構わない。雅也が母に勝ち、旅立った後、一度我が下へ訪れてくれ。その時は、秘蔵のメンマを肴に酒を飲もう。それが、私のわがままだ」

趙幻「……了解仕った。その旨、確実に果たしましょう」

趙雲「出来ればその時私に主が居て、共に仕えられたら良いな」

優しく微笑み、もう一度姉者は俺を抱き寄せた。

もうすぐで姉者は旅立ってしまう。この安らかな匂いも、柔らかな肌も、美しく凛々しき容姿も、俺をからかい、慌てさせ、時に優しくしてくれる姉者と、会えなくなる。

そう思うと、自然と涙が零れ落ちた。

趙雲「な、何を泣いている。今生の別れではないのだぞ、情けない」

趙幻「わからない。わからないんだ。だけど、ごめん。しばらく、もうしばらくこうさせてくれ、姉者。そうすれば、俺は強くなるから。約束を果たすから。だから、頼む」

その夜、俺は姉者を抱き締めながら大きく泣いた。今までで、産まれてから初めて、強く強く泣いた。

そんな俺を姉者は優しく抱き締めていてくれた。

翌日、にやける母上に勝負を挑んで大敗した。けれど目標が決まり、俺の心は大きく晴れ渡っていた。

趙雲。別れ。目標。（後書き）

少年時代編終了。

姉、趙雲は旅立ち趙幻はこの後修行と勉学により一層精を入れます。

次から旅立ち編。そしてその次は漸く恋姫本編と入る黄巾の乱編。

チート発動は何時になるやら。

‡間幕‡　趙雲。旅中。独白。（前書き）

姉者のお話。

‡間幕‡　趙雲。旅中。独白。

我が名は趙雲。姓は【趙】名は【雲】字は【子龍】、真名は【星】だ。常山の登り龍、などとも呼ばれることもある。

故郷を旅立って早四年、武芸を磨き、私が仕えるべきと目に適った主を探しながら旅をしていた。

私には、弟がいる。自慢の弟だ。もしかすると約束通り私を追って既に旅立っているかもしれない。

姓は【趙】名は【幻】字は【守殻】、真名は【雅也】。これが私に似てなかなかの良い男だ。私の居た邑の中で一番の容姿を誇っていたと言っても過言ではない。更に、文武両道だ。今ならば恐らく武は私だが、知は雅也の方が秀でているだろう。そんな天才なのだ、あ奴はな。

おっと、いけない。弟の話になるとつい自慢話になってしまう。私の悪い癖だ。弟風に言うなれば、『直す気はない毛頭ないっ！』と高らかに宣言するが。

「星殿っ！盗賊の部隊、見えて来ました！」

白馬に乗り、待機している私にそう伝えたのは眼鏡を掛けた美少女、稟だ。

旅の途中、偶然出会った仲間だ。名を戯志才と名乗っている。

「星さん、作戦通りお願いします」

もう1人、うねりを持つ癖毛な髪を持つ幼い風貌のまた美少女、風はのんびりとした口調で告げた。

趙雲「あいわかった」

私は2人にそう答えると、精神を集中させて我が自慢の槍、直刀槍【龍牙】を強く握り締める。

稟、風、どちらも私が信頼し、頼りにしている大切な仲間だ。故に真名を交換し合い、呼び合っている。

今はこの2人と共に見聞を広める旅の途中。そして、路銀を稼ぐための盗賊退治を始める前だ。

さて、また活躍させて頂くとしよう。我、趙子龍の名を広める為に。

◇

戯志才「いやはや、星殿はさすがですね。今回もまた首級を取るとは」

程立「路銀も色を付けてもらいましたし～、言うことありませんね～」

邑の宿、用意された客室で稟が私を讃え、風は満足気に渡された金の確認をする。

私としては、満足のいかない戦いであった。最近、敵が弱くて仕

方ない。

趙雲「敵が弱いのだ。当たり前のこと」

戯志才「と言いましても、先程の盗賊はなかなか力はありました。星殿がお強くなっただけではないでしょうか」

そう、稟の言うとおり私は強くなった。旅立ってからも手を抜く事なく武芸を磨き、強き相手と刃を交わし、今では神槍とまで呼ばれている。

故に、物足りなさがあるのか。私と刃を同等に交えられる相手、それが欲しいだけなのか。

稟と風は、武芸者ではない。知略を巡らす文官、もしくは軍師に適した者達だ。勿論、その知に助けられた事は多々ある。

そんな事を考えていると、私の胸にとある思いが去来した。

趙雲「寂しがっているのか？この私が」

呟いて、何を馬鹿なと自嘲する。寂しくなどあってたまるか。私は雅也と約束したのだ。再び必ず会うと。

程立「星さんは、弟さんに会いたいのではないですか？」

趙雲「どうだろうな。会いたくないと言えば嘘だが、まだ時期ではないと思う自分がいる」

風の問いへの答えは、本心だ。会うならば、もう少しだけ後にし

たい。

私はまだ、武将ですらないのだ。きっと雅也は気にしないだろうが、私には宣言した手前と姉としての矜持がある。

わがままだな。そう思うが、雅也には立派な自分を見て欲しかった。

雅也よ、姉は元気にしているぞ。そちらはどうだ。早く私にその成長した姿を見せてくれ。

◇

戦乱は、徐々に徐々にと忍び寄りやがて中華全土を飲み込んで行く。

腐り行く官僚、廃り行く官軍。

今はまだ、平和だった。

時はまだ、蒼天の頃だった。

超幻。旅立ち。青年期。（前書き）

青年時代編のプロローグ的な何か。
短めっす。

趙幻。旅立ち。青年期。

5年前、姉者が旅立ってから俺の目標は決まった。

姉者に恥じない、強く賢い武将になることだ。

母上との厳しい稽古や、自分の限界を超えた自主トレ、更に賊退治を行う中で何度も挫け、体を壊した事もあったが母上や父上の優しさや姉者を思い出し喝を入れて立ち上がった。

殺す事の意味、重圧、斬り捨てる感覚、断末魔。

未だに慣れる事もなく、夢に見る事も沢山ある。

だが、姉者との約束を果たす思いで乗り切った。約束が無く、姉者や母上、父上がいなかったら絶対に逃げていただろう。

平和な時代を生き、平穏の中を生きた俺には、無理難題だったから。しかし家族が救ってくれた。そして再び、平和を叶えられる世の中にしたいという思いも積み重なっていった。

明鏡止水をある程度コントロール出来る様になり、賊退治もこなせるようになった頃。

母上に勝てる様になった。

まだまだ勝利とは言い難く、辛くもという印象が強いがそれでも母上に膝を付かせられるくらい、強くなれた。

母上は「私も歳か、それとも時代か」と溜め息を吐いていたが、俺の事を認めてくれた。

それからすぐに俺は父上と母上に旅に出たいと申し出た。

2人とも知っていたのか、時が来たかとすんなり認めてくれた。

それから旅に出た俺は、知を磨くという理由で荊州で有名な先生、水鏡先生の下へと向かった。

水鏡先生の噂は荊州に広がっていたらしく、これまたすんなりと私塾を開いている邑を知る。

俺は賊退治や工事、商店や食事処の仕事をしつつ、水鏡先生のいる邑まで辿り着いた。

邑に着いた後直ぐに私塾へと向かい、貯めていた路銀、何でもするので学ばせて欲しいという心根を水鏡先生に伝えた。

水鏡先生は女性だった。彼女はならばと俺を手伝いとして雇ってくれた。それが2年前の事だ。

それから2年。俺は私塾の中でもそこそこ優秀な人物になることが出来た。

姉者、武を付け、母上に勝てました。今でもちゃんと鍛錬は欠かしておりません。

姉者、知を磨き、有名な私塾で評価される程になりました。まだこれからも励みます。

姉者。必ず会いに行きます。ですから、絶対に死なず元気で居てください。

趙幻。旅立ち。青年期。（後書き）

水鏡先生を女性にしたのは何となく。
黄巾の乱の１年くらい前の話。
次話では孔明ちゃんと鳳統ちゃんが登場。

諸葛亮。鳳統。説得。（前書き）

孔明ちゃんの話の筈が鳳統ちゃんの話になった。何故だ！

「好きだからさ」

ですよねー。

そんな感じで投稿。

諸葛亮。鳳統。説得。

姉者が旅立ってから5年、俺が旅立ち水鏡先生に弟子入りしてから2年の月日が経った。

元々父の蔵書を読み漁り、知謀を磨いていた事もあり水鏡先生は良い拾い者をしたと笑っていた。

拾い者扱いはアレだが、手伝いとして雇い弟子入りさせてもらった事には今でも深く感謝している。

趙幻「１９９８……１９９９……２０００」

朝、俺は日が昇り始める前に起き、日課の鍛錬をする様にしている。

内容は故郷でしていた事よりも簡単なものばかりだが、それでも何かしらしなければ1日落ち着かない。

難儀な体になったものだ。身に染み着いた生活とは、抜けきらないのだろう。

趙幻「さてと」

簡単な筋トレは終了。それから瞑想がてら居合いの型を1時間行い、塾生達の朝食を作る。

最初こそそこまで料理は作れなかったが、2年近く手伝いをやってきた。

それはつまり、俺の家事スキルの上達を意味している。

時間が経ち、朝日が完全に登った頃俺は厨房に立っていた。自前で作った前掛けを着け、両手に包丁を握る。

趙幻「受けよ、我が奥義！トランザム！！」

トランザム（料理）を開始。頭の中にあのシステムが起動するイメージを思い浮かべ、目の前の食材以外全てを視野の外へと流す。

説明しようっ！トランザムとは雅也の習得した明鏡止水を転用したスキルである！この時雅也の動きは通常の三倍を持ち、集中力が異常に上がるのだ！！

制限時間があるのは欠点だが、その間の雅也は異様な覇気と気迫を放っている。

以上説明終わりっ！！

◇

朝餉を食べ終わり、水鏡先生の授業が始まる。

俺も普通の教えなら答えられる様になった。さすが有名な私塾であると言うべきか、門下生は皆揃って優秀なのである。

既に遙か彼方へと消えてしまいそうな前世の記憶を引っ張り出したり、新たに覚えた兵法や知識を組み合わせ、水鏡先生の授業になんとか着いていけていた。

水鏡先生は、俺にとても良くしてくれている。最初は手伝いとして雇ってくださったのに、今では「しなくても良い、文武に励みなさい」と言ってくれる。

とは言っても、知を教えて頂き部屋まで用意され、何もしないで素直に勉学、稽古に励める俺ではない。

だからこそせめてと、暇な時は掃除や料理、買い出しや護衛をしているのだ。

水鏡先生「好々（よしよし）、じゃあ今日はここまでにします。みな、復習をよくしておくように」

柔らかな笑顔を浮かべ、口癖の好々（よしよし）と言ってから今日の教えが終了した。

いつもなら夕方までやっている筈だが、今日は昼過ぎで切り上げられる。

突然の半ドン授業に戸惑う塾生達だったが、せっかくだからと皆受け入れる事にしたみたいだった。

俺は教室の隅から塾生達の様子を見る。

女の子、女の子、女の子、女の子、女の子……。

実は、この水鏡私塾。女子しかいない。最初はとても居辛かった。ハーレムだって喜びたかったが、そんな余裕はなかったし今では慣れたものだがな。

水鏡先生「ああ、そうだ。臥龍、烈虎。後で私の所に来なさい。話がありますから」

そんなことを考えていれば、水鏡先生から呼び出しを食らった。

ちなみに、烈虎とは俺の号……渾名みたいなものである。

以前、水鏡先生から授けられた名だ。由来はさっき呼ばれた臥龍や、もう一人号を授けられている鳳雛と、この中華に伝わる四聖獣に関連付け白虎にちなんだことと、俺が授業中に提案した戦略や戦術が「烈火の如く激しいですね」という評価を受け、俺自身が武を嗜んでいるかららしい。

しかし、臥龍……つまり、諸葛亮と一緒に呼び出しか。

彼女と一緒、ということは何か俺に問題があったわけではなく、頼み事があるって所だろう。

諸葛亮と鳳雛……鳳統とは、同じ水鏡先生の門下生ながらそこまで接点があるわけじゃない。つか、他の門下生ともだが。

会えば挨拶を交わす、そんな程度である。2人とも優秀だし、個人的には後世に名だたる名軍師殿と交友をしたいものだが。

まあ、水鏡先生から呼び出しを食らった者同士これから仲良く出来れば良いな。

そう脳内で完結・画策し、早速行動に移る事にする。

趙幻「諸葛亮殿」

諸葛亮「は、ひゃい！？なんでしゅか趙幻さん！？」

話し掛けたら慌てられた。そして噛み噛みだ。保護欲に駆られそうになるが、自重する。

この諸葛亮孔明、見た目がロリなのである。ロリなのである。これで俺より（多分）年上なのだ。世の中信じられない。

ついでに、その隣に居る顔を真っ赤にして魔女みたいな三角帽子目深く被っている鳳統殿も同じく、見た目がロリ。ロリロリ軍師コンビなのだ。2人の仲が良いのは知っている。趣味も知っている。言わないけどね？

趙幻「落ち着いてくだされ。水鏡先生が私達を呼んでいましたが、何か知っておりますか？」

おかしな敬語であるが、2人は姉弟子なのでそうする。そこ！笑うな！俺が私って言うのがそんなにおかしいか！！

諸葛亮「えっと、すいません。私も何も……」

趙幻「そうですか。ああ、そういえばちゃんと話すのは初めてでしたな。我が名は趙幻。姓は【趙】名は【幻】字は【守殻】。改めましてよろしくお願い致します」

諸葛亮「こ、これはご丁寧に……。わたしは諸葛亮です。姓は【諸葛】名は【亮】字は【孔明】と言います」

よしっ！スムーズに円滑な自己紹介が出来た！

鳳統「しゅ、朱里ちゃん……」

趙幻「お隣に座られているのは鳳統殿ですね？」

鳳統「ひゅ、ひゃいっ！そうでしゅ……。せ、姓は【鳳】名は【統】字は【士元】です。よろしくお願いしましゅ……」

趙幻「はいっ！こちらこそっ！！」

飛びっきりの笑顔を浮かべて鳳統殿に礼をする。

この2人、というかこの私塾には女の子しかいないせいで門下生達はみんな男性免疫がない。多少強引であるが、2人と自己紹介が出来たのは僥倖と言っても過言ではないだろう。

諸葛亮「大丈夫、みたいだよ？雛里ちゃん」

鳳統「う、うん……。ごめんね、朱里ちゃん」

諸葛亮殿、鳳統殿はそう言い合い、その後何やらひそひそと話を始める。

ああ、可愛い。ロリ2人が身を寄せ合っている。再度保護欲がそそられるが、やはり自重する。目の保養になりますなぁ。

諸葛亮「趙幻さん」

趙幻「はいなんですか？諸葛亮殿」

諸葛亮「雛里ちゃんは何か知っているみたいです」

ほう？それはそれは聞くに越した事のないものだ。

おずおずとしている鳳統殿に視線を向ける。

趙幻「では、是非。お話して頂きたい」

鳳統「は、ひゃいっ。水鏡先生がお2人を呼んだのは、多分最近増えて来ている黄巾党と呼ばれる賊が、近くに来ているからだと思いましゅ……」

趙幻「……黄巾党」

鳳統殿の意見に、俺は前世の記憶からそのキーワードを引っ張り出してくる。

マズいな、もうそんな時期か。俺もそろそろ、また旅に出なければいけないかもしれないな。

趙幻「あいわかった。鳳統殿、ありがとうございます。そして提案なんですが」

諸葛・鳳統「はい」

趙幻「鳳統殿も共に、水鏡先生の所へ着いて来て頂きたいのです」

俺の提案に、2人は顔を見合わせてえ？という表情を浮かべる。

俺の予測だと、水鏡先生が俺達を呼び出した理由は鳳統殿の言っ

ていた黄巾党のことだろう。

そして俺はこの水鏡私塾の門下生である以前に武芸者だ。水鏡先生はこの邑の人達に頼られている人でもある。おそらく、村人達で退治するのを手伝ってくれと頼まれたのだろう。

そしてそれを、俺と諸葛亮殿に任せようとしているのだ。多分だがな。

俺はその考えを2人に伝えると、諸葛亮殿は顎に手を当て確かに、と呟き鳳統殿はあわあわとしていた。

諸葛亮「趙幻さんの話の通りだと、確かに雛里ちゃんの補佐が欲しいかもしれませんね」

鳳統「しゅ、朱里ちゃん……！？」

趙幻「退治となれば私も武人。戦前に立ち、民を守るために戦いたい。そこで鳳統殿に諸葛亮殿の助けをして頂きたいのです」

鳳統「ちょ、趙幻さんまで……あわわ……」

諸葛亮殿は俺と同じ考えらしく、賛同してくれたが鳳統殿はあわわと慌て、顔を真っ赤にして俯いてしまった。

趙幻「鳳統殿、お願い仕る！あなたのお力添えが必要なのでございます！！」

ここで1発、ジャパニーズＤＯ☆ＧＥ☆ＺＡ☆を発動させる。

いや、冗談抜きでもし本当に討伐や防衛を頼まれた場合、鳳統殿の力が欲しくなるのだ。

諸葛亮殿だけでも良いと言えば良いのだが、確実性の話になれば2人が一緒にいる方があがる。

鳳統「で、でしゅがわたしは……その、朱里ちゃんみたいに水鏡先生に誉められる程頭は良くないし、趙幻さんみたいに武芸に秀でてるわけじゃ……」

諸葛亮「ひ、雛里ちゃん！そんな」

趙幻「そんなことありません！！」

俺が思わず叫んだ声に、2人がおっかなびっくりな表情になって俺を見た。

鳳統殿は自分に自信がないのだろう。ならば、ここで引かず前へと押し通すのみ。

趙幻「お2人もご存知の通り、私もこの私塾の門下生になり早2年、水鏡先生のお手伝い等をしながら勉学に勤しんで来ました。諸葛亮殿は確かに頭のキレが良く、成績も修め、水鏡先生に認められる逸材です。ですが、鳳統殿。あなたとてそうではございませんかっ！」

諸葛亮「！！」

趙幻「柔軟かつ臨機応変な思考、戦略の考え方、勉学への姿勢、口に出さないだけで、皆認めている所です。それに、夜遅くまで勉学に勤しんおられるのを私は知っています」

鳳統「っ！」

そう、鳳統殿は夜遅くまで勉強し、努力し、苦悩し、積み重ねて来ているのを俺は知っている。

偶然、夜の鍛錬をしている時に見てしまったのだ。やはり世に名だたる人物は努力を積み重ねているのだな、と思い関心したものさ。

だからこそ、その才能を発揮して欲しいのだ。だからこそ、手を貸して欲しいのだ。

趙幻「再度お願い致します。どうか私を助けると思い、その知略をお貸しください」

深々と頭を下げ、俺は鳳統殿にお願いする。

これでダメなら、それでも構わない。だが、俺は見たいのだ。この名軍師コンビの打ち立てる軍略を、戦略を、戦術を。

鳳統「……」

諸葛亮「……雛里ちゃんの負けだね」

趙幻「っ！！」

しばらくの間があった後、諸葛亮殿が微笑みながら鳳統殿にそう告げた。

諸葛亮「雛里ちゃんのことをちゃんと理解して、認めてくれてる。だったら、雛里は応えてあげなくちゃ」

鳳統「朱里ちゃん……。うん、そうだね。そうじゃないと、趙幻さんに失礼だよね」

２人の会話に、俺は鳳統殿の了承があったと取って顔を上げる。

２人とも、良い顔をしていた。まさに軍師とした、凛々しい顔付きになっていると思えた。

諸葛亮「趙幻さん、わたしからも水鏡先生にお願いしてみますね」

鳳統「わたしなんかで力になれるなら、よろしくお願いします」

趙幻「ありがとうございますお二方！恩に着ます！！」

２人の言葉に感激し、彼女達の手を取って握りながら再度深々と頭を下げて礼を述べる。

鳳統「あわわ……。ちょ、趙幻さん……恥ずかしいでしゅ……」

諸葛亮「はわわ……。趙幻さん、大胆ですね……」

が、何故か２人ははわあわしていた。

趙幻「し、失礼致しました。何分嬉しくて興奮してしまったようです……」

すぐに理由に気付き、俺はそう言いながら２人の手をそっと離す。

そうだった。2人共、対男性免疫ないんだった。そりゃあはわあわするわな。

諸葛亮「では、早速水鏡先生の所へ行きましょう」

趙幻「そうですな。鳳統殿、よろしくお願いします」

鳳統「はい」

こうして、俺達3人は水鏡先生の居る部屋へと向かうのだった。

そして伝えられたのは、予想通り黄巾党の話。

俺と諸葛亮殿は鳳統殿が一緒ならという条件を付け、水鏡先生は少し驚いていたがそれを口癖の『好々』という言葉を添えて承諾してくれた。

喜んでいるのも束の間、水鏡先生の話によれば賊の集団は近付いて来ているとのこと。

邑人達からも志願があり、兵数はどっこいどっこいになりそうな

様子だった。

さて、どうするか。３人で軍議をしながら日は流れていく。

そして戦略が決まった頃、不穏の足音はすぐ近くにまで寄って来ていた。

諸葛亮。鳳統。説得。（後書き）

トランザムもとい明鏡止水は雅人が自分で会得した技。チートっぽいけどチートじゃない。要は氣なんですけどね。

次は黄巾の乱前の前哨戦。

雅人君大活躍の予定。

あ、感想などありましたらお気軽にお願いします。

趙幻。檄励。諸葛亮。（前書き）

こんな時間まで何を書いているのか。

うちおとせーなーい

眠れなーい

趙幻。檄励。諸葛亮。

黄巾党の賊達が近付いている。この平和な邑を襲おうとしている。それだけでも、俺の中にある正義が戦えと叫ぶ。

この邑の人達は、好きだ。優しくて、気さくで、人当たりが良くて、何より水鏡先生が大好きだ。

官軍に最初、馬を走らせて救援を頼んだらしいがその答えはこうだったらしい。

『どこも黄巾党の被害が多く、救援は出来ない。そちらで方を着けろ』

さすがは劉表の部下、腐ってやがる。

まあ、奴はたしか水鏡先生の実力がわからないぐらいの馬鹿だった気がするから仕方ないかと割り切った。

趙幻「朱里殿。集まった人数はどれくらいだ？」

諸葛亮「約１５０人ですね。これなら、余裕を持って事に当たれます」

改めて、確認する。

ここ数日で、予想以上に戦うために志願してくれた。これも水鏡先生の人徳か、俺達は素晴らしい人を師に持っている。

これを何部隊も分け、この邑の入口に配置、防衛の要とする。

ちなみに、ここ数日3人で軍議を交わしている内に、2人が信頼の証として真名を授けてくれた。

俺は喜んで2人と真名を交換し、絶対に勝つと心に決めたものである。ちなみに違和感があると言われて口調は元に戻した。2人はそれを笑って許してくれた。

趙幻「雛里殿、馬防柵と塹壕の方は？」

鳳統「だ、大丈夫でしゅ。用意は完璧、陣も形成していましゅ」

緊張しているのか、雛里殿は言葉を噛みながらも報告してくれた。

馬防柵とは、俺が提案した馬が突撃出来ないように鋭利な先端を持ち、斜めに掛ける柵だ。

その後ろに防衛隊を配置して、乗り越えて来た敵を槍による突きで倒す。そんな簡単な作業でも、時間は大いに稼げる。

ちなみに俺は、騎馬による奇襲部隊の隊長を勤めることになっている。

馬は母上にしこたま練習させられた。しばらく乗っていないが、多分大丈夫だろう。

健気で可憐な少女。大事な仲間。尊敬する師。守らねばなるまい。この2人も。この邑も。全てを。

趙幻「よし、では私は集まった人々に檄を飛ばしてくる。２人共、指示の方、頼むぞ」

諸葛亮・鳳統「はいっ！」

２人の美少女の快活とした返事を背に受け、俺は部屋を後にした。

◇

邑の中央にある広場には、良く知った顔が並んでいた。普段、買い物に出ると必ず見る人達だ。

酒屋のおっちゃんやその息子、娘。本屋や雑貨屋、服屋に大工の人達やその家族。

みんなみんな、俺の大好きな人達だ。だが、俺はその人達を死神のさすらう戦場へと駆り出さなければならない。戦わせなければならない。胸がグッ、と締め付けられる。

趙幻（だが、戦わなければ生き残れないのもまた事実か）

この広場に集まった約１５０人の人々は、この邑を守るために志願してくれた人達だ。

命を賭けて、守りたいと思い立ち上がった人達だ。

――悲しいな。そう思いながら俺は彼らの並ぶ最前列の前へと歩いて行く。

すると、全員引き締まった顔でその視線を俺に集めた。

趙幻「この邑を守るために立ち上がった勇者達よ。今回、あなた方の上に立ち戦う趙幻だ。姓は【趙】名は【幻】字は【守殻】。皆知っていると思うが、敢えて名乗らせて頂く」

粛々と、俺はまず自己紹介から説を始める。

趙幻「この邑には今、世に蔓延り始めた賊の集団。黄巾党が近付いている。奴らの数は約５００。我らの人数が約３倍の数だ」

そう、雛里が集めてくれた情報によると奴らの数は約５００。俺達の３倍近い数を有している。

だが、と小さく呟き俺は大きく息を吸った。

趙幻「それがどうしたっ！我らより人数が多くとも、奴らは悪に身を染めた賊！！単なる烏合の衆である！！ただの寄せ集めの集団に、我らが負ける道理はない！！もしあったとしても、その道理は私の無理でこじ開けてくれよう！！！」

明鏡止水で得た気迫。それを放ちながら、俺は声高々に邑人達に喝を飛ばす。

趙幻「我らは皆、自らの守りたいモノを守るために立ち上がった勇者である！その手で抱き締めたい者を守るために立ち上がった英雄である！！その足で守りたい者を脅かす敵を蹴散らす猛者である！！死地へ向かうと考えるな！！勝利のための前進と考えろ！！我らはこれより守りたい者を守るため阿修羅すら凌駕する存在へと変わる！！躊躇うな！悩むな！！砕け！！撃ち抜け！！貫き通せ！！！」

俺は気迫に覇気を交え、更に強い言葉を放ち声を荒ぶらせた。

邑人達に闘志が宿るのを感じる。

趙幻「そして最後に、私のわがままを聞いてもらう。敢えて言おう。死ぬなよ」

その一言が終わったのを皮きりに、邑人達の雄叫びがこだました。

声の嵐と言うべきか、邑人達の気持ちが高ぶり空へと抜ける。

ああ、これがトップの気持ちか。複雑な思いとは別に、彼らの思いが自分を高ぶらせているのを感じてそう思った。

「この邑は俺達が守るんだ！！」

「やってやるぞぉぉおっ！！」

「水鏡先生を守るぞお前らぁぁあっ！！」

「水鏡塾のみんなを守るぞぉぉおっ！！」

誰かの言葉の度に「おぉっ！！」と誰かが答え、連鎖していく。

この一体感があるなら、大丈夫だ。元々長くこの邑で共に暮らしてきた人達なのだ。絆は相当深い筈だ。

高ぶる邑人を傍目に見ながら立っていると、雛里と朱里がパタパタと走ってくる。

険しい表情だ。それはつまり――。

趙幻「来たか、黄巾党」

朱里「はいっ！北西から接近して来ます！」

雛里「あと2刻ほどで邑に着きそうです」

2刻っつーと、4時間か。意外と早いな。

趙幻「あいわかった。全員これから持ち場に着け！！奇襲部隊は伏兵に向かうぞ！！気合いを入れろ！私達にこの邑の未来が掛かっているのだからな！！」

「「「「「「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！！！！」」」」」」

これだけで大地が揺れるのではないかと思えるくらいの咆哮が上がり、邑人達はそれぞれ与えられた持ち場へと向かっていく。

槍、剣、弓、盾。それぞれがそれぞれの武器を持ち、勝利を信じて走り去って行った。

諸葛亮「しゅ、しゅごい声だったね……雛里ちゃん」

鳳統「う、うん。しょうだね……朱里ちゃん」

一方で、我が可愛い軍師コンビは先の咆哮で目を回しているみたいだった。

まあ、あれは凄まじいよな。でも、それくらいで目を回してちゃ駄目だ。2人は多分、近くない未来何万人という兵士を動かす軍師

になるんだから。

趙幻「よし、それでは私は部隊を連れて所定の位置へと移動する。頼んだぞ」

鳳統「はい。その、あの……頑張ってください」

諸葛亮「機会は一度きりです。お願いします」

雛里の応援ににへらと笑っていれば、朱里に諭される様に伝えられた。

ちょっと怒っている気がするが、気のせいだろうか。

趙幻「私はやるさ。姉者との約束を果たす為にもな」

それだけ言って、俺はその場を後にした。

姉者、その言葉にポカーンとする2人に気付かないまま。

‡朱里ｓｉｄｅ‡

趙幻「私はやるさ。姉者との約束を果たす為にもな」

雅也さんは呟く様にそう言うと、馬舎を目指して歩いて行きました。

諸葛亮「雅也さん、お姉さんが居たんだ……」

鳳統「だ、だから女の子に慣れてたの……かな」

雛里ちゃんと顔を見合わせて、そんな会話をする。

でも、何だか雅也さんの表情はちょっと暗い感じだった様にも見えました。

まさか、とは思いますが……。

雅也さんは不思議な魅力のある人です。最初は女の子しかいない水鏡先生の私塾に入って来た初めての男性、という事もあって警戒する人や恥ずかしがる人が多数でした。

しかし粛々と勉学に励み、鍛錬に打ち込み、私塾の掃除や料理をする姿を見て、みんないつの間にか雅也さんを認め、惹かれている人まで出て来る始末でした。

端整な顔立ち、細身の体、男性なのに腰まで伸びた長く綺麗な水色の髪、そして文武両道。決して鼻に掛けない所も人気の秘密です。

実は、雛里ちゃんもそんな雅也さんに惹かれている1人でした。かっこいいですからね、雅也さん。

その雅也さんに才能を認められて、雛里ちゃん凄く喜んでいました。今だってきっと、雅也さんの役に立つために頑張って緊張と戦ってるんだと思います。

……そんな雛里ちゃんが少し羨ましいのは、秘密です。

さて、わたしも頑張って指揮をしましょう。

雛里ちゃんには負けません。わたしだって、雅也さんに才能を認めてもらった1人なんですから♪

趙幻。檄励。諸葛亮。（後書き）

檄励の言葉はグラハムを意識してました
結構滅茶苦茶です

助けてください。

眠れなーい

超幻。奇襲。トランザム！！（前書き）

雅也無双。

トランザムな回。

脳内ＢＧＭは【ＦＩＧＨＴ】を推奨します。

今回はちょっと長め。

超幻。奇襲。トランザム！！

はてさて、朱里殿と雛里殿にあの場を任せ、俺は2人と決めた作戦通り部隊を率い、ある場所へと移動した。

馬を久片ぶりに扱ったが、どうやら腕は鈍っていないらしい。最初こそ多少感覚に戸惑うこともあったが、すぐに勘を取り戻せた。これも日頃鍛錬をしていた賜物か、体はなまっていないようだ。

今回の作戦の肝は、俺達奇襲部隊。これが成功するか否かで、邑を守れるかどうかが掛かっている。

作戦内容を単純に説明するならば、邑を守りつつ黄巾党の頭数を減らし、首級が出て来た所を俺達が奇襲。討ち取ることで敵を混乱させ、あわよくば殲滅すると言った所か。

奴らは烏合の衆。陣形も戦略もへったくれもなしにただ突っ込んでくると容易く想像出来る。指揮官が居なくなれば簡単に瓦解するだろうと、朱里殿が言っていた。

朱里殿と雛里殿は初陣という事もありやや不安であるが、そこは天性の才と培われた知謀で乗り切ってくれるだろう。

2人はかの名軍師、諸葛孔明と鳳雛だ。それだけでも、不安は若干取り除ける。

さて、所定の位置にて伏兵として着いた訳だが、俺の部隊は何かと血気盛んな輩が多い。

まあ、選別する際に俺の気迫と覇気に堪えられた連中だ。そうで無くては困るというもの。

今まで基本女の子に囲まれて生活して来たからな、こういう男臭い匂いもやぶさかではないのだ。

「趙幻殿。我ら、何時でもあなたのために命を投げ打つ覚悟はありますが故、危なくなればすぐに逃げてくだされよ」

隣にいた筋骨隆々な男が見事なサムズアップと共にそう言ってくれた。

後方にいるみんなもうんうんと頷き、俺は思わずお前達……と涙ぐみそうになる。

趙幻「馬鹿者共が。敢えて言った筈だ、死ぬなと」

照れ隠しにそう言い伝えて、俺は前を向いた。姉者、俺は第2の故郷を見つけたようだ。

そんな事を思っていれば、地平線の向こうから勢い良く移動する黄色い波が見えてきた。

趙幻「見えたな。お前達、下手に動くなよ。合図があるまで出る事は許さん。黙して待て。この作戦、俺達に掛かっているのだから」

最後の忠告を部隊に言い伝えて、俺は小さく溜め息を吐いた。

さて、そうは言ったが俺自身が堪えられるかどうか。

俺は落ち着きがなく我慢弱い男だ。邑が襲われているのを、黙して静観を決められるとは到底思えない。

あわよくば敵の司令官よ。早く前へと出て来てくれよ。

◇

‡雛里ｓｉｄｅ‡

「報告します！北西の方角から、黄巾党と思われる集団が広く展開し此方へ向かって来ているのを確認しました！！」

鳳統「わ、わかりました。で、では作戦通りお願いしましゅ……」

あわわ、噛んじゃった……。

報告をしてくださった邑の人は、それでも小さくはにかみ失礼しますと自分の持ち場に戻っていきました。

今回わたしが受け持った持ち場は、西側の入口。

この邑は背の高く堅固な石の防壁に囲まれていて、東西南北の入口からしか入れない様になっている造りをしています。

昔、水鏡先生が邑の人達に頼んで造ってもらったそうです。有事の際に備えて、と。

水鏡先生は、こういった多数の賊の方々が襲ってくるのを見越していたのかもしれません。そう考えると、やっぱり凄い人なんだな、と改めて尊敬します。

「鳳雛ちゃんは、後ろの方で私達に指示だけ出しててね。戦うのは私達の仕事だから」

「そうそう、鳳雛ちゃんが怪我でもしたら俺達この先ずっと後悔しちまう。それに、趙幻さんにどやされちまうからな」

邑の方々はそう言って、違いないと笑っていました。

雅也さんは、人々から愛される星の下に生まれたんでしょうか。邑の人達から嫌われることもなく、寧ろすごく慕われていると思います。

雅也さんは、すごい人です。

武芸に秀で、勉学も出来て、何気なしに人々を魅了し惹きつけていく。時々、本当に男の人なのかわからなくなるくらい、綺麗な人。

……もしも仕えるなら、雅也さんに仕えたい。そう思えるくらい、わたしは雅也さんに憧れを抱いてしまっています。

「敵接近！もう少しで鳳雛ちゃんが言ってた射程圏内に入ります！！」

陣や馬防柵、矢を防ぐ柵と一緒に急造した簡単な物見矢倉の上から、目が良いという理由で上がってもらった人からそう報告が入りました。

開戦……。怖いです。すごく、すごく怖い。だけど、わたしは雅也さんにここを任された人物。

怖いけど、逃げたいけど、わたしが居なくなれば指示を出す人がいなくなって、邑と戦っている人の危険がずっと大きくなる。

それに、雅也さんはわたしなんかに信頼していると言ってくれました。だから、それに応えたい。憧れの人の、信頼に応えたい。

鳳統「み、皆さんっ！作戦通りにしていれば絶対に勝てます！だから、えっと……。わたしは雅也さんみたいにかっこいいことは言えませんが、頑張ってください！」

恥ずかしいけど、勇気を出して噛まずに言うことが出来ました。

しかし、何故か皆さんわたしを見ながら目を白黒させています。

あわわ……。やっぱり変だったのかな。駄目だったのかな……。

「鳳雛ちゃんが……鳳雛ちゃんが俺達を応援してくれたぞぉぉぉぉぉぉっ！！！」

「いいいいよっしゃぁぁぁぁあっ！！全力で守るぞてめえらぁぁぁぁあっ！！！」

「みwwwwwwなwwwwwwwぎwwwwwwwwwwwwwwwwwwきwwwwwwwたwwwwwwwwwwwwwwwwww

鳳統「あわわわわ……」

少し間を置いてから口々に出て来る高ぶりの言葉。雄叫び。咆哮。雅也さんの時と同じくらいのそれに、わたしは驚きました。

話や文献で読んだ、勝ち鬨の声みたいです。

士気は上がっているので成功……だと思っていいのでしょうか？

これなら、きっと問題なく戦えます。活躍してくれます。雅也さん、わたし、頑張って指揮をします。

もし活躍出来たら……御褒美、くださいね……♪

◇

‡雅也ｓｉｄｅ‡

敵、黄巾党の数はおよそ５００と、予想を裏切らない形だった。俺達の部隊が潜み、伏し、息を殺し、気配を殺している場所からもそれを確認出来た。

邑の西側から、唐突に咆哮が上がる。

男はそれを聞いた時、ふっ、と笑みを漏らした。

趙幻（杞憂だったみたいだな）

内気な雛里が勇気を出したのだろう、そう心の中で呟くと、黄巾

党の方を見直し小さく貧乏揺すりを始める。

この俺、趙守殻は我慢弱く、落ち着きがなく、卑怯や姑息を嫌い、真っ向勝負を好しとする男だ。本来ならばこの奇襲、性に合わんと言って辞退する事も出来たがしなかった。

個の我が儘で、多を乱す。それで起こる被害を想像出来ない俺ではない。

何より、その時から自分達の人数の約3倍を有する相手と分かっていたのだ。恩があり、大切な第2の故郷を守るためならばと喜んでこの奇襲部隊の隊長を受け持った。

「「「「「……おおおおおおっ！！！！」」」」」

趙幻「始まったかっ……！」

互いの陣営から雄叫びが上がる。

黄巾党はやはり何の陣も組まず、ただ弓によるバラバラな援護と突撃という特攻紛いの事をしていた。

遠目でしっかりと確認出来ず、様子がどうなっているかも分からないのが歯痒くて仕方ない。

しかし、敵側に思ったよりも馬が少ないのは嬉しかった。騎馬による突撃は脅威だ。ただの邑人では太刀打ち出来ない。

馬防柵は機能しているだろうか。あれは丸太で造らせた、急造だがなかなか頑丈なものだ。何匹馬が刺さろうと、そう簡単に壊れる

ものではない。

不安と焦りと苛立ちが、徐々に積み重なっていくのが自分でもわかる。

本能が往けと叫ぶ。戦えと、守るために殺せと咆哮する。

だが、それを俺は理性で我慢した。今は時ではない。朱里殿と雛里からの合図が無ければ出る訳にいかないのだ。

隊の命も掛かっている。それに、合図が出るまで往くなと言ったのは俺だ。

隊長の俺が守らずしてなんとするか。俺の矜持にも関わる。約束は守る男、それがこの趙守殻だ。

「趙幻殿、凄い気迫だ……」

「そこまで俺達の邑を愛してくれているのか……」

「くそっ！臥龍ちゃん、鳳雛ちゃん、早くしてくれっ……！」

隊からも我慢出来ずそわそわとしている者まで出始めてしまう。

これは本格的にマズいな。何より、堪忍袋の緒がキレそうだ。

本当に阿修羅すら凌駕する存在へと成りかねないぞ、黄巾党。

そんな時だった。敵の中に他とは違った雰囲気と武装した馬に乗った男が北側の前線へと出て来たのは。

何やら不甲斐ない部下達に激を飛ばしている様だが、愚か者め。良く出て来たと言っておこう。我慢の限界だ。

ジャーン！ジャーン！ジャーン！！

タイミング良く、朱里殿の持ち場である北側から銅鑼を叩く音が鳴り響く。

それに連鎖する様に、俺達は隠れていた小さな丘の向こうから馬による奇襲を敢行した。

趙幻「敵を蹴散らし瓦解させる！全員抜刀！！突撃ぃぃぃぃっ！！」

「「「「おぉぉぉぉぉぉっ！！！！！」」」」

咆哮と共に剣や槍を構える部隊のメンバー。双剣を抜き、両手に持つ俺を先頭に土煙を上げながら移動する馬が嘶き、黄巾党の横っ腹を目指して突撃する。

趙幻「私が先行する！」

先に行くと宣言し、意識を首級の男に向けて集中させる。

精神統一、無我の境地、全身に駆け巡る力を全て開放し、それは鳴った。

水の一滴。精神という名の泉の水面に落ちるそれを見極め、体内の気が膨れ上がるのを感じる。

趙幻「ト　ラ　ン　ザ　ム　！！」

この境地、明鏡止水にまで辿り着くに2年。操るまでに3年。まさに5年という月日を費やした。

最初は居合いの型を取り、長時間瞑想して初めて使える技だったが、今では短い時間で精神をそこへと揚げることが出来る様になった。

保って居られる時間は短いのは悔やまれるが、そこはまた俺の鍛錬次第だろう。

単騎、馬の出せる限界の速さを引き出し、双剣で邪魔な輩を排除しながら首級へと向かい、駆け抜ける。

「なんっ……！！」

「がぁっ！！」

無情に斬り捨てた賊達を気にも止めず、奔走邁進。狙うはただ、首級のみ！！

馬上という事もあり、歩兵は雑魚と言っても過言ではなかった。

剣は届くこと無く、槍を叩き斬ると共に頸を跳ね、弓を弾き、やがて見えた、首級の居場所。

道がある様だった。俺の目には、どう進めば最短の距離で近付けるかが見えていた。

趙幻「趙守殻っ！推して参るっ！！」

力強く宣言し、その記された道を辿る様に馬を走らせる。

そして、首級は俺の存在に気付くが時既に遅し。左手の剣を振り上げ、頸を狙う。

趙幻「斬り捨て――！！」

憤怒の形相で俺を見る首級。ああ、そうだな。お前の顔は覚えておこう。命を貰うのだ、背負ってみせるさ。

趙幻「――ごめぇぇぇぇぇんっ！！！！」

気持ちの悪い人肉を斬る手応えを一瞬感じ、胸糞の悪さに1人悪態を吐きながら俺が跳ねた首級の頸は、澄み渡った蒼天へと血を撒き散らしながら舞い上がった。

◇

‡朱里ｓｉｄｅ‡

黄巾党は北西から来たという事もあり、やはり北側と西側の入口を攻めて来ました。

予想通りに事が運び、敵に馬が少なかった、という嬉しい誤算も受け、わたし達は最小限の被害で敵を押さえる事が出来ました。

そして、遂にとうとう指示を出していた方がわたし達の前へと、

現れました。

「何やってんだてめえらっ！もっとしっかりしやがれってんだ！！」

「でもお頭！こいつらなかなか手強くて……」

どうやら、なかなか上手くいかないのに業を煮やした様子です。

しかし、此方に取って見れば好都合。弓が届かない位置に居るのは厄介ですが、相手の士気は見るからに落ちていました。

諸葛亮「今です！銅鑼を鳴らしてください！！」

わたしの指示に、近くにいた男性が静かに首を縦に振ると、合図用に用意した銅鑼の近くで待機している方に手を上げます。

ジャーン！ジャーン！ジャーン！！

強烈で大きな音を響かせた銅鑼。呼応する様に伏兵に徹していた奇襲部隊が、北東にある小さな丘の向こうから凄まじい速度で移動を始めた模様です。

諸葛亮「さすがですね、雅也さん」

武芸に秀でている、と雛里ちゃんから聞いていましたが、どうやら馬の扱いも上手いらしく、聞けば部隊を引っ張りながら先頭を走っているみたいです。

諸葛亮「奇襲部隊が動きました！ここが正念場ですよ！」

わたしの後少し、という声に北側を守ってくださっている方々が雄叫びに近い返答を一斉にくれました。

はわわ……。やっぱり、この感じは不思議です。お腹に響く感じが特に。

「臥龍ちゃん！趙幻さんが単騎掛けしてる！！」

諸葛亮「ふぇっ！？」

物見矢倉の上で矢をつがい、射っていた方の言葉にわたしは耳を疑いました。

なんと、雅也さんの馬が考えられない程の速さで先を行き、黄巾党の部隊の中へと突撃したらしいです。

ですが、ここからも信じがたい内容を随時あの方は報告してくれました。

賊とはいえ、多数の相手を赤子の手を捻るように簡単に斬り伏せていること。しかも闇雲に走っているわけではなく、指示を出している頭に向かっていること。そして一気に近付き――。

「あ」

諸葛亮「ど、どうしましたか！？」

「討ち取った！討ち取ったよ！あの人！！」

首級の頸を討ち取った、と。

わたしは武芸に詳しいわけではないですが、それでも戦略や戦術を学び、戦の知識はあると自負しています。

だからこそ、雅也さんの活躍は目を丸くするくらい、驚かされました。

趙幻「敵将は趙守殻が討ち取ったぁぁぁぁぁあっ！我に斬られたくなくば、二度とこの地に踏み入れるなぁぁぁあっ！！」

宣言すると共に、相手に恐怖を植え付ける言葉を投げつける雅也さん。

敵将の頸を片手に、長く美しい水色の髪を靡かせて馬を走らせる姿は、どこか御伽噺に出て来る武人を思わせ、似合っていると思えました。

諸葛亮「さあ、大詰めです。なるべくたくさんやっつけちゃってください。ですが、深追いは駄目ですよ！」

ここから最後の仕事。数を減らさなければ直ぐに再起を図り、他の邑を襲う可能性がありますから、追い討ちを掛けます。

ふう……。この分なら、きっと大丈夫だとは思いますけどね。

超幻。奇襲。トランザム！！（後書き）

鳳統ちゃんと孔明ちゃんは邑の人から号で呼ばれてる、っていう設定にしました。

元凶は水鏡先生。

次回で雅也が旅立つ予定です。

好々。約束。旅立ち。

黄巾党との戦が終わり、被害や戦死者、負傷者の報告が終わった日の夜。俺は1人自室に籠もり、借りてきた桶に胃の中のものをぶちまけた。

初めて人を殺し、血や肉の臭いに慣れるまでは決まってこうだったが、まさか今になって再発するとは予想だにしなかった。

2年という期間、戦いも無く人を殺さなかったから当たり前と言えば当たり前なのかもしれない。

趙幻「くっ……。俺もまだまだ未熟、ということか」

胸がイガイガし、胃がムカムカする中で自分の精神的な弱さに愚痴を漏らす。

腑抜けたつもりは毛頭ない。だが、この吐き散らした吐瀉物は俺の弱さから出て来たものだ。歯軋りをして、直ぐに溜め息を吐いた。

別の思考をしよう。弱くなったならば再度鍛えれば良いだけのこと。俺はそれが分からないまま喚き散らす子供ではない。

――50人。その数字が示す意味は、亡くなった邑人の数だ。

激戦区であった北側、その次に敵が多かった西側。東、南にそれほどの被害はなかったが、俺の率いた部隊からも予想以上の人が死んだ。

その分黄巾党の数をめっきり減らしてやったが、身内と他人では思うところが違う。

……やはり、俺は甘いのだろうな。胸に去来する切なさを感じて、そう思った。

だが、やり切れなくとも割り切る事は出来る。戦なのだ、人は死ぬ。摂理だ、道理だ。当たり前の事なのだ。

俺1人が全ての人々を守れるわけがない。出来るとを思っている者は自惚れている。1人で出来る事には限界があるのだ。

ならばどうすれば良いか。そんな事決まっている。仲間を集めればいいのだ。

仲間が居れば俺の手が届かない所を守ってくれる。俺が仲間を守り、仲間が俺を守り、やがてその輪は大きく広がる。

黄巾党が出て来た、という事は姉者もそろそろ動き始める筈だ。俺もうかうかして居られない。

多少名残惜しいが、この邑を発つ日も近そうだ。朱里殿、雛里殿、水鏡先生、邑の人々。別れるのが辛く悲しいが、行かなければならない。

姉者の背中を追う為にも、姉者のわがままを果たす為にも、己が誓いを果たす為にも、な。

◇

数日が経ち、邑自体にそこまで被害が及ばなかった事も有り活気はすぐに元通りと成った。

結果的に言えば、逆に邑人が増えたくらいだ。

どうやら旅の商人が噂を広めたらしく、移住してくる者が後を絶たないらしい。

黄巾党が手を出せない邑。強固な守りと資源の豊富な邑。話を聞けば、そんな感じだった。

住人の数が増えるのは悪くないことだ。それはつまり、生産量の増加や資金の潤いに直結する。

劉表がいかに馬鹿であっても、邑が大きくなれば守らざるを得ない。守りはより強固になり、俺が居なくとも官軍が守ってくれるだろう。

後の憂いはなくなった。俺の精神も、体力もいつも通りに戻った。後は私塾を止め、旅に出る事を水鏡先生に伝えるだけだ。

何時も通り日課の筋トレや朝餉作りを終え、午前の授業を経て昼餉を振る舞い、午後の授業をこなす。

日が暮れようとしている頃に授業が終わり、俺はひと息吐いた後に水鏡先生の部屋へと向かった。

水鏡先生「烈虎、居るのはわかっています。そのまま入って来なさい」

水鏡先生には驚かされてばかりだ。何故俺が今日訪ねる事を知っていたのか。

驚愕すると共にやはり素晴らしい人だ、尊敬し直さなければと思った。

趙幻「趙幻、入らせて頂く」

部屋へと宣言した後、中へと入り戸を閉める。

そこには水鏡先生だけでなく、朱里殿と雛里殿が居た。はて、2人は何故ここに居るのだろうか？

諸葛亮「雛里ちゃんの言った通りだったね」

鳳統「うん……でも……」

どうやら俺の行動は雛里殿に予測されていたらしい。

再び驚かされてしまったが、何故雛里殿は俯いて居るのだろうか。不思議である。

趙幻「水鏡先生、お頼みがあり参上させて頂きました」

水鏡先生「好々（よしよし）。わかっていますよ烈虎。旅に出たいのですね？」

趙幻「なんと、お気付きでしたか」

今日は何度も驚かされる日だ。まさか悟られているとは思わなん

だ。

水鏡先生「あなたはこの水鏡塾の門下生である前に武人。烈虎の性格を鑑みれば、先の戦を皮切りに黄巾党討伐のため旅に出るのは予測出来ますよ」

さすがは人物鑑定家としても有名な我が師、司馬徽様。我が性格を良くわかっておられる。

趙幻「ならば」

水鏡先生「あなたがそう言うのであれば好々。許しましょう」

趙幻「はっ！ありがとうございます！！」

やはり水鏡先生相手に隠し事は無理だな。これならばもっと早く伝えておけば良かった。

諸葛亮「雛里ちゃん……良いの？」

鳳統「……」

しかし、何故朱里殿は難色を示しながら雛里殿に尋ねているのだろうか。

雛里殿も雛里殿で俯き、押し黙っている。ふむ……。

水鏡先生「臥龍、鳳雛。あなた方にも好々と言ってあげたい所ですが、許しは出せませんよ」

水鏡先生の放ったその内容に、朱里殿と雛里殿が顔を上げた。

朱里殿は慌てている様子で、雛里殿は今にも泣きそうな表情を浮かべている。

諸葛亮「そ、そんな。わたしは……」

鳳統「ふぇ……ふぇ……」

水鏡先生「あなた方が出るには時期尚早です。……そうですね、烈虎」

趙幻「はっ！」

水鏡先生「何れ、名を上げたらこの2人を軍師として迎え入れてもらえますか？」

趙幻「はいっ！喜ん……えぇっ！！？」

水鏡先生の申し出に、俺は思わず素っ頓狂な声を上げる。

朱里殿と雛里殿も顔を見合わせて驚愕し、水鏡先生の顔をまじまじと見つめていた。

当の本人はと言えば当たり前といった雰囲気でニコニコと笑っており、どうやら本気らしい。

水鏡先生「この2人の才、もう少しだけ伸ばさせてからあなたに任せたい。そう言っているのです」

趙幻「私は一向に構いません。が、朱里殿・雛里殿の意見は……」

と言って2人の顔を見れば、ジッといつの間にかこちらを見つめていた。

可愛いロリ2人の熱い視線……。ふ、鼻血ものだな。出さないが。

諸葛亮「わたしは大丈夫です。雅也さんなら、安心して仕えられます」

鳳統「わ、わたしもでしゅ……。寧ろ、その方が……嬉しいです」

どうやら俺はかなりの果報者らしい。神よ！我に幸運をありがとう！！

と、俺を転生させるために殺してくれた奴じゃない神に心の中でそう叫んだ。

しかし、本格的に本編から話がズレ始めてきたな。諸葛亮と鳳統を部下に、か。

これは一度、劉備に会ってその志を確かめなければなるまいなぁ。

◇

これまた数日後。俺が旅立つという報は瞬く間に広がり、準備の為に買い物等の用事で邑に出れば口々に応援と礼と寂しさを伝えられた。

食料を安く売ってもらったり、オマケを付けてくれたり、俺の武

器をタダで鍛え直してくれたり、背中を押してくれたり。

大工の方や筋肉質なガチムチっぽい奇襲の時に一緒に戦った奴らは、本気で涙を流してくれた。俺も泣いた。告白された。それは一蹴した。俺に男色の気はないっ！

水鏡先生は、俺に新しく服と馬をくださった。

服は白を基調とした燕尾服のような袖無しの上着に、これまた白を基調とした長ズボン。そして、胸元まで開けた蒼いノースリーブだった。

馬は俺が奇襲する時に乗せてくれた奴だった。赤茶けた毛並み色に、漆黒の鬣と尻尾を持つ豪馬。俺のトランザムに応えてくれるまでの力を持つ馬だ、これ以上ないくらいの相棒だった。

名を、【翅麒】と付けた。今後の活躍に期待する。

そうだ、水鏡塾のみんなからは紅い紐をもらった。

長い髪をこれで縛れ、だそうだ。朱里殿曰わく、仲間が居ることを忘れないよう、身につけられるものにした、らしい。

有り難いものだ。早速髪を結い上げ、ポニーテールにした。水鏡塾の面々にそれを披露したら、何人かが鼻血を垂らしたり悦に入っていた。何故だろう。

画して、俺の旅に必要な物が揃い贈り物を授かり、出立の日は訪れた――。

◇

水鏡先生「いざ別れの時となると、寂しくなりますね。弟子の旅立ちとなれば、これ一層と言った所ですか」

趙幻「そう言わんでください水鏡先生。私とて、気持ちは同じですから」

出立の朝、朝餉を作り何時もより早く水鏡先生、朱里殿・雛里殿と食べた後、水鏡塾の屋敷の前に出て、翅麒の体を撫でながら水鏡先生とそんな会話をする。

水鏡塾は今日は休みになっていた。昨夜は宴会を催し、飲み食い騒ぎだったからだ。朱里殿や雛里殿以外の門下生達はまだ夢の中だろう。寧ろ、この2人はよく起きたものだと感心する。

諸葛亮「雅也さん、お体にはお気を付けて。無病息災を祈っています」

趙幻「傷み入る。朱里殿もお元気で。我が軍師として再会すること、期待している」

眠気も二日酔いもないのか、朱里殿はそう言って笑顔を浮かべ、俺と握手をした。

一方で、雛里殿はと言えば今にも泣きそうな表情だった。服の裾を両手で強く握り締め、体を震わせている。

趙幻「雛里殿」

鳳統「ひゃい……」

呼べば、返事の声も上擦っていた。泣かない様に堪えているのだろう、その姿が愛くるしく、健気で俺は思わず目線が合う様に膝を折り、彼女の小さな体をそっと抱き締めた。

鳳統「ま、ましゃやさん……！？」

趙幻「雛里殿と同じく、私とて皆と別れるのは口惜しく、そして胸が張り裂けそうな思いだ。だが、私は行かねばならない。それを理解して欲しい」

鳳統「わ、わかってます……。わかってるんですが……」

趙幻「なに、直ぐに会えるさ。我、趙守殻は瞬く間に名を馳せてみせようぞ。……雛里殿。あなたは私が認めた才ある人間だ。そして努力家だ。どうか、私に免じて今は少しの別れと割り切ってくれ。でなければ、でなければ……」

俺の目から、大粒の涙が溢れ出そうとしていた。別れは辛く、悲しく、どうも苦手だ。

姉者の時もそうだった。故郷の時もそうだった。そして、今もまた、そうだ。

俺は我慢弱く堪え性も落ち着きもない男だ。別れの時が長引けば長引く程、俺の思いは強くなり涙と成って溢れ出る。

大の男が、情けない話だ。

雛里「雅也さん……」

趙幻「私は我慢弱く落ち着きも堪え性もない男だ。更に卑怯や姑息が大嫌いと来ている。だがな、雛里殿。私は約束を守る男だ。だから、約束しよう。必ず再び会うと」

彼女の肩を優しく掴み、引き離した後その双眼を真っ直ぐに見詰めて言い放つ。

雛里殿はそれで納得してくれたのか、真剣な表情で頷いてくれた。

趙幻「良い表情だ。さすがは我が軍師となる者、そうでなければな」

鳳統「雅也さん。わたし、もっと頑張って、頑張って、雅也さんのお役に立てるようになります」

趙幻「ああ、楽しみにしている」

もう大丈夫だろう。そう思いながら彼女にそれだけ言って、俺は安心しながら目を瞑り微笑んだ。

それから荷物を積んだ翅麒の背中に騎乗し、水鏡塾を眺める。

趙幻「水鏡先生！今まで大変お世話に成り申した！！このご恩、一生忘れません！！朱里殿！あなたの策に戦では大変助けて頂きました！！雛里殿！あなたの努力する姿にはいつも感心させられていました！！お二方！しばしの別れではありますが、どうかお元気で！！我が軍師と成って共に戦が出来る日、大変楽しみにしております！！では！！行って参ります！！！」

精一杯の感謝を込めて、3人や未だ夢の中であろう同門の姉弟子・妹弟子達に向かい声高らかに叫んだ。

水鏡先生が行ってきなさい、と軽く微笑み、朱里殿は両手を上げ強く手を振っていた。

鳳統「お気を付けて！！」

最後に、あの雛里殿が大きな声でそう言ってくれたのには驚いた。

何と清々しい旅立ちか。翅麒を走らせ、雲一つない空を仰ぎ見ながらそう思う。

悲しみも切なさも寂しさもない旅立ち。あの蒼天と同じく、俺の心は晴れ渡っていた。

姉者よ、遅くなりましたが今からあなたを追い掛けます。沢山の土産話を用意してある故、楽しみに待っていてください。

趙幻「往くぞ翅麒！目指すは幽州、公孫賛が治める地だ！！」

軽快に走る翅麒は嘶き、俺は手綱を引いてしっかりとした目的地を目指す。

◇

転生し、三国志の武将が皆女性と成っている外史に産まれ落ちた鵲雅也こと趙幻。

幼少期から少年時代を故郷にて姉の背中を追い掛け育ち、武を磨

いた。

それから両親に認められ武芸者として流浪し、知を磨くために司馬徽を訪ね、師と仰いだ。

門下生となった趙幻は、同門との新たな約束が成され、それを果たすと誓いを立てる。

体も精神も鍛えられ、青年となった趙幻は今再び姉を目指して旅に出た。

相棒、翅麒は嘶き走り、趙幻はただひたすらに前を向いた。

長く美しい水色の髪を風に靡かせ、彼の英雄としての物語が幕を開ける。

時は後漢、蒼天に変わり黄天が成ろうとしていた頃。

群雄割拠の戦乱は、もう目の前にまで迫っていた――。

好々。約束。旅立ち。（後書き）

ここから、二重の意味で本編に入ります。

真・恋姫†無双としての本編であり、雅也の物語の本編でもあります。

察しの良い人達ならわかると思いますが、多少オリジナル展開を交えた蜀√に突入するわけです。

本当は雅也に色んな所を回らせても良かったんですが、姉が趙雲。約束を交わした姉弟子2人が諸葛亮と鳳統だったので一直線にしました。

雅也のチート、トランザムじゃないんです。だけどわかる人にはわかるんじゃないかなぁ。

さて、長々となりましたが次話から真・恋姫†無双編の本当の始まりです。

ではでは～ノシ

流浪。迷子。姉者。（前書き）

一直線に向かわせるつもりが、迷子路線に。

一刀君登場の回。

色々とムチャクチャ。キャラのトレースが難しくて仕方がない。

流浪。迷子。姉者。

――拝啓、水鏡先生。

お元気ですか？お体の方は如何ですか？邑に変わりはございませんか？朱里殿の調子はどうですか？雛里殿は泣いていませんか？私、趙守殻は今日も今日とて――。

趙幻「腹……減った……。ここ、どこよ……」

――絶賛遭難中にございます。

1年前、水鏡塾を旅立った私はそちらで培った知識、鍛えてきた武を用い、黄巾党の撃退や邑の復旧の手伝い、旅商人の護衛等をしながら路銀の為に色々と道草を喰いつつも旅を続け、幽州を目指しておりました。

初めこそ調子良く旅は続けられたのですが、護衛等の関係で洛陽を目指したりと何故か様々な土地を巡ることに。

まあ、姉が幽州に居る、という確証もなく、とりあえず探しながらと思い走り回ったのですが、いつの間にやらこんな事になってしまいました。

黄巾党のせいで仕事を得られない邑や、食料を分けてもらえない邑もございます。最近では特に顕著で、黄巾党への恨み辛みが募る一方にございます。

さて、今日で食料がなくなり3日目になりました。何とか本当に

小さな小川を見つけたりで水を飲み、騙し騙しで空腹を紛らわせてはいるのですが、そろそろ限界です。

翅麒が食料に見える事もあります。絶対に食べたりはしないと誓いましたが。

水鏡先生……。みんなに、会いたいです。

趙守殻より。

◇

何もない開けた平原を翅麒に跨り歩く中、俺の体力は限界に達しようとしていた。

翅麒が気遣ってくれているのか、揺れは最小限だがここ数日間何も食べていない体には、やはり応えるというものだ。

ぐったりとうなだれる体。翅麒は落とすまいと身を震わせて、バランスを取ってくれている。

目が霞み、全身から力が抜けていく感覚がした。

あ、ヤバい。本当に、駄目かもしんねー……。

完全に力の抜けてしまった俺の体は、翅麒の背中から落ちようとする。

翅麒が何とか衝撃がないよう、膝を畳んで身を屈めてくれた後に、俺の体は道に落ちた。

趙幻「ああ、翅麒。ありがとう。だけど、ごめん。俺、もう駄目みたいだ……」

横たわる俺の顔に翅麒の鼻先が当たる。心配してくれているのだろう、それが妙に心地よく、嬉しかった。

趙幻（姉者、朱里殿、雛里殿、申し訳ない。趙幻はここまでの様です）

死んだら、またあの空間に行くのかな、と心の中で続けながら俺は目を閉じる。

悪神よ、これで一回だ。ろくでもない終わり方を用意しやがって……。恨むぞこん畜生……。

◇

‡？？？ｓｉｄｅ‡

要請された黄巾党の討伐を終え、私は自らが治める地、許昌へと軍を進めていた。

黄巾党……。元々は腐敗した朝廷を打倒するべく立ち上がった民草だと聞いたけど、今では数が増えすぎてただの暴徒と化している。

「華琳様、進行方向に行き倒れを発見したとの報告がありました」

途中、平原を進んでいると私の大事な家臣『夏候淵』こと【秋蘭】が私に報告を入れる。

秋蘭は私、『曹孟徳』が幼い頃から共にいる家臣の1人だ。真名を呼び合う程に私は彼女を信頼し、彼女もまた私を敬愛し付いて来てくれている。

曹操「行き倒れ？珍しいわね」

夏候淵「どうやら旅の武芸者らしく、二本の直刀を持っておりました」

旅の武芸者……。この時代に珍しくはないが、二本の直刀ね。

夏候淵「どうなさいますか？」

曹操「捨て置きなさい。……と言いたい所だけど、そうね。どう思う？一刀」

一刀「そこで俺に振るのか？そうだな、やっぱり見捨てるのは可哀想だし、助ければまた1人良い噂を呼んでくれる人が増える。恩を売るって意味でも、助けたいかな」

何気なく聞いてみれば、一刀は打算的な答えをした。

北郷一刀。巷で噂になっていた天の御遣いらしい男。天の国の道具、初対面の私達の名を当てたりと確かに占いとは別に信じられる要素を持っている。考え方は甘いけど。

天の御遣い、という大義名分を持っているしそこそこ使えるみたいだから軍に引き入れた。

そんな彼に甘いわね、と言いたいけれど後半述べた事には賛成する。

今は1人でも多く、この曹孟徳の噂を広めて欲しい。力を得る為に、兵を集める為にだ。

我が覇道を進むには、まだまだ力と名声が必要。それを読み取っているのか、それとも甘いのか。一刀はその行き倒れの武芸者を助けようと言った。

曹操「そういう事よ。秋蘭、助けてあげなさい」

夏候淵「御意」

私の指示に、秋蘭は馬を走らせて前の方へと戻って行く。

一刀「だけど、二本の直刀かぁ。実は噂の人だったりして」

曹操「ふふふ、もしそうなら是非引き入れたいものだわ」

一刀の軽口に、私は微笑みながら言葉を紡ぐ。

最近、この豫州にはこんな噂が流れている。

二本の直刀を繰る、水髪美麗な武人。文武両道、男女不明な義に厚き武芸者。

耳に入る噂を纏めるとそうだった。

男とも女ともわからない中性的な顔立ちで、武と文に通じ、義に厚く、一度した約束は必ず守る。

各地を旅する商人達が口々に噂し、実際に助けられた事もあるそうだ。

さて、行き倒れの武芸者は一体何者なのかしらね……。

◇

‡趙幻ｓｉｄｅ‡

趙雲『では雅也。これから私特性の秘蔵メンマを食べさせてやろう』

趙幻『姉者？その見れば見るほどぬめっとした割り箸の様なものはなんですか？』

趙雲『何を言う。お主のためにじっくりしっかりと作り込んだメンマだぞ』

趙幻『違うぞ姉者。それはメンマではなく、割り箸の様なものだ。メンマではない』

趙雲『ふむ、私のメンマが食べられぬと申すか』

趙幻『違う。そうじゃない。って姉者？何故そんなゆっくりと大量に摘んだ割り箸の様なものを持って近付いてくるんですか？』

趙雲『ええい、黙って食べろ！さあ食べろ！』

趙幻『ことわ……あれ！？体が動かない！？姉者待て！時におちつあー！あー！！そこはらめぇぇぇぇぇっ！！アーッ！！！』

趙幻「姉者ぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！！！！！」

「私はお前の姉者ではないっ！」

がばちょっ、と割り箸の様なものを俺の口に注ぎ込もうとする姉者から逃げ、叫んでから上体を勢い良く起きあがらせた。

すると隣から誰か知らない若い女性の声が聞こえて来て、何故か頭を殴られる。

お、ｏｈ……。なかなか効いたぞ誰かさん……。今ので眠気がぶっ飛んだぞ。

「起きて早々、騒がしい奴だなお前は」

趙幻「も、申し訳ない……」

隣に居たのは、長い黒髪を全て後ろに流した女性だった。

赤いチャイナドレスを着ていて、座っているせいかスリットから見える足が艶めかしい。

趙幻「しかし……。ここは？」

「邑の宿だ。華琳様が行き倒れの貴様を助けてくれたのだ。感謝するがいいっ！！」

見渡してみると、目覚める前は平原だったのが、確かに屋内になっている。

どうやら、彼女の言う『華琳様』という人物に俺は助けられたらしい。むう、また恩を返すべき人物が増えてしまった。

しかし、あれ？『華琳様』？妙に引っ掛かるキーワードだ。

が、とりあえず考えるのを止めた。目の前にいる人物にまずは自己紹介をしよう。

趙幻「命を助けていただき感謝する。我が名は趙幻。姓は【趙】名は【幻】字は【守殻】。よろしく頼む」

「あ、ああ……。私は夏候惇。姓は【夏候】名は【惇】字は【元譲】だ」

趙幻「夏候惇殿か。改めて礼を述べさせていただく。ありがとう」

夏候惇「わ、私は別にお前の見張りを頼まれただけだ！何もしていない！」

頭を下げ礼を言う俺に、夏候惇殿は慌ててそう返してくる。

だが、『華琳』という人物が俺を助けてくれたということは、様

と付けている所をみると夏候惇殿はその人の部下であり、俺からすれば彼女も恩人の1人と言っても過言ではない。

しかし、彼女の雰囲気を見ると武人と見受けるが……はて、夏候惇と言えば――。

「春蘭、何やら騒がしいみたいだけど、目覚めた？」

そんな時に、タイミング良く現れたのは金髪ツインドリル……もとい、巻き髪をツインテールにしている凛々しい雰囲気を持つ美少女だった。

思い出した。もう15年以上も前のことだから忘れかけていたが、夏候惇と言えば『魏武の大剣』、つまり曹操配下の武将じゃないか。

そして、華琳と言えば恋姫の曹操の真名だ。何故忘れていた。よりにもよって曹孟徳の領地で行き倒れたのか俺は。

夏候惇「はい、今し方」

趙幻「……」

曹操「長く美しい水色の髪、男とも女ともわからない中性的な顔立ち……。あなた、名前は？」

趙幻「姓は【趙】名は【幻】字は【守殼】と申します。あなたは……曹孟徳とお見受けしますが」

曹操「あら、私も有名になったものね。そうよ、私が曹操。姓は【曹】名は【操】字は【孟徳】。感謝しなさい、仁義の武芸者趙守殼」

互いに自己紹介を終えた後、曹操殿の口元が歪につり上がり、微笑んだ。

仁義の武芸者……か。そう言えば、俺の事をそう噂されてるって聞いたことあるな。

趙幻「命を拾って頂いた事には感謝致します。ですが、私は一介の武芸者。お返し出来るモノは手持ちには……」

そう言った時、俺の腹の虫が盛大に鳴った。

俺は恥ずかしくなり顔が熱くなるのを感じながら俯き、曹操殿と夏候惇殿が目を丸くする。

曹操「ぷっ……。あはははは、良いわ。まずは腹拵えと行きましょう。趙幻、立てるかしら？」

趙幻「はい、申し訳ございません」

曹操「春蘭、夕食にするわよ。みんなを集めて」

夏候惇「はいっ！」

◇

さて、曹操殿には命を救って頂いただけでなく、夕飯までご馳走になってしまう形になってしまった。

しかし、今俺が出来る恩返しは武か文によるものしかない。

だが、仕官するにも姉者が見付かっていない上に俺は幽州の公孫賛の下を目指しているのだ。

勿論、何かしらの形で恩を返したい。それをしなければ俺の矜持が許さない。

どうすれば。どうすれば。

宿の食堂で、1人悩み苦悩しながら曹操殿の配下らしき3人と共にとりあえず腹を膨らませた。

1人は先ほど自己紹介を交わした夏候惇殿。もう1人は夏候惇殿と瓜二つだが、蒼いチャイナドレスを着て、髪型が前髪を左だけ足らしているクールな雰囲気の女性。そして最後に、この世界では初めて見る服装をした……。ああ、彼か。ギャルゲ主人公はこの世界だと魏ルートらしいな。

曹操「さて、食べ終わった所で早速紹介しましょう。春蘭」

夏候惇「先にも言ったが、我が名は夏候惇。姓は【夏候】名は【惇】字は【元譲】だ。よろしく頼むぞ」

夏候淵「私は夏候淵だ。姓は【夏候】名は【淵】字は【妙才】。姓でわかると思うが、夏候惇は私の姉者だ。よろしく頼む」

一刀「俺は北郷一刀。姓は北郷、名前は一刀だ。字とか真名はない。好きに呼んでくれ。一応、天の御遣いってことで話は通ってる」

存じておりますとも。

趙幻「命を拾って頂いただけでなく、夕餉までご馳走していただき感謝する。我が名は趙幻。姓は【趙】名は【幻】字は【守殼】。ある理由で旅をしながら武芸を磨いている流浪人だ」

右の手のひらに左の拳を当てながら、続けてよろしく頼むと頭を下げる。

一刀「男の人……？」

趙幻「ああ。まごう事なく正真正銘の男だ」

曹操「なに一刀。女の子の方が良かったの？」

一刀「い、いや違うよ。でも、綺麗だし、落ち着いてるからびっくりしただけだ」

夏候惇「確かにな。私も声を聞くまでは女だと思っていた」

夏候淵「噂通りの容姿、というわけか。女よりも女らしい男。なんともちぐはぐだな」

……どんな噂が流れているのか知らないが、どうやら打ち解けられたみたいだ。

曹操「ところで、ある理由で旅をしていると言っていたけど、聞かせてもらっても良いかしら？」

趙幻「別に隠すような話ではないし、大して面白くもないですが」

曹操「それを決めるのは私。さあ、話しなさい」

さすがは女王様、といった所か。覇道を突き進もうとする曹操、なんとまぁ独善的というかなんと言うか。

趙幻「姉者を探しているんです」

夏候淵「ほう、趙幻には姉がいるのか」

趙幻「はい。名を趙雲と言います」

一刀「趙雲!?趙雲に弟がいたのか!?」

まあ、一刀君の驚きは致し方ないか。君の知っている三国志の知識には、趙雲の弟など存在しないからな。

つか、俺はある種のイレギュラーな存在だし。俺だって自分の中にある三国志の知識にゃあ趙幻なんて奴知らないしな。

夏候惇「常山の昇り竜の弟か」

曹操「あながち、噂も役に立つものね。ここまで要因が揃えば、信じられない事も信じられる」

あ、曹操殿?すっごい嫌な笑顔を浮かべておられますね。何か思いついたんですか?

曹操「あなたの武、見てみたいわね」

夏候惇「っ！！」

曹操殿の言葉にいち早く反応を見せたのは、夏候惇殿だった。目を光らせ、立候補したいと言わんばかりに熱い視線を送っているのがわかる。

やっぱりそうなりますか。まあ、あの趙子龍の弟が目の前にいるわけですからね。

姉者の噂は、旅の途中所々で耳にしている。それが彼女達の耳に入っていない筈もないとは思っていたけど。

夏候淵「お言葉ですが華琳様。夜も遅い上に、趙幻はまだ目覚めたばかりです。万全の武を見るならば、明日になさいませんか？」

ここで、思わぬ方向からフォローが飛んできた。

その内容は模擬戦ちょっと先延ばしにする程度だったが、有り難かった。

俺の体力は、確かにまだ全快とは程遠い位置にある。安眠と食事で精神は回復したが、武を見せるとなれば話は別だ。

曹操「確かにそうね。じゃあ、明日にするわ。春蘭、趙幻。良いかしら」

夏候惇「はいっ！！」

曹操殿の問いに夏候惇殿は勢い良く返事をして、俺は黙して頷く。

明日、朝。朝餉を食べた後、俺と夏候惇による戦いが幕を開けるのだった。

流浪。迷子。姉者。（後書き）

次回は春蘭との模擬戦。

ちょっと血気盛んな雅也君。

一刀君は魏ルートなのです。

一応、時系列的には荀イク・許緒参加手前くらいかな。

夏候惇。試合。勧誘。（前書き）

長め。

キャラクターのトレースの難しさと言ったらもう……。

夏候惇。試合。勧誘。

朝、と言っても空が白み始める頃。早朝。いつものように起きた俺は、昨夜返された双剣を腰布に差し、宿の外へと出る。

宿の近くにある馬舎には曹操殿達が乗っていただろう軍馬の中に紛れて、赤茶色の毛並みと漆黒の鬣と尾を持つ我が相棒の姿があった。

趙幻「翅麒、すまんな。心配を掛けた」

俺の姿を確認し、近寄ってくる翅麒の頭を撫でながら、謝罪の言葉を贈る。

聞けば、行き倒れていた俺を助けようとした曹操殿の部下の前に立ちはだかり、俺を守ろうとしていたそうだ。

翅麒は強く賢い馬である。その後、夏候淵殿が姿見せ説得を受け、身を引いて頭を下げたらしい。

趙幻「まだお前に乗って旅に出られないが、もう少しだけ我慢していてくれよ」

撫でる手が気持ち良いのか、目を細めて小さく嘶く翅麒にそう呟いた。

体力は回復した。精神状態も落ち着いている。これから、日課の筋トレと居合いの型を使った瞑想をする。

朝餉の後に夏候惇殿との試合があるから、体を温めておいて損はない。

元より、体を動かさなければ1日落ち着かないのだ。

最近は空腹と体力の消耗を抑える為にやらなかったが、なまっていなければいいがな……。

そう思いつつ、一度宿の中に戻り桶を借り、荷物から布を取り出してから外へと出ようとする。

その時、夏候淵殿と鉢合わせになった。

趙幻「おはようございます」

夏候淵「趙幻か。早いな。まだ寝ていても良いんじゃないか？」

趙幻「そちらこそ、と言わせて頂く。私の朝は早いのだよ」

夏候淵殿は俺の言葉にそうか、とだけ呟いて察してくれた様だ。

夏候淵「桶と布を持って外へ向かう様だが」

趙幻「ああ、朝の鍛錬だ。今日は夏候惇殿と試合をするからな。体を温めようと思っている。元より、普段から体を動かさねば1日落ち着かなくてな。習慣とは恐ろしいものだ」

夏候淵「体の方は大丈夫なのか？行き倒れから目覚めてまだ昨日の今日だ。あまり無理をされては困る」

趙幻「ご心配傷み入る。が、生憎と体調は万全。自分の体、自分でわかっているつもりだ」

夏候淵殿の心配は嬉しいが、これをしなければ本気を出すことまならん。その事も伝えると、彼女は少しだけ思案してわかった、と納得してくれた様だった。

夏候淵「だが、無理をするなよ。本気の貴公の武を見せねば華琳様は満足しないし、姉者が勝つだろう」

趙幻「随分と夏候惇殿を買っているようだな」

夏候淵「なに、姉者だからな」

夏候淵殿の気持ちが含んだ言葉には、妙に同感する所があった。

なる程、彼女は俺と同様に姉が大好きなようだ。

俺がもし夏候淵殿と同じ立場だったら、姉者に関してそう宣言するだろう。

自分の姉は強いぞ、と。

趙幻「ふふふふ、夏候惇殿との試合がより一層楽しみになったぞ」

夏候淵「そうか、それは何よりだ。どうか姉者と華琳様を楽しませてやってくれ。あれで姉者、自分と躊躇いなく剣で張れる者が身近にいなく、退屈していた所だからな」

夏候惇殿となろうものならば、確かに一般の兵では相手にならないだろう。

夏候淵殿は確か、弓の名手だったと覚えている。剣で競うという意味では確かにそぐわないわな。

一方で、主である曹操殿をこれでもかという程に敬愛し、夏候姉妹は本来の意味で張り合えないのだろう。

なる程、ならばこの戦いにて夏候惇殿を満足させ、曹操殿を楽しませるのが俺の出来る恩返しの形と見た。

趙幻「あいわかった。この趙守殻、全力を持って試合に臨もう」

夏候淵「うむ。私も楽しみにしているぞ」

そんなこんなと世間話に花を咲かせた後に夏候淵殿と別れ、俺は宿から出ると馬舎とは反対方向だが近くにある井戸から水を汲み上げ、桶へと注ぐ。

さて、久々の鍛錬といこう。まずは腕立て、２０００回だ。

◇

曹操「それじゃあ、約束通りに対決してもらおうかしら」

朝の鍛錬を終え、昨晩と同じ顔ぶれ朝餉を胃に納めて全員が気を落ち着かせた後に曹操殿が放った言葉は、それだった。

曹操殿の隣に座っていた夏候惇殿の表情が待っていましたと言わんばかりに輝き、そんな彼女を向かい側の席に座る見て夏候淵殿が

微笑む。

一方の一刀君は夏候惇殿の様子に苦笑し、俺の顔を見て表情をひきつらせた。

一刀「す、凄い嬉しそうな顔してる」

趙幻「夏候惇殿が、か？」

一刀「いや、趙幻さんが」

ふむ。どうやら夏候惇殿と戦えるという実感が湧いて、気付かぬ内に顔が綻んでいた様だ。

趙幻「私とて、武を磨く為に旅をしていた武芸者。強い者と手合わせ出来るのだ、嬉しくない筈がない」

曹操「あら、随分と自信がある様ね」

趙幻「少しばかり、ですがな。腕に自信がなければ、旅などには出ませぬよ」

曹操殿に対して返した言葉は、本心である。

元より鬼の如く強い母上に勝つのが旅に出る条件だったのだ、それに辛くも勝利出来た自分の腕に自信がないと言えば、謙遜でなく失礼というもの。

それに、俺にとって彼女達を楽しませ、満足させる事がこの試合の目的なのだ。

夏候惇「ふふふ、ならばその腕。この夏候元譲が見極めてくれようっ！」

趙幻「うむ、よろしく頼む」

意気込みや好し、心底楽しみなのか夏候惇殿は浮き足立っているようだった。

曹操殿がその後、なら兵士達にも見本として見てもらおうと言ったことには何故と疑問に思ったが、まあ良い。

その後5人で宿を出ると、村の近くで野営をしている曹操軍の陣へと向かった。

夏候淵殿と曹操殿の鶴の一声で、兵士達が集まってくる。

曹操「さて、面白いものが見られるかしら」

品定めをするような目で、俺を見る曹操殿。

いつの間にやら兵士達が俺と向かい側に立つ夏候惇殿を囲い、その円形がちょっとした特設リングになっていた。

「夏候惇殿ーっ！軽く捻り潰してやってください！」

「その武、誰もかなわない事を知らしめてやってくだせぇ！！」

やんややんやと野次が飛ぶ。夏候惇殿は随分と兵士達に好かれている様子だった。

趙幻「人気者、ですな」

夏候惇「それでなくば戦場に着いては来まい」

それもそうだな。彼女の言葉にクスクスと笑い、一本の紐を取り出す。

趙幻「では、本気でお相手しましょう。我が武の全て、特とご覧あれ」

水鏡塾の同門達から貰った思い出の籠もっている紐で後ろ髪を上げてから結い、ポニーテールに仕上げてから2本の直刀を鞘から抜いて、構える。

が、何故かその場には静寂が訪れていた。皆が皆呆然と俺を眺めている。

夏候惇「ほ、本当にお前が男だと、未だ信じがたいぞ、私は……」

夏候淵「産まれてくる性別を間違えいると思うぞ、趙幻……」

曹操「……人とはわからないものね、一刀」

一刀「彼女は男性、彼女は男性、彼女は男性、彼女は男性……」

見物人として居る3人とこれから試合をする夏候惇殿の言葉に、俺は構えを解いてガクッとうなだれたくたくなった。

いやいやいやいや、男ですから。喉を見ろ喉を。喉仏あるでしょ

ここに。

趙幻「まったく、失礼極まりないな」

夏候惇「す、すまない。だが手加減はしないぞ、趙幻」

趙幻「私とて、そのつもりだ」

どうやらやっと始められそうだ。夏候惇殿は一度深呼吸を行うと、幅広い刀身を持つ剣を構える。

雰囲気が、武将のそれへと変質する。

流石は後世に名を残す程の猛将。構えに隙が見当たらず、気迫もまた、十分。下手をすれば飲み込まれかねんな。

趙幻「久片ぶりに血がたぎる。この感覚、やはり私も武人ということか」

胸に沸き立つ高揚感を感じながら、俺は直刀を構え直した。

体を揺らしながら横に向かせ、左腕を中段、右腕を上段に構えて前にいる夏候惇を見据える。

夏候淵「殺しは無し。負けを認めるか戦闘続行不可能になったら負け。それで良いな」

趙幻・夏候惇「応っ！」

曹操「それじゃあ、始めなさい！」

曹操殿が放った開始の言葉に、誰がいつの間にか用意したらしい銅鑼が鳴らされた。

ゴング代わりか、何とも準備の良い。

趙幻「趙守殻。推して参る故、いざ尋常に――」

夏候惇「来いっ！！」

趙幻「――勝負っ！！」

名乗りを上げ、気合いを放ちながら姿勢を低く走り出し、夏候惇殿へと肉薄する。

まずは小手調べ、速さを重点に置き、左手の直刀を振り上げる。

一刀「早いっ」

夏候淵「ああ、早いな」

夏候惇「ふんっ！」

振り上げた刃は、いとも簡単に避けられ、夏候惇殿の目の前を空振りする。

が、それは勿論わかっていた。そのまま体を回転させ、右手の直刀を水平に振るう。

夏候惇「甘い！」

これを弾かれ、その衝撃を使い逆に回転しながら距離を取った。

ふむ、見切られているか。あの早さが見えるってことは、全力であっても避けられるな。

夏候惇「今度は私から行くぞっ！」

考察と思案を脳内でしていると、夏候惇殿が片手で自身の得物――七星餓狼を振りかざし、突撃してきた。

趙幻「ぐっ……！」

振り下ろされた七星餓狼を左手の直刀で受け止め、流す。

何という力強さ、手が痺れてしまいそうだ。これほどになるまで、いかほどの努力を重ねて来たのだろうか。

夏候惇「まだまだ！！」

袈裟切り、後方へのステップで回避。突き、右手の直刀で去なす。振り下ろし、左手の直刀で軌道をずらす。

虚と実が入り混じった猛攻が来る。何とか隙を突き反撃するが、夏候惇殿はそれも難なく回避する。

趙幻「はぁぁぁあっ！！」

夏候惇「ちぃっ……！」

精一杯の力を込めた斬撃、それを防御した夏候惇殿の体が少し後ろへと押し込む。

一方的に攻撃されるつもりはない。今度は俺が振るい続ける番だ。

趙幻「はぁっ！やぁぁあっ！！せいやぁぁぁぁあっ！！」

最初の小手調べの為に放った早さを求めた斬撃ではなく、力を込めた攻撃で夏候惇殿へと向かう。

何合と切り結び、互いに剣を振りかざし、打ち付け合った所で鍔迫り合いへと相成った。

夏候惇「やる、では、ない、か……！」

趙幻「そちら、こそ、さすが、だ……！！」

七星餓狼と2本の交差させた直刀の刃が火花を散らせ、力が拮抗しているのか互いに一進一退となっていた。

埒があかない。そう思った俺と夏候惇殿は同じタイミングで後方へと跳び退くと、再び剣を打ち付け合い、回避し、火花を散らせながら戦いを描く。

趙幻「そこっ！！」

大きく跳び上がり、変則的な動きからの空中攻撃を仕掛けたが、夏候惇殿はそれにも対処してみせた。

気が付けば、全身に汗をべったりとかき、避けきれなかった斬撃

により付いた切り傷に染みる。

曹操「へえ、やるじゃない。春蘭と互角なんて」

趙幻「お褒めに預かり光栄ですが、まだまだですよ」

夏候惇殿との距離を置くために跳び退いた際、たまたま曹操殿の近くへと着地すれば感心する様に言われた。

なんとまぁ、俺も大分強くなったつもりだったのに、ここまでとはな。

しかし、今のままでは俺が敗北するのは目に見えていた。

此方は切り傷だけだが随分と負傷させられたし、何度か蹴りを入れられている。

一方あちらは、ほぼ無傷に近い。確かに傷を入れることは出来ているが、まだ体力に余裕があると見える。

体力も握力も、心許なくなっているのを俺は感じていた。

鍛え方か、天賦の才か、経験値の違いか、はたまた根本的な何かか。

ふぅ、と一息吐き辺りを見渡してみる。

夏候惇殿は、活き活きとして楽しそうだ。曹操殿は、口元が綻んでいるのを見る限り満足していると思える。

夏候淵殿は、姉の様子にニコニコと笑みを零していた。一刀君は、黙しているが拳を握り締めて目を輝かせている。

兵士達も盛り上がり、声援が心地よく響いていた。

それらを確認した俺は、構えたままこちらの様子を窺っている夏候惇殿に体を向けると、２本の直刀を鞘に納めた。

騒然とする、兵士達。曹操殿達も怪訝な顔を見せていた。

趙幻「夏候惇殿！」

夏候惇「なんだ！」

趙幻「そろそろ終わりに致そう！！」

左手で直刀の持ち手を握り締め、右手で鞘を支えながら自重を前に傾け、精神を集中させる。

曹操「初めて見る構えね……」

夏候淵「趙幻、何をする気だ……？」

一刀「あの構え、まさか……」

夏候惇「……っ！」

曹操殿や夏候淵殿、見学している兵士達に俺の構えが何なのかわかっていなかった様だが、対峙している夏候惇殿は何かを察したの

か警戒を強めていた。

そして流石は一刀君と言った所か。この構えが何をする為の構えかを察している。確か、剣術の経験があるんだっけか。まあ、俺のする事はただのそれとはちょっと違うがな。

精神を研ぎ澄まし、夏候惇殿以外を視野の外に流す。喧騒も言葉も耳に入れず、心を水面の様に静かに落ち着かせる。

瞬間、見えた。水の一滴。

趙幻「受けよ。我が武の集大成にして奥義っ！！」

気が全身を駆け巡りながら大きく膨れ上がっていくのを感じつつ、夏候惇殿に向けて叫ぶ。

明鏡止水。5年の月日を掛けて習得し、未だ磨き続けている俺の持つ最高の技術にして状態。

曹操「……！！」

夏候淵「なんだ、この異様な気迫と覇気は……！あれが趙幻の奥義……！」

夏候惇「何であろうと、私が勝つ！！」

趙幻「ト　ラ　ン　ザ　ム　！！」

咆哮と共に、俺の体は通常時の数倍とも言える早さで夏候惇殿に肉薄した。

趙幻「切り捨て――」

夏候惇「なっ！はや……」

趙幻「――ごめぇぇぇぇぇぇぇぇんっ！！」

体の捻りを加えた最速の抜刀。全力を込めた渾身の一撃。夏候惇殿は何とか反応を見せたが、俺の全てを注ぎ込んだ武を避けられず、防御しようと構えに入った。

けたたましい金属音が響くと同時に、重い感触を手に感じながらも振り抜く。

夏候惇「……っ！」

彼女が吹き飛ばされると同時に七星餓狼は手を離れ、空を舞った。

夏候惇「くそっ……。参った……」

七星餓狼の刃が地面に突き刺さり、夏候惇殿の負けを認める言葉と共に舞い降りる沈黙。誰もが信じられないと言った表情で俺達を見て、絶句しているのが気配と様子で分かる。

曹操「勝者！趙幻！」

それを打ち破ったのは、威厳に満ちた曹操殿による俺の勝利宣言だった。

瞬間、囲んでいた兵士達が驚きの混じった雄叫びを上げた。

趙幻「……立てるか？」
夏候惇「あ、ああ……」
トランザム――もとい明鏡止水を解除した俺は夏候惇殿に近付き、問い掛けてから手を差し出す。
彼女は首を縦に振ると俺の手を取り、立ち上がった。
夏候惇「まさかこの私が負けるとは……。大陸は広いな」
趙幻「なに、夏候惇殿程強い者は初めてだった。私も勝てたのはたまたまだろう」
それから互いに武を讃え合い、俺はありがとう、と礼をした。
◇
試合が終わった後、興奮覚めやらぬ状態の兵達に曹操殿が檄を飛ばし、解散してから俺達は元居た宿へと戻った。
負けてしまったと落ち込む夏候惇殿を夏候淵殿や曹操殿、一刀君の3人が慰めているのを見て微笑ましく、そして時折危険な気配を感じる事があった。
主に何故か恍惚とした笑顔を浮かべる夏候淵殿と悦を含めた微笑みを浮かべる曹操殿から発せられていたが……。
……。深く考えるのは止めよう。きっとそれが良い。一刀君も表

情はひきつっていた。

それから、気分が落ち着いた夏候惇殿やいつも通りに戻った夏候淵殿、一刀君、そして何故か身の危険を感じる程にニコニコとしている曹操殿と共に昼餉を頂いた。

曹操殿？何故私を見ながらニコニコと笑顔を浮かべているのですか？正直怖くて仕方ないんですが。

曹操「さて、昼食も食べ終わった所だしまずは礼を言いましょう。ありがとう、趙幻。良いものが見れたわ」

趙幻「なに、満足して頂けたようで光栄です」

机を挟み向かい側に座る曹操殿の言葉に、俺は笑顔を浮かべながら答える。

曹操「まさか春蘭が負けるとは思ってもみなかったわ。まあ、最近天狗になっていたみたいだし、良い戒めになったでしょう」

夏候惇「そんなぁ、華琳さまぁ～」

曹操「あら、『この大陸で私に勝てる奴などいない』、って豪語していたのは誰だったかしら？」

夏候惇「そ、それはぁ……」

曹操殿の悪戯っぽく言った言葉に、夏候惇殿は小さくなりながら俯く。

後ろで夏候淵殿がはぁはぁしているのなんて知らない。見てない。関知しない。

曹操「それで、趙幻。その春蘭の鼻っぱしを折ったあなたに提案が」

趙幻「お断りします」

ピクッ、と曹操殿の整った眉が動く。

趙幻「私はあなたに仕官する事は出来ませぬ」

曹操「あら、わかってたの。だけど、この曹孟徳の誘いを断るほどの理由が聞きたいわね」

曹操殿の性格から、もし満足させた上で夏候惇殿に勝てば誘われるだろうと予測はしていた。

彼女は覇道を進む為に今、力を必要としている。大変魅力的なことではあるが、今はその誘いに乗る事は出来ない。

趙幻「曹操殿の人柄、能力、人を引き寄せる力は確かに魅力的です。私自身、既に惹かれている所もあります。一宿三飯、命を拾って頂いた事にも大変恩義を感じています」

曹操「そう、そこまでにして断るのは何故？」

覇気と殺気を込められた言葉が、放たれる。

だが、それに屈せられない理由が俺にはある。

趙幻「姉との約束があります」

覇気も殺気も弾き飛ばし、俺は曹操殿の瞳をじっと見つめながらそう言い放った。

そう、姉者との約束がまだ果たせていないのだ。姉者のわがままを果たせていないまま、誰かに仕官するという気にはなれなかった。

曹操「姉……。趙雲だったかしら」

趙幻「はい。私と同じく、武芸を磨く為に旅をしています。私は姉者と再会すると約束しました。それを果たすまでは」

曹操「……もういいわ」

今度は曹操殿が俺の言葉を遮り、額に手を当てながらそう言って溜め息を吐いた。

曹操「あなたの気持ちはわかった。良いでしょう、今回は手を引くわ」

夏候淵「華琳様」

曹操「春蘭、何も言わないで。その代わり、旅先で私の良い噂を広げて頂戴」

趙幻「ああ、約束致します」

曹操殿の頼みはお安いご用だった。ただ、立ち寄った先や旅商人に曹操殿がどういった人物かを伝えるだけ。

そんなことで良ければ喜んで引き受ける。何せ、大恩のある相手だ。仕官出来ないのがまた、心惜しいくらいに。

曹操「なら、食料と少しの路銀を渡すわ。それでさっさと旅に出なさい」

趙幻「……よろしいのですか？」

曹操「私に良い物を見せてくれた。その礼よ」

ありがたい。この上なくありがたい。感謝してもしきれない程だ。これが、曹孟徳という後に名を轟かせる者の徳か。

趙幻「曹操殿。この趙守殻、受けた大恩を生涯決して忘れませぬ」

曹操「ええ。だけど、もし私の覇道を阻むことがあれば容赦なく殺すわ。それも覚えておきなさい」

そうならない事を祈るばかりだが、そうもいかないのを知っているだけに肯定しながらも苦笑するしかなかった。

◇

‡華琳ｓｉｄｅ‡

まったく、この私が気紛れを起こすなんて。欲しいものは何が何でも手に入れて来たこの私が。

曹操「まったく、不思議な男ね」

趙幻が去っていった後、何かがおかしくてそう呟き微笑む。

一刀に続いて、また面白い男が現れたものだ。この私が男を欲しいと思う、昔では考えられないこと。

夏候惇「華琳様、本当によろしかったのですか？」

曹操「あら、春蘭。あなたまさか、彼に惚れたの？」

夏候惇「ち、違います！ただ、あの武。確実に華琳様のお力になります！」

春蘭、顔を真っ赤にしながら言っても説得力はないわよ？

まあ、良くないと言えば良くないのは真実だ。春蘭の言う通り、彼が私の下に来れば良い武官として覇道を助けてくれるだろう。文武両道と聞いているし、知恵もまた然り。

ただ、裏を返すと私に着かなければ覇道の妨げになるだろう。余程無能な輩でなければ、の話だが。

夏候淵「そうか。姉者は奴に惚れたか」

夏候惇「秋蘭まで～」

秋蘭が春蘭で遊んでいるのを傍目に見ながら、私は微笑み頬杖をつく。

今回は気紛れで手を引いたけれど、今回はという話。いずれまた

引き入れる策を練っておこう。覇道を進み、羨む程素晴らしい軍を作り上げて。

そこでふと、誰かがいないのに気が付いた。周囲を見渡してみると――。

曹操「あら？春蘭、秋蘭。一刀が見当たらないのだけど」

◇

‡一刀ｓｉｄｅ‡

春蘭と戦っている時に見せた趙幻さんの抜刀術。俺の記憶が間違っていなければ、アレは『居合い』に間違いない。

この時代の日本は、まだ弥生時代の筈だ。剣術が発展しているわけがないし、ましてや日本刀が存在していない。

本来存在しない筈の剣術。それを使う趙幻さんに、何故と気になってしまっていた。

彼女……じゃなかった。彼の後を追いかけて外に出ると、赤茶けた毛色を持つ立派な馬に荷物を括り付けていた。

一刀「趙幻さん、少し良いですか？」

趙幻「一刀君、何か私に用かな？」

ポニーテールに結んだ髪を揺らしながら振り向いた趙幻さんは、微笑みながら俺の方に近付いてくる。

むう……。声は確かに男のそれだけど、見れば見る程女の子だ。春蘭とも秋蘭とも、華琳とも違う綺麗な感じと雰囲気を持っている。

でも、良く見れば喉仏が有るし、胸元を晒している服からは女性特有の母性の象徴がなかった。

男の娘……か。

趙幻「一刀君？」

一刀「あ、ああ」

趙幻「人の顔や体を見つめるのは、感心しないな」

怒られた。そりゃあ、自分の体をジロジロと見られて嬉しい奴は少ないよな。

一刀「ごめん。そうだ、趙幻さん。趙幻さんの使ってた抜刀術、誰に習ったんですか？」

早速、趙幻さんに疑問を尋ねてみる。するとどうだろう。眉間にシワを寄せて、何かうなり始めた。

んー、やっぱり変な感じだなあ。そういえば、何か横文字みたいな事も叫んでたし、何か有るんだろうか。

‡趙幻ｓｉｄｅ‡

さて、予想外。一刀君が居合いに対して言及してくるとは思ってもみなかった。

これは答えても良いものか。確かに、彼からすれば気になる事だわなあ。

趙幻「君は、これが私が考えて編み出したと言えば信じるかな？」

一刀「それって」

趙幻「さあな、君の考え通りかもしれないが、違うかもしれない」

まあ、それっぽく言って悩ませてやろう。どうせ記憶を持ったまま転生して来ました、何て言っても信じないだろうし。

当の一刀君は悩んでいる様で、額に手を当てながら一人百面相をしていた。

何この子、面白い。

趙幻「私は生まれも育ちもこの世界だよ。姓は【趙】名は【幻】字は【守殻】。一刀君、信じてくれ」

一刀「……はあ、わかった。あなたがそう言うなら」

どうやら考えるのを止めたのだろう、諦めた感じを醸し出しながら彼はそう答える。

俺はそれに我が恩師の口癖だった「好々（よしよし）」と言って、微笑んだ。

趙幻「では、私は発つ。曹操殿には次会う場所が戦場でない事を祈

ると伝えてくれ。達者でな」

一刀「はい、趙幻さんもお元気で」

それから翅麒に跨り、一刀君にそれだけ伝えた。

彼もまた、微笑みながらそう言う。

……。その笑顔が数多の女をこれから落とすと思うと、どうもやり切れない気持ちになった。

ふむ。最後にまたからかうか。

趙幻「一刀君！」

一刀「はい！」

趙幻「これから大変だろうが、『リラックス』していけよ！」

それだけ伝えて、俺は翅麒の腹を足で叩き走らせる。

一刀君は驚愕していたが、まあ何だ。置き土産だ、これからまた悩むが良い。

趙幻「見たか翅麒、一刀君のあの驚き様。彼は面白いなあ」

青空の下を走らせながらクスクスと微笑み、翅麒に問うと短い鳴き声が帰ってくる。

さて、出立する前に邑の人に聞けばここは豫州。随分と遠回りし

てしまったが、目指すは幽州公孫賛殿の治める地。

去年も同じことを言った気がするが、気にしない。

趙幻「姉者、今から往くぞ！」

足取りは軽快、心の中は晴れ模様。風もなく心地よい気候に感謝しつつ、翅麒と共に旅は続く。

続くったら、続く！！

夏候惇。試合。勧誘。（後書き）

華琳様の気紛れで、なんとかなった感じの雅也くん。

真名交換無しなのは、魏に着かないから。一刀君いるし。

言っておきますが、春蘭は本当に雅也に惚れてません。

ただ、自分と同じくらいの力を持つ雅也と高め合えたらって程度。

次回は幽州入り。漸く本筋です。

幽州。黄巾党。乱入。（前書き）

合流回。

愛紗と鈴々の登場。

※やばい誤字があったので修正しました

幽州。黄巾党。乱入。

曹操殿との出会い、夏候惇殿との試合をしてからしばらく経った。

翅麒に乗り、豫州を離れ幽州へと順調に足を進める俺。途中、やはりと言った所か黄巾党を中心とした賊の退治や旅商人の護衛をしつつ、今回は道草を喰わずに向かっている。勿論、曹操殿の好評を語りながらだ。

そしてそんな中、護衛をしている時に気になる噂を耳にした。

『公孫賛の所に義勇兵が出入りしている』

恐らく。否、絶対に劉備殿達事に違いない。

普段、前世の記憶は既にだいぶ薄れて来ているが、要所要所で思い出せるあたり俺の記憶力は捨てたものではないな。

そう自画自賛をしつつ、林の中や谷、山などを越え、漸く幽州へとたどり着いた頃、平原で久々に数の少ない黄巾党を見つけた。

恐らく偵察か、それともただの独断か。

まあ良い。捕まえて根城の情報を吐かせ、公孫賛殿の所への手土産とするか。

趙幻「おい、貴様等。こんな所で何をしている」

翅麒を進め、ゆっくりと近付いてから降り、徒歩で歩み寄りなが

ら黄色い布を頭に巻いた3人組に声を掛けた。
見た目はチビ、デブ、髭。なんとまあ、テンプレートな3人組みだ。
髭「あぁん？んだてめえ」
趙幻「なに、少し聞きたいことがあるのだが」
睨み付けてくる髭に、俺は何も感じずただ飄々と言い放つ。
おお、訝しげな表情を浮かべてるな。んで、全身をくまなく見てやがる。
デブ「い、良い体してるんだな」
チビ「良いものぶら下げてんじゃねーか」
髭「デブの趣味は知らんが、おいてめえ。俺達を黄巾党と知って声を掛けたんだろ？」
一瞬物凄い悪寒に見回れた。おいデブてめえ。何頬赤くしてんだ。ぶっ殺すぞ。
髭よ、チビよ。んな隙だらけに刀構えて何したいんだ？ばかなの？死ぬの？
趙幻「ああ。知っていて声を掛けた。なに――」
デブ「ああ？」

趙幻「根城への道を聞きたくてな！！」

２本の直刀を抜き取り、構えながら叫べば３人組みは戦闘体勢に入った。

威圧的に睨み付けて来るが、問題ない。殺気もまともに放てないゴロツキが、そんなもん見せられても怖くないぞ。

髭「ぬかせ！１人で何が出来るってんだ！！」

チビ「アニキ、こいつぶっ殺して刀ぶん捕りましょうぜ」

デブ「こ、殺しちゃダメなんだな。お、俺好みなんだな」

あらあら、どうやら口に出てたみたいで反感を買ったみたいだ。つかデブてめえやっぱりぶっ殺す。

趙幻「ふん、相手の力量も見抜けぬか？悪いことは言わん。大人しく情報を吐け」

髭「黙れ女男！てめえが大人しく――」

趙幻「おい貴様。今何て言った？」

髭の放った言葉が、俺の中にある怒りの琴線に触れた気がした。

ちなみに、今の俺は寝不足気味で少しだけ堪忍袋の緒が切れやすくなっている。

風呂にも入れていない。寝るにも安眠出来ていない。俺の中には沸々とストレスが溜まっているのは明白だった。

チビ「ああ？だから女お……と……こ……？」

趙幻「女男、ね。別に何故か知らないがそんな風に俺の姿はそんな風に取れるらしいし冗談や誉め言葉としてなら許容していたが、そうか。今のは明らかに侮蔑だったな。うむ、そうかそうか。そんなに死にたいと見える。はて、貴様らは黄巾党だったな。元より罪もない人々から金銭・武器・食料・尊厳を奪いたい放題してきたのだよな。うむ、ここでひとつ因果応報を喰らわせてやろう。今死ね、直ぐ死ね、骨まで砕いてくれよう」

身の内から沸き立つ黒い感情を感じながらだが、饒舌になってこの3人組みを脅しに掛ける。

向こうは俺の怒気と黒い何かを感じたのだろう、手に持つ武器をカタカタと震わせていた。

趙幻「ぶ・ち・こ・ろ・し・か・く・て・い・ね」

3人組み「ヒィィィィイッ！！！」

それから一発ずつ峰打ちを決めて、存分に痛めつけてから情報を吐かせた。

まあ、弱い者イジメは趣味では無いので、殺しはしなかったが武器は破壊させてもらった。

しかし、こいつら惰弱過ぎるだろう。吐かせた情報と経緯に溜め

息を吐く。

こいつらは、逃亡者だった。しかも敵前逃亡。軍だったら打ち首ものだ。賊だから仕方ないけど。

でも、良い内容であったので翅麒を呼び出し、早速と早足で駆けさせる。　戦いを始める前、あの3人組みは公孫賛殿から兵を借りたのだろう、関羽殿と張飛殿の2人の隊とわかり、逃げ出したそうだ。

何かしらの縁があるらしいが、まあ捨て置く。とりあえず急ぎ足で、2人がまだ戦っているだろう根城へと向かう。

根城は、森の中に隠れていた。とは言え、賊の拠点と言えば森の奥か洞窟と人が普段立ち寄らない場所だとそう場は決まっている。

そして、案外場所は近かった。戦場の雄叫びが聞こえる方向へと邪魔な枝を直刀で切り払いながら、翅麒が森の中を難なく走破した。

森を抜けるとそこには傾斜の緩い丘だった。見下ろせば阿鼻叫喚が放たれ、武器と武器が火花を散らし、血の臭いが充満し、死体が次々と築かれる地獄があった。

……存外、相手が多くて苦戦している様に見える。

戦いは基本的に数がモノを言う。最初に決まる優劣はそれだ。

その優劣を覆す為に戦略を練り、戦術を説き、練度を上げ、指揮を執る。

旗を確認する。関、張……。残念、姉者の旗はなかった。が、それでも彼女達なら情報を知っているに違いない。

それにだ。目の前で賊と戦う者達をただ黙して見下ろすのは趣味ではない。

更に言えば、目の前は戦場。俺は我慢弱く堪え性のない男だ。今武を振るわずして、何時振るう。

と、その時。関の旗に集まった兵達が叫びを上げた。目を凝らして見ると、どうやら賊の数が関の旗へと集まっている。

趙幻「往くぞ翅麒。走りつづけさせてすまないが、この状況。見捨ててておけん！」

ここに助けに入れば、恩を売り取り入り易くなるだろう。だが、俺は先述した以外にも卑怯と姑息な手段が嫌いという性分を持ち合わせている。

いざ戦いとなれば理性で割り切れるまで成長したが、こと人間関係には持ち込みたくないのだ。

翅麒の横腹を靴の踵と叩き、速度を出させて賊共の脇から単騎駆けを開始する。

直刀を両手に、精神を集中。これを使えば、もう明日まで使えまいと思いながら、全力を出す為に発動させる我が奥義。

趙幻「ト　ラ　ン　ザ　ム　！！！！」

出し惜しみはしない。この期を逃すことは出来ないからな！！

‡張飛ｓｉｄｅ‡

公孫賛のお姉ちゃんから兵士の人を借りて、愛紗と一緒にやっつけに来たけど数が思っていた以上に多くてびっくりしたのだ。

最初の内は鈴々達が勝ってたけど、気付いたら愛紗と別れてて、兵士の人達もなんだか元気がなくなってるのだ……。

張飛「みんなーっ！頑張るのだ！悪い奴に鈴々達は負けないのだーっ！！」

鈴々の蛇矛が敵を沢山吹き飛ばすと、その分兵士のみんなは頑張ってくれる。

だけどやっぱり、愛紗が心配なのだ。鈴々達に向かってくる敵は少なくなって来たけど、愛紗の方はまだまだいっぱいなのだ。

そんな時、左の方から凄い大きな声と一緒に、敵が吹き飛ぶのが目に見えた。

趙幻「殺されたくなくば道を空けろ！もし空けなくば、無理矢理おしとぉぉぉぉるっ！！」

赤茶色の立派な馬に乗った見覚えのある髪の色の人が、鈴々達の前を凄い気迫と速さで駆け抜けて行ったのだ。

あの人の通った道には沢山の敵が倒れていて、相手もあの人に腰を抜かしているみたいだったのだ。

張飛「だ、誰かは知らないけど助かったのだ！みんなーっ！後一息なのだーっ！！一気に攻め入るのだーっ！！」

「「「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！！！」」」

さっきの人のおかげで、押し込む事が出来そうなのだ。ありがとう！知らない人！

‡関羽ｓｉｄｅ‡

ぐっ、不覚……。まさか敵の流れ矢が利き腕を掠るとは。

幸いにして、痛みはあるが毒が塗ってあったわけでなく、青龍堰月刀を握るには問題がないのは救いだが……。

敵の数が如何せん、多い。鈴々とはぐれてしまったのは、明らかに失敗だった。

私が負傷したことで、隊の士気も落ちている。たかが賊と侮ったが運の尽きか。

しかし、ここで盛り返さなければ桃香様や兵を貸してくれている公孫賛殿に申し訳が立たない。一緒に戦ってくれている兵も、鈴々も私も生きている。

関羽「ここで腰を引くな！相手はたかだか賊だ！！冷静に対処すれば、絶対に勝てる！！」

私の動きがいつも通りと兵士達に見せ、檄を飛ばしながら一気に５人を斬り伏せる。

後もう一歩。もう一手なのだ。それさえ開ければ、私達は勝利出来ると言うのに……！！

趙幻「……ぉぉぉぉぉぉぉぉるっ！！」

すると、左の方から誰かの雄叫びが聞こえた。賊達も何があったと注意をそちらに向け始める。

「報告！左の方向から騎馬が単騎、こちらへ敵を斬り伏せながら物凄い速さで近付いて来ます！！」

戦闘の中をかいくぐり、兵士の1人が私に報告する。

単騎駆けだとっ！？しかも黄巾党の賊を倒しながら！？

思わぬ援軍に心の中で叫びながら、近付いて来た敵を斬り伏せる。

血飛沫が飛び、武器を手放すと賊は膝を着いて事切れた。

「相手の士気が低下しています！」

関羽「わかった！皆の者！今が好機だ！！押し返し、捻り潰せぇぇぇぇぇっ！！」

「「「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！！！」」」

相手の動揺がこちらに良く作用したのか、兵士達の士気は何時も通りに戻っていた。

何にせよ、単騎で賊とは言え混乱を招かせる様な武を持つ人間が未だ居たとは。

そう思っていると、報告通り左から物凄い速さの騎馬が敵を斬り伏せながら私の前を通り過ぎ、反転して来た。

赤茶けた毛並みの見事な馬に乗った御仁は赤い紐で馬の尾の様に結んだ長く美しい水色の髪を靡かせ、両手に2本の直刀を持ち、胸元の開いた服の上に返り血で汚れた赤と元々の色だろう白い上着を着ていた。

近付くにつれて、その気迫と覇気とも言える雰囲気に圧されそうになる。

それとは裏腹に綺麗な顔をしていた。女の私が美しいと思う程に。

趙幻「関雲長殿と見受ける」

関羽「そ、そうだが、あなたは……」

趙幻「我が名は趙幻。故あって助太刀する」

話してみれば、男のそれであった。

だが、今はそんな事をしている場合ではないと自分を奮い立たせ、青龍堰月刀を構え直す。

関羽「趙幻殿か。助太刀感謝する。我らはこれより突撃を仕掛ける故、その武を惜しみなく発揮して欲しい」

趙幻「あいわかった。微力であるが、戦列に参加し、敵を葬り去ろう」

微力とは、なんと謙遜をしてくれる。

あの敵の中を単騎で斬り伏せながら駆け抜ける技量、大層お強い筈だ。

関羽「これより敵を殲滅する！！皆の者！！続けぇぇぇぇぇっ！！！」

趙幻殿の武を見た兵士達の士気は一気に駆け上がり、鈴々との合流も相成りその後は難なく黄巾党の根城を落とす事に成功した。

趙幻殿が我らの戦を盛り上げ、士気を上げてくれたのが今回の勝因と言っても過言ではないだろう。鈴々もまた、彼に助けられたと言っていた。

だが、当の本人は戦が終わると同時に倒れて仕舞われた。

……しかし、本当に見れば見るほど美しく女性の様な顔立ちだ。これで男とは、こう、なんというか、腹立たしく感じる。

それにしても、この髪の色、見覚えがある。趙幻と名乗っていたが、まさかな……。

幽州。黄巾党。乱入。（後書き）

何気に雅也くん無双な回。

次回は白蓮と桃香様、姉者の登場。

※まさか雅也のセリフが翅麒がトランザムしてるセリフになってて眠いんだな、て思いつつ吹いた。誤字ンザム！！！

公孫賛。劉備。相談。（前書き）

前話に姉者登場と書きながら出なかった。
マジメな話は長くなってだめだなぁ。

公孫賛。劉備。相談。

目が覚めれば、視界に入って来たのは見知らぬ天井だった。

だるさを感じる体を起こし、辺りを見回してみると執務用の机があり、立派な装飾が飾られていて、今俺が寝ていたのがそこそこ大きな寝台であるのがわかった。

はて、何故俺はこんな部屋に寝ていたのだろうか。

思案して、記憶を探る。

趙幻「ああ、関羽殿達を助けた後に倒れたのか」

思い当たる節を探り当て、1人ごちりながら右手の掌に左の拳を軽く落とす。

どうやら俺は、今関羽殿達が居座っている公孫賛殿の城の一室にいると考えついた。

何とも情けない。助けに入った筈が助けられてしまった。どうやら、俺は倒れる事に何かしらの運命を持っているらしい。

……改めて思う。情けない。

窓から入り込む日差しの向きを考えると、今はまだ昼前といった所か。

このまま寝台の枕に顔を埋めて恥ずかしさと情けなさにバタバタ

と足を暴れさせたいところだが、ここが公孫賛殿の城、という確証が欲しい。

動き回る……か？

いや、そうもいかないか。勝手の知らない場所で動き回るのは不躾というもの。それに、俺が介抱の為に寝かされていたのならば誰かしらが尋ねて来るだろう。

その時に俺が居なければ、混乱を招きかねん。只でさえ迷惑を掛けていると言うのに、更に迷惑を掛けるなんてことがあれば俺の矜持はボドボドだ。

……失礼。どうやらまだ頭が回っていないようだ。

趙幻「とりあえず、このボサボサの髪をどうにかしよう」

前に風呂に入ったのはいつの頃やら。すっかりとボロボロになった毛先や跳ねている髪の毛に溜め息を尽き、執務用らしき机の上にある赤い紐を手に取る。

趙幻「風呂に入りたい……」

まあ、基本的に水が貴重なこの時代。風呂に入れるのは週に一度か二度程度。わがままっちゃあ、わがままなんですよね。

趙幻「よし」

ポニーテールに結い終わった後、とりあえずもう一度身辺確認をする。

双直刀、壁に立てかけてある。思い出の紐、今使っている。翅麒に着けてあった荷物、発見。

中身を確認するが、なくなった物はなかった。

みんなとの思い出。プライスレス。

???「ん？ああ、何だ。起きてたのか」

心の中でふざけていたら、入口に見覚えのない……いや、あるな。前世の記憶の中に見覚えのある御仁が立っていた。

趙幻「助けて頂いた上に、この様な立派な部屋にて寝かせて頂き、ありがとうございます。公孫賛殿とお見受けしますが」

公孫賛「ん？私を知っているのか？」

趙幻「長く旅をしていた身の上ですので。お噂はかねがね」

公孫賛「どうせ、みんな口を揃えて『普通～』とかでしょ？」

……自爆して落ち込みやがった。

まあ、全体的に普通評価だもんな、公孫賛殿は。

普通に可愛くて、普通に強くて、普通に勉学が出来て、普通に太守を勤めてる。

趙幻「しかし、その普通が必要なのですよ。世の中にはね」

公孫賛「お前……。まあいい。一応、名前を聞こうか」

呆れた、というよりも諦めた雰囲気を醸し出しながらも、何とか立ち直ったのか普通な口調で公孫賛殿が尋ねてくる。

趙幻「はっ！我が名は趙幻。姓は【趙】名は【幻】字は【守殻】にございます」

公孫賛「水色の長い髪、２本の直刀、女以上に綺麗な顔立ち、赤茶けた毛並みの豪馬。そして趙幻か。あんたの噂も自慢話も耳にしてるよ」

途中、何か引っ掛かる部分があったが、最後の言葉に目を見開く程の驚愕を覚えた。

自慢話。公孫賛殿はそう言ったのだ。

公孫賛「全く、あんたあれだろ？星の――」

趙幻「姉者は居るのですか！？姉者はここに居るのですね！？姉者ぁぁぁぁぁぁっ！！」

公孫賛「話を聞けっ！！」

殴られた。痛い。普通に痛い。

趙幻「も、申し訳ない。取り乱してしまった」

公孫賛「お前、私に恨みでもあるのか？」

いえ、なんのことかさっぱり。

公孫賛「はぁ。質問に答えるなら、今星は黄巾党の討伐に出てる。成功したって早馬が来てるから、戻るのは3日後くらいだな」

そうか……。今はまだ会えぬか。

まあ、それは良いか。今俺が居る場所に姉者は帰って来るのだ。漸く、会えるのだ。約束を果たせるのだ。こんなに嬉しいことはない。

趙幻「……公孫賛殿」

公孫賛「なんだ？」

趙幻「ありがとう、ございます」

何だか、無性に礼を言いたくなったので深々と頭を下げた。

公孫賛「い、良いよ礼なんて。それに、星には色々と助けてもらってるから」

趙幻「そして、迷惑も。ですかな」

公孫賛「……よくわかったな」

趙幻「弟ですから。苦労を掛けます」

あの姉者の性格、どうやら変わっていないみたいだ。

しかし、良かった。これで漸く姉者と会える。良かった。良かった……。

◇

さて、あの後公孫賛殿から姉者に関する話――という名の不満や愚痴――を苦笑混じりに聞いていたら、いつの間にやら時間は昼過ぎとなっていた。

公孫賛殿がそれに気付き、ならば昼餉に行こうと誘われたので街に繰り出す。

街は、普通に治安の良い普通な感じに活気溢れる普通な良い所だった。

これも皆、公孫賛殿が培った知識や努力の末、なのだろう。

そういえば、太守のいる街に来るのは久方ぶりだな。

公孫賛「やっぱりお前、星の弟だわ」

さて、それは異な事を仰る。

公孫賛「にやけてるぞ」

趙幻「おっと、失敬」

公孫賛殿がふか～い溜め息を吐くのを見たが、見て見ぬ振りをしておいた。

それからまたしばらく街の中を歩き、とある食事処へと案内される。

公孫賛「愛紗、鈴々、桃香、お待たせ」

中に入れば、壮そうたる面子がテーブル席に座り、揃っていた。

え？ナニコノサプライズ。聞いていないぞっ！公孫賛殿！！

関羽「っ！趙幻殿！？目を覚ましたのですか！？」

張飛「あーっ！お兄ちゃんなのだーっ」

関羽殿と張飛殿の２人は、俺に気付くと公孫賛殿そっちのけで声を出す。

あらららら、公孫賛殿また落ち込んでらぁ。無視しとこ。

趙幻「関羽殿、張飛殿。戦後いきなり倒れてしまい申し訳ない。そして、助けて頂き感謝する」

関羽「い、いえいえ！私はあなたに助けられた身。助けるのは当然のことです！」

張飛「そうなのだ。だから趙幻のお兄ちゃんは気にすることないのだ！」

２人の言葉に、俺はそんなことはないと答えつつ、深々と頭を下げて礼をした。

いや、公孫賛殿？勿論受け入れてくださったあなたにも感謝していますよ？

公孫賛「どうだか」

あいや、心を読まないでください。

劉備「あなたが……趙幻さん？」

趙幻「はい、劉備殿。あなた様のお噂はかねがね耳にしております」

劉備「そ、そんな！私なんて全然ですよ！」

それでも人柄や仁徳が噂となって耳に入るのだよ、劉備殿。

趙幻「そういえば、自己紹介が遅れました。我が名は趙幻。姓は【趙】名は【幻】字は【守殻】。どうぞ、よろしくお願いします」

再度、４人に向けて深々と頭を下げる。４人共それぞれがそれぞれによろしく、と口にしてくれた。

劉備「私は劉備です。姓は【劉】名は【備】字は【玄徳】と言います。よろしくお願いしますね、趙幻さん♪」

関羽「私は関羽。姓は【関】名は【羽】字は【雲長】と申します。先の戦いでは助けて頂き、感謝しております」

張飛「鈴々は張飛なのだ！姓は【長】名が【飛】字は【翼徳】なのだ！鈴々も助かったのだ！ありがとうなのだー♪」

公孫賛「私は公孫賛。姓は【公孫】名は【賛】字は【伯珪】だな。一応太守をやってる。改めてよろしくな」

それぞれに自己紹介をされ、1人1人と握手をしてから笑顔を浮かべてよろしくと返した。

あー……何だろ。この殺伐としない空気、良いなぁ。

1年振りにのんびりと自己紹介出来た気がする。

劉備「趙幻さんって、綺麗ですよね……。本当に男の人？」

公孫賛「ぶーっ！！！」

ほわほわといきなり深い斬り込みがきたぁぁぁぁあっ！！？

そして公孫賛殿汚い！それはお約束だけど汚い！！

関羽「と、桃香様！？」

趙幻「正真正銘、真っ当なくらいの男です」

劉備「ご、ごめんなさい。何だか、私よりもずっと綺麗だから……」

関羽「……」

謝る劉備殿の俺を見る目に何だか羨望を含んでいる気がする。そしてチラチラとこっちを見る関羽殿。

……いや、うん。慣れたよね（泣）

張飛「趙幻のお兄ちゃんは、お姉ちゃんなのか？」

趙幻「違います」

一方で張飛殿は純粋に疑問として尋ねて来たので、断っておく。

公孫賛「ちなみにこの趙幻。星の弟だぞ」

劉備「えぇぇぇぇぇっ！？」

関羽「やはりか」

張飛「どおりで強いのだー……」

公孫賛殿からの暴露に劉備殿は本気で驚き、関羽殿はどこか気が付いていたのか頷き、張飛殿はちょっと心外なことを呟いた。

趙幻「張飛殿？強さに姉弟は関係ないぞ。私は私の努力と修行を重ねただけだ」

張飛「うーん……。そっか！鈴々も頑張って強くなったのだ！」

何だかわかっているのかわかっていないのかよくわからない返事が返って来たが好しとしよう。

劉備「そっかぁ。星さんの弟さんか～。そう言えば、星さんが言ってた特徴とか当てはまるもんね～」

趙幻「劉備殿……？姉者は私の事をなんと？」

関羽「『私と同じ髪の色、私に引けを取らぬ容姿、私と変わらぬやも知れぬ武、直刀を2本扱う、一本気な男』。星はそう言っておられました」

関羽殿の語ってくれた姉者が俺をどう言っていたかを聞いて、がっくりと肩を落とす。

どんだけ俺を誉めてるんですか姉者。その通りは髪の色と直刀2本と性格だけですよ。姉者ェ……。

趙幻「はぁ。容姿は一応、い・ち・お・う！否定させてください」

劉備「え～、そんな勿体無いですよ～」

趙幻「すまない劉備殿。その、悲しいのだ。色々と……」

この歳になったが、未だに髭が生えない。寧ろムダ毛が生えない。男としてのなんというか、アイデンティティは股間にある息子と喉仏くらいだ。

はぁ。と深く深く溜め息を吐けば、張飛殿以外どうにか察してくれたようだ。

劉備「その、ごめんなさい」

関羽「お主はお主で苦労をしているのだな……」

公孫賛「まあ、あれだ。元気出せ？」

張飛「？」

公孫賛殿が肩に載せた手が、やけに重く感じたのは気のせいだと思いたい。

趙幻「お察しありがとうございます。それと、私は皆様とそう変わらぬ年齢故、敬語はいりませぬ」

関羽「そうか。星の弟、ということは桃香様と同い年か？」

劉備「ん～、だったら趙幻くんも敬語じゃなくて良いんだよ？」

趙幻「あいわかった。ただ、口調は癖でな。どうかご容赦を」

もう何年くらいこの口調で過ごして来たか。いつの間にやら普通な口調が何処へと消えていた。

――それから劉備殿達と姉者の事や先の戦の話で花を咲かし、お腹いっぱいに昼餉をご馳走となった。

俺は公孫賛殿に姉者と同じ客将として置いてもらう事になり、姉者を待つ事にした。

しかし、姉者はどこに行っても愛される様だ。関羽殿や劉備殿の口から出た姉者への言葉は、温かく嬉しかった。

◇

翌日、早朝。何時も通りに朝の鍛錬をこなした俺は、翅麒の居る馬舎まで向かっていた。

ちなみに、昨日の夜にほんっとうに久しぶりの風呂に入れたのは有り難くて仕方がなかった。

っとと、確かここを左で……。あったあった。さすがは白馬将軍と呼ばれる公孫賛殿の馬達。見頃な毛並みと力強さが見て取れる。

その中に紛れている赤茶けた毛並みと漆黒の鬣と尻尾を持つ翅麒を見つけるのは、造作もなかった。

趙幻「ごめんな、翅麒。また心配を掛けてしまったな……」

駆け寄り、謝り、顔を持ってきた翅麒の額を撫でながら俺は頬摺りをする。

翅麒は小さく嘶くと僅かに体を震わせ、それが気にするなと言っている様に思えた。

お前、ほんっとうに男前だな。

趙幻「ま、そういう所が私は大好きなのだがね」

翅麒は賢く強い馬だ。そして俺と性格が似ている。

こいつもこいつで一本気な所があるのだ。そして馬にしては珍しく臆病でなかった。

よし、今度体を洗ってやろう。せっかく立派な馬舎に居るのだ、身嗜みも大事にしないとな。

そんな事を思っていたら、公孫賛殿の配下の兵士が近付いて来て、話し掛けて来た。

「趙幻殿、公孫賛様がお呼びです」

趙幻「あいわかった。すぐ行くと伝えてくれ」

了解と答えた兵士は、颯爽と走り去って行く。

さて、客将身分となったわけだが公孫賛殿は俺に何の用だろうか。

ま、行ってみりゃあわかるか。城の見取りもだいたい把握出来たしなあ。

◇

公孫賛殿に呼ばれるまま、謁見の間に顔を出す。

彼女は玉座っぽい椅子に腰掛けていて、それを見つけた俺は歩み寄って行った。

守衛らしい兵士達が何人か柱の影に立っている。

公孫賛「趙幻、朝早く呼び出してすまないな」

趙幻「いえ、問題ありません」

公孫賛「早速ですまないが相談があるんだ。噂だと知謀にも秀でているお前にな」

ふむ、まだ客将となってから昨日の今日の俺に相談か。公孫賛殿の様子を見るに……。

趙幻「黄巾党と劉備殿達について、ですかな？」

公孫賛「話が早くて助かる」

はて、黄巾党についてはともかく確か公孫賛殿は劉備殿と大変仲が良かった気がするのだがね。

いや、仲が良いからこそか。彼女の性格は友人思いだったと覚えている。

公孫賛「愛紗達の戦場に乱入し、共に戦ってどうだった？趙幻」

趙幻「関羽殿、張飛殿の武は申し分ありませんでした。少々突撃思考が目立ちますが、彼女達は良き武将となるでしょうな」

公孫賛殿の問いに、素直な感想と考察を述べる。

良き武将となる。それはある意味予定調和なのだが、自分の目で見た限り光る物を感じたのは間違いない。

公孫賛「そうなんだよ、強いんだよなぁ。私の部下に欲しいくらいにさ」

はぁ、と言葉に続けて溜め息を吐きうなだれる公孫賛殿。

確かに、公孫賛殿の兵は良く調練されていて普通に強い。だが、それを指揮する突飛した武将がいないのもまた事実。

彼女の兵達は強すぎるわけでもなく、弱すぎる事もない。平均的なのだ。良い意味でも、悪い意味でも。

公孫賛「でもさ、桃香は違うんだ」

そんな中で、公孫賛殿が真剣な表情を浮かべて言い放った。

……確かに、な。劉備殿は強いわけじゃない。剣を握らせれば並みの兵士以下だろう。体付きの問題ではない。甘いのだ。彼女は。

趙幻「ですが、民に慕われております」

公孫賛「そう、そこが問題なんだよなぁ」

それでも劉備殿は相応の覚悟と志を持っている事もわかっている。昨日話した時に、それを俺はひしひしと感じた。

その覚悟と志、そして人柄の良さが民を惹き寄せている。劉玄徳ほど、民に愛される者は少ないだろう。

趙幻「良いではないですか。彼女には彼女なりの覚悟と志をちゃんと持っている」

公孫賛「そして部下にも民にも愛し愛され……。はあ、わかってるんだけどさ」

余程心配なのだろう。公孫賛殿の溜め息には憂いと迷いが混じっていた。

趙幻「しかし、それでも兵を貸し与え関羽殿の張飛殿の人となりと武を見させている。劉備殿に街の警邏を任せ、民達と触れ合わさせている」

公孫賛「お前……」

趙幻「友人思いな公孫賛殿は、あながち劉備殿の事を言えませんな」

クスクスと微笑みながら皮肉を言えば、うるさいと顔を真っ赤にして怒られた。

俺の推測が正しければ、公孫賛殿が劉備殿達にしようとしていることはこうだ。

関羽殿と張飛殿の武を示させ、兵士達から追い掛けたい、共に戦いたいと思う者を出すこと。

劉備殿に街の民と触れ合わせることで、この人を助けたい、この人の下で戦いたいと志願する者を出すこと。

表立った支援をしない所は少しひねくれているな、と苦笑させてもらうけど彼女はこの幽州を治める太守。劉備殿達を特別扱いするわけにもいかないのだろう。

まあ、関羽殿達の経験値稼ぎや単純に心を掴んでいない将に兵が付いて行く筈もないから、という見解も出来るが。

公孫賛「野心をもって私を訪ねて来たのならそこそこの地位でほっとくんだけどさ……。桃香は正直にしゃべっちゃうんだもんなぁ～」

趙幻「ははは、想像に難くないですな。確かに劉備殿ならと思ってしまう」

――そこが桃香らしいと言えばらしいけど。

そう言って公孫賛殿は両腕を組ながら苦笑した。

公孫賛「趙幻も不思議な奴だな。相談の筈が談笑になってしまった」

趙幻「それはただ、公孫賛殿は劉備殿に関してもう心の内で決めているからでしょう。……まだ本題は残っていますがね」

公孫賛「黄巾党、か」

前半を軽く流された気がするが、それは彼女達の問題だ。俺はもうとやかく言えない。

だが、ここからは俺も口に出したが本題だ。今、どこかしくもこの賊に手を焼いている。

黄巾党。旅をしている時に噂や情報を何度か集めたことがある。

初期は腐った朝廷を打倒すべく立ち上がった市民団体だったが、数が爆発的に増加しただの暴徒と化しているのが現状だ。

首謀者に居るのが3人で、張角、張宝、張梁という名前しか判明していない。正に正体不明なのだ。

この黄巾党の討伐、漸く最近官軍の上層部が重い腰を上げて指令を出したらしい。

とはいえ、官軍の能力が下がっており何度も敗退を喫しているのも問題だった。

公孫賛「私の部下に腑抜けがいないのは確かだけど、問題は黄巾党がどんどん力を増やしているんだ。今じゃどこにでも湧いて出て来る。厄介極まりないよ」

……まるで黒光りするGの様な言い方だが、言い得て妙だ。

しかし、本気で潰しておかなければいけないのもまた事実。例え賊と言えども数が揃えば立派な勢力なのだ。戦いは数が最初の優劣。数に負けていれば、士気が下がる事もあるだろう。

趙幻「各太守や諸侯と連携し、情報の共有を図れないのか？」

公孫賛「出来るならとっくにやっているさ。でもね、官軍も一枚岩じゃないんだよ」

その言い方だと、どうやら上層部の腐敗具合は思ったよりも酷いらしいな。

趙幻「……独自の情報網が敷ければいいのだがな」

戦いは数でもあるが、情報も大切である。

敵はどこに駐軍するか、兵力や数はどうなっているか、敵はどういう進路を取るか、敵にはどんな奴がいるのか、敵の備えはどうか、戦場や行軍する地形、地理はどうなっているか。

勿論揃わないこともあるだろうが、その全てを持って戦略を立てるのが理想的だ。

地理や地形がわかれば陣の組み方、戦い方や戦術の指南もやりやすい。

公孫賛「私は私で斥候とか偵察部隊を放って情報集めてるけど、なにぶん黄巾党の数が多くてな」

趙幻「やはり数が厄介か……」

公孫賛「ああ……」

改めて敵の多さに2人して溜め息を吐く。これが重い悩みなだけに深く長かった。

首謀者さえ討ち取れれば、後は所詮烏合の衆。取るに足らない相手である。

煽動する者が居なくなれば、革命とは自ずと火を消していくものだ。

その主犯格が見つからなければ、今はどうしようもない。

公孫賛「とりあえず、もう一度各諸侯に協力を要請してみるよ。ありがとう趙幻、参考になった」

趙幻「力になれず、申し訳ない」

公孫賛「いや、気にするな。それに、力になれなかったなんてとん

でもないさ」

かっかっか、と良い笑顔を浮かべる公孫賛殿。それでもやっぱり申し訳なくて、その言葉に俺は改めて頭を下げ、もう一度謝った。

それから今後の方針の少し相談され、解散する。

――黄巾党。どうすれば良いかを考えつつ、俺は朝餉を食べる為に食堂へと向かうのだった。

公孫賛。劉備。相談。（後書き）

次こそ、次こそは姉者を……。

出せたら良いなぁ。

関羽。演習。握手。（前書き）

演習の回。

色々と考えながらは難しい。

関羽。演習。握手。

俺の前世の名前は鵲雅也。今の名前は趙幻だ。姓は【趙】名は【幻】字は【守殻】真名は前世から引き続き【雅也】と言う。

突然の話だが、俺は今公孫賛殿の城にある広いひろーい演習場に居る。

後方にはその公孫賛殿の部下である兵士達が５００人。前方には刃引きしてある堰月刀を構え、嬉々として面構えの関羽殿が立っている。

さて、どうしてこうなったかを簡単に説明しよう。

俺は今、公孫賛殿に客将として城に居座らせて頂いて居るのだが、身分上あまりふかーい仕事には関与する事が出来ない。

昨日やったみたいに簡単な相談事の相手になったり、軽い訓練に参加したり、劉備殿と同じく街の警邏をしたりと意外と暇なのだ。

でだ。そんな暇を持て余した俺に公孫賛殿が昨夜の夕餉の時、こんな提案をした。

公孫賛『なら、ウチの兵士達の演習の相手をやりなよ』

話しを聞けば、俺の武を見たいとのこと。

その相手がまさか関羽殿とは夢にも思わなかったが、やはり暇だったので受ける事にした。

今日は確か、姉者が戻ってくる予定日だがゆっくりと話すのは後でも出来る。

劉備「愛紗ちゃーん！趙幻さーん！頑張って～！！」

張飛「愛紗負けるなー！趙幻のお兄ちゃんも頑張るのだーっ！」

演習場を見渡せる城壁の上からは、今回暇な劉備殿と張飛殿の呑気な声援が響く。

その隣には、公孫賛殿が立っていた。目線が合ったので笑顔を向けるが、そっぽを向かれた。悲しい。

関羽「趙幻殿ーっ！手加減は致しませぬぞーっ！」

趙幻「応っ！こちらも本気で行かせて頂く！！」

２里（１里は５００ｍ）先にいる関羽殿の宣言に、俺も勇んで返してみた。

とは言えだ。俺は部隊を率いてまともに戦うのも久々である。

初めての時は、１年前の荊州にある水鏡先生の村を守った時だったか。あの時は奇襲攻撃の為に伏兵となって騎馬隊の先頭を走ったっけ。

……閑話休題。

さてと、考察するに関羽殿は強力な破壊力を持つ陣形が得意と見えるが、今回は恐らく慎重に動いて来るだろうか。

少々突撃思考があるとは言え、根は落ち着いた人だ。張飛殿ならともかく、いきなり突撃して来ることはあるまい。

この演習をする部隊が決まり集まる一刻前、俺はこの部隊の予め決められていた副長殿に、兵士達はどの陣形が得意でどの陣形が苦手かを聞いた。

副長殿はなかなか気前よく、簡潔に纏めて話してくれたので、演習が始まるまでずっと戦略を考えていられた。

ちなみに、俺の部隊の兵種対比は歩馬弓で表すと5：3：2である。

公孫賛「じゃあ、そろそろ始めるぞ！相手の陣にある将旗を奪うか、将が戦闘続行不可能になったら負けだ！いいな！！」

関羽&趙幻「応っ！！」

さて、そろそろ演習開始。刃を潰してある直刀を両手に構え、翅麒の上から関羽殿に視線を送る。

彼女は強い。こと武に関して言えば、夏候惇殿と同等かそれ以上だろうと見受ける。

ふむ。部隊を動かすに俺は経験不足だが、どこまでやれるか。

公孫賛「始めっ！！」

「「「「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！！」」」」

公孫賛殿の開始の声に両部隊――否、両軍は雄叫びを上げる。

趙幻「魚鱗の陣を敷け！まずは見だ！近付いて来たら弓をつがえろ！！だが、放つのは十分に引き付けてからだ！！」

最初に、俺はこの部隊がどの程度早く陣形に移行出来るかを把握する為に初期陣形である衝軛の陣を崩させる。

さすが公孫賛殿の兵と言った所か。普通に俺の指示にちゃんと従い、普通に素早く陣形を整えてくれた。

後方の弓隊が矢をつがえ、引き絞る音が聞こえる。だが、命令通りちゃんと撃つのを待っていた。

一方、関羽殿はこちらが選んだ見とは違い、動を選んだ様だ。

関と書かれた将旗と共に、土煙が此方へと進んで来る。

ふむ。あちらも見と読んでいたのだが、どうやら違ったみたいだ。

選択理由によってはやはりと取るかアホかと取るかに変わるが、まあ関羽という人物を考えると俺の行動を読んだと見て良いだろう。

陣形は恐らく鋒矢の陣。先頭の騎馬に乗っているのは関羽殿、か。

残り1里を切ったな。

趙幻「私が5つ数えたら中央に向けて斉射っ！その後弓兵隊は少し下がって矢を撃ち続けろ！5、4、3、2、1、ってぇ！！」

左腕を上げ、合図と言わんばかりに振り下ろしながら射撃の命令を叫ぶ。

一斉に放物線を描く矢。しかし、やはり弓に対して強い陣形か。それとも関羽の手腕か、速度が早く、そこまで打撃を与えられなかったみたいだ。

来る来る来る来る。関羽殿が来る。

趙幻「騎馬は作戦通りに2隊に別れ、左右から挟み込め！歩兵は俺に続け！突撃するぞっ！！」

演習場に集まる前、俺の部隊には考えた戦略を伝えてある。

歩兵は俺を筆頭に突撃し、2人1組で必ず戦うこと。騎馬は2隊に別れ、敵を挟撃し混乱させ、あわよくば将旗を奪うこと。弓隊は1度矢を放ったら後退し、また撃ち続けること。

そして、関羽殿の相手は必ず俺にさせること。

人数が少ない内はこれが限界。本当ならもっと複雑に陣形を掛け合わさせ、部隊長を任命して指示させるが今は無理だ。

更に、関羽殿は強く2人1組で相手をした所で負けるのが目に見えている。

だから俺が当たる。

当たって時間を稼ぐのだ。

しかし、鋒矢の陣とはまた攻撃的な陣形を取るなあ。

趙幻「突撃ぃぃぃぃぃぃっ！」

思いっきり叫んだ掛け声と共に翅麒を走らせ、歩兵達を引き連れて突撃を仕掛ける。

同じタイミングで歩兵の後ろにいた騎馬隊が左右に別れ、半円を描きながら関羽軍を挟撃しようと駆け始めた。

目の前に、武器を構えた関羽殿が迫っている。

趙幻「関羽殿っ！いざ尋常に勝負！！」

関羽「行くぞ趙幻殿っ！！」

趙幻「アァァァァァァァァァッ！！！！」

関羽「ハァァァァァァァァァッ！！！！」

瞬間、俺と関羽殿の気合い、それと双直刀と堰月刀の刃がぶつかり合うと共に、互いの兵達が吹き飛んだ。

けたたましい金属の不快な音色が響き、互いに弾かれる。

その後何合も何合もぶつかり合い、やがて肉薄すれば馬上による双直刀の交差した刃と堰月刀の持ち手による鍔迫り合いのような事に発展した。

関羽「やはり、私の目に、狂いはっ、無かったっ！趙幻殿は、強い！」

趙幻「まだまだ、ですよっ！私、なんてね！！」

ガッ！と関羽殿に翅麒ごと押し込まれ、２人の間に距離が出来る。

しかし、周りを見れば混乱している様子はないな。騎馬隊は挟撃に失敗したのか？

関羽「ふふふ、随分と不思議そうな顔をしているな」

その不敵な微笑みに、俺はまた読まれていたかと悟る。

うーむ、やはり関羽殿。こと戦いに関しては一枚上手か。

しかし俺も我慢弱く堪え性もなく、卑怯や姑息を嫌い、負けず嫌いな男。

相手が例え関羽殿であろうと敗北を喫したくはない。

まだ策は残っているしな。上手く行けばいいが……。

‡公孫賛ｓｉｄｅ‡

趙幻が戦場で出来ること。それを把握する為にこの演習をやらせてみたが、どうも思っていた以上の動きをしてくれる。

相手に愛紗を指名したのも良かったのか、丁度よく競い合う形になっていた。

趙幻が突撃を仕掛けた時騎馬が2隊に別れて左右から挟撃しようとしているのを見た時は顎に手を当てて関心を寄せたものだが、そこは愛紗の方が一枚上手だった様だ。

愛紗の部隊の中頃には槍隊がいたのだ。

槍の前には馬は止まる。迎撃されれば大打撃を受けるからな。その痛手を私はよく知っている。

一方で、趙幻は上手く愛紗との一騎打ちを長引かせている様だ。

趙幻の歩兵達は基本的に2人1組で戦っているみたいだし、徐々に部隊を押し上げている。

公孫賛（この勝負、わからないなあ）

一進一退の攻防戦とはこの事なのだろうか。横を見れば、桃香と鈴々が呑気に声援を送っている。

一応、戦略の参考程度になるだろうと連れて来ているのだけれど、そんな素振りも見せないでまったく……。

劉備「あれ？白蓮ちゃん、趙幻くんの騎馬隊の人たち、変だよ」

公孫賛「変？」

桃香の言葉に私は疑問を覚えつつ、騎馬隊の方へと目をやる。

張飛「離れて行くのだー」

鈴々が、その状景をはっきりと口にした。

乱戦をしていた趙幻の騎馬隊が、合流すると同時に右へと離れて行き渦を描く様に走っている。

竜渦の陣にしては、変だ。あれは攻撃よりも防御に主眼を置いた陣形。あんな離れた場所で、そんな事をする意味はない。

直後、渦を巻いていた騎馬隊はその先端が愛紗の軍に向いた途端、再び突撃を開始した。

斜めからの鋭角的な突撃。しかし、その矛先が向いていたのは中頃の槍隊ではなく、後方の弓隊だった。

‡趙幻ｓｉｄｅ‡

関羽殿の率いる軍の後方から、雄叫びが上がる。

どうやら騎馬隊が後方の弓隊への突撃に成功した様だ。

公孫賛殿は白馬将軍と異名を持つ人だ。騎馬隊の強さ、その点で言ってしまえば他の軍よりも勝っている。

故に、騎馬隊にだけ２つのオーダーを出した。

１つは最初に言った、２隊に別れて挟撃すること。

そして２つ目は、混戦中に合流し、渦を巻く陣形になった後斜めから後方にいる部隊に突撃すること。

趙幻「どうやら、今度は成功したようだな」

関羽「くっ……！」

関羽殿の後方から聞こえてくる雄叫びに、俺は口元を釣り上げながらそう呟いた。

彼女は悔しそうに表情を歪ませている。ふふふ、二段構えとは読めなかったようだにゃぁぁぁぁぁあっ！！？

関羽「ちぃっ」

趙幻「危ないな、驚いたぞ」

関羽「ふんっ」

表面は平然を装うが内心はバックバクだ。策が成功したのに油断していたのだろうか、堰月刀の刃が俺の目の前にまで来ていた。

関羽殿から黒いオーラが放たれ、怒気マークがこめかみに見えた気がする。

関羽「やはり貴様は星の弟のようだ。その嫌味な笑みはそうそう真似は出来ん」

趙幻「ふふふ、見たくないならば私に勝つのだな」

関羽「言われずとも、勝つのは私だっ！！」

おお、怖い怖い。挑発してみたものの、怒りに任せた攻撃でない所を見るにやはり根は落ち着いた人だ。

振るわれる攻撃を双直刀で弾き、受け流し、体を屈めたりで回避しながらそう思う。

……しかし、どうも部隊自体の戦況は良くないな。

兵士達の実力が拮抗しているせいか、攻めることは出来ているが決定打に欠けている。

趙幻「ならばっ！！」

関羽「なに！？」

馬上から跳躍し、関羽殿に全体重を乗せた一撃を振るう。

俺の突然の奇策に関羽殿は驚いたのか、堰月刀の柄で防御に入った。

しかし彼女はそのまま吹き飛ばされ、体勢を立て直しながら地上へと落ちる。

俺も着地すると、双直刀を構え精神を集中した。

通常、長物に対し剣や無手で勝つには何倍もの実力がなければならない。

随分と関羽殿と打ち合ったが、実力で言えば向こうの方が上であると俺は判断した。

一方で、俺が彼女に勝っている点が1つだけある。

それは、早さだ。手数とも言える。

手数が出せる、というのは虚と実を織り交ぜた攻撃がより多く使えるということに繋がる。

それを上手く利用し、懐に飛び込めればあるいは……。

ちなみに、トランザムは本当に最後の手段であり切り札だ。

これを使えば確かに俺の集中力、身体能力は飛躍的に上昇するが一時的にという話。もしも防ぎきられ、逃げ切られた場合により受けるデメリットは確実に俺を負けさせる。

それに、トランザムなしで勝てないようでは、この先生き残り続けるのは難しいだろう。

トランザムはあくまで一時的な反則技なのだ。

俺は強くなければ、強くならねばならない。今で満足出来る程、小さな男ではないのだ。

趙幻「早さで飲み込む！」

強く呟き、俺は地面を蹴り上げて姿勢を低く保ち駆ける。

関羽殿も堰月刀を構え、こちらへと振り上げながら走り出した。

関羽「シッ！」

力強い一撃が振るわれるが、それを横にステップを刻んで回避。堰月刀の刃が地面を砕き、その力が如何に凄いかを見せ付けられる。

関羽「まだまだ！」

なぎ払いが来たが、それを更に屈んで回避。カウンターを仕掛ける為、そのまま跳び双直刀を交差させて突然する。

趙幻「ズェアッ！！」

関羽「甘い！」

どうやら先のは虚だった様だ。持ち直しの早さに合わせられ、柄で防御されて押し返された。

趙幻「まだまだぁぁあっ！！」

だが、それだけで終わらせるわけがない。もう一度肉薄しようと、左右に走る不規則的な動きで近付いて行く。

向こうから素早い突きの迎撃が成されるが、動きを止めずに回避。袈裟切りに振るわれた刃を受け流し、飛び込む。

両手が痺れて来てはいるが、なんとか我慢して今度はこちらから突きを繰り出す。

が、それも難なくかわされる。

趙幻「行かせんっ！」

関羽「……！」

距離を離そうとする関羽殿に右手の直刀によるなぎ払いを仕掛け、突き立てた堰月刀の柄に阻まれる。

しかし、チャンスは生まれた。

趙幻「もらった！」

関羽「やらせんっ！」

しかし、左手の直刀でトドメの突きを放とうとした時、思い切り右手の直刀が弾かれ、宙を舞う。

――しまったっ！

そう思った矢先、関羽殿が堰月刀の刃を振り下ろそうとしているのが見えた。

回避。間に合わない！防御。片手だと押し切られる！

頭の中、迫り来る刃と関羽殿の放つ気迫に思考が高速回転し、負けるという結果を弾き出す。

しかし、体は動いた。この事態に陥っていても、体だけは自然と思考に反して反射的に行動を起こしていた。

‡関羽ｓｉｄｅ‡

勢いに乗った趙幻殿の攻撃。私は思い通りに攻めることを許されず、自然と受け身に回るしか出来なかった。

懐に入れる事を阻むことは出来ているが、彼は素早く手数を活かしてこちらの攻撃を誘導している。

しかし、私だって成されるがままにされれているつもりはない。

早さは向こうに分があるが、力では私の方が勝っている。その点を突き、弾く際には渾身の力を込めて当てていた。

趙幻「まだまだぁぁあっ！！」

不規則的な軌道で駆ける趙幻殿に対し、迎撃する為堰月刀の刃で突きを放ち続ける。

しかし彼はかわし続け、袈裟切りを振るえば2本の直刀を使い受け流された。

関羽（接近され続けては分が悪いな）

趙幻殿が表情を一瞬歪ませるのを見れたので、おそらく後ひと息で押し切れる。

だが、近付かれてはあちらの得意とする距離だ。

私は後方へと距離を空ける事を決め、跳ぼうとした。

趙幻「行かせんっ！！」

関羽「……！」

その判断が失敗だったと思ったが後の祭りだ。趙幻殿はそのまま私に右手の直刀によるなぎを放って来た。

堰月刀を立て、受け止める。

趙幻「もらった！」

関羽「やらせんっ！」

しかし、彼は2刀を使う武人。左手の直刀が私を襲おうとしているのに気付き、苦し紛れに力を込めて受け止めていた刃を弾いた。

運が良かったとしか言い様がない。趙幻殿の右手は弾かれると同時に直刀を手放したのだ。

しまった、といった表情を浮かべる趙幻殿に対し、私はそのまま好機と思い堰月刀の刃を振り下ろす。

が、刃が彼の頭部に当たる直前に、背筋が凍るのを感じた。

私の首筋に、趙幻殿の左手に握られている直刀の刃が突きつけられていたからだ。

関羽「……！」

その時、趙幻殿から放たれている気迫と眼光に私は思わず圧せられた。

すぐにその気配はなくなったが、あの動き、あの気迫が彼に眠っている本来の武なのだと確信する。

公孫賛「両軍止め！！この勝負、引き分けとする！！」

止めに入ったのは、公孫賛殿の終わりを告げる言葉だった。

趙幻「ああ、まいったまいった。関羽殿にしてやられたとしか言い様がないな」

刃を引き、鞘に収める趙幻殿の表情は笑っている。

しかし、拳は握られていたので悔しさも感じているのだろう。

だが、私はあの時負けたと一瞬でも思ってしまった。

私の放った刃は確かに彼の脳天を捉えようとしていたが、それを上回る速度の刃が趙幻殿から放たれたからだ。

関羽「本当の戦場だったら、死んでいたのは私だったな」

趙幻「何を言う。先に脳天を叩き割られていたのは私だろうさ」

私の言った言葉に対し、彼は自分の頭を指先でつつきながら返してくる。

それから私が、いや私がと互いに譲らず言い争い、最後には馬鹿らしくなって笑い声をあげた。

関羽「はははははっ！お前も譲らないなあ、趙幻」

趙幻「ふはははははっ！あなたには言われたくありませんな、関羽殿」

つい先程のやり取りを思い出し、確かになと呟いてから微笑む。

趙幻「それに私は、我慢弱く堪え性もない男だ。卑怯や姑息を嫌い、それに加えて大の負けず嫌いと来ている」

関羽「それは恐らく私もそうだ。似た者同士だな、趙幻殿と私は」

趙幻「違いない」

実際に刃を交わして伝わって来た彼の人柄と思いは、私に似ていると思える所がたくさんあった。

ああ、世の中にまだこのような気骨のある男が居たかと思える程に。

趙守殻。見た目は女性と見違えそうになるが、その中身はなんとも熱く真っ直ぐな者だ。

関羽「趙幻」

趙幻「なんだ、関羽殿。私もあなたに提案があるのだが」

関羽「なんだ、お前もか。ならば同時に言おうではないか」

つい先日出会ったばかりだが、私達は似た者同士。きっと同じ事を考えているのだろうと、何故か知らないが確信出来た。

関羽＆趙幻「私と、真名を交換して頂けないだろうか」

見事に被った提案に、私達はまた大きく笑った。

こうも馬が合う人間に出会ったのは久方振りだ。世の中、まだまだ見捨てたものではないな。

関羽「私の真名は愛紗だ」

趙幻「私は雅也だ。好きに呼ぶと良い」

関羽「ああ。これからよろしくな、雅也」

互いに真名を授け合った後、私達は強く握手をした。

そして同時に、雅也に私達と共に来て欲しいと思ったが、なんとなく口には出さなかった。

‡劉備ｓｉｄｅ‡

趙幻くんと愛紗ちゃんの演習は手に汗握るくらいに凄くて、私は感動を覚えた。

最後はお互いに武器を突き立て合った所で白蓮ちゃんが引き分けって言って終わらせちゃったけど、それで良かったのかな？

でも、演習だしあのまま続けてたらきっと2人とも大怪我を負っちゃうと思うし、うん、きっと良かったんだよね。

そんな事を考えてたら、突然演習場から2人の笑った声が聞こえて来た。

楽しそうに2人はお話してるし、問題はないみたい。

鈴々ちゃんは2人の一騎打ちを見てる時、凄く目を輝かせてた。多分、この後趙幻くんに勝負を挑んじゃうかもしれない。

ちょっとだけ不安だけど、楽しそうにしている鈴々ちゃんを見てると私もちょっと見たいな、なんて思ったり。

一方で、白蓮ちゃんは何故か城壁にうなだれていた。

公孫賛「うーん……。なんで2人とも私より兵士動かすの上手いんだよぉ……」

……白蓮ちゃんの悩みは深いみたいだし、私じゃきっと力になれないからそっとしておこう。

それにしても、趙幻くんかぁ。昨日話してみて凄く良い人だったし、愛紗ちゃんと渡り合えるって事は凄く強いって事だし……私達の力になってくれないかなぁ。

私の夢は、この大陸にいるみんなが笑顔で幸せに暮らせるようにすること。

甘くて、世間知らずな夢だっていうのはわかってる。

だけど、誰かが変えなきゃいけない。だから私は、義勇軍になって平和の為に立ち上がった。

愛紗ちゃんと鈴々ちゃんはそんな私を支えてくれる、とっても大事な仲間。でも、そんな2人を守るのは誰？

私は、弱い。弱いから、2人を守ることが出来い。だから、私に出来ることなら何でもしてあげたい。

趙幻くんは、きっと愛紗ちゃんと鈴々ちゃんを守れる人だ。愛紗ちゃんと鈴々ちゃんも、趙幻くんを守れる力を持っている。

これは、私のわがままだと思う。だけど、今の私には力と仲間が必要。だから、趙幻くんに手伝って欲しい。

……口に出して言いたいけど、趙幻くんは星さんの弟さん。星さんを追い掛けて幽州まで来たって言ってたから、それを引き離すなんて私には出来ないから。

「おやおやー？せっかく我が弟の成長を見ようと思っていたのに、もう終わっていましたか」

そんな時に、姿を現したのは星さんだった。

関羽。演習。握手。（後書き）

今回は引き分けにした。
トランザムはなし。頼りすぎは良くないっていう判断から。
最後に姉者帰還。

次話でようやく姉者と再会です。

姉者。再会。思い。（前書き）

色々とキャラ崩壊。

姉者。再会。思い。

1日の終わり、自室に戻った俺はとりあえず寝台へと倒れ込んだ。

昼間に行った演習で関羽……いや、愛紗殿と意気投合したのは良いが、その後に待っていたのは張飛……じゃなかった、鈴々殿との勝負がだった。

何とか勝てたのは良いが、その後にまた愛紗殿に勝負を挑まれて敗北。さすがの俺も体力が続かないということか。

トランザムを使わなかっただけ、ましだと思いたい。アレは俺にとって諸刃の剣なのだ。

身体能力・集中力の飛躍的強化は助かるのだが、保っていられる時間が半刻もなく、制限時間を超えた場合俺の体はボロボロになる。

全身に激痛が駆け巡り、意識は遠くなり、まともにすら歩けなくなるのだ。

それに、制限時間内に自己解除したとしても体力を多く使う為疲弊は必須。

メリットはデカいがデメリットも多く存在する。故に、ここぞというべき場所でのみ使うべき奥義なのだ。

まあ、夏候惇殿と戦った時は俺の武の全てを見たい、という要望があったから使ったが。

趙幻「しかし、今日は良き日ではあった」

そう呟いて、今日の事を振り返る。

愛紗殿と互いを認め合い、真名交換をした事。鈴々殿と武を讃え合い、真名交換をした事。桃香殿と語らい合い、真名交換をした事。

趙幻「……乙女3人と真名交換をした、か。乙女座の私にはセンチメンタリズムを感じられずにはいられないな」

一応言っておくが、冗談である。それに乙女座生まれではない。

しかし、真名交換をした相手を思い出せば皆女の子なんだよな……。

家族を除けば、朱里殿、雛里殿、愛紗殿、鈴々殿、桃香殿。

――深く考えるのはよそう。きっと不毛だ。

1人納得（？）し、この問題はなかったことにした。

そんなどうでもいい考えをした後、ふと気付けば部屋の扉の向こうに人の気配を感じた。

劉備「雅也くん、いるかな？」

趙幻「おりますよ」

劉備「良かったー。疲れてるところ悪いんだけど、ちょっと出て来てもらってもいい？」

声から察するに、桃香殿か。はて、こんな時間に何の用だろう。

そう思いつつ、重い体を起き上がらせて外へと出る。

扉を開ければ、蝋燭の灯りに照らされた温かみのある笑顔を浮かべている桃香殿の姿があった。

傍らには栓の閉められた壷を抱えていて、そこから発せられる特徴的な匂いに酒かと判断する。

趙幻「夜更けに酒を抱えて男子の部屋に訪れるとは、些か破廉恥ではないか？桃香殿。いや、私も男であるからやぶさかではないが」

劉備「ち、違う違う～！そそそういう理由じゃないからね！？」

趙幻「冗談だ」

からかってみれば、顔を真っ赤にして愛らしく慌てる桃香殿に思わず笑みがこぼれた。

当の本人は頬を膨らませてムスッとしているが、すぐに溜め息を吐いて俺の顔をじっと見つめる。

劉備「やっぱり、星さんの弟だね」

趙幻「何を異なことを仰る」

まあ、このからかい癖は間違いなく姉譲りだろうとは自覚している。

趙幻「ところで桃香殿？私に何か用があるのでは？」

あまりからかい続けては桃香殿がかわいそうか。そう思った俺は、呼び出した理由を尋ねた。

劉備「そ、そうだった。雅也くんは、これから大丈夫？」

趙幻「ん？ああ、大丈夫だが」

劉備「良かったー♪これから中庭でみんなとお酒を飲むんだけど、雅也くんにも来て欲しくて」

ほう、酒の誘いとは嬉しいな。そういえば、ここ最近路銀がなく酒を飲む機会がなかったところだ。

趙幻「有り難く参加致そう」

劉備「やったーっ！じゃあ、みんな揃ってると思うから早く行こうっ♪」

趙幻「と、桃香殿！？あまり引っ張られてはっと……！？」

本当に嬉しいのか。単に天然なだけなのか。桃香殿は酒壷を持っていない手で俺の手を握ると、走り出す。

急な事と彼女の柔らかい手の感触に動揺した俺は、転げそうになるが何とか足を踏ん張った。

……変な所で強引だな。まあ、天真爛漫な笑顔を向けられては文

句を言おうにも言えないか。

そのまま互いに手を取り合った状態で中庭に進むと、既に酒盛りが始まっているのか鈴々殿と愛紗殿の笑い声に加えて。

趙雲「はははははっ。愛紗は本当にからかいがいがあるなぁ」

姉者の楽しそうな声が聞こえた。

趙幻「姉者……」

その声、聞き間違える筈がない。俺は桃香殿の手を離すと、無心になって駆け出していた。

姉者がいる。姉者が中庭にいる。そう思うと、居ても立ってもいられなかった。

趙幻「姉者ぁぁあっ！」

趙雲「ん？」

中庭に着くと、俺は姉者に向かって思いっきり飛び付く。

いきなりの事に放心する姉者、愛紗殿、鈴々殿だったが俺は気にせず力一杯に姉者の体を抱き締めた。

趙幻「会いたかった……。会いたかったぞ……姉者ぁ……」

趙雲「その声……。雅也、か？」

趙幻「はい。はい……。あなたの弟、趙守殻でございます」

趙雲「……」

姉者から身を離し、涙目になりながら頷く。

すると彼女は俺の顔をじっと見つめ、それから体を眺めてから何かを思案するように顔をしかめ、息を吸った。

趙雲「お前が雅也なわけあるかぁぁぁあっ！！！」

「「「えぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！！？」」」

おい待て姉者！今凄く良い空気だったのに何おかしなこと仰りやがりますかこん畜生！？

見ろ！愛紗殿と桃香殿が滅茶苦茶困惑してどうしたら良いのかわからなくなってるじゃないか！！

趙雲「ま、雅也はそんなに髪が長くなかったし身長だって私より小さかったぞ！」

趙幻「姉者落ち着け！そりゃあ5年も経てば成長するし髪だって長くなるぞ！私も人間だっ！」

趙雲「雅也は自分を私と呼ばない！」

趙幻「色々あったのだ！良いから落ち着いてくれ姉者！本当に台無しだぞクソォッ！！」

予想外な姉者の慌て振りに、俺も両手で自分の頭をかきむしりどうすれば良いかわからずとりあえず叫ぶ。

酒か？酒なのか？姉者がおかしいのは酔っているせいなのかぁ！？

関羽「ふふふふふ」

劉備「クスクスクスクス」

張飛「お酒が美味しいのだー♪」

趙幻「おぃぃぃぃぃぃっ！？」

なんで愛紗殿と桃香殿は微笑ましいなあ、みたいな感じでこっち見てるんすか！？鈴々殿に至っては呑気に酒飲み続けてるし！

関羽「いや、すまない。２人の姿があまりにも微笑ましく思えてな」

劉備「ねーっ♪」

いや、『ねーっ♪』ではない。

劉備「星さんは、久しぶりに会った雅也くんがとっても綺麗で恥ずかしいだけなんだよっ」

趙雲「な、何をおかしなことを……」

趙幻「そうだぞ桃香殿。何をバカぐふぅ」

腹に突き刺さる姉者の蹴り。お、俺が何をした……。

趙雲「……はぁ。確かに、この鈍感具合は雅也だな。間違いなく」

関羽「はははは……」

俺を俺だと判断する基準に納得いかないが、姉者はどうやら認めてくれたようだ。

しかし、冷静になって姉者を見るとこう……女性らしさに磨きが掛かっている。凛とした端正な顔は昔よりも更に美しくなり、こう、胸の膨らみもまた……。

元々スタイルが良かったから特におかしいと思うことはないがな。当然と言えば当然の美しさということか。

趙幻「……姉者」

趙雲「なんだ、雅也」

趙幻「大変遅くなりましたが、あの時に交わした約束。果たして参りました。そして漸く、ようや……く……。私……いや、俺は、姉者に会える事が出来た」

かつて、姉者が俺と交わした約束。

母に勝て。武を磨き、知を身につけ、私を追い掛けて来いという、姉者のわがまま。

俺は、それを果たす為に死に物狂いで修行をし、母に勝った。知を身に着ける為に水鏡塾の門を叩き、門下生となった。

5年。5年の月日を掛けて、俺は漸く姉者との再会を果たす事が出来た。

嬉しくて、嬉しくて仕方ない。今まで溜め込んでいた思いが爆発し、関を切ったかの様に溢れ出す。

気付けば、目から涙が溢れていた。

趙幻「は、ははっ。かっこつかないなぁ。色々と言うことを考えていたのに、頭真っ白だし、涙が……」

ボロボロと落ちる涙を拭いながら、俺はこれ以上流すまいと我慢しようとする。

だが、その時ふわっとした感触が俺の体を包み込んだ。

趙雲「良いのだ、雅也。格好をつける必要はない。雅也は雅也だった。それだけで私は、嬉しく思うぞ」

趙幻「姉者……姉者ぁ……っ！」

姉者は俺を優しく抱き締めてくれた。姉者と約束を交わしたあの日の様に、俺はその温かさに涙腺が更に緩くなるのを感じた。

趙雲「良く来たな、雅也。私はお前を歓迎する」

趙幻「ありが……とう、姉者。また、よろしくお願い致します……」

その言葉を交わした後、俺は愛紗殿達を気にする事もなく声を張

り上げて泣いた。

後日その事で公孫賛殿にいじられるのだが、それはまた別の話。

‡趙雲ｓｉｄｅ‡

白蓮殿の要請により兵士を率いて、黄巾党の討伐を終えて帰って来た日。

謁見の間に白蓮殿は居らず、兵に聞いてみれば愛紗の演習を見に行ったと聞き、演習場へと早足に向かった。

相手をしているのが、趙幻と言うなの先日客将となった男だと聞いたからだ。

その男が、間違いなく我が自慢の弟であるという確信が私にはあった。

演習場を見晴らせる城壁に着いた時には既に終わっている様で、兵士達は撤収を始めていた。

遠目だったが、中央で愛紗と楽しそうに笑っている者が雅也だった。

髪は私以上に長くなっていて、身長もだいぶ大きくなっていたが、雅也に間違いなかった。

雅也が居る。その事実に私は嬉しく、すぐに会いに行きたくなったが同時に恥ずかしさがこみ上げて来た。

白蓮殿に帰還の報告などを済ませた後、私は桃香殿達にどうか私が戻って来た事は内密にと頼んでしまった時は、自分がおかしくてたまらなかった。

あの雅也が、居るのだぞ？精神的にも幼かった頃の私が言ったわがままを、果たす為に雅也がここまで来てくれたのだぞ？

旅に出て、片時も忘れず会いたいと思っていた自慢の弟が手の届く距離に居るのに、何故逃げる様な真似をする必要があるか。

だが、それでも私は心の準備、余裕がなくなって居たのだろう。

結局、桃香殿がそれじゃあみんなでお酒を飲もうと言うまで、会うという手段が思い付かなかった。

そして、夜。私は愛紗と鈴々を連れ、先に集合場所である中庭にて一足先に酒を飲んでいた。

雅也が来る。そう思うと嬉しいというよりも恥ずかしさが先行してしまい、飲まずには居られなかったからだ。

ふふふ、この趙子龍がだぞ？弟とはいえ、男である雅也に会うのが恥ずかしいとは、とんだ笑い話だ。

桃香殿には悪いが愛紗と鈴々と共に酒を呷っていると、雅也がいきなり現れて私に抱き付いて来た。

私の酔いはその衝撃的な現実に覚め、思考が停止した。

私に似た長く美しい水色の髪。図らずも似ている服装。男だと言

うのに、私に似た端正な顔立ちは美しさを感じる程だ。

目の前に、雅也の顔がある。その事実に私の心臓は早鐘を打ち、その成長した姿に私は思わず思ってもいないことを口に出していた。

趙雲「お前が雅也なわけあるかぁぁぁあっ！！！」

途端に後悔した。ああ、バカな事を言ったと。

だが、慌てふためく雅也の姿が妙に懐かしく感じて、もう少しからかう事を心に決めたのは内緒だ。

雅也は随分と変わった。厳格さのある口調、一人称が俺から私に変わり、容姿もまた、磨きが掛かっている。

しかし、根本は変わっていなかった。からかえば慌て、一本気な姿勢、そして鈍感具合は腹立たしささえ覚える程だった。

……まあ、その後しっかりと私の心を掴んで行ったのは言うまでもない。

趙雲「雅也は相変わらず泣き虫だなぁ」

趙幻「や、やかましいぞ姉者。私とて、その、嬉しすぎたのだ」

雅也が盛大に泣きはらした後、中庭に全員が揃った所で再び酒盛りを始めた。

私はニヤニヤとしながら、久々に会話する雅也をからかう。

ああ、ほんっとうに可愛い。確かに男なのだが、顔を真っ赤にして俯く姿は美少女のそれに匹敵する程の破壊力を持っている、と言っても過言ではない。

趙幻「しかし、良かった」

趙雲「どうした、いきなり」

趙幻「姉者が旅に出てから5年。本当に色々とあったが、漸く姉者と再会出来た」

夜空を仰ぎ見て、雅也はしみじみと語る。母に勝つまでの修行、旅に出てからの経緯、旅中であった様々な出来事。

楽しそうに、時には辛く悲しそうに語る雅也の話は、本当に面白く酒の肴にするにはもったいないと思える程だった。

趙幻「なあ、姉者。私はつくづく思うのだ。この国は、民があって成り立つ物なんだと」

趙雲「そうだな」

趙幻「その民を苦しめる原因は、賊だ。だが、根本にあるのはその賊を出すまでに民を苦しめた国の在り方だ。王朝の上層は、権力や己の保身しか考えていない。旅をして私が強く思ったのは、それだったよ」

雅也は語り終えると、遠い目をして酒の入った杯を一気に呷った。

確かに、雅也の言うとおりだと私は思う。私も旅をしていて考え

ていた事だ。

白蓮殿といった例外はあるが、欲にまみれた連中が王朝を腐敗させて居るのは事実。だが、変える者がいないのもまた事実。

雅也は、一本気な男だ。この現実に憂い、悩んでいるのだろう。

趙雲「ならば雅也は、義勇軍に志願することを考えなかったのか？」

趙幻「……考えた。だが、それよりも姉者との約束を優先した」

問の答えは、なんとも姉冥利に尽きるものだった。

雅也らしい。雅也らしくて、逆に私が恥ずかしくなってしまう。

趙雲「ふふふふふ……。まったく、本当にお前という奴は……」

だが、そこがまた可愛いのだ。私のわがままを果たす為に義勇軍よりも私を優先するとは、なんとも律儀と言うか。

趙幻「一度した約束は守る。それが私の矜持だ。直せぬ性分さ」

趙雲「知っているさ。しかし、それならばこれからどうする？」

趙幻「……桃香殿に着いて行こうと思っている」

ほう？なかなかどうして、興味深い答えが返って来た。

先の話を聞く限り、あの魏の曹操から誘いを受けていたと言っていたのにだ。

趙幻「私の理想に一番近いのは、桃香殿と判断したと言えば良いだろうか。私は、皆が笑って暮らせる世が見たいのだよ。それが例え矛盾を孕んだ道だとしてもな」

趙雲「甘い考えだな」

趙幻「ああ、わかっているさ。だがな、姉者。甘いと言われど、道が見えれば進むが人生。その甘さがもし太平をもたらしたならば、面白くはないか？」

そう言った雅也の見せた子供のような笑顔に、私は呆気にとられた。

面白い？世を治そうとする志に、そんなことを言える人間がそうそう居るだろうか。

しかし、雅也は心の底からそう思っているのだろう。甘いと言われる理想が、現実になると本気で考えているに違いない。

我が弟ながらなんと豪胆な事よ。だからこそ、という所もあるか。

雅也の思いは全て本物なのだろう。憂いも、悩みも、理想も。本気だからこそ、ああ言って笑えるのかもしれないな。

趙雲「さすがは自慢の弟。私が一本取られるとはな」

趙幻「一本って、私は別におかしなことを言ったつもりはないぞ？」

……天然というかなんと言うか。

そういう所が私を惑わせるのだよ。雅也。

雅也のキョトンとした顔を見ながら、私は微笑みそう思った。

姉者。再会。思い。（後書き）

感想などお待ちしております。

劉備。夕暮れ。趙幻。（前書き）

桃香の回。

色々と甘い。

劉備。夕暮れ。趙幻。

姉者と再会した。約束とわがままを果たし、俺が旅に出た最初の理由はなくなった。

だが、だからといってこれから何もしないわけではない。何もしないわけにはいかない。

世は今、まさに乱れている。旅をしている内に、嫌という程味わった現実は、俺の心の中にある思いを募らせていった。

――何故、罪のない人々が泣かなければならないのか？

この問いは、ある意味この時代。否、この先ずっと解決する事の出来ないものだろう。

人間は、生きている限り戦いを生み出す生き物だ。それは俺の生きていた前世の歴史が証明している。

恒久的な平和とは、絶対に存在しないのだ。それくらいわかってる。

だけど、それでもだ。俺は、助けられる命を見逃すなんて出来ない。

物を、金を、食料を、尊厳を、命を奪う賊が許せない。

賊だから。悪だから。敵だから。そう言って俺が命を奪っても良いと考えているわけじゃないが、例え矛盾を孕んだことでも民を守

る為に動きたい。

誰かが言った。例え矛盾だらけの生でも、背中を向けず正面から受け止めて進むことが生きることだと。

……いや、小難しい事をちまちまと考えるのは俺らしくないな。うん、単刀直入に言ってしまえばこうだ。

民草が笑顔で安心して生きていける様にしたい。

桃香殿の理想に共感を持てたのは、この考えが俺の中にあったからだろう。

曹繰殿の覇道もまた、１つの道で立派なものだと思うがそれでも俺は桃香殿の思いの方が好きだった。

結局の所、そういうちょっと俗っぽい考えが一番の決め手だったりする。

力で押さえつけて手に入れた平和よりも、甘いと言われても優しさと思いで手に入れた平和の方が俺は良いと判断した。

――そりゃあ、力が必要な時は力を使う。矛盾は確実に起こる。それでも、結果的に平和になれば良い。これからどうしたら良いのか。まったくわからないがな。

きっと、進んでいる内にわかるだろう。

それに、姉者にも言ったが甘い甘いと言われる考えが本当に世を正したならば、面白いと思うからな。

◇

公孫賛殿の下で客将として働き始めてからしばらく、その事件は唐突に起きた。

未だ勢力を伸ばし続けている黄巾党の討伐に向かっていた愛紗殿が、怪我をしたのだ。

俺はたまたまその討伐には参加せず、簡単な書類を片付けたり、兵達の調練をしたり、桃香殿と一緒に町の警邏をしたりと割と平和に過ごしていた。

その日、俺は桃香殿と共に町の警邏をしていたのだが討伐から帰って来た姉者が深刻そうな顔をして言いにくそうにしながら伝えて来たものだから、桃香殿は血相を変えていた。

彼女は慌てながら姉者に愛紗殿の居る場所を聞き出すと、一目散に走り出す。

俺もそれに着いて行こうとしたが、姉者が顎に手を当てて不思議そうな表情をしているのを見て止まった。

趙雲「ん？雅也よ、追いかけなくて良いのか？」

趙幻「いや、姉者が余りにも余裕をかましているのでな。愛紗殿の怪我、それほどでもないのだろう？」

聞けば、姉者は無言で頭を縦に振った。

予想通り、という所か。姉者め、わざとあんな言い方をして桃香殿を焚きつけたな。

趙雲「幸い、敵の矢が腕に掠っただけだ。命に別状はない」

趙幻「姉者、桃香殿に後で謝っておくように」

不謹慎だ。そう思いながら、俺は言った後に溜め息を吐く。

人をからかうとしても、時と場合を考えて欲しい。桃香殿、本気で慌てて心配しながら走って行ったからな。

趙雲「……雅也がそう言うのなら、そうだな。私も後悔していたところだ」

趙幻「ならば良いんだ。俺も警邏を切り上げて様子を見に行く。共に行こうか」

どうやら、桃香殿の様子が余りにも変わったのを見て姉者もしまったと思ったらしい。

その後、公孫賛殿の兵に警邏の引き継ぎを任せた後俺達は城へと戻って行った。

姉者の話では愛紗殿に用意された部屋で治療をしているらしいので、そのまま彼女の下へと向かった。

公孫賛「桃香。ここから出て行くんだ」

愛紗殿の部屋に近付いた時、聞こえたのは公孫賛殿の放ったその

冷たい宣告だった。

‡劉備ｓｉｄｅ‡

愛紗ちゃんが怪我をした。星さんの言った言葉に私は気が動転して、雅也くんを置いて愛紗ちゃんの所に走った。

愛紗ちゃんは部屋で治療をしていたみたいで、真っ直ぐ向かって部屋に入ると鈴々ちゃんが左腕に包帯を巻いてるところだった。

劉備「愛紗ちゃん！」

関羽「桃香様！？そんなに慌てて、警邏に行っていたのではないですか？」

劉備「星さんから愛紗ちゃんが怪我をしたって聞いて、いてもたっても居られなくて……」

驚いた愛紗ちゃんに、私はこの部屋に来た理由を話す。

最初、愛紗ちゃんはう～んと唸ってたけど鈴々ちゃんと顔を合わせて苦笑いをする。

関羽「ありがとうございます。怪我はただ矢が掠っただけですから、ご心配なく」

張飛「愛紗は強いのだ。簡単にやられるわけないのだ！」

劉備「そ、そうだよね。良かったぁ……」

平気そうに左腕を回す愛紗ちゃんと笑顔の鈴々ちゃんの言葉に、私は安堵の息を吐く。

でも……。私はやっぱり心配だった。

鈴々ちゃんも愛紗ちゃんも私なんかよりすっごく強くて頼りになる人だ。兵士の人達を連れて、指揮だって立派にこなしている。

だから、黄巾党の人達を討伐する時、白蓮ちゃんが頼りにするのは2人。戦場に向かうのは私じゃなくて、2人。

別に、白蓮ちゃんの言うことが間違ってるってわけじゃない。それでも、私は。

劉備「愛紗ちゃん。やっぱり私も戦場に出るよ」

関羽「と、桃香様！？」

劉備「だって！2人が頑張ってるのに私だけ町に居るなんて嫌なんだもん！私だって2人の仲間なんだよ！？なのに……」

なのに、2人が戻って来るのをただ待ってるだけなんて、情けないよ。

続けてそう言って、私は俯き服の裾をぎゅっと握り締めた。

愛紗ちゃんと鈴々ちゃんの心配は嬉しい。でも、その代わりに2人が怪我をするのは我慢出来ない。

私にもっと力があれば。私に2人を助けられる知識があれば。

無い物ねだりなのはわかってるけど、そう思わずに居られなかった。

公孫賛「ダメだ。桃香は戦場には出せない」

そんな私の思いを打ち砕いたのは、いつの間にか入口に立っていた白蓮ちゃんだった。

白蓮ちゃんは呆れ顔を浮かべて部屋に入って来ると、私の前で止まる。

劉備「なんで……。私だって戦える！足手まといにならないように頑張るから！」

公孫賛「それでも桃香は弱い。どう頑張ったって並みの兵士にも勝てないだろ？」

白蓮ちゃんの言う事は、もっともだった。私は弱い。力もない。愛紗ちゃん達みたいに、立派に戦いの中を立ち回れない。

公孫賛「桃香。お前は戦場に出て躊躇わずに人を殺せるのか？人間の尊厳を踏みにじれるのか？」

劉備「そ、それは……」

公孫賛「別に、桃香が弱いからって理由だけで戦場に出さないんじゃないんだ。お前の覚悟だって知ってる」

劉備「ならっ……！」

公孫賛「でもな。優しすぎるんだよ、桃香は。その優しさが兵士を殺す。わかるか？」

……何も、言い返せなかった。

相手は黄巾党って言っても人間だ。旅に出てから賊の人達とも何回か戦ったし、命を奪った事もある。

だけど、後ろめたくて申し訳なかったと思ったのは確かだ。愛紗ちゃん達は気にするなって言ってくれたけど、だけど何度も吐いたし夢見に見た事もある。

劉備「でも、だけど、それでも……」

それ以上に、私には果たしたい理想が。夢があるのだ。引けない理由が、私にはあるのだ。

白蓮ちゃんの言う事は正しい。だからこそ、悔しい。

ぎゅっと拳を握り締めて、自分の情けなさに涙が出そうになった。

公孫賛「はぁ……。しょうがないな」

溜め息を吐き、そっぽを向きながら白蓮ちゃんは呟くと頭をかく。

公孫賛「桃香。ここから出て行くんだ」

劉備「えっ……？」

信じられない言葉が私の胸を深く貫く。

出て行くんだ？え、えっ……？

足元から何かが崩れて行くのを感じた。愛紗ちゃんと鈴々ちゃんが白蓮ちゃんに何か言っているみたいだけど、耳に入らない。

頭が真っ白になって、何も考えられなくなる。

気付いたら私は、外へと飛び出していた。

‡趙幻ｓｉｄｅ‡

関羽「公孫賛殿！それはどういうことですか！！」

張飛「そうなのだ！桃香お姉ちゃんに出ていけなんて、おかしいのだっ！！」

愛紗殿と鈴々殿が、公孫賛殿に鬼気迫る様な勢いで詰め寄っている。

２人が怒るのは当たり前だろう。公孫賛殿が自分の主に出ていけと言ったのだ。

趙雲「おかしな雲行きだな」

趙幻「あ、ああ……」

姉者の言葉に、俺は空返事で同意する。

趙幻（あの公孫賛殿が、何も考えなしに出ていけなんて言うか？）

答えは、ノーだろう。公孫賛殿は大変友人思いな人だ。その彼女が、出ていけと言った。何か考えがある筈だと思案する。

そんなことを考えていると、部屋から桃香殿が飛び出して行くのが見えた。

趙幻「桃香殿っ！？」

その背中に叫ぶが、彼女に届いていないのかそのまま走り去っていく。

俺は姉者と桃香殿の方を交互に見て、どうしようかと歯軋りをした。

ああもうっ！今日は桃香殿走ってばっかりだなこん畜生っ！！

趙幻「姉者っ！俺は桃香殿を追い掛ける！！姉者は愛紗殿達を頼むっ！！」

趙雲「うむ、あいわかった」

趙幻「くれぐれも！く・れ・ぐ・れ・もっ！話をややこしくしてくれるなよっ！！」

趙雲「雅也は私を何だと思っているのだ。大丈夫だ、私とて場はわきまえるさ」

ニヤニヤとしながら言われても説得力がないから、釘を刺してい

るのだということを理解して欲しい。

とは言え、中では愛紗殿達が大変慌てているし、長く構っていられない。

趙幻「頼んだぞっ！」

最後にそれだけ言い放ち、俺は桃香殿を探す為に走り出す。

彼女には悪いが、身体能力は俺の方が上だ。走りで俺から逃げられると思うなよっ！

◇

と、思っていた時期が俺にもありました。

趙幻「はぁっ……。くっそ！どこに居るんだ桃香殿ぉ……！」

桃香殿を追い掛けたのは良いが、結構距離が開いていてすぐに見失うという大失態を俺は犯してしまった。

姉者に探すと宣言した矢先、戻るのは俺の矜持が許さないのでそのまま走り回ったわけだが、どうも見つからない。

城の中をくまなく探し、町の中も駆けずり回り、見つけた狼藉者を捕まえて警邏中の兵士に突き出したり、兵士や町人に情報を聞いたりしたが桃香殿を見つけるに至らなかった。

そして、時は夕暮れ。世界が黄昏に暮れる頃、俺は一度城に戻った。

もしかしたら、戻って来ているかもしれないと考えたからだ。

それが当てはまった場合、姉者から散々からかわれるだろうが甘んじて受け入れよう。それは俺の力不足が原因だ。

そんなことを考えながら城内に入ると、城壁の上に繋がる階段を登る見覚えのある桃色髪の人物を見つけた。

俺は慌ててその後を追うと、城壁の中頃には呆然と町を眺めている桃香殿が居た。

……綺麗だと、素直に思った。

物鬱気な表情は夕陽に照らされ儚さを引き立たせ、長くサラサラな桃色の髪は風に遊ばせている。

桃香殿は、確かに可愛らしい容姿と抜群のスタイルを持つ美少女だ。

普段はぽやぽや、というかどこか天然で感情の起伏も表情も多い性格だが、こんな表情もするのかと思わず心を奪われる。

額に飾りたい程に、この目に映る桃香殿の姿は風景と溶け合い、美しかった。

劉備「あれ？雅也くん？」

だが、その時間も終わりか。桃香殿はこちらに気付くとキョトンとした表情で俺の名前を呟く。

趙幻「探したぞ、桃香殿」

溜め息を吐きたくなったが、我慢した。

そのまま彼女の方に歩み寄り、前に着くと立ち止まる。

劉備「探したって……私を？」

趙幻「ああ。公孫賛殿と何かあったみたいだから、心配でな」

城壁に背中を預け、そう伝える。

公孫賛殿の名前を聞いた時、桃香殿の表情が険しくなったがすぐに溜め息を吐いて落ち込む様に膝を折った。

劉備「ごめんね？雅也くんにまで心配掛けるなんて、本当に私はダメダメだなぁ……」

そう言ってから、桃香殿は二度目の溜め息を吐く。

体育座りの様な体勢になり、彼女は背中を丸めると膝に顔を埋めた。

趙幻「……まあ、色々察するが。一応聞こう。公孫賛殿と何があった？」

予想は出来ているが、本人から聞きたい話でもある。

俺は桃香殿に尋ねると、意外にも素直に事の始終を話してくれた。

愛紗殿達が戦っているのに、自分は2人の力に成れていないこと。

その事で自分が情けなく思えてい、戦場に出たいと言ったら公孫賛殿に止められた事。

公孫賛殿に言われたこと。そして、出ていけと言われてショックだったと。

趙幻（なんというか……）

公孫賛殿にも、色々と落ち度はあると思えた。

まず、言葉が足りない。そりゃあ何の説明も無しに出て行くんだなんて言われりゃ、誰だって勘違いするわ。

だが、まあ……。桃香殿も色々と思うことがあるのだろうが、公孫賛殿の言った事は正しい。

桃香殿は弱い。それは変えようもない事実であるし、戦場に来られても足手まといと言うのは確かだ。

だが、それはあくまで前線に出られたらの話なんだが……。

劉備「私だって……。私だって戦えるもん。愛紗ちゃん達にだけ戦ってもらって、私だけ安全だなんて……」

本人がコレか……。はあ、全を教えたら公孫賛殿の立場がなくなるし、それとなく諭してみるか……。

趙幻「桃香殿」

劉備「なに？雅也くん」

彼女の隣に腰掛ける形で座り、目線を合わせながら名前を呼ぶ。

桃香殿は首だけをこちらに向け、話を聞いてくれる様だ。いや、聞いてくれなければ困るのだが。

趙幻「人にはそれぞれ役割がある。家庭の中で例えるなら、夫は仕事をして金を稼ぎ、妻は家事や子供を育てる。子供もそこそこ成長していれば親の手伝いもする」

劉備「いきなりどうしたの……？」

趙幻「では、それを桃香殿達で当てはめてみましょう。愛紗殿と鈴々殿は強き武将。武将の役割とは？」

劉備「戦うこと……」

趙幻「正解。桃香殿は武将ではない。言わば主君だ。主君を守るのもまた、臣下の務め」

劉備「でもっ……。愛紗ちゃん達は、仲間だよ……。守ってもらうだけなんて、情けないよ……」

まあ、彼女の中で2人は主君とか臣下とか区別なく、仲間なんだろうとはわかっている。

桃香殿の言わんとすることや気持ちはわからないでもない。かつ

ての俺はそうだった。姉者と母上が賊退治に行くとき、似たような事を思っていたから。

趙幻「それでは、桃香殿の役目を考えてみるとしよう」

劉備「え……？」

自分の名前が出てくるとは思っていなかったのだろう。桃香殿は目を白黒させて、驚きを露わにしている。

まあ、回りくどく言っていたがこれが本題。そしてこれで納得してくれると良いのだが……。

劉備「そ、そんな。いきなり私の役目って言われても……。私、特別なことなんて何も出来ないし……」

趙幻「……桃香殿は、もし自分が帰って来た時に『おかえりなさい』と笑顔で言ってくれる人がいたらどう思う？」

劉備「……」

趙幻「もし自分が戦場に向かう時、『頑張って』と心から応援してくれる人がいたらどう思う？」

劉備「それは、嬉しいかな」

趙幻「つまり、そういう事さ」

劉備「……！」

使い古されたやり方だけど、気付いたみたいだしまあ良いかと俺は思う。

愛紗殿と鈴々殿は、戦いに適した者達だ。桃香殿が今からどうやっても2人にはなれないし、2人の様に活躍するのは不可能だ。

趙幻「桃香殿には人を惹きつける魅力がある。人を癒せる力がある。これが案外、手に入れたくても手に入れられない天性のものだ。愛紗殿と鈴々殿にはない、桃香殿にしかない力だ」

劉備「……だけど、雅也くんが言うみたいにそんな力があっても、2人は守れない」

趙幻「ああそうだな。武力ではないから、守るなんて到底叶わぬ力だ。だが、なんだ桃香殿？その言い方では2人の力が信じられないみたいじゃないか」

劉備「そんなこと、そんなことないっ！」

趙幻「なら、信じてやれ。それは一見無力だが、やがて膨らみ力となる。意外な程強力な、武力以上の力にな」

劉備「雅也くん……」

柄にもないことをしているせいか、どうも気恥ずかしくなって来た。

信頼とは、即ち信じて頼ること。そこに絆がなければ成立しないことだ。

桃香殿は2人を信頼している。2人はその信頼に応えるために努力する。兵士達もその姿に感化されるだろうし、そうすればより強くなる。

この連鎖、簡単な様で難しいことだ。前提として、強い信頼関係を築いていなければならないからな。

人を信じるのは存外、難しいものだ。だが、桃香殿の人柄は多くの人がこの人なら信じられると思えるだろう。

仁徳や人柄は幾ら努力しても手に入り難い天性のものだ。性格と言っても良いか。

つまり、桃香殿は弱くてもその人柄がみんなを強くする、ということだ。

……我ながら、意味がわからないな。

趙幻「それに、桃香殿。あなたを助けるのは愛紗殿達だけではない」

劉備「それって」

趙幻「この趙守殻、劉玄徳の手伝いをさせてもらいたいのだ。良いかな？」

真剣な思いでその旨を伝えると、桃香殿の表情がどんどんと輝いていった。

そして、俺の腕に抱き付いてくる。ちょっ！まって！

劉備「良い！良い！良いに決まってるよっ！」

趙幻「よ、喜んでもらえるのは嬉しいが、その」

劉備「でも、良いの？せっかく星さんと会えたのに……」

見事なスルーが発動した気がするが、いきなり心配そうな表情を浮かべた桃香殿にツッコミを入れられるわけがない。

俺はとりあえず精神を集中させて、取り乱さない様に心掛けた。

趙幻「別に、気にすることはない。それに、私が選んだ私の道だ。姉者も納得してくれるだろう」

劉備「そっか……」

趙幻「今生の別れではないしな。生きていればその内会える」

俺がそう言うと、桃香殿は納得したのか心配そうな表情から和らげな微笑みへと顔を変えた。

……さっきから左腕に柔らかい感触がする気のせいだ。気のせいに決まっている。

劉備「雅也くん、私と一緒に来てくれるんだよね。えへへ、嬉しいな」

趙幻「喜んでもらえて良かった。私は全力をもって桃香殿を守ろう。あまり、戦場に出たいと言うなよ？桃香殿が思っているのと同じく、皆もあなたが心配だということを忘れないでくれ」

劉備「うん、わかった。色々とありがとう。それと、ごめんね？」

趙幻「なに、気にするな。私は私のしたいことをしただけさ」

劉備「あははっ、優しいんだね。雅也くんって」

漸くの笑顔を浮かべて、恥ずかしい事を言ってくる桃香殿に俺は思わず視線を逸らす。

優しいとか、そんな面と向かって言われると恥ずかしいわこん畜生……。

劉備「あ、もしかして照れてる？雅也くん可愛い♪」

趙幻「～～～～っ！！！！」

どうやら、今日俺をからかうのは姉者ではなくて桃香殿だった様だ。

まあ、色々とわかってくれて内面も元通りになってくれたみたいだから、良しとしよう。

声にならない声を上げ、恥ずかしさに悶えながらもそう思う俺だった。

劉備。夕暮れ。趙幻。（後書き）

書いてて思った。

雅也くんもげろ、と。

感想などお待ちしております。

公孫賛。姉者。義勇軍。（前書き）

前話直後から開始。
今回は旅立ちまで。

公孫賛。姉者。義勇軍。

さて、時間は既に夜。空は闇に覆われ、たくさんの星々と美しい月が輝く頃。桃香殿と随分と喋り込んでしまったが、そろそろ愛紗殿が本気で捜索隊を組んで飛び出しそうだと思い、公孫賛殿の所へと向かう事にした。

いや、実際に兵士が集まり始めたから急いで向かったと言った方が良いか。

桃香殿は先の話し合いで考えを変えたのか、はたまた気丈に振る舞っていてまだ悩んでいるのか知らないが普段通りになっている。

いや、だけどね、うん。何で俺の左腕に抱き付いているんですかね。大きく熟れた2つの実りがですね、当たっているんですよね。

恥ずかしくて仕方ないわけだし、こんな所を姉者に見られでもしたら――。

趙雲「おっ？」

趙幻「あっ」

はい御約束ぅぅぅうっ！！

自分が嫌だと考えることほど、現実になるのは世の常と言った所か。謁見の間に向かう途中の廊下でばったりと、姉者に出会してしまった。

沈黙が降りる。姉者が視線が俺と桃香殿を交互に捉える。にやけ

た。

趙幻「姉者っ！これは違っ！」

趙雲「うむうむ、わかっているぞ雅也。やるなっ」

見惚れる程のサムズアップを決められた。絶対わかってない。つか、新しい玩具を手に入れた子供みたいな顔をしてやがる。

一方で、慌てる俺を余所に桃香殿は何のことやらと不思議そうな顔をしていた。

趙雲「いやはや、まさか雅也と桃香殿の仲がこれほど進んでいようとは。姉としては少し複雑な気持ちだな」

劉備「っ！？」

姉者のわざとらしく演技掛かった物言いに、桃香殿がボンッと一気に顔を赤くする。

劉備「ち、ちちち違いますよ！？星さんから雅也くんを取ろうなんて思ってませんからね！？」

俺の腕から体を離し、両手を一心不乱に振りながら桃香殿はそう言って否定に入る。

いや、桃香殿？そいつは色々と問題のある発言じゃあないっすか？

趙雲「はっはっは。別にそこまで言っておりませんよ。ただ、腕を組んで歩いていたので少し羨ましく思いましてね」

趙幻「姉者まで何を言い出す！？ちょっ！抱きつくな姉者っ！！」

趙雲「なんだ？桃香殿は良くて私は駄目なのか。雅也、私は今とても悲しいぞ」

違う！そういうことじゃない！

そう反論しようとしたが、涙目になっている姉者に向かって言える筈もなく黙殺される。

劉備「……」

趙雲「桃香殿、何をしておられる。遠慮なく雅也に腕を絡ませてやってくだされ」

劉備「で、でも」

趙雲「構いませぬよ。コレも男、きっと内心喜んでいる筈ですから」

何を勝手なこと……ああもう、腕に胸を当てるな！些か破廉恥だぞ姉者！やめ、本当にこれ以上はダメ！

劉備「じゃ、じゃあ、折角だし……」

何が折角なのかわからないが、そう呟いて遠慮がちにしながらもさっきまでの様に桃香殿は腕を絡めてくる。

瞬間――。

「雅也殿に桃香様？一体何をしているのだ……？」

一難去ってまた一難。今度は愛紗殿が姿を現したのだ。

弁解しようにも、時既に遅し。両腕はしっかりと掴まれ、逃げるにも逃げ出せない状態。

姉者を見ればニヤニヤとしている。桃香殿を見れば罰が悪そうにしていた。

一方で愛紗殿は、黒くどす黒い雰囲気を纏い笑顔を浮かべていた。

笑顔とは、本来攻撃的な意味を持っているらしい。口元を吊り上げ、見せる歯は威嚇を表しているそうだ。

その説が本当なんだな、と俺は身を持って体験しているわけだが、マジで怖い。

趙幻「と、時に落ち着け愛紗殿。まずは話し合おう。な？」

関羽「ええ、ええ。そうですね。雅也殿と桃香様にはしっかり事情を聞かなければならないですからね」

話し合いの意味が伝わっているかは疑問だったが、とりあえず彼女が怒っているという事がわかった。

そりゃあ、いきなり飛び出して行った主とそれを追い掛けて探しに出た俺が腕組みをして歩いていたのだ。

姉者はまあ、この際置いておき心配していただろう愛紗殿からす

ればどういうことだと言いたくなるだろうしなぁ。

趙幻「わかった。事情の説明は公孫賛殿の所に着いてからしよう。姉者、すまないが鈴々殿を呼んで来てくれないか？」

趙雲「……わかった」

趙幻「すまない。では、愛紗殿、桃香殿、参ろうか」

名残惜し気に腕を離した姉者は、渋々と俺を見た後に溜め息を吐いてから歩き始める。

すまんなと思いながらもちょっと寂しい気持ちになったのは俺も男だから、といった所か。まあ、悪い気がしなかったのは確かだが、心に積もる恥ずかしさは辛かったのもまた本当の事。

俺はその後悪いと思いながら桃香殿にも離れてもらう様に言い、それから愛紗殿と共に公孫賛殿の元へと向かうのだった。

◇

さて、公孫賛殿の元へと着いたわけだがとんとん拍子に事が運んで良かったと言っておく。

最初に桃香殿が謝り、公孫賛殿も言い過ぎたと言って和解。それから姉者が鈴々殿を連れて遅れながら参上し、何故出て行けと言ったかの理由を説明した。

公孫賛「愛紗と鈴々は経験も随分積んだ頃だ。桃香も、そろそろ義勇軍を集って討伐に乗り出しても良いと思ってる。あの時に出て行

けって言ったのは悪かったよ。私は、義勇軍を集って独自に討伐に乗り出せって言いたかったんだ」

言葉が足りなかったのを公孫賛殿もわかっていたのだろう。もう一度すまないと頭を下げる公孫賛殿に、桃香殿達は顔を見合わせた後柔らかな表情を浮かべた。

公孫賛「なんと言うか、馴染みがある分私は桃香をどの位置に置いたらいいのか分からないんだ」

頬を右手の人差し指の指先でかきながら、彼女は自分の思いと考えの独白を始める。

公孫賛「国を持つのが目的なら、私より上には行かせられない。なにより、桃香の仲間に私の下でずっと働いてもらうのは気が引ける……」

そう語りながら公孫賛殿は桃香殿に歩み寄り、その肩を小さく叩く。

公孫賛「出発の準備はする。あとは自分の力でやってみないか？」

微笑み、本来言いたかったことであろう事を彼女は口にした。

桃香殿はそれに感激したのか嬉し泣きしながら抱き付き、公孫賛殿は照れくさそうにするも表情はどこか満更ではない様子だった。

愛紗殿と鈴々殿も2人を見ながら微笑み、俺もいつの間にか隣に立っていた姉者と笑い合った。

趙幻「さて、公孫賛殿」

しばらくして、桃香殿の抱擁から解放された公孫賛殿に自分の用事を果たす為に話し掛ける。

彼女はなんだと言わなかったが視線をこちらに向け、首を傾げた。

趙幻「私は桃香殿に着いて行くつもりなのだが、よろしいかな」

その言葉を発した時、桃香殿と姉者以外の全員から驚きの視線を一気に感じた。

関羽「雅也殿、それは真か！？」

張飛「お兄ちゃんが居れば百人力なのだー♪」

早々に口を開いたのは、信じられないといった感じで尋ねてくる愛紗殿と、嬉しそうに笑顔を浮かべる鈴々殿だ。

俺が黙って頷いて見せると、愛紗殿は朗らかな表情になる。

公孫賛「はぁ……。良いよ。元々客将として雇ってたわけだし、趙幻の力はここに居ても腐るだけだから」

一方で、公孫賛殿は溜め息を吐きながらも俺の発言に理解を示してくれたのか、了承してくれた。

別に力を腐らせているつもりはないが……。まあ、彼女の周りにいる重鎮共の目は明らかに俺を良く見ていなかったし、それを含めてなのだろう。

公孫賛「それで、星。お前はどうする？」

趙雲「む？ここで私に振るとは異な事を」

公孫賛「いや、ずっと会いたがってた弟がまた離れていくわけだからさ。もしかしたらと思ってね」

趙雲「うむ……。確かに名残惜しいな。まだ再会してそれ程も経っておらぬし」

姉者の言葉に、桃香殿達は揃って申し訳なさそうな表情をする。

趙雲「とはいえ、雅也が決めた雅也の道だ。そうだろう？」

趙幻「うむ。そうだと肯定させて頂く」

趙雲「ならば私は、黙して応援するだけさ」

姉者の言葉に、公孫賛殿と桃香殿達は納得してくれたのか表情は穏やかだ。

だが、俺は真面目に語った姉者の言葉がおかしくて、吹き出してしまう。

劉備「雅也くん？」

趙幻「姉者。それ、私が姉者が旅立つ時に言ったことじゃないか」

趙雲「何のことかな？」

不思議そうに首を傾げる姉者をよそに、俺は笑いながらも胸の中は寂しさでいっぱいだった。

姉者と離れるのは辛い。辛いが、桃香殿に着いて行き力に成ると言ったのは俺だ。決めたのは俺だ。

しかし、姉者はそんな俺を応援すると言った。それが嬉しくてたまらなかった。5年前の姉者の気持ちがわかった気がして、それも嬉しくて仕方がなかった。

趙雲「なに。私もしばらくしたらまた旅に出て、仕えたいと思った主が居なければ桃香殿に頼るつもりだ。縁があれば、また出会える」

趙幻「そうか。なら、今度は私が良い酒とメンマを用意しなければいけないな」

あの日とは立場が逆になってしまったな。そう思いながら、俺は姉者と笑い合った。

ちなみに、その後腕を組んでいた理由の説明を問われ、話すと公孫賛殿は吹いて笑い、鈴々殿が頭に飛び付いて来たのでどうしようかと思った。

愛紗殿は呆れた様に溜め息を吐き、桃香殿に説教をしていたが知らない。飛び火されるのは勘弁したかったし。

それから数日、義勇軍の募集も落ち着き公孫賛殿の協力で食糧や荷物が整った頃。

俺達は旅立つ為に城門へと集まっていた。

◇

空は快晴、風も穏やかで心地良い気候。隣には目を白黒させている桃香殿と落ち込んでいる公孫賛殿がいる。

城門前、高台のような城内へと続く場所から見えるのは、志願者達の立ち並ぶ風景だった。

ざっと数えて、約４０００人と言った所か。見れば俺が調練と討伐の際に率いた兵や、桃香殿と警邏に行った時親身に話し掛けて来た町人の姿もあった。

口には出さないが、俺も愛紗殿も驚いている。まさかここまで集まるとは、予想ＧＵＹです。

公孫賛「こっちも人手足りてるわけじゃないんだけどな……」

落ち込む公孫賛殿の放った呟きには、同情を禁じ得ないなと思うばかりだった。

まあ、もっと長くここに居たら更に志願者は増えていただろうと思うし、それは彼女にとって痛手以外の何でもないからなぁ。

趙幻「凄い集まった様だが、これも桃香殿の人柄と愛紗殿達の頑張りのおかげかな」

関羽「どうだろうな。だが、公孫賛殿には私達の力を兵達に見せろ、と言われたのは確か。私達はそれを実践したまでに過ぎない」

集まった数はさすがに予想を超えていたが、これも公孫賛殿の考えていた事なのだろう。俺もそれが一番だと思っていたし、結果は確かに出た。

彼女には悪いが、志願者達は桃香殿の魅力や愛紗殿達の力に魅せられた者。

そう考えると、流石だなと感心せざるを得なかった。

まあ、それを差し引いて公孫賛殿の計算は桃香殿を想ってのことだったのだろう。

趙幻「太守としてではなく、友として……か」

関羽「そうだな。公孫賛殿は桃香様を大変心配しておられたからな」

愛紗殿は俺の呟きに何を考えていたかを悟ったのか、そう言って小さく微笑んだ。

それで落ち込んでいれば世話ないな、と思うが口には出さない。公孫賛殿にこれ以上の追い討ちはさすがに酷だからな。

劉備「ね、ねぇねぇどうしよう……人がいっぱいだよぉ。ど、どうしたら良いんだろ？」

一方で、我らが主は沢山の志願者を前にあたふたと慌てて両手を顔に当てていた。

どうするもこうも、彼女には檄のひとつでも配下に置く志願者達

に飛ばして欲しいものだが、性格を鑑みるにカッコ良く決めるのは無理か。

関羽「桃香様しっかりして下さい。これからこの兵は、桃香様が率いるのですよ？」

劉備「で、でもでもっ……」

ううむ、愛紗殿の言うことが最もだが本当に気が動転しているのか、桃香殿は小さくなっている。

愛紗殿と顔を見合わせ、小さく溜め息を吐く。

その後、彼女は「今回だけですよ？」と呟くと俺と同じタイミングで下へと飛び降り着地した。

劉備「愛紗ちゃん！？雅也くん！？」

驚く桃香殿の声を背中に、愛紗殿は青龍堰月刀を床に勢い良く突き立て、俺は双直刀の片方を左手で抜き空へと掲げる。

関羽「我が名は関雲長！」

趙幻「そして我が名は趙守殻！！」

関羽&趙幻「皆の者、集まってくれたこと感謝する！！！！」

お互いなるべく気迫を込め、大きく名乗りまずは礼を叫んだ。

兵達はそれを聞くと表情を引き締め、視線を俺達に向ける。

関羽「皆が知るように今世界は動乱に満ちている！強き者は弱き者を虐げ、弱き者は更に弱き者へと暴力を振るう！」

趙幻「そんなことが許されていいのか！そんなことを許していいのか！！否っ！！答えは断じて否っ！！許される筈がないっ！！！！」

関羽「不条理な世を正すため、劉備様は立ち上がった！！我等もまた、劉備様に心を合わせて立ち上がったひとりだ！！」

趙幻「道のりは長く険しいだろう！だが、ここに集った者達の協力があれば歩みは確かであろう！劉備様は必ず我等の希望となる！皆の力、劉備様のため、何より世の為に振るって欲しい！！」

2人で交互に檄を飛ばし、その中で主は誰なのかを強く認識させる。

こうやって言い放つのは俺と愛紗殿なのだが、それで誰がトップなのかを間違って認識されたら困るからだ。

あくまで俺達は彼女の家臣であり、その先頭に立つのは劉備なのであると意識に植え付ける。

本来は桃香殿に言って貰えれば一番なのだが、まあ今回だけは良い。今後は彼女に任せようと思うがな。

趙幻「立ち上がった諸君等には我等がある！臆すな！怯むな！ただ信じ、我等と共に、劉備様と共にあれっ！！」

関羽「ここが新たな歴史を創る出発点だ！行こう！我等は劉玄徳と共にあるっ！！」

「「「「「オォォォォォォォォォォッ！！！！！！！！！」」」」」

愛紗殿が叫び、振り上げた青龍堰月刀と共に兵達は一斉に拳を振り上げて割れんばかりの雄叫びを上げた。

どうやら兵達の心は掴めた様だ。結果は上々、この鳴り止まない声の奔流が現実である。

チラッと桃香殿の方を見てみれば、鋭く凛々しい表情を浮かべていた。

さて、ここからが本当の始まりだ。黄巾党の討伐の為、俺達はこの兵達と一緒に旅に出る。

その先には幾多の困難があるだろうが、乗り越えられるかは桃香殿次第。信じて進もう、皆が笑顔で平和に暮らせる世の中を目指して。

趙幻（やれるよな、俺達ならば）

心の中で高ぶる気持ちを呟くと、俺は広く雲一つない空を見上げた。

いつも旅立つ時に空を見るが、今日は一段と澄み渡っている様に見えた。

公孫賛。姉者。義勇軍。（後書き）

黄巾党討伐に乗り出しました。
とはいえ、黄巾党討伐編はもう何話かで終わりになるんですがね。
そろそろ雅也くん専用の武器を出したいと思います。
いつまでもただの双直刀だと様にならないので、名前を募集しようかと思います。
ご協力お願い致します。

登場人物紹介（前書き）

作ってみたので。

一応未登場ながら呉のメンバーも何人か書いた。

登場人物紹介

†主人公†

名前：鵲　雅也《Ｋａｓａｓａｇｉ　Ｍａｓａｙａ》
姓：趙
名：幻
字：守殻
真名：雅也
愛馬：翅麒《ＳＨＩＫＩ》

神との契約で転生を義務付けられた主人公。元一般人。神から容姿と才能開花のチートを受けている。
性格は一本気。約束を守り恩は必ず返すことを心に決めている。
精神を極限まで研ぎ澄ませ、内気功により身体能力を通常の倍以上まで引き上げる技術、『明鏡止水』こと『トランザム』を使えるただ1人の人間。
自分を『我慢弱く堪え性もなく、卑怯や姑息と負けるのが大嫌いな男』と称しているが、某フラッグファイターとは関係ない。
元の記憶と人格が薄れつつあるが、要所でちゃんと思い出すことが出来る。　主は劉備。姉に趙雲を持つ。

†義勇軍†

姓：劉
名：備
字：玄徳

真名：桃香

言わずと知れた天然っ娘。
義勇軍を立ち上げ、黄巾党の討伐に乗り出した。
関羽、張飛と共に義姉妹の契りである『桃園の誓い』をした。長姉。
趙幻を「雅也くん」と呼ぶ。
武力はなく、智学も人並みであるが人を惹きつける魅力と心を癒やす力を持つ。
関羽、張飛、趙幻の主。臣下というよりも仲間として見ている為、上下関係など堅苦しいことを苦手とする。

姓：趙
名：雲
字：子龍
真名：星

旅をしながら武芸を磨き、自らが仕えるべき人物を探している旅の武芸者。現在は公孫賛の下で客将として仕えている。
無類のメンマ好きであると共に酒好き。自由奔放な性格だが、根は悪を許さなず正義感が強い。
趙幻の姉であり、再会を果たすがまだ劉備に仕えるには早いと着いて行かなかった。
武器は直刀槍『龍牙』。巷では『神槍』『常山の登り龍』と呼ばれている。

姓：関
名：羽
字：雲長
真名：愛紗

劉備、張飛と義姉妹の契りである『桃園の誓い』をした武将。
美しい黒髪から『美髪公』と呼ばれ、武器である『青龍堰月刀』と共に名を広めている。
性格は生真面目で一本気。そして恥ずかしがり屋な一面もある乙女。
自らの武に誇りを持つ自信家であるが、少々突撃思考がある。
主である劉備を敬愛すると共に信頼し、張飛と大変仲が良い。

姓：張
名：飛
字：翼徳
真名：鈴々

自分の事を真名である『鈴々』と呼ぶ少女。ロリ成分一号。
劉備、関羽と義姉妹の契りである『桃園の誓い』をした武将。
幼い見た目に反して怪力であり、身の丈の倍以上もある『蛇矛』を用いて戦う猛将である。
大変突撃思考であり、難しい話になるとよくわからないと口にする。
語尾によく「～なのだ」と付けるのが癖。
戦いの勘が鋭く、関羽並みに強い。が、知力はおざなりなのが欠点。
気に入った年上の相手を名前の後に「～のお兄ちゃん」「～のお姉ちゃん」と呼ぶ。
主は劉備。

姓：諸葛
名：亮
字：孔明

真名：朱里

趙幻がかつて門下生だった水鏡塾の姉弟子。ロリ成分二号。
頭のキレが良く、知識も豊富で邑を襲って来た黄巾党を趙幻、鳳統と共に戦略を立て撃退した経験がある。
慌てると噛む癖があり、その時は決まって「はわわ」と言う。
鳳統と共に趙幻の元へと向かう為旅をしていた。
現在は趙幻と合流を果たし、劉備傘下にて軍師として働いている。
号は『臥龍』。

姓：鳳
名：統
字：士元
真名：雛里

諸葛亮と同じく、水鏡塾における趙幻の姉弟子。
柔軟な思考を武器に、趙幻と諸葛亮と共に戦略を練り、邑を襲って来た黄巾党を撃退した経験を持つ。
努力家であり、師の司馬徽や親友の諸葛亮、趙幻を筆頭に水鏡塾でも認められている。
趙幻に淡い思いを寄せる1人。
慌てると噛む癖があり、その時は決まって「あわわ」と言う。
号は『鳳雛』。
諸葛亮と共に、趙幻の元へと向かう為旅をしていた。
現在は諸葛亮と同じく劉備の下で軍師として働いている。

†魏†

姓：曹
名：操
字：孟徳
真名：華琳

豫州の都『許昌』を治める巻き髪をツインテールに結んだ若き覇王。
行き倒れた趙幻を助け、その後余興として見た趙幻の武に魅力を感じ手に入れようとしたが、一度諦めた。
覇道の為なら使えるものは何でも使い、自らの欲しいものは何が何でも手に入れようとする。
現在、黄巾党の討伐をしながら順調に勢力を拡大している。

姓：夏候
名：惇
字：元譲
真名：春蘭

曹操に仕え、敬愛している猛将。
魏において武力は右に出る者がいない程に強く、『魏武の大剣』と呼ばれる人物。
知力はおざなりだが、武力においては誰もが一目を置いている。
趙幻と試合をして負けており、好敵手と定めながら共に戦いたいと想っている。
武器は幅広の刀『七星餓狼』。妹に夏候淵がおり、溺愛すると共に信頼している。

姓：夏候
名：淵
字：妙才

真名：秋蘭

曹操に仕え、敬愛している武将。
夏候惇の妹であり、姉とは反対に冷静沈着な性格で姉の手綱を握っている人物。
弓の名手であり、武力も高い。
姉をからかったりするが、本人に悪気はなくただ夏候惇の慌てる姿や恥じらう姿が好きなだけ。よく姉者は可愛いなと言っては興奮している。

姓：北郷
名：一刀

未来の世界からこの外史の世界に飛ばされてきた本来の主人公にして天の御遣い。
曹操に拾われ、天の知識でサポートしながら色々とフラグを立てているフラグメイカー。
何だかんだで必死に政務を勤め、貢献したりしている。
趙幻の事を何者だと勘ぐっている人物。

姓：荀
名：イク
字：文若
真名：桂花

趙幻が去った後、曹操に仕える事になった軍師。
大の男嫌いであり、一刀を貶めようと何度も画策するが失敗している。
曹操が趙幻の話をする度にイライラを募らせている。
主である曹操を異様な程敬愛している。

†呉†

姓：孫
名：策
字：伯符
真名：雪蓮

呉の小覇王。
袁術の客将をしながら、孫呉の地を奪還しようと徐々に勢力を拡大している。
本編未登場。

姓：周
名：瑜
字：公瑾
真名：冥琳

孫策を支える親友にして軍師。
自由奔放な孫策の手綱を握れる唯一の人物。
本編未登場。

姓：黄
名：蓋
字：公覆
真名：祭

孫堅の頃から仕える猛将。
無類の酒好きだが、その武は確かの弓の名手。

本編未登場。

大喬&小喬

孫策、周瑜が保護した双子の姉妹。
大喬が孫策を、小喬が周瑜をそれぞれ慕い、仲良く暮らしている。
本編未登場。

†その他†

姓：公孫
名：賛
字：伯珪
真名：白蓮

幽州の太守にして劉備の親友。
普通に太守として勤め、普通に街を治め、普通に民に慕われているが兵士や民は劉備が義勇軍を募った際結構持って行かれた。
所謂『普通が似合う女の子』。それがコンプレックスだったりする。

姓：司馬
名：徽
字：徳操

荊州のある邑で私塾を開いている女性。通称『水鏡先生』。
趙幻、諸葛亮、鳳統の智学の師であり、人物鑑定家としても有名。
趙幻を『烈虎』、諸葛亮を『臥龍』、鳳統を『鳳雛』と呼ぶ。口

癖は「好々（よしよし）」。

現在も邑で門下生の師をする傍ら、趙幻達の身を案じている。

登場人物紹介（後書き）

喬姉妹も登場させる予定だったので。

設定はオリジナルなんですがね。

†間幕†諸葛亮。鳳統。旅中にて。（前書き）

長短め。
わっかりやすい伏線張り。

†間幕†諸葛亮。鳳統。旅中にて。

雅也さんが水鏡塾を発ってから1年が過ぎました。お久しぶりです。諸葛亮こと朱里です。

私達は今、ある噂を元に幽州へと向かっていました。

その噂とは、幽州の公孫賛の下に義勇軍が出入りしている、というものでした。元々雅也さんは幽州を目指すと言っていましたし、もしかしたらと思いました。

噂を辿り、幽州へ入ると更に多くの情報を手にすることが出来ました。

曰わく、水髪美麗な2人が黄巾党を見事な武で打ち倒している。

曰わく、美しい黒髪を靡かせ、民を助ける容姿端麗な女性がいる。

曰わく、小さな身体で巨大な蛇矛を操る少女がいる。

曰わく、義に厚く仁徳のある女性の将が民を助け、黄巾党を討伐する義勇軍を率いている。

曰わく、水髪美麗で見た目が中性的な将が義勇軍に居て、その美しさは女にも引けを取らない。

曰わく、その将は女性に囲まれているにも関わらず全く気にしていない。男色の気がある可能性があるかもしれない。

など、様々な噂を統計した結果、雅也さんは今義勇軍に居ることが判明したんです。最後の噂は色々と気になります。

最初の水髪美麗な2人、というのは恐らく片方は雅也さん。もう1人は雅也さんが言っていたお姉さんのことでしょう。

旅立つ前の夜、雅也さんが旅をする理由を聞いた時に姉に会うのが目的だと言っていましたから、その噂を聞いた時私は内心良かったと思ったものです。

それから、先述した情報を割り出した私は雛里ちゃんと一緒に喜びましたが、問題が発生しました。

義勇軍が今、どこに居るのかがわからないということです。

鳳統「あわわ……。どうしよう、朱里ちゃん」

諸葛亮「だ、大丈夫だよ雛里ちゃん。きっと見つけられるよっ！」

ひとえに幽州と言っても、馬もない私達からすれば広く、更に歩いたこともない未知の領土。

雛里ちゃんが慌てるのもわかりますが、それでもきっと見つけられると私は信じています。

今だって、噂を元に割り出せたのですからこれから情報を更に集めれば大丈夫です。

鳳統「雅也さん……元気だと良いなぁ」

諸葛亮「雛里ちゃんは雅也さんが大好きだもんね。勉強だって、雅也さんの力に成りたいから頑張ってたみたいだし」

鳳統「あわわっ……！しゅ、朱里ちゃんだって雅也さんの期待に応えないとって言ってたよね？」

諸葛亮「はわわっ……！そ、それは水鏡先生と雅也さんが期待してるって言ってたからだよ」

い、一応成長した私を誉めて欲しいなぁ。と思ってたのは秘密だけど……。

たまに、雅也さんの話になるとこんな会話をしたりします。

雅也さんは、水鏡塾の中でただ1人の男性でした。だからと言うべきでしょうか、人気も高く旅立った後にすすり泣く人も多かったです。

雛里ちゃんは、そんな雅也さんが大好きな女の子の1人です。私も実は少しだけ気になっていたんですが、それよりも雛里ちゃんの応援の方が大事だと思っています。

鳳統「早く会えると良いなぁ」

諸葛亮「そうだね♪」

雛里ちゃんの溜め息は、凄く重くて恋する女の子のそれだと思います。

私はそんな雛里ちゃんを応援しています。だって、恥ずかしがり

屋で自信のなかった頃の雛里ちゃんを変えたのは、間違いなく雅也さんだから。

私達の旅はまだまだ続きますが、雅也さんと1日でも早く再会出来る事を祈っています。

早く再会して、私達の成長ぶりに驚いてください。

「そうそう、こんな噂を聞いたんだ。近くの谷の近くに黄巾党が集まっててそれを討伐するために義勇軍が――」

鳳統「しょの話っ！」

諸葛亮「詳しく聞かせてくだしゃいっ！！」

はわわっ、噛んじゃった……。

†間幕†諸葛亮。鳳統。旅中にて。（後書き）

合流前夜的な意味合いを持たせるためのお話でした。

鳳統ちゃんは完全に惚れてます。

孔明ちゃんは気になっている程度ですが……。

趙幻。思案。奮闘記。（前書き）

雅也くん奮闘記。

たまに怒るのもまた、友情だと思います。

※誤字修正しました。

趙幻。思案。奮闘記。

さて、公孫賛殿の城を経ってからしばらく。俺達は様々な邑や町を回り、黄巾党の情報を得つつ討伐を繰り返す日々を送っていた。

黄巾党も勢いに乗っているのか、戦いも激化し始めている。

最初は相手の数も俺達と同等か少ないくらいだった。だが、最近は俺達より多い集団が増え始めている。

戦術を説き、工夫はしているがそれでも兵士から必ず犠牲は出る。数を補強するも再び調練するとなると、時間が掛かりすぐには使えない。

黄巾党からこちらに下る奴らも少なくないが、ただ数が増えれば良いという問題ではないので選出にも時間を使う。

選出方法はいたって簡単だ。俺か愛紗のどっちかから放たれる気迫と殺気に堪え、動ける者を選ぶというもの。

これが意外にも効果的で、堪えられる者は大抵腕っ節に自信のある奴か本当に覚悟を持っている奴らが基本だった。

選出が終わったとしても、その後に待っているのはどの隊に入れるかと戦術の講義。これは俺が担当している。

とはいえ、時間と場所が限られているのもあり出来るのは簡単な陣形や基本的な戦い方を教えるくらいだ。

現在、人数は全体で５０００人といった所か。これが今俺達が内包できる兵士の限界でもある。

俺達には、兵站を運ぶ為の荷車も少なければ補給をしてくれる後ろ盾も拠点もない。故に、あまり兵を増やせば兵糧が直ぐに尽きてしまうのだ。

俺達は今、ある意味悪循環の中に居るのかもしれない。教え、戦い、亡くし、募兵し、食べ、教え、戦い……。この繰り返しでは、この先恐らく大打撃を受ける可能性があった。

問題は、戦死者数が戦の度に増え始めていることだ。このままではいずれ募兵が間に合わなくなり、全滅するかもしれない。

我が軍には、軍師と呼べる人材が居ないのだ。軍師の代わりに俺が作戦を立案する事もあるが、どうも他にもやるべき事が多くて手が回らない場所が必ず出て来る。

特に、情報収集が十二分に出来ていないのが一番辛く問題性の高い所だった。

例えば、相手の根城にしている場所が割り出せたとしても、周りの地形があやふやな時がある。

例えば、相手の数を把握しきれず、それでも戦わなければならない時がある。

例えば、相手の根城がわからないまま戦になり、援軍が来られた時がある。

何れも、今まで俺達に降りかかってきた戦の悪い一例だ。

そりゃあ、そんな事ばかりでなく情報より相手が少なかったり、直ぐに逃げ出してくれたり、地形利用が上手く行ったりと簡単に勝てたりする事もあった。

だが、良い例よりも最近は悪い例の方が顕著なのである。

更に言えば、最終的には力押しになる事が当たり前になり始めているのだ。

前の戦では――。

関羽『くそっ……！後一歩、先に進めれば……！』

趙幻『トランザム！！』

関羽『趙幻殿が押し返したぞ！進めぇぇぇぇっ！！』

その前の戦では――。

張飛『弱ったのだ……。なかなか突き崩せないのだ』

趙幻『トランザム！！』

張飛『お兄ちゃんがやってくれたのだ！今が好機なのだ！！』

その前の前の戦では――。

劉備『みんな！頑張って！これからだよ！！』

趙幻『ト　ラ　ン　ザ　ム　！！』

劉備『今だよ！雅也くんに続いて！！』

……。

思い出してみれば、俺が原因を作っているとしか思えなくて自己嫌悪になりそうだった。

いや、まあね。言い訳するなら、兵の損失を抑えるために俺が先頭に立って突き崩すしか方法がなかったんだよ。

そりゃあ俺だって戦略を練って、伏兵を仕込んだり奇襲作戦を企てたり、なるべくなるべくと色々な策を講じて来たさ。

でもな。現状、必ずどこかで穴が開くんだよ。情報が不足してたり、兵の練度が低かったり、最悪愛紗や鈴々が突っ走ることだってある。俺だって先行する事もたまにはある。

ただ、この現実を打破するには時間も場所も金もないのだ。だからこそ、戦略や戦術を専門とした軍師が喉から手が出るくらい欲しい。

軍師さえ居れば、俺や愛紗や鈴々、桃香の役割分担が更に割けるのだ。俺は情報収集に力を入れられる。愛紗と鈴々は兵の調練にもっと力を入れられる。桃香は……まあ、追々考えるとしてだ。

兎に角、俺は軍師が今一番欲しい人材だった。

……にしても、軍師か。朱里殿と雛里殿はどうしているのかな。

あの2人が今居れば、俺は確実に助かるのだがな。

◇

関羽「くっ……！馬鹿みたいに突っ込んで来る！鈴々！二手に分かれるぞ！」

張飛「あい！」

趙幻「待て！今2人が分かれたら……！！」

関羽「両側から挟み込む！！」

ああくそっ！人の話を聞け馬鹿やろう！！

そう思いながら、俺は兵の指揮を取る。

俺達は今、黄巾党との戦の真っ最中だ。敵は事前に収集した情報通りの数だったのだが、どうも馬鹿正直に突っ込んで来るので愛紗はそれで行けると判断したようだ。

鈴々もまたそれに応じ、2人は両側に回り込もうと敵を倒しながら駆ける。

相手は確かに烏合の集であり、戦略も戦術もへったくれもなく突き進んで来る馬鹿だが、それでも数だけは俺達より多い。

その中で主力の2人が挟み込む為に分かれたら……。

「「「「「オォォォォォォォォォッ」」」」」

趙幻「隊列を整えろ！なるべく陣を突破させるな！弓隊は後退しながら斉射！槍隊は前に出て敵を受け止めろ！！歩兵隊は槍隊が押さえている間に押し返せ！！騎馬隊は私に続けぇっ！！」

無論、２人を突破して来た敵は本陣を目指して来る為、俺が受ける事になる。

出すべき指示を出した後、俺は舌打ちをしながら前から向かってくる黄色い波に向かって突撃する。

趙幻「っのやろう！！！」

翅麒に跨り、騎馬隊を連れて俺はまず相対した賊を斬り伏せた。

俺に続き、騎馬隊が波の中へと入って行くがやはり時間稼ぎにも辛く、徐々に押されて行く。

弓隊の援護も最早焼け石に水。この様子だと槍隊と歩兵隊が突破されるのは時間の問題だろう。

趙幻「くそっ！またこのパターンか……！」

戦場を駆けながら1人悪態を吐き、精神を集中させる。

限界まで研ぎ澄ました精神はやがて水面となり、落ちる水の一滴を見切ると俺の中で気が荒れ狂いながら全身に行き渡った。

趙幻「トランザム！！」

明鏡止水、この状態になれば俺を止められる奴は黄巾党にはいない。

翅麒も俺の状態を察したのか嘶き、応えてくれる。

戦場を敵を斬り捨てながら駆け回り、敵を混乱させながら俺は後退した。

直後、挟撃に入った2人が一気に賊将の頸を討ち取り、戦に終わりを告げた。

◇

戦が終わり、被害や成果、下って来た者の報告がひと段落着く頃には既に夜になっていた。

防柵や天幕を張り、今夜は野営する事は戦が終わった後に決めてある。

俺は愛紗、鈴々、桃香を落ち着いたら天幕に来る様に伝えていた。

劉備「ごめんね～っ！ちょっと手間取っ……」

関羽「……」

張飛「……」

劉備「雅也くん、この状況はどうしたの……？」

愛紗、鈴々と順に俺の天幕に来ていて最後に来たのは桃香だった。

ちなみに、桃香が驚いている訳を説明すると簡単だ。愛紗と鈴々は互いに向き合う形で正座していて、俺が両腕を組ながら奥に座っていたからだ。

趙幻「桃香、よく来てくれた。寛いでくれ」

劉備「う、うん……」

俺の促しにぎこちなく向かい側に桃香は座る。

ちなみに、今更だが共に旅をしているというのもあり3人に殿を付けなくなる位俺達は仲良くなっている。

趙幻「さて、先の戦いだが……。愛紗、何故二手に分かれた」

関羽「それは、相手を効率的に叩ける手段と思ったからで」

趙幻「それはだな、敵が私達よりも少なかった場合の手段だ！主力の2人が中央を開ければあぶれた敵が向かって来るに決まっているだろ！」

関羽「だが」

趙幻「言い訳無用！！」

俺の雷が落ちて、珍しく愛紗の表情が怯む。恐らくだが、今の俺の顔は般若になっていることだろう。

度重なる力押しによる勝利。手段は嫌いではないが、決して良い

勝利とは言えないのが現状だ。だから、今日。俺の堪忍袋の緒が切れたわけだが。

趙幻「鈴々。お前もお前だ。確かにお前の武は愛紗に並び強い」

張飛「そうなのだ！鈴々は強いのだ！」

趙幻「だがそれで突っ走るのはダメだ！前に出過ぎて何回危ない目に会ったか覚えているか！？」

張飛「それは……うにゅぅ……」

俺の問いに、小さくなって顔を下に向ける鈴々。

一方で桃香を見やれば、オロオロと2人を見てはどう声を掛ければ良いか戸惑っている様子だった。

趙幻「そして桃香！」

劉備「はいっ！」

趙幻「あなたは我らの主だ。優しく声を掛けてくれるのは嬉しいが、それだけでは主は務まらん！たまには2人を叱咤するぐらいしてくれ」

劉備「が、頑張ります……」

俺の言葉に桃香はシュン、と身を縮こませてうなだれる。

全く……と言ってこのまま続けて説教をしたいが、生憎俺はその

説教が本当は嫌いだ。
だが、言わなければ成らなくなってしまった今の方が問題でもあるが故に、雷を落としてしまっている。
趙幻「はぁ……。私は説教するのは嫌いなんだがな。現状、そうも言ってられないが故にさせてもらったわけだ。わかるか？」
3人「「「はい……」」」
趙幻「ならよろしい。2人とも、正座を解いていいぞ」
そう言い渡すと、鈴々は即刻胡座を掻いて辛そうにしていたが、愛紗は解く気配がなかった。
愛紗のことだ。どうせ責任を感じて自分を戒める為に続けているのだろうと考えるに容易い。
はぁ。生真面目で良い奴なんだがなぁ。本当なら彼女に説教してもらう方が似合っているわけなんだが。
趙幻「さて、ここにあるのは先の戦いで手には入った少しばかり値が張る酒なんだが」
張飛「鈴々も飲みたいのだーっ！」
趙幻「というわけで飲むぞ。愛紗、先のことはわかっているならば何も言わん。だから正座を解け」
背中に隠していた酒の入った壷を取り出し、颯爽と立ち上がった

鈴々を横目に愛紗に言えば、本当に渋々といった様子で正座を解いてくれた。

関羽「雅也には勝てないな」

趙幻「なにを異なことを仰る」

劉備「そういう所は本当に、星さんそっくりだよね」

……いや、姉者はわかっていながらからかう所があるから、桃香の言う事は間違っていると思うがな。

趙幻「いやまあ、姉者とは幼少の頃ずっと一緒だったからな。自然と影響を受けているとは思うぞ？」

関羽「それが故意か天然かで対応が変わるのだがな……」

愛紗が何を言っているのか雅也全然わかんなーい。俺気持ち悪い。

何で桃香が苦笑してるのかも俺はわからなかった。

張飛「お兄ちゃーん。早くお酒～」

趙幻「はいはい。杯配るから少し待て」

そんな2人をよそにさっきの小さくなっていた様子はどこ吹く風やら、鈴々は俺の用意した酒が飲みたくて仕方ないようだ。

そこは少しは反省していてくれよと思ったが、しんみりどんよりとした空気は鈴々に似合わないと思い考えるのを止めた。

酒を取り出した理由だって、説教だけだと後腐れがあると思ったからだ。

愛紗は理解して反省してくれた様だし、桃香もこのままだといけないと薄々感づいている様子だし、鈴々だって今はああだがちゃんと考えてくれることだろう。

いや、3人にしろ俺にしろまだまだ未熟者なのだし、何時立場が変わるかもわからない。

とりあえず、今日は俺が雷を落とした。なら明日はもしかすると愛紗が雷を落とす可能性だってある。

まあ、言いたいことはとどのつまりみんなで支え合いながら成長しよう、という事なのだが。

趙幻「よし、では戦の勝利を祝して乾杯といこう。桃香、音頭を頼む」

劉備「えっ？う、うん！それじゃあ、みんな。かんぱーい！」

3人「「「かんぱーい！！！」」」

こうやって4人で絆を深めていけば、自ずと強く大きくなれると思えて、敢えて口にしなかった。

超幻。思案。奮闘記。（後書き）

というわけで、色々と甘い気がしますが私にゃあ精一杯でした。

まだ雅也くんの武器名アンケートはしています故、協力をお願い致します。

戦乱。軍師。再会にて。（前編）（前書き）

初めて前編後編と分けることに。

黄巾党との開戦はまだです。そして、孔明ちゃんと鳳統ちゃんの出番も。

戦乱。軍師。再会にて。（前編）

あれから数日、俺の説教が効いてくれたのか戦いの中でも愛紗は冷静に、鈴々は戦況を確認しながら慎重になる様になっていた。

勿論、ここぞという時の突撃はしっかりしてくれているし、各々の得意とする戦い方に持って行く戦術は目を見張るものがある。

だが、仕方ないことと言ってしまえばそこまでだが、やはり叩けば叩くほど埃は出て来るものだ。

判断をミスする事もある。状況を把握仕切れない場合もある。俺も人の事をとやかく言える程ではないが……。

だが、その穴埋めを2人はしてくれるし、俺もする。基本後続で本陣にいる桃香も客観的な意見の下に叱咤激励する様になってきた。

結果、力押しによる勝利よりも、堅実で確実な勝利を得る事の方が多くなってきたのである。

戦死者数も着実に減り始め、代わりに戦果を上げ少しばかり有名になり始めた頃。俺は行軍中に立ち寄った町である噂を耳にした。

「そういえば、最近大規模な黄巾党の集団がこっちに向かっているらしくてね。私もそろそろ逃げ出す準備をしなくちゃねぇ」

商人から聞いた話では、普段よりも大掛かりな人数らしい。

気になったので更に情報をかき集めてみると、ちょっとばかり意

外な事に気が付いた。

趙幻（基本的にある場所を中心にしているな）

幽州には、平原よりも山や森林が多くその周りに邑や町が形成されるのは珍しくはない。

１人、部屋に戻った俺は商人から買い取った地図を眺め、筆を持ちながら色々な可能性を考えていた。

ひとつ。連中は山の中に大規模な根城を構え、拠点にしている。

ひとつ。規模が大きいのはそこに張角の様な重要人物がいるから。

ひとつ。もしくはそこが補給拠点になっていて、近隣の邑や町から奪った食糧や武器を貯蔵してあるから。

情報を元に思い浮かぶ限りを見れば、可能性として高いのはこの３つだと絞り込む。

だが、問題はある。もし仮に本拠地か補給拠点だった場合による兵数の規模だ。

重要人物がいる、補給拠点であるのに高々数千の兵で守りを固める筈もなく、移動して来ている敵が仮にその一端だとすれば、全体を想像すると数は確実に万を超えるだろう。

桃香が率いる我等義勇軍の兵は多く見積もって６０００人。戦闘でまともに動かせるとなればもう少し減ってしまう。

仮にだが、敵が出て行った後を狙ったとしても籠城されればそこまでだ。功城戦となれば、敵の3倍はこちらの数がいなければ無謀というのが世の道理。

その道理、私の無茶でこじ開けると言いたい所だが無理なものは無理。相手は援軍を期待出来るわけだし、数で圧倒されるのが関の山だ。

……とりあえず、斥候を放って様子を見るとしよう。

こちらに黄巾党が向かって来ているのは事実。出来るだけ数を把握しなければならない。

趙幻「誰かある！」

「はっ！ここにっ！」

趙幻「斥候を放ちたい。劉備様と関羽達を呼んで来てくれ」

「了解致しましたっ！」

さて、軽く軍議とするか。これで鬼が出るか蛇が出るか。どちらにせよ、次の戦いは厳しくなりそうだ。

◇

趙幻「というわけだが、異論はあるか？」

あれから半刻もしない内に、桃香達は集まってくれたので即刻軍議を開始し、俺は集めた情報や彼女達が聞いた噂を統計し、思い浮

かべた軍略を説明した。

愛紗は顎に手を当てながら考え、桃香は首を傾げながらも必死に理解しようとしていて、鈴々に至っては考えるのを止めている。

ちなみに、斥候は既に放ってある。これに関しては敵がこちらに向かって来ているのもあり、見逃せないという結論で満場一致したからだ。

関羽「しかし、問題は相手をうまく誘導出来るか、だな」

趙幻「そこは愛紗達の腕の見せどころだな。俺は今回は後方に回るし」

張飛「はにゃ？お兄ちゃんなんで前に出ないのだ？」

鈴々の疑問は最もだが、それを説明するは簡単な事だ。

趙幻「前の戦で見ただろ？私の武器が壊れたのを」

劉備「びっくりしたよねぇ。まさか、いきなりボロッと崩れちゃうなんて」

桃香の言う通り、俺の武器である双直刀は壊れてしまっているのだ。しかも、ただ折れただけなら鍛冶屋頼んで鍛え直せば治るのだが、刃自体が根元から崩れ落ちてしまったのである。

それは見事なくらい、ボロボロと。

まあ、5年以上も付き合っていた武器だし、色々と無茶をさせて

いたのは事実だ。だが、治せないくらい壊れるとは想定外だった。

趙幻「幸いにして、私には弓の心得もあるからな。それでしばらくは凌ぐさ」

新しく直刀を2本買うにも、直刀というのはなかなか珍しいらしく、売っていなかったのが恨まれる。

打ってもらうにも金がかさむわけだし、今はとりあえず弓でなんとかするしかなかった。

ちなみに、何故弓が使えるかという理由だが、あの母上が教えてくれたおかげでもある。もしもの時に覚えておいて良い、と言われて練習をしたわけだが、そのもしもが今となればなかなか有り難く思えた。

芸は身を助ける。身につけておいて損はなかったということか。

関羽「それは初耳だ」

張飛「鈴々も初めて聞いたのだー」

劉備「雅也くんって、もしかして何でも出来るんじゃないかな」

何でも出来る、という発言は否定させて頂く。

趙幻「私は何でも出来るわけじゃない。ただ、身につけているだけだ」

俺に出来ないことだって沢山ある。愛紗や鈴々の様に長物を上手

く扱うことは出来ないし、桃香の様に沢山の人に慕われ、癒やすことは出来ないのだ。

人には必ず得意不得意が存在する。ただ、自慢ではないが俺の場合不得意の幅が狭いだけなのだろう。

関羽「それはそれで凄いと思うのだがな……」

劉備「そうだよね……」

2人から訝しげな視線を食らった。まあ、こと武芸に関して言えばかなり無理をしたし、あの母上に教えられて育ったのだ。案外慣れれば身に付くものだよ。

趙幻「とりあえず、相手の進軍速度と兵数がわかり次第出よう。なるべく、ここで開戦したいからな」

与太話はお終いにして、俺はそう言うと筆である場所に円を描く。

そこは開けた平原なのだが、その北には崖に挟まれた道が存在するのだ。

今回は、なるべく敵を引き付けつつ全軍をこの道に後退させ、挟撃や背後からの奇襲を防ぎつつ誘い込み撃破するのが目的。

相手は予想だとこちらを上回る数を有している。ならば、それを逆手に取れる地形に誘うのが策というもの。

……上手く行けばいいがな。

そう思いながら、俺は軍議の終了を口にした。

◇

あれからまた日にちが経ち、俺達は開戦予定の場所に向かって行軍していた。

斥候によれば敵の数は我々の倍近く。騎馬の数が少ないのは幸いと言いたいが、それでも相手側に数の利があるのは明白。

今更ながら、俺の中には沸々と湧き上がる不安があった。本当に大丈夫なのか？本当に成功するのか？不安は決して口には出さないが、それでも思わずにいられなかった。

今回は、愛紗と鈴々の2人には前衛部隊の指揮を全任してある。今の彼女達ならなんら問題ない筈だと考えたからだ。

それと同時に、前に出られない己が不幸を呪った。

別に、他の武器で前に出れば良いじゃないかと思うかもしれないが、実はそうもいかない理由もある。

感覚が狂うのだ。俺は確かに、曲刀や青竜刀を扱えないわけじゃない。だが、切れ味や間合い、感触が違えばやり難さが出て来るのだ。

その点、弓ならば構造から違うわけだし、個人的に槍よりも慣れている。

槍は姉者が使っているから、という理由であまり深くは触れなか

ったのが起因であるが……。

まあ、そんなことは良い。兎に角、そんなこんなで俺は後衛部隊の指揮を取る。

一度、行軍するまでに自分の弓の腕を試したが、若干精度と射程は落ちているものの使えない程ではなかった。

「伝令！約十五里先に敵を発見、関羽様から戦の準備をとのことです！！」

趙幻「あいわかった。こちらも臨戦態勢に入ろう。関羽にもそう伝えておいてくれ」

目的地に着いた頃、前にいる愛紗から伝令が来たのでこちらも動くと伝えて返す。

兵士はそれに了解の意を示すと馬を反転させ、前へと戻っていった。

ふむ。こちらが予定よりも先に着いたか、相手の行軍速度が情報より遅かったのかわからないが、とりあえず良かった。

時間があるなら陣形を整えられるし、何より今の内に確認出来る事もある。

俺は後衛部隊の副長に少し前に出て来ると言い渡し、翅麒を走らせた。

†関羽ｓｉｄｅ†

敵の姿が見えたのは、目的地に着いてすぐだった。

開けた平原故に見通しが良いからか、距離はだいぶあるがわかりやすい黄色い波がこちらへ向かって来ている。

北を見れば、２つの崖に挟まれた狭い一本道があった。あれが雅也の言っていた場所だろう。

後曲の部隊には既に伝令を出し、雅也からの返事も返ってきていた。

関羽「さて、上手く行くかな」

張飛「お兄ちゃんの作戦なんだから絶対に上手く行くのだ！鈴々達はお兄ちゃんの作戦の為に頑張れば良いのだ！」

私の懸念に対し、鈴々は朗らかな笑顔を浮かべて言い放つ。

たまに、鈴々の性格が羨ましい時がある。この子はいつも前向きで、天真爛漫な振る舞いに元気付けられた事が何度あったことか。

思えば、旅の途中桃香様の住んでいた邑で彼女と出会い、互いに武をぶつけ、讃え合った時から仲良くなった。

桃香様の思想に触れ、盗賊を退治し終わった後に再び旅に着くと仲間が３人に増えていた。

旅の途中、桃香様の夢の素晴らしさに感嘆し、鈴々に誘われたの

を機に私は本当の仲間になった。

そして、桃園で果たした姉妹の契りで私は心に強く刻んだものだ。桃香様を守り、鈴々と肩を並べ、夢を必ず果たそうと。

鈴々との付き合いも長くなったものだが、今でもあの時の情景は思い出せる。

関羽（ふっ……。何を私は思い出しているのだろうか。私達は前に進んでいるのだ。今はただ、前へと）

急にそんな事を思い出している自分がおかしくて、心の中で嘲笑する。

前方には黄色の人波。数は私達の倍近く。だが、止まらない。私達は、止められない。

趙幻「愛紗」

そんな中で、後曲に居るはずの雅也が私に声を掛けて来た。

背には大量の矢が入った筒と、何の変哲もない弓を抱えている。

そして、彼を背負う赤茶けた立派な毛並みと漆黒の鬣と尾を持つ豪馬、翅麒が嘶いた。

関羽「雅也、どうした？」

張飛「お兄ちゃん、どうしたのだ？」

私と同じタイミングで、首を傾げた鈴々が雅也に尋ねる。

趙幻「いや、何。敵との距離と数を確認しておきたくてな」

そう答えた雅也は、額に開いた掌を水平にしながら当てて、目をしかめる。

その後ふむ、と呟けば突然ニヤリと笑みを浮かべた。

関羽「雅也、何かおかしなことを考えているだろ」

趙幻「な！？何故わかったんだ愛紗」

張飛「悪戯を思い付いた星と同じ顔をしてたのだ～」

私の言った事に雅也は驚き、鈴々にまで言われて、おかしな顔を浮かべる。

雅也は天然で星に似ている所がある。のらりくらりと相手を自分の調子に合わさせたり、乗せたり、おかしな事を思い付いた時の笑みだったり。戦場で見せる凛々しさだったり、民を思う考えだったり。

やはり、姉弟なんだなと思う所が多い。普段は正反対なのだが、共通する所や根本が似ているのだ。

関羽「それで、何を思い付いたんだ？」

趙幻「ああ。挑発だよ。より私達の軍が討伐しに来た者。つまり敵だと強く印象付ける為のな」

戦乱。軍師。再会にて。（後編）（前書き）

いつの間にかＰＶが十万、ユニークが一万を越えてました。ありがとうございます。いや、本当に。

後編はめっさ長くなった……。

孔明ちゃん、鳳統ちゃん登場です。そしてついでにあの人達も……。

※修正しました。

戦乱。軍師。再会にて。（後編）

突然だが、挑発とは意外と高等な技術だったりする。バカだったり、余程の単細胞だったり、怒り狂っていたり、と相手が冷静でない場合は誘いに成功する事は多いだろう。

とはいえ、こちらが罠を張っているのをわかっていながらわざと乗ったり、挑発を逆手に取られる場合もあるわけだが。

冷静な相手や慎重で堅実的な輩を挑発に乗せる事は難しい。蔑み、卑下し、罵ったところで堪え忍んでしまうからだ。

逆に、バカや単細胞な輩程乗せやすい相手はいない。そういう奴程、基本的に簡単な言葉や態度という『餌』で釣れる。例外と言えば、その『猪』の手綱を握っている奴がいた場合だろうか。

さて、俺達の目の前に居る黄色い手拭いを頭に巻いた人波はどちらだろうか。

たった2人で隊列から駆け出した俺達を見て、ニヤニヤと下卑た笑いを浮かべている連中はどちらだろうか？

騎馬隊から借りた馬に愛紗が、嫌な物を見た様な表情を浮かべている。

趙幻「関羽よ。こいつらは数に物を言わせるしか能がない連中。いくらお前が女であっても、負ける筈がなかろう？」

その中で、俺が放った言葉は愛紗を含めて先頭に立っている連中

の表情を固めた。
愛紗は女と言われたことに。他は俺の態度と言葉が勘に障ったのだろう。
関羽「そ、そうだな……。この関羽、ただの有象無象に負けるなどありえん。趙幻、そういう貴様はどうだ？本来の武器も持たず、勝てるとでも？」
趙幻「無論だ。このような奴らに負けるなど、末代までの恥。それに我等は正義の義勇軍だ。悪に負ける道理もない」
眉をひそめ、苛立ちを隠しているのだろう愛紗の表情は固い。が、しっかりと話に合わせて来ているあたりさすがとしか言い様がない。
俺は鼻を鳴らしながらそれに返し、敵を横目に見て笑う。
苛立っているのは愛紗だけではない。寧ろ、爆発しようとしているのは敵方だ。
わざと先頭集団にだけしか聞こえない様にしつつ、囲まれないような距離で言っているわけだがこれがなかなか上手くいっている。
奴らが俺達を囲もうと動いた時が、戻る時。じりじりと動こうとしているが、まあまだ大丈夫だろう。
趙幻「さあ、それでは黄巾党の諸君はどうする？私達を見事打ち倒すか？それとも羽虫の如く蹴散らされるか？まあ、どちらにせよ数にしか頼れぬ連中か」

言葉の途中、前から矢が俺を狙い放たれる。だが、バレバレだ。
俺はそれを身を傾けて避けると、そろそろ潮時かと感じた。
趙幻「不意打ちとはますます外道と言うことか。ほら、来い。私達は――」
弓を構え、矢をつがえる。今の攻撃は気に入らん。不意打ちは、俺が一番嫌いなことだ。
趙幻「貴様等には負けん！！」
続けて叫んで放てば、矢は俺を攻撃した輩の額を貫いた。
それが引き金になり、奴らは咆哮を上げながら走り出す。
俺達も引き返す為に馬を走らせれば、併走する愛紗が口を開いた。
関羽「これで良かったのか？雅也」
趙幻「ああ。まだ奴らと兵とは距離がある。成功と言えば成功だ」
愛紗の気持ちはわからんでもない。後方の敵は、確実に俺達を殺そうと躍起になっている。
だが、それで良い。挑発して怒らせるのは俺の策の内だ。
趙幻「それと、すまなかった」
関羽「何がだ」

趙幻「愛紗を引き合いに出してしまったことだ。気に障っていた様だったからな」

そう言って謝れば、愛紗は目を丸くして驚く。

関羽「……確かに、あの時は苛立った。だが、それも計算に入れてあったのだろう？」

趙幻「ああ」

やや間があって、愛紗は馬の手綱を操りながら尋ねてきたので、肯定した。

すると、彼女はふっと微笑み、こちらに視線を送る。

関羽「気にしておらんよ。私は、雅也の策を信じている」

趙幻「……ありがとう」

てっきり怒られると思っていたものだから、愛紗の反応は予想外だった。

それと同時に信じていると言われ、心の奥が熱くなるのを感じ、礼を述べる。

信頼は成功に直結する要素の一つと言っても過言ではないと、俺は思っている。

どんな献策も、どんなに良い戦略を考えても、実行してくれる相手との信頼がなければ失敗する可能性があるからだ。

だから、愛紗の信頼は嬉しかった。だから、この戦に勝とうと改めて心に決めた。

趙幻「愛紗」

関羽「なんだ、雅也」

趙幻「敢えて言わせてもらう。死ぬなよ」

前を向きながらだから、愛紗の顔は見れなかった。だが、言った言葉は俺の本心。彼女はどう受け取ってくれたのかわからないが――。

関羽「承知した」

小さくも短く力強いその言葉に、偽りがないことだけはわかった。

◇

馬の足は、歩兵のそれより遥かに早い。追い掛けてくる敵とかなりの差を離しながら、俺達は布陣している本隊へと合流した。

改めて状況を確認すれば、思わず頬が緩まる。

まず、敵はバラバラになりながら此方へと向かって来ていた。

わざと先頭集団にのみ聞こえるよう挑発した理由はこれだ。

まず、前に居る集団が怒りに任せて俺達を追ってくる様に煽動す

る。そうすれば、芋づる式に後方も追ってくるだろうと考えていたが、ドンピシャだった。

敵も一応こちらを調べるために偵察くらいしてきている筈。なら、先頭集団がこちらに突撃しようとしているのを止めず、数に勝っているわけだから追わせると読んでいた。

バラバラになりながら、という理由は無断で先行した先頭集団に合わせられず他の奴らが遅れて走り出したからだろう。

元々陣形もへったくれもない連中だから、瓦解するのに難しくはない。

数の利は確かに恐ろしいが、バラバラな相手に対してと言えば冷静に対処すれば問題は生じない。

この結果が、挑発の成功を雄弁に語っていた。

「接敵！」

趙幻「よし。弓隊はしっかりと引き付けてから斉射する。後は合図があるまでひたすら矢を放て！仲間には当てるなよ！」

伝令の兵が前から伝えに来て、俺は指揮下にある部隊に指示を出す。

愛紗、鈴々。上手くやれよ……！

そう思っていると、前方から割れんばかりの雄叫びが聞こえ、部隊全体が動き始めた。

関羽「弓隊前へ！！」

黄巾党の先頭集団がかなり近くまで来たのだろう。愛紗の指示に弓隊は前へと動き、最前線へと出る。着けば全員が弓を構え、矢をつがえて力の限り絃を引く。

距離にして、約三里か。随分と走らせたから、黄巾党の連中の中には既に疲労を顔に出している奴もいた。

だが、決して足を止めないのは素晴らしい根性だな、と心の中で皮肉を漏らす。

そんなに怒ったか。それでこちらの思い通り走って来てくれたのだから、やはり馬鹿の集まりだと思う。

趙幻「ってーっ！！！」

丁度良い具合の距離に敵が差し掛かった所で、俺は合図と共に弓から矢を放った。

同時に放物線を描き、部隊から放たれた矢が雨の如く敵に降り注ぐ。

閑散した陣形でなく、密集した魚鱗の陣から放たれる矢は脅威だ。それは、集中豪雨と言い表せる程の密度を誇った暴力。

相手の数は多い。ならば、矢が当たる確率も上がる。

下手な鉄砲数打ちゃ当たるとはよく言ったものだ。この場合弓だ

が、つまりはそういうこと。

関羽「行くぞ鈴々！」

張飛「あいっ！」

弓隊を縫うように走り出したのは、愛紗達の率いる前衛部隊。騎馬、槍、剣、それぞれの武器を持った兵達が2人を先頭に雪崩れ込んで行く。

趙幻「弓隊は矢を放ちつつ後退！！前衛部隊の援護をするぞ！！」

「「「オォォォォォォォォォォォォォォッ！！！！！」」」

士気は上々、相手は数が多いという不安要素こそあれ、陣形はバラバラ。このまま行けば、もしかすると当初の予定にあった策を使わずして勝てる可能性まで出て来た。

とはいえ、確実に勝つにはまだ要素が足りない。故に、こちらとしてはまだ油断は出来ない。

今はただ、敵の数を減らすために矢を放ち続けるのみか。

そんな事を考えていると、残りの敵部隊が先頭集団に追い付いたらしく、敵の数はみるみるうちに膨れ上がっていく。

趙幻「やはり、一筋縄には行かないよな」

合流した敵は、同時に士気を上げ反撃に出て来た。数の利は覆しのない優劣だから仕方ないが、改めて戦うと眉をひそめたくなる。

趙幻「弱音を吐く暇があれば敵を倒せ、か」

弓隊を少しだけ前に出し、矢を放たせる。流れ矢が仲間に当たらない様、しっかりとタイミングと狙いを定めて。

趙幻「しっ！！」

絃を限界まで引き絞り矢を放てば、命中した敵の頭を飛ばす。

そんな作業の繰り返しをしていると、ある報が俺の耳に入って来た。

「伝令！伝令！！」

趙幻「どうした！」

「西南約二十里先に敵部隊を確認！数はおよそ５０００と思われます！！」

万が一に備え、偵察に出していた兵が黄巾党の部隊を発見したらしく、報告に来た伝令の顔は真っ青だった。

俺も想定外の出来事に歯軋りをして、弓を握る力が増す。

ここで援軍だと？いや、どちらかと言えば同じ場所を狙いに来た別動の集団か？

しかし、何れにせよマズい事には変わりない。敵の数が３倍になるとすると、それこそ手が付けられなくなる。

趙幻「誰かあるっ！」

「ここにっ！」

趙幻「今の話は聞いていたな？関羽達に伝えろ！」

呼んだ兵にそう言い渡すと、前線の中へと彼は消えて行く。

どうする？このままだと最悪全滅だ。それは絶対に避けなければならない。

早めに策を使うか？いや、まだだ。まだ機会ではない。もし使うとすれば、敵が合流する直前だ。それまで愛紗達に頑張ってもらうしかない。

敵の行軍速度がわからないからなんとも言えないが、二十里先ならばこちらまで遅くて半刻。それまで愛紗達はともかく、他の兵が保つかどうかが問題だ。

今は乱戦状態になっている。そして敵の方が数が多い。

状況は一変して最悪。考えたくない考えが脳裏を過ぎっていく。

趙幻（くそっ！何を弱気になっている！）

最悪の場合を想定するが、それはもしもの場合。まだ弱気になっていたら士気にも影響が出るし、何より自分が死に引っ張られてしまう。

堪えろ。堪えろ。堪えろ。今はまだ堪えろ。

嫌な汗が輪郭を伝う。握る手は汗ばみ、強く噛み締め過ぎたのか口から血が流れ出す。

劉備「雅也くん！」

趙幻「桃香！？前に出てきたら……」

聞き覚えのある声に振り向けば、そこには我らの主がまた見知った顔を連れていた。

信じられない状況に、俺は思わず言葉を失う。

諸葛亮「雅也さん、お久しぶりです」

鳳統「お、お久しぶりでしゅ……雅也さん」

幻じゃないかと思った。それぐらい、信じられない光景だった。

1年前、荊州にある邑で世話になっていた水鏡塾の姉弟子の2人を桃香が連れて現れたのだ。

趙幻「朱里殿……雛里殿……？」

諸葛亮&鳳統「はいっ！」

俺の力の抜けた声に対し、2人は力強く返事をする。

幻じゃない。どういう経緯かは知らないが、2人は今ここにいる。

趙幻「すまない、2人共。いきなりで悪いが、力を貸してくれないか？」

諸葛亮「その為に、私たちは来たんです」

鳳統「喜んで、お力を貸します」

趙幻「すまない。ありがとう……」

2人の言葉に、俺は深く深く感謝して頭を下げる。

何の説明もしていないのに、2人は快く協力を了承してくれたのだ。最早、感無量だ。

劉備「それとね、町の人達が近くの邑の人達を連れて来てくれるんだって、雅也くん」

そして、桃香の語った言葉に俺は更なる驚きを覚える。

諸葛亮「はい。義勇軍の噂はかなり広まっていましたし、協力を申し出て頂ける方は意外と多かったです」

鳳統「わ、私たちはここで義勇軍が戦うのを聞いて、志願したい方を集めて一足先に来させてもらったんです」

広がっていた絶望の中に、希望が溢れ出すのを感じた。

俺は思わず2人に歩み寄り、地面に膝を着いて小さな姉弟子を両手を使って抱き締める。

趙幻「ありがとう、ありがとうっ……！さすがは私が尊敬する方々だ……！」

諸葛亮「はわわっ……！雅也しゃん！？」

鳳統「あわわっ……！恥ずかしいでしゅ……」

劉備「ま、雅也くん大胆だー」

しばらく歓喜と御礼の抱擁をした後、俺は立ち上がり瞳を瞑る。

もう、頭の中には最悪の場合は想定されていない。黒く塗りつぶされた絶望は希望に変わり、俺の中で力強く鼓動を始めている。

趙幻「良し。私は少しの間後ろへ下がる。朱里殿、雛里殿、桃香。軍議を開くぞ。弓隊は今まで通り矢を放ち続けろ。なるべく直ぐに戻る。何かあれば伝令を寄越せ。いいなっ！」

「「「「了解っ！！」」」」

兵達の放った声に満足感を感じ、俺は桃香達を連れて本陣へと下がって行く。

希望はまだ残っている。絶望にはまだ早い。ならば、勝ちへの方程式を組み上げる。俺達は、まだ終わっていないのだ。

◇

本陣に下がると直ぐに、俺は今の状況と作戦を2人に詳しく説明

した。

敵の数は今は倍近くであり、約５０００人の黄巾党が別にこちらへと向かって来ていて合流される可能性があること。

愛紗と鈴々が戦線を何とか保っているが、恐らく時間の問題であること。

本来は北にある崖に挟まれた道に誘い込み、撃破する予定だったこと。

それが終わった後、２人に援軍の数と所要時間を尋ねた。

諸葛亮「人数は約３０００人です。こちらに着くのは直ぐの予定ですから、その内に陣形を整えましょう」

鳳統「作戦は当初のままで大丈夫です。それに、あの場所なら更なる援軍も望めます」

更なる援軍。その言葉が引っ掛かり聞いてみたが、２人は答えてくれなかった。

疑問に思うが、この２人のことだ。何か考えがあっての事だと推察する。

とりあえず、３人には援軍の指揮を任せる事にして、敵の援軍が合流する直前に全軍をあの道へと移動させることで方針は決まった。

桃香は軍議に参加していたというよりも俺達の会話を聞いていただけ、という形になってしまったが、まあ仕方ないと思える。

劉備「あの2人、凄いんだね」

趙幻「私が智学で尊敬している姉弟子だ。当たり前だろう」

2人を誉められて嬉しく思いながら、少しだけ自慢気に桃香に言う。

劉備「雅也くんが尊敬するほど、かあ……」

そう呟いた桃香は、深い溜め息を吐いていた。

何やら色々と重く思えたが、彼女も思う所があるのだろうか。

趙幻「では、私は指揮に戻る。桃香、2人を頼む」

劉備「うんっ！私も頑張るから、雅也くんも頑張ってっ！」

桃香の笑顔に見送られながら、俺は一礼すると弓隊の下へと翌麒を走らせた。

それから直ぐ、朱里殿が言っていた通り援軍は到着した。鎧を纏っていない者も疎らには居るが、各々が武器を持って戦列に参加してくれる。

守るべき町の為に。守るべき邑の為に。守るべき家族の為に。守るべき何かの為に。

こちらの数が増えた事により、戦場は形勢を逆転してこちらの有利となったが、懸念していた敵の増援が現れた事により作戦が開始

される。

合図の銅鑼が戦場に鳴り響き、移動が開始された。

俺は弓隊に指示を出して離れ、翅麒を走らせて前衛部隊と個別に合流する。

殿を務めている愛紗達の援護をする為に。

趙幻「愛紗っ！！」

走る馬上で矢を放ち、敵を斬り伏せる愛紗の援護をする。

鈴々が吼え、蛇矛で数人を1度になぎ払い、愛紗は青龍堰月刀を用い持ち前の技術で更に数人を斬り伏せると、こちらへと飛び退いて来た。

無論、2人とも殺気と気迫を敵に向けたままである。

関羽「援護感謝する」

張飛「助かったのだー♪」

2人とも軽い傷を負ってはいるものの健在だった。心の中で安堵しながら、矢を放ち敵の命を刈り取る。

趙幻「大方の人数は谷の中へと移動を完了した。行くぞ、乗れ」

関羽「だ、大丈夫なのか？」

翅麒の事を心配しているのか、愛紗は渋っているが鈴々は了承して俺の前に座った。

大丈夫だと言いたげに嘶く翅麒に諦めたのか、愛紗も素早く俺の後ろに飛び乗ると、俺は近付いてくる敵に矢を放ってから走らせる。

趙幻「この翅麒をそんじょそこらの馬と同じと思ってもらっては困るっ！」

力強く嘶く翅麒。蛇矛を持った鈴々と青龍堰月刀を持った愛紗との3人乗りにも関わらず、翅麒は普段と変わらない速度で走り谷の中へと敵と距離を離しながら入って行った。

奥では本隊が既に布陣を終えており、先頭には桃香と朱里殿、雛里殿が立っている。

どうやら、俺達で最後の様だ。

劉備「愛紗ちゃんっ！鈴々ちゃんっ！雅也くんっ！」

関羽「桃香様っ！」

張飛「桃香お姉ちゃーん！」

劉備「無事で良かった……！」

ずっと前衛で戦っていた2人を心配していたのだろう。桃香は翅麒から降りた愛紗と鈴々を抱き締め、呟いた。

趙幻「朱里殿、雛里殿。首尾の方は？」

諸葛亮「万全です。敵もこちらの誘いに乗っていますから、後は撃破するだけです」

鳳統「機が来れば一気に叩けるでしょう。それまで、まだ堪えなければなりませんが……」

一方、此方は状況の整理をする。

水鏡先生に更に鍛えられたのだろう。今の2人は以前よりも頼もしく、そして軍師としての自信に溢れていた。

関羽「所で桃香様、その2人は誰ですか？雅也と知り合いのようですが……」

趙幻「愛紗、自己紹介は勝ってからだ。来るぞ」

愛紗の疑問は最もだが、今は目先の敵である。

狭い道を所狭しと埋め尽くす黄色の人波が此方へと徐々に徐々にと行軍して来ている。

まだ少し距離はあるが、それを見た愛紗と鈴々の表情が武将のソレへと変わった。

趙幻「桃香、朱里殿、雛里殿。3人は予定通り頼むぞ」

諸葛亮&鳳統「はいっ！」

劉備「任せて！って言っても私は多分見てるだけだと思うけど」

趙幻「そうでもないさ。桃香はどっしりと構えて、みんなを見守っててくれ。それだけで力になるから」

申し訳なさそうに頬をかく桃香に、俺は笑顔を浮かべて告げ、弓を構える。

桃香はそれに元気良く「うんっ！」と頷きながら答えると朱里殿達と一緒に後方へと向かって行った。

「趙幻様。此方を」

その後、兵士の1人が矢が大量に入ってある矢筒を持って来て差し出してくる。

気付けば、俺の今持っている矢筒には殆ど矢が入っていなかった。

趙幻「ありがとう。貴様も頑張ってくれ」

「はいっ！」

矢筒を受け取り、交換して礼と激励を言う。

珍しく女性兵の彼女は良い返事で返してくれて、自分の部隊へと戻って行った。

――弓、良し。絃、良し。矢、良し。

趙幻「翅麒、すまないがもう一踏ん張りだ。頼む」

最後に翅麒の顔を撫でつつそう言うと、翅麒は嘶き応えてくれる。

敵は既に眼前。もう少しで範囲に入る。

ここで今回の戦は決着をつけるだろう。ならば、その後は勝利の美酒に酔いしれよう。

そう思いつつ弓を構え直し、矢をつがえた時、頬に僅かなそよ風を感じた。

◇

†???side†

黄巾党の重要拠点がある。

その情報を耳にした私はその場所を目指している途中、黄巾党の集団と戦う軍勢を高台から見つけた。

あの場所は確か……。

「へぇ……。私達以外にもこの場所に目を付ける者がいたなんてね……」

距離が開いているせいか、はっきりとどこの軍勢かはわからない。

道中に見つけた獲物を追って来てみれば、意外と面白い者が居たものだ。

「何か面白いことでも？」

「いいえ、この地形を上手く利用する者がいると思ってね。もしかしたら……」

そこで彼の名前を出せば、後ろにいる我が軍の軍師の機嫌が悪くなるのがわかった。

そういえば、最近噂の義勇軍が黄巾党の討伐に出たと聞いていたし、もしかしたらもしかするかもしれないわね。

ふふふ、そう思うとより一層あの戦いに興味が湧く。あの時取り逃がした彼。私の国も前より強くなったし、もしあそこにいるのならまた勧誘しようかしら。

この魏の曹操、欲しいと思ったものは何が何でも手に入れる。趙幻、覚悟なさい。

曹操「秋蘭！」

夏候淵「はっ！」

曹操「伝令を出しなさい！」

夏候淵「はっ！」

さあ、上手く軍を勝利させられるか。お手並み拝見ね……。

◇

†趙幻ｓｉｄｅ†

狭い地形というのは、基本的に守りに適している。

ましてや、今の敵は前進しか知らない黄巾党。所狭しと埋め尽くす黄色の人波は、進むにしろ戻るにしろ渋滞を巻き起こしているに想像は容易い。

取り囲むにも狭く、矢を放つにも軌道が限られ、出て来る者は叩かれる。

敵からすれば、前進する度に仲間の死体ばかりが転がって不安を募らせている頃だろう。

――とはいえ、それだけでは詰めの一手とは言えない。

確かに囲まれる心配はないが、何しろ相手は数だけは多い。数が多いというのはそのまま優劣に直結する。

倒しても倒しても敵はいる。終わりが見えないのは精神的にも体力的にも辛い。なら、どうすれば良い？

だからこそ、詰めの一手を用意するのだ。

今はまだ堪える時。機が来れば、一気に叩けると雛里殿は言った。

俺が考えた策は既に全て彼女達に伝えてある。それをどう変えるか、加えるかは軍師である彼女達次第だ。

兵達も疲れを見せ始めている。愛紗と鈴々も汗だくだ。かくいう俺も、集中力が切れかけている。

張飛「愛紗～、雅也お兄ちゃ～ん。こんな狭い所じゃどっかんどっかんできないのだぁ……」

鈴々は存分に力が振るえなくて不満なようだ。顰めっ面で地団駄を踏んでいる。

元気だな、お前……。

関羽「そ、そうだな……」

一方で、愛紗は引きつった表情で鈴々に同意した後、溜め息を吐いていた。

趙幻「とりあえず前だけを見ていろ！出て来たら叩け！！今は堪えろ！！」

関羽「ああ。私は雅也を信じているぞ」

張飛「鈴々も、お兄ちゃんがそう言うなら堪えるのだ」

俺の指示に文句も言わず、色々と思うことがあるだろうに、２人の言葉に笑みをこぼす。

趙幻「なら、まだまだ堪えるぞっ！！」

関羽「応っ！」

張飛「あいっ！」

挫けてられない。そう思いながら叫ぶと、2人も応えてくれた。
俺は弓から矢を放ち、愛紗は青龍堰月刀で斬り伏せ、鈴々が蛇矛でなぎ払う。
出て来る者には死を与え、敵を威圧しドンドンと攻め倦ねさせる。
桃香達はまだ準備が終わっていないのだろうか。悠久にも感じられる時の中、ただただ敵を射殺し、斬り殺し、なぎ倒す。
趙幻「……？」
ふと、その時気付いた。そよ風が吹き始めている。
そしてそれはやがて、突風へと変身した。
思わず身を固めてしまうような風。これか、これのことか、雛里殿！
関羽「なっ、なんだっ！？」
張飛「にゃあっ！？」
後方から来る突然の突風に、愛紗と鈴々が戸惑いの声を上げる。
だが、この突風に驚いているのは味方だけではなかった。
「なんっ！があっ！！」
「うわっ！砂が！！」

「目が開けらんねえ！！」

突風に乗った砂埃が前方に居る黄巾党の視界を奪い、混乱を招いていた。

こちらにとってはまさに追い風。あちらにとっては向かい風だ。

諸葛亮「戦とは、力を用いてのぶつかり合い」

鳳統「されど勝利とは、策を用いての奪い合い」

諸葛亮&鳳統「勝ちを得るのは、一手先を読んだ者！！」

趙幻「神風とは、こういう事を言うのだろうな……！」

見上げれば、崖の上に隠れていた矢をつがえた弓隊と朱里殿と雛里殿が姿を現していた。

その狙う先は全て黄巾党。この風を待っていたのだろう。弓隊は虎視眈々と指示を待ち続けていたのだ。

諸葛亮「皆さん！お願いします！！」

朱里殿の指示に、矢が風に乗りながら勢い良く敵陣へと降り注ぐ。

突然の事と先の砂埃で対応出来ないのであう敵は、為す術もなく撃ち抜かれていった。

趙幻「今が好機！全軍！敵を捻り潰せぇぇぇぇぇぇっ！！！」

「「「オォォォォォォォォォォォォォッ！！！！」」」

このチャンス、逃す手はない。降り注ぐ矢が止むタイミングを狙い、俺は後方にいる歩兵部隊と愛紗達に向かって指示を叫んだ。

こちらの士気は最高潮。相手の士気はかなり落ちている。

好機に乗った俺達に敗北の二文字は既に無く、黄巾党はただただ蹂躙される様に屍を積み上げて行くのだった……。

◇

今回の戦闘、始まりは俺達の倍はいた。途中、予想外の事もあり敵は更に増え絶望を感じる事もあった。

だが、その埋め尽くしていた敵はもういない。見渡せば死体と折れた矢と俺達の軍勢だけだ。

打ち勝った。俺達は、勝った。

趙幻「勝ち鬨を上げよ！！この戦、我等の勝利である！！！」

「「「オォォォォォォォォォォォォッ！！！！！！！！！」」」

今までに無い興奮を孕んだ勝利の咆哮が、遥か空へと溶けていく。

この大勝、途中援軍を率いて来てくれた朱里殿と雛里殿の知謀、愛紗と鈴々の武力、桃香の思い、そしてここにいる1人1人の兵達の頑張りがあってこそのものだ。

喜び、より一層の歓喜が心を満たしていく。

崖を見上げれば、桃香と目が合い笑みを浮かべながら手を振ってくれた。

俺もそれに笑顔を浮かべながら手を振り返し、深く息を吐く。

関羽「やったな……」

趙幻「ああ。やったよ……」

いつの間にか隣に立っていた関羽が呟き、俺もそれに精魂尽き果てた声で言い、握手をした。

別に深い意味があるわけじゃない。ただ、互いを讃え合う。それだけの握手。

見れば、この場にいる者達は殆どがボロボロだった。

それ程、激烈な戦いだった。それでも勝った。それが、無性に嬉しかった。

張飛「大勝利なのだ〜！！」

鈴々は無垢な笑顔を浮かべ、蛇矛を掲げながらこちらへと走り寄って来る。

趙幻「よく頑張ったな。2人とも」

張飛「勝てたのは雅也お兄ちゃんの作戦のおかげなのだ！鈴々達は

それを信じたから頑張れたのだ！」

労いの言葉を言ったら、鈴々からそんな賛辞が送られて来て俺はフッ、と微笑みまた崖を見上げた。

その先には朱里殿と雛里殿が居て、心の中でありがとうと呟く。

趙幻（そして、よろしくな……）

続けてそう思い、後でキチンと面と向かって言い、何か買うか食べさせてやろうと心に決めた。

そんな中で、ふと転がっている黄巾党の死体の1人がのそのそと立ち上がり、逃げるように歩き出す。

張飛「あ……」

関羽「放っておこう。桃香様もきっと去るものは追うなと……」

「がぁっ！！？」

仰るだろう。愛紗がそう言葉を紡ごうとした時、突然どこからか矢が飛来して男の心臓を背中から貫いた。

関羽「と……桃香様！？」

趙幻「あれは……！」

矢が放たれた方を向けば、そこには数ヶ月前に世話になった人物の家臣がそこにいた。

弓を構え、その体勢が彼女が放ったものだと言うことを示している。

髪を顔の右側を隠す様に降ろし、凛として冷静な雰囲気がその整った顔立ちを際だたせ、蒼いチャイナ服のような服を着た女性。

趙幻（夏候淵殿！？何故……。ということは……！！）

彼女はある人物を心の底から敬愛し、尽くしている武将だ。その夏候淵殿が１人で行動しているなど、考え難い。

ならば、居るのか。あの人物が。

趙幻（曹孟徳が……！）

†劉備ｓｉｄｅ†

矢を放った綺麗な人は、何事もなかった様にその場から離れていく。

私達はそれを呆気に取られながらただ見ていることしか出来なくて、一言も口に出すことが出来なかった。

劉備「だ、誰……？」

やっと紡げた言葉はそれだった。

あんな綺麗な人、仲間の中に居た覚えがない。居たとしたら絶対覚えてる。それに、あの弓の腕も凄かった。

「邪魔するわよ？」

突然聞こえて来た声に振り向くと、綺麗な巻き髪を2つに結んだ凛とした女の子が腕を組ながら立っていた。

その後ろにはたくさんの兵士さんが居て、彼女がその集団を率いてるのが一目でわかる。

そして、兵士さんが支えている旗に書かれた文字は『魏』だった。

諸葛亮「あ、あの旗は……」

劉備「知り合いの人？」

隣にいる諸葛亮ちゃんが呟いた言葉に、思わず小声で尋ねてみる。

諸葛亮「いえ、でも軍旗の文字からしておそらく……魏の曹操！」

諸葛亮ちゃんの言った名前に、私は驚いた。

曹操さんって、雅也くんが言ってたあの？

曹操「自己紹介の必要はないわね」

透き通る様な威厳のある声に、私は固まる。

ううん、きっとみんなそう。せっかく今戦いが終わった後なのに、何で曹操さんがって思ってる。

そんな時、崖の下から愛紗ちゃんの声が聞こえて来た。

関羽「おぉぉぉぉぉぉっ！！」

崖を跳んで超えて来た愛紗ちゃんは、空中からあの弓を放った人に青龍堰月刀を振り上げた。

そして振り下ろすと誰かがその間に割って入って、愛紗ちゃんの攻撃を大きな剣で防ぐ。

強烈な音が、静かだった雰囲気の中で強く強く響いた。

割って入った人は、弓を放った人と良く似てて、弓の人は蒼、剣の人は紅い服を着ていた。

愛紗ちゃんは防御している剣を青龍堰月刀で振り抜いて弾き、また振り上げて攻撃しようとする。

曹操「静まれ！！！」

それを止めたのは、とてつもない気迫と声量で叫んだ曹操さんだった。

愛紗ちゃん達はそのまま少しの間固まった様に動きを止めて、辺りにまた静けさが戻る。

曹操「ふんっ……」

つまらなさそうに右手で髪を揺らし、曹操さんは私の方を向いた。

曹操「ここの指揮を執っているのは貴方？」

劉備「はい、私です。劉備と言います」

尋ねられて、自己紹介を含めた答えをする。

すると曹操さんは薄く笑って、また口を開いた。

曹操「そう……。なら答えなさい。この地の効果……知っていたの？」

劉備「え？えっと～」

新しい問い掛けに、なんて言えばいいのかわからなくて、私は戸惑いながら私の体に隠れている鳳統ちゃんを見る。

鳳統ちゃんは私の視線に気付いたみたいで、隠れながらだけど答えてくれた。

鳳統「風のことは知ってました……。この地域特有の現象で、1日に何度か……日が沈む頃には、必ずと言っていいほど起こります」

そ、そうだったんだ……。もしかして雅也くん、それを知ってこの場所を選んだのかな？そうだったら、やっぱり彼は凄い人なんだと思う。

鳳統「戦中に吹かないことは、まずありえないです……」

曹操「ふぅん……」

「そうだったのか」

鳳統ちゃんの説明が終わった後、曹操さんが何かを思案するように呟き、それに続いて誰かが納得するような声を出す。

趙幻「なるほど。それは知らなかった」

劉備「雅也くん！？」

曹操「いつの間に！？」

気付いたら、雅也くんが隣に立ってうんうんと頷いていた。

†趙幻ｓｉｄｅ†

愛紗がいきなり岩肌を蹴り上げ、跳び上がったのは驚いた。

その後、金属と金属がぶつかり合うけたたましい音が聞こえて、愛紗の攻撃を誰かが防いだんだと察する。

「静まれ！！！」

そしてその後聞こえた聞き覚えのある声と、凄まじい覇気。曹操殿のものだと直ぐにわかった。

趙幻（やっぱり居るか。しかし、不穏な空気だ。俺も向かうかな）

漂う緊張感に嫌な感じがして、俺も愛紗に倣い岩肌の小さな突起を跳び、崖を登る。

崖の上では桃香と曹操殿が何かを話し合っていて、雛里殿がこの地の特性を説明していた。

どうやらこの場所は1日に何回かあの突風が起こる場所らしく、知らなかった俺はただただ桃香の隣に立って頷く。

劉備「雅也くん！？」

曹操「いつの間に！？」

すると、2人が面を喰らいながら驚きの声を上げた。

おいおいちょっと待て。俺居たよ？雛里殿が説明を始めた時から。

軽くショックを受けながら、小さく溜め息を吐く。

趙幻「曹操殿。御無沙汰しております」

とりあえず、気を取り直してまずは彼女に礼をする。

曹操「趙幻、こんな所に居たのね。どう？姉とは会えたの？」

趙幻「はい。御陰様で無事再会を果たす事が叶いました」

それは良かったわね。続けて軽い笑顔を浮かべ、曹操殿はそう言った。

趙幻「それで、曹操殿は何故こちらに？」

曹操「貴方達が討伐した黄巾党。その中に私達が追っていた連中が

居たの。それで、その連中を打ち破った軍勢がどんな者達かが気になったのよ。まあ、そうね。事を構えるつもりはないから安心なさい」

気付かれていたか。忠告込みでほんの少しだけ殺気を混ぜてみたのだが、やはりそこは曹操殿。侮れなさは流石だ。

曹操「それでは趙幻。今度は私から何個か質問があるのだけれど」

趙幻「はい」

曹操「見たところ直刀ではなく、弓を持っているようだけど。どうしたの？」

趙幻「壊れてしまいましてね。私は弓も使えます故、此度は弓にて戦に加わりました」

素直に答えると彼女の反応は小さく、そう、というものだった。

いつの間にか曹操殿の後ろに戻っていた夏候淵殿が、関心したように頷いている。

曹操「ではもう1つ。この作戦の立案者はあなた？それとも後ろの者？」

趙幻「立案は私ですが、風による機転は彼女達によるものです」

これまた素直に答えれば、また反応は薄いものだった。

彼女の後ろにいる猫耳っぽいフードを被った女の子が、俺を色々

な感情の籠もった稀有な視線で見ている。表情を見る限り基本的に敵意と嫌悪なんだが……。はて、見覚えがある。

曹操「では最後の質問をするわ」

趙幻「はい」

曹操「私に降るつもりはない？」

「「「「！！？」」」」

曹操殿の最後の質問に、その場にいる全員が騒然とした。

おいおい、ちょっと待て。ここまで来て勧誘か？

趙幻「……私にはあなたに対する恩義があるます。ですがそれは、私に特が得られる物ですか？」

敢えて、迷いながらその質問に対し質問で投げ返す。

確かに、俺には忘れられない大恩が彼女にある。命を拾ってもらったという大恩が。

だが、それは桃香達にも感じている事だ。彼女達にも俺は命を救ってもらった。そして、仲間として何度も救ってもらい、守ってもらった。

期間で言えば桃香達だが、最初に救ってもらったのは曹操殿だ。天秤が揺れる。

曹操「特？ふふ、あなたがそんな事を尋ねるなんて」

「華琳様駄目です！あんな男か女がわからないような妖（あやかし）……」

曹操「黙りなさい桂花」

おいおい、妖判定かよ俺は。初めてだよんなこと言った奴……。

しかし、桂花……。思い出した、彼女が荀イクか。そうだ、だから俺に敵意やら何やら含めて飛ばして来てたのか。

曹操「部下がとんだ失礼をしたわ」

趙幻「いいや、慣れていますから……」

素直に曹操殿が謝ってくるが、まあ確かに慣れてるから良い。もう気にしない事にしてるから大丈夫。

曹操「話の続きだけれど、そうね。新しい剣、それも名刀を拵えるわ。それにそれなりの地位も与える。文武両道の貴方に相応しい地位をね」

名刀と地位、ねぇ。まあ、妥当だろう。待遇は破格だ。何せ彼女はあの『魏』の曹操。それだけ与えてもらったなら、将来を約束されたようなものだ。

曹操「それにね、趙幻。私は欲しいものは何が何でも手に入れる主義なの。貴方の力、我が覇道に欲しいのよ」

趙幻「……そこまでして欲しいのか？私を？」

曹操「ええ、欲しいわね。貴方が」

劉備「ま、雅也くん……」

真っ正面からの見つめ合い。ただジッと相手の瞳を捉え、俺達は沈黙する。

そこまで欲しいと、しかも美少女に言われるとは俺も男だ。やぶさかではない。

だが、後ろで心配している桃香がいる。愛紗がいる。朱里殿、雛里殿がいる。兵士達がいる。

ならば、答えは1つ。寧ろ、最初から出ていた。

趙幻「だが断る」

曹操「なっ……！」

趙幻「申し訳ござらん、曹操殿。私は仕えるべき主を見付けてしまった。故に、誘いは大変嬉しく思うが辞退させて頂く」

俺の返答を聞き、以前断った時と同様の反応を見せた曹操殿に頭を深く下げる。

そうだ、俺は想ってる。この仲間達を。その想いこそ俺の力であり、絆なのだ。それを裏切ることは、出来るわけがない。

夏候惇「趙幻、貴様っ！！」

曹操「止めなさい春蘭。わかったわ、趙幻。ただし、諦めないわよ？」

往生際が悪い。と言いたいが、曹操殿は自分を欲しいものは何が何でも手に入れる主義だと言った。

それが彼女の性分なのだろう。何とも男冥利に尽きることか。

曹操「帰るわよ、春蘭」

夏候惇「……御意」

そう言って、曹操殿は兵を下がらせていく。その中で愛紗を見ると、薄く笑った。

曹操「ああ、貴女。腕は確かなようだけど、詰めが甘いわね。どう？趙幻の代わりに私に降ればしつけてあげるわよ？」

関羽「なんだと！？」

曹操「ふふふ、せいぜい頑張りなさい……」

今度は愛紗を勧誘するか、貴女は。

曹操「まあ、討伐令は指をくわえてでも終わらせてあげるわ。私がね……」

最後に不敵に笑いそう言い残してから曹操殿は軍を率いて去っていく。

あの言葉は自信の顕れか。恐らくそうだろう。彼女ならやってしまうだろうな。

劉備「雅也くん……。良かった、良かったぁ……」

魏軍が完全に姿を消した後、桃香が涙声になりながら背中に抱き付いてくる。

ちょっ！まっ！とっ！！まっ！！（ちょっと待て桃香マズいって！！）

劉備「行っちゃうかと思ったよぉ……」

趙幻「はぁ……。桃香、大丈夫だ。私はあなたの仲間だ。仲間を置いて他に行くなどしない。それが私の矜持だ」

劉備「本当に？」

趙幻「本当だ」

そこまで言ったら、彼女は安心してくれたようで抱き付きから解放される。

ああ、もう、疲れた。今日は精神的にも体力的にもほんっとうに削られた。

諸葛亮「雅也さん」

鳳統「雅也しゃん……」

趙幻「そんな顔をするな。2人も仲間だ、安心してくれ」

まだ正式な決定が下っていない2人は心配そうに俺を見て来るが、そう伝えたら朗らかな笑顔を浮かべてくれた。

そういや、2人の紹介がまだだったな。

趙幻「桃香、改めて紹介する。勉学における私の姉弟子である諸葛亮殿と鳳統殿だ。知は確実に私以上と断言する。軍師として推挙したいのだが、よろしいかな？」

諸葛亮「お願いします！」

鳳統「お願いします……！」

俺の紹介の後、2人は深くお辞儀をして強くお願いする。

桃香を見れば笑顔であり、愛紗と言えば仕方なさそうな表情を浮かべていた。

劉備「うん、わかった。じゃあ2人共、真名を教えてくれないかな」

その問い掛けは、承認するという事だろう。2人は目を丸くさせながら互いに顔を見合わせ、その後俺を見る。

笑顔で返せば、2人の表情は華やかに彩られた。

諸葛亮「【朱里】と言います！よろしくお願いしましゅ！」

鳳統「【雛里】と言います。お願いしゃま……」

２人揃って噛んではわあわしていた。

はて、誰か忘れているような……。

張飛「ね～～～っ！上で何を話しているのだ～！鈴々だけのけ者は嫌なのだ～！」

崖の下を覗けば、蛇矛を両手で掲げて拗ねた表情の鈴々が叫んでいた。

俺達は１度顔を見合わせて、苦笑した後彼女を迎えに行くことにした。

戦乱。軍師。再会にて。（後編）（後書き）

色々と甘いし酷いのは自覚しております。が、どうかご容赦をｏｒｚ

今回で黄巾党討伐編は終了です。
次話から反董卓連合編に入ります。

アンケートはまだ募集中です。ご協力をお願いします。

拠点。平穏。武器入手。（前書き）

拠点フェイズ的な話その1。

武器入手回です。

拠点。平穏。武器入手。

朱里、雛里、魏の面々との再会からしばらく。俺達は勢力を拡大させながら討伐を繰り返し、根城を手に入れさぁこれからという時。

黄巾党の頭が落とされたという報が、俺達の元へと届いた。

討伐に成功したのは曹操殿だ。あの言葉通りになってしまったな、と思いつつ、悔しさを感じたのは記憶に新しい。

さて、黄巾党討伐令が果たされ、世界は平和になったかと言えばそうではない。

賊というのはどこにでも現れるし、今の俺達は討伐の際に打ち立てた功績が王朝に認められ、この根城を中心に尉官として民の為に政務を行っている。

まあ、功績を認めっていうのは建て前だろう。漢王朝に仕えていない力のある奴に首輪を付けたかった、ってのが本音だと思う。

建て前は褒賞、実のところ牽制。一応、田舎地方にある城と町を根城に構えていたってのも、向こうからすればここに留まらせるに都合がよかったみたいだ。

下手に王朝の政に手を出させないよう、漢王朝の中心である洛陽から離させたかったのだろう。

とまあ、愚痴紛いの事を言っていても仕方ないので、俺達はこの場所を中心に活動し続けている。

黄巾党の残党討伐による遠征や、検知に治水、制度決めなど書面関係の色々とやることが多くて忙しい毎日だ。

この前は、警邏の体制改善とか犯罪者の服役後どうするか、とか決めたりした。

幼少の頃に読んだ父上の書物や水鏡先生から学んだことが大いに役立っている辺り、やはり知恵はつけておいて損はないと実感している。

……しかし、今更だが父上は何故政に関わる書物や兵法書を大量に持っていたのだろうか。今更だが疑問だ。

とはいえ、その疑問は父上本人に尋ねなければ解決しないだろうし、今は居ない人物への疑問よりも目の前の書類。

朱里や雛里と連携してまだまだ色々と決めたりしなければならないし、やらなければならない事も多いのだ。

そして、ある日。ようやく政策が軌道に乗り始め、安定して来た頃。俺は久々の休日に心を浮つかせていた昼下がりにそれは起こった。

趙幻「は？」

諸葛亮「ですから、雛里ちゃんと一緒にお出掛けして欲しいんです」

日課の筋トレや料理を済ませ、自室でお茶を飲んでいた時、突然朱里が押し掛けて来て放った言葉に俺はあっけらかんとしていた。

朱里は言った。雛里をデートに誘えと。

趙幻「いや、それは構わないんだが……。何故雛里と？」

諸葛亮「雅也さんは、雛里ちゃんの性格はよく知っていますよね？」

趙幻「ああ」

人見知りで、恥ずかしがり屋で、大人しくて、それでいて人一倍努力家。俺の中にある雛里のイメージはこうである。

ちなみに、朱里と雛里とは正式に仲間になった事もあり呼び捨てにする事になった。何でも、桃香や愛紗を呼び捨てしているのに自分達には殿付けされるのはおかしいとのこと。

それもそうかと思い、あの日からそうしている。

つか、今まで年上だと思っていたんだが年下らしい。ただの俺の思い込みだったのだが、それを知った時とても恥ずかしかった。

諸葛亮「雛里ちゃん、久々の休みなのに政務の続きをしようとしてるんです。確かに仕事をしてくれるのは嬉しいのですが、せっかくの休日ですから……」

趙幻「それで、同じ休日の私に白羽の矢が立ったと」

諸葛亮「はい」

確かに、雛里の性格を鑑みるとまだ終わっていない書類とかをや

っていそうだ。

彼女は基本的に、真面目も真面目。大真面目で努力家なのである。

朱里の心配もわかる。最近はろくに休日もなかったのだ。それこそ寝る間も惜しんで書類を片付けることもある位に。

せっかくの休日、俺も暇を持て余しているし、雛里にも体を休めて貰いたい。町に行くのも良いだろう。行きたい場所もあるしな。

趙幻「あいわかった。姉弟子の頼みだ、聞かないわけにはいかないしな」

諸葛亮「ありがとうございます。雛里ちゃんは多分自室に居ると思いますから、よろしくお願いしますね♪」

了承すれば朱里は礼を述べた後笑顔を浮かべ、俺の部屋を後にする。

そう言えば、あの日の礼も出来てないしな。良い機会かもしれない。

そう思いながら俺は腰をあげ、財布の中身を確認した後雛里の部屋へと向かうのだった。

◇

懐が潤うのは、なかなかどうして、今の俺には道理だった。

娯楽がないのが一番の原因であり、使い道と言えば智学の為に本

を買う程度である。

いや、後は酒だな。酒が一番金を食うのだが、それでも給金は無くなることもなく、今まで貯金していた金と合わせれば結構良いものも余裕で買えるくらいだ。

つーわけで、雛里をデートに誘えば即座に了承され、書類の処理を手伝ってから町に繰り出したわけだが。意外と人が多いなぁ……。

趙幻「雛里、大丈夫か？」

鳳統「あわわっ……。は、ひゃい……大丈夫でしゅ」

噛んでる噛んでる。

活気があるのは良いが、見た目ロリな雛里が心配になる。混み合っているとまでは言えない、それでも大勢いるのだ。

雛里と離れないように歩幅を合わせて歩いているが、いつはぐれるかわかったものではない。

しょうがない。

鳳統「ま、雅也さん？」

掌を向けて差し出すと、雛里は訝しげな声で尋ねてくる。

趙幻「手を繋ごう。そうすればはぐれない」

鳳統「あわわっ……！そっ、そんな、恥じゅかしい……」

趙幻「大丈夫だ。私は気にしない」

帽子のつばを両手で押さえ、恥ずかしがる雛里に俺は微笑んでそう伝える。

雛里は少しだけ悩んだ後、そっと手を握ってくれた。

鳳統「ま、雅也さんの手。すごく……大きくて綺麗です……」

ウホッ、良いロリ娘。って何考えてんだ俺は。馬鹿か。

趙幻「そうでもないさ。剣胼胝でゴツゴツしてるし」

鳳統「そ、そんなことないです！それに、安心出来ますから……」

そう言って雛里はまた恥ずかしそうに頬を赤く染めながら俯いた。

安心出来る……ね。こんな血で染まりきった手を、そういう風に思ってくれるか。やっぱり雛里は良い娘だなぁ。

そんな事を考えつつ、俺は温かい気持ちを感じながら雛里の手を引いて目的地に向かい、歩き続ける。

途中、商店が建ち並ぶ道に出るとふと雛里が顔を此方に向けて口を開いた。

鳳統「そ、そう言えばどこに向かってるんですか？」

趙幻「武具店だ。店主が珍しい物を仕入れたらしくてね。直刀らし

いから買い直そうかと思って」

質問に答えると、雛里は納得した表情を浮かべてから前を向いた。

あれからというもの、探したは探したのだが壊れた双直刀に代わる代物が売っておらず、弓で討伐を繰り返していた。

それが先日、武具店の店主から直刀を仕入れたと聞き、置いてもらっていたのだ。

部下を使いに出して買っても良かったのだが、やはりこれから使い続け自分の命を託す武器。自分の目で見て、手で感じてから買いたい。

とまあ、忙しくてなかなか休みも取れず、仕入れてもらってから随分と経ってしまったが今日やっと向かうことが出来たのだ。

趙幻「あそこだな」

道にまで様々な武器が放り込まれた箱が置いてある店を見付けて、俺は雛里と共に歩いて行く。

店に入ると奥の方にくたびれたサラリーマンの様な壮年の男がいて、俺に気付いたのかダルそうな動きで椅子から立ち上がった。

店主「ああ、趙幻君か。やって来てくれたね。僕はもう、来てくれないかと思ったよ」

趙幻「忙しくてな。なかなか来れなかった事は謝罪しよう。申し訳ない」

謝罪をして頭を下げると、店主は良いよ良いよと頭をかきながら微笑んだ。

この店、実は俺の部下達が使っている剣や槍を売ってくれた場所で、意外と良いものが揃っている。

店主も気さくで人柄が良く、警邏をしている時にたまに顔を出しては町の様子を聞いたり世間話をする仲でもあった。

店主「あら、趙幻君。その娘は？もしかして彼女かい？」

鳳統「か、かのっ！？あわわっ……！」

悪戯っぽい嫌ににやけた笑顔を浮かべた店主の問いに、雛里は右往左往と動きながら慌て、最終的には帽子を目深めに被り俯く。

俺はそれに溜め息を吐き、額に手を当てながら口を紡いだ。

趙幻「同士、そして智学における姉弟子だ。それ以上でもそれ以下でもない」

店主「……そうかい？僕はお似合いに見えるけどね」

趙幻「店主、私が警邏の途中関羽や劉備様と共に訪れた時にもそれを言っただろう」

呆れながら言った俺の言葉に、彼はそうだったかなと惚けた顔で返してから笑う。

確かに気さくで人柄は良い。だが、人を食った様な性格はちょっと頂けない。

前にそれで愛紗が慌て去って行き、桃香は何故か上機嫌になったのは何故だろうか。

趙幻「それで、仕入れてくれた直刀を見せて欲しいのだが？」

店主「ああ、ちょっと待っててね」

本来の目的に話を移し尋ねた所、直刀は奥の物置に置いてあるらしく店主はその中へと消えて行く。

俺はまた深く溜め息を吐き雛里の様子を横目で見てみると、耳まで赤くして俯いていた。

鳳統「お似合い……お似合い……お似合い……」

ブツブツと呪文のように呟く雛里。最後には口元を緩ませていたが、なんか怖い雰囲気出てる。

趙幻「おーい雛里さーん」

鳳統「ひゃいっ！？」

趙幻「どうした？なにかずっと呟いていたけど」

鳳統「あわっ！？な、何でもないでひゅ！大丈夫でしゅ！」

噛み噛みだが、雛里は両手をブンブンと振りながらそう言ったの

で信じることにする。

店主「お待たせ。これだよ」

奥の物置から戻った店主は2本の直刀をカウンターに揃えながら置き、俺の気持ちは雛里からそっちへと向いた。

片方は漆で塗られているのだろう、見事な光沢のある黒色の鞘に収まっており、もう片方は雪のような純白に染められた鞘に収まっていた。柄は無く、持ち手は布で巻かれ滑り止めになっている。

趙幻「刃を見てもよろしいかな？」

店主「どうぞ」

許可が降りたので、俺は黒色の鞘に収まっていた直刀を抜き、刃を確認する。

思わず見惚れてしまうような、力強さを感じる見事な造りだ。刃には亀裂模様が浮かんでいる。これを打ったのは、きっと名のある鍛冶師に違いない。

それを鞘に戻し、今度は純白の鞘に収まっていた直刀を抜く。

趙幻「これは……！」

店主「珍しいだろ？刃が真っ黒なんだ、それ」

驚かずにはいられなかった。黒刀とは、予想外すぎる。

刃は吸い込まれてしまいそうな程に黒く、それでいて打ち手の優しさを感じる造り。刃には水波模様が浮かんでいた。こちらもまた名のある鍛冶師による業物だろう。しかし、何故鞘は純白なのだろうか。

趙幻「銘は？」

店主「亀裂模様が浮かんでいる方は【干将】、水波模様が浮かんでいるのが【莫耶】。またの名を【双烈白虎】」

趙幻「作者は？」

店主「干将・莫耶夫妻だと聞いている」

趙幻「製造法は？」

店主「鋳造だと聞いた」

趙幻「素晴らしいっ！いくらだ！？」

店主「有り金全てで」

趙幻「買った！！」

関羽「止めい！！」

趙幻「べっ！！」

力一杯頭を殴られた。

そして何時の間にか愛紗がいた。

後ろでは雛里がオロオロしながらあわわと言っている。

関羽「まったく、雅也。いくらなんでも有り金全てと言うのはおかしいだろ。不思議に思わんのか？」

言われてみれば、確かに愛紗の言う通りだった。思わず全財産をこの店主に吐き出す所だった。

趙幻「あまりにも素晴らしかったのでな……。興奮していた様だ。すまない、愛紗。助かった」

店主「チッ……」

おい、舌打ちしたな店主コラ。

店主「じょっ、冗談だ。だからその武器と殺気を収めてくれ。僕はまだ死にたくない」

店主の舌打ちが愛紗にも聞こえていたらしい。殺気と共に青龍堰月刀の切っ先が店主に向けられ、彼は慌てながら顔と両手を振って命乞いをする。

そんな店主に愛紗は鼻を鳴らし、仕方なさそうにしながら青龍堰月刀を引いた。

鳳統「愛紗さん、さすがに流血騒ぎには……」

関羽「大丈夫だ。元より斬るつもりはない」

いや、結構本気だっただろ。そう思ったが、決して口には出さない。出したら斬られる。

店主「怖いね、彼女」

趙幻「いや、根は良い奴なんだがな」

愛紗に恐怖を感じているのか店主にボソボソと囁かれ、俺は一応フォローを入れた。

店主ははぁ、と溜め息を吐くと右手で頭をかく。

店主「まあいいや。趙幻君。ソレただで持って行っていいよ」

趙幻「ほぁ？」

素っ頓狂な声が出るくらい、突然ぶっ飛んだ事を店主は口にする。

有り金全てとか言っておきながら、いきなり無料で持ってけとはこれ如何に。

店主「仕入れたって言ったけど、実はソレ貰い物なんだ。最初から趙幻君に渡すつもりだったしね。いつも贔屓にしてもらってるお礼だよ」

趙幻「良いのか？」

店主「その代わり、ちゃんと活躍して頂戴よ？良い物は良い主人が居てこそ力を発揮するんだから」

なんというか、本当にこの店主は人を食った様な性格をしている。良い意味でも、悪い意味でも。

俺は店主に深々と頭を下げ腰布の、右に干将、左に莫耶を差した。

ああ、やはり両脇に直刀がある方が落ち着く。これが本来の俺だと言わんばかりだな。

店主「大事にしてよ？ソレ、夫婦剣なんだからね」

趙幻「言われずとも、大切に使います」

笑顔の店主につられて俺も笑みをこぼし、再び深々と頭を下げてから店を後にする。

雛里は良かったですね、と言ってくれた。

趙幻「ところで愛紗。お前は警邏の途中ではないのか？」

関羽「あ、ああ。その途中で雅也とあの店主がおかしなやり取りをしていたからな。思わず手が出てしまった。すまない」

趙幻「いや、謝る事はない。私がおかしくなっていただけだ。寧ろ感謝している」

まさか、殴られて感謝する日が来るとは思わなんだがな。

関羽「しかし、その武器はそれ程まで良い物なのか？」

趙幻「うむ。私はそう感じた。この圧倒的な素晴らしさに心を奪われたよ。この気持ち、まさしく愛だ」

関羽＆鳳統「「愛！？」」

俺の言った事がそんなにおかしかったのか、２人が同時に驚きを露わにする。

ふ、この双烈白虎に出会えたのは運命か。乙女座の私にはセンチメンタリズムを感じざるを得ない。いや、乙女座ではないが……。

関羽「愛……か」

鳳統「愛……ですか」

一方で、愛紗と雛里はそれぞれそう呟くと俺の顔を見た後に、深い溜め息を吐いていた。

……やはり、俺はおかしかったのだろうか。武器に愛を感じたのは初めてなのだかなぁ。

趙幻「さて、ではこれから少し雛里と行きたい所があるのでな。愛紗、警邏頑張れよ」

関羽「あ、ああ……」

鳳統「あ、愛紗さん。ではまた……」

呆けている愛紗に俺達は別れを告げて、また雛里の手を引きながら人混みの中へと歩いて行く。

雛里も少しまだ呆けているのか反応が薄かったが、まあ大丈夫だと信じたい。

そんな昼下がりの出来事だった。

拠点。平穏。武器入手。（後書き）

アンケートで、干将・莫耶、雅也くんの号である烈虎からという意見がありました。
それで、干将・莫耶をちゃんとした銘に。双烈白虎を別名に付けました。

アンケートにご協力、ありがとうございました。

次話も拠点フェイズ。続きみたいな感じの予定です。

拠点。鳳統。感謝から。（前書き）

前話の続き。

短めです。

拠点。鳳統。感謝から。

新しい武器、【干将】と【莫耶】こと【双烈白虎】を手に入れた俺は愛紗と別れ、雛里と手を繋ぎながら町の中を歩く。

愛紗には行きたい所があると言ったが、それは口から出任せだ。実際はノープラン。

その旨を雛里に伝え、どこに行きたいか聞いた所、近くの書店をチラチラと横目で見ていたが顔を赤くして俯きながら特にないと言われた。

……艶本か八百一か。

彼女達の趣味を知っているせいかすぐに分かったのだが、それを口に出してしまえば雛里の精神に深い傷を与えると思い、そうかと答えて別の場所に向かう事にした。

趙幻「雛里、何か欲しいものはないか？」

鳳統「ふぇ？」

趙幻「いや、なに。水鏡先生の所に居た時から随分と世話になっているからな。何か贈りたいと思っているのだが……。勿論、朱里にもな」

町をぶらぶらとてきとーに歩いている内に、そろそろ２つ目の目的を果たすかと思った故の発言。

鳳統「い、良いですよそんな。私だって雅也さんには沢山御恩がありますし……」

趙幻「気にするな。それに、私がそう思っているのだ。遠慮することは無い。それに、私の気が済まない」

元より、俺は雛里と朱里にそうしたいと思っていたのだから、そうさせて欲しいというのが本音だ。

2人……というか、水鏡塾の面々から貰い受けた紅い紐のお返しも、彼女達が合流した時の戦で受けた恩も、未だ返せていない。

趙幻「私を助けると思って欲しい。厄介な事に、受けた恩は必ず返さねば気が済まない性分なのだ。だから、頼む」

俺の言葉に、雛里は戸惑っている様子だった。

彼女の困惑は理解出来る。だが、これも俺の矜持。プライドの1つである。雛里は大人しい娘だ。強引に言わなければ、返す機会が作れないだろう。

鳳統「わ、わかりました……。雅也さんがそこまで言うのでしたら」

趙幻「ありがたい。では早速だが……」

鳳統「雅也さんが選んでください」

趙幻「ふむ？」

鳳統「何でも良いんです。雅也さんが私に選んでくれた物なら、喜

んで受け取りますから」

また難しい事を言われてしまった。

一応言っておくが、俺には基本的にそういったモノのセンスというものがない。

特に雛里は女の子だ。本、というのは最初から除外するとして、何か良い案はないか思案する。

さっき言った通り、本はなしだ。元より、彼女達が本を求めるなら直ぐに買いに行って揃えてしまう。それが艶本か八百一本かは別として。

次に、俺という存在からくる物は武器である。が、雛里は軍師。護身用の短剣であれば話は別だが、贈るにはそもそも華がない。

ならば、服か。いや、ないな。俺にはセンスがない。今俺が着ている服だって、水鏡先生から頂いた物を呉服屋に頼み、複製して貰ったものだ。

食事……は何だかんだで手料理は日頃から振る舞っている。食事処で奢るというのも、鈴々ならともかく本心から喜んで頂けるかは別だ。それにやはり、華がない。

酒、は論外だ。

消去法で行くと、後は小物か。

趙幻「あいわかった。では、向かうとしよう」

無難な選択かもしれないが、やはり小物が良いかと俺は思った。
雛里を連れ、警邏や検知で見て回った時に覚えた頭の中にある地図を頼りに適当であろう小物屋を目指して歩き始める。
鳳統「……そういえば、朱里ちゃんにも、と言ってましたけど、やっぱり買うんですか？」
趙幻「うむ。彼女だけではない。桃香、愛紗、鈴々にもと考えている。が、今は雛里に贈るものだけを考えていた」
鳳統「そ、そうでしゅか……あわわ……。う、嬉しいです」
問いに素直に返すと、雛里はどうしてか嬉しそうに顔を緩ませ、頬を朱に染めて俯きながら呟く。
喜んでくれるなら良いが、何故俯く必要があるのだろうか。よくわからない。
しばらく彼女は顔を上げなかったが、それでもちゃんと手を離さず着いて来てくれたので、はぐれずに目的の小物屋へと辿り着いた。
「あらあら、趙幻様じゃないですか。本日はどのような御用件で？」
店に入ると、初老の着物を着た女性が柔らかい笑顔を浮かべながら歩み寄ってくる。
趙幻「買い物だ。少々長居するかもしれないが、よろしいか？」

「ふふ、大丈夫ですよ。どうぞごゆっくり」

俺の答えに1度雛里を見た婆は、一層笑みを深くするとそう言って会計所へと戻って行った。

しかし、彼女は何でも構わないと言ってくれたわけだが、どうも悩んでしまう。

一口に小物、と言っても種類が多いのだ。

装飾品、日用品、消耗する物を雛里に買ってもなぁ。と思う。

そんな中で、ふと目に入って来たのは……。

趙幻「なんだ、この意味不明に惹きつけられる魅力ある仮面は……！」

そう、それは実に素晴らしい揚羽蝶を象った1つの仮面だった。まるで買えと、まるで着けろと、そして悪を倒せとこの仮面は俺に囁き掛けてくる。

天が呼ぶ、地が呼ぶ、人が呼ぶ。悪を倒せと我を呼ぶ。

鳳統「雅也さん……？」

趙幻「……はっ！どうした雛里。大丈夫だ。私は大丈夫だ」

何か怖い物を見たような目で俺を見てくる雛里。

危なかった、いつの間にか手にとっていた仮面を元あった位置に

戻す。

彼女が居なければこの仮面の魔力に取り憑かれる所だった。

趙幻「む……？」

その後、隣に置いてあった一本の筆を見付け、手に取る。

漆塗りされた木は握りやすいように削られ、墨を浸ける筆先の毛は恐らく上質な物。無駄に装飾されておらず、金箔で卍が尻の方に小さく描かれ、見た目にも丁度良いアクセントを付けている。

趙幻「婆、コレをくれ」

「あらあら、流石は趙幻様。お目が高いですね」

感心した様子で言ってくる婆に、小さく鼻を鳴らして返す。

雛里は申し訳なさそうにしているが気にしない。値段を聞き、更に「良いんですか？」と目で訴えて来たが気にしない。

俺の手持ちは、干将・莫耶の分が浮いたこともありこの筆を買うにも気にならない値段だった。

買った後、終始笑顔を浮かべていた婆に別れを告げて町に戻る。

雛里は大事そうに買ってあげた筆の入っている包みを両手で抱き締め、俺の横を歩いている。

鳳統「こんな良い物を、本当にありがとうございました」

趙幻「なに、雛里に与えられた恩を返す為だ。それくらいが丁度良い」

夕暮れに染まる道ゆっくりと進みながら、俺は笑顔で雛里に言葉を紡ぐ。

趙幻「それに、今日は楽しかった。雛里と一緒に町を回れて良かったよ」

鳳統「いえ……。私も、雅也さんと一緒にお出掛け出来て、嬉しかったです」

えへへ、と無垢な笑顔を浮かべる雛里。夕焼けに照らされ、心から良かったと思える程に嬉々としている表情は、思わず胸が高鳴る位に可愛らしいと思えた。

鳳統「雅也さん。ま、また、一緒にお出掛けいてくだしゃいっ！」

俺の前に向かい合う様に立ち、言葉を噛みながらもそう言ってくれた雛里に俺はまた微笑む。

鳳統「あわわ……。噛んじゃった……」

趙幻「ふふふ、雛里。また休みが同じ時に今度は何か食べに行くとしよう」

鳳統「……！はいっ！！」

良い返事で雛里は答え、それがまた嬉しく思えて両面を閉じる。

今日は久々に満足出来る日だったと思い、またいつか来る雛里との食事に思いを馳せるのだった。

ちなみに、後日愛紗には髪留めを。鈴々には酒を。桃香には腕輪の様な装飾品を。朱里には羽毛扇を買ってあげた。

皆喜んでくれて、また絆が深まったと思う。

そして、余談だが雛里の仕事をする早さが一段と上がり、皆を驚かしていたのはまた別のお話。

拠点。鳳統。感謝から。（後書き）

次話から反董卓連合編本格スタート予定。

檄文。合流。反董卓連合。（前書き）

連合結成まで。
大変ながーくなってしまった。

檄文。合流。反董卓連合。

平穏とは、かくも儚く不意に崩れ去るものである。

町の治安も安定し、生産高も上がって来たここ最近。盗賊の数も減りに減り、より平和に近付いたと思った矢先に、その事件は衝撃的なものだった。

劉備「はぁ……」

関羽「はぁ……」

諸葛亮「はぁ……」

鳳統「はぁ……」

趙幻「はぁ……」

張飛「？」

謁見の間で、届いた檄文を主要メンバー全員で読んだ所、鈴々以外の面子で揃いも揃って一斉に溜め息を吐いた。

桃香なんて、読み上げてる途中からどうしようか悩んでいるようだったし、俺に至ってはその檄文の差出人からして嫌な予感がしていた。

差出人の名は、袁紹。内容は長々と理由が付け足されていたわけだが、要約すればつまり、『権力を独り占めする輩が居て、気に入

らないからみんなで倒そう』というやっかみ以外の何でもないものだった。

俺がそれを指摘したのだから、鈴々以外の全員が全員あまり良い顔をしていないのである。

まあ、鈴々はそれでいいと思っているようなのだが……。その思惑は頭を悩ませるに充分なものだ。

そも、事の発端は少し前に起きた霊帝の死去から始まる。

これにより宦官と軍部で各々のお抱えの皇太子である少帝弁か劉協のどちらかを即位させるか、という問題に発展。結局は少帝弁が即位したわけだが、宦官の中でも力のある十常侍が大将軍である何進を暗殺した。

何進の部下も十常侍を暗殺しようとしたが、その際に十常侍の一部が少帝弁と劉協と共に長安を離れ、董卓と合流し洛陽へと向かったのだが、その董卓が十常侍を抹殺。洛陽で劉協を即位させ、暴政を働いているらしい。

その董卓という人物が袁紹の気に入らない輩なのだが……。

趙幻「本当に暴政を働いているなら、止めるべきであるが」

問題点は、袁紹が筆頭に立っていることだ。俺の中で埋もれている前世の記憶から何とか引っ張り出したイメージでは、袁紹という人物像は一言で表せる。

『馬鹿』。この言葉が最も当てはまるだろう。

劉備「雅也君の言うとおり、酷い人ならどうにかしないとね」

関羽「だが、あの檄文の真意を読み取ると……」

萎える。愛紗の言うとおり、気持ちはかなり下を向いていると言っても過言ではない。

諸葛亮「ですが、これは名を上げる好機でもあります」

鳳統「本当に暴政を働いているなら討ち取れば良し。そうでなくても、何かしらは出来るかと……」

軍師2人の意見は最もで、俺もそれに賛同する。

どちらにせよ、放っておくのは得策ではない。ならば、選べる答えは1つだけ。余地もない。

趙幻「桃香、とりあえずだ。民が本当に困っていた場合見過ごす訳にはいかない。行こう」

劉備「うん、雅也君の言うとおりだね。愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、雅也君は兵士さん達の編成。朱里ちゃん、雛里ちゃんは補給作戦の立案と軍備の確保をお願いしても良いかな？」

関羽「お任せください」

諸葛亮「こちらも、なるべく早く済ませます」

桃香の指示――というかお願いに、武将陣を代表して愛紗が、内

政担当を代表して朱里が返答する。

どちらにせよ、連携してことに当たらねばならないわけだが。残念なことに、我が軍は他の諸侯に比べてお金もなければ兵数も少ない。

結局、用意出来る物を精いっぱい用意して後は他の諸侯の持ってきた物にあやかろうってことになった。

かっこ悪いからあまりそういう事をしたくはないのだが、というのが顔色を見る限りで俺以外の思う所なのだろうが、如何せんそういう事を言える立場ではないので納得してもらう。

というわけで、俺達も弱小勢力ながらこの『反董卓連合』に加わる事を決めた。

群雄割拠の戦乱は、足音を立ててまた確実に近付こうとしていた。

さて、数日の準備期間を経て俺たちは精いっぱいの物品を揃え、城を出立する。

それから大体一週間の日数を経て反董卓連合の合流予定地に辿り着いたのだが、その中で嬉しい合流があったことをここに記す。

趙雲「ほう……。これは壮観だな」

趙幻「ああ、そうだな姉者」

趙子龍――我が姉者の合流は、俺達も予想しない形であっさりと果たされたのだ。

姉者曰く、あれから様々な地を転々してみたが良い主に出会えず、この連合の噂を聞き合流を計って来てくれたそうだ。

桃香達も合流を喜んでいたし、朱里達にも紹介したらいきなり抱き締めて「雅也！閨に持ち帰っても良いか！？」と興奮気味に尋ねられたのには困ったが、彼女達も問題なく受け入れてくれたようだった。

とまあ、そんな簡単な合流秘話はさて置き。今俺達の居る陣地には至る所に天幕が張られ、所狭しと諸侯の旗が立ち並んでいる。ふと見れば色んな色、そして様々な軍装を着ている兵士達がたむろしていた。

劉備「ほわ～……。たくさん兵隊さんがいるねえ～」

桃香が感嘆の声を上げ、愛紗達も一同に旗の周りにいる兵達を見やる。

陣地中央にある大天幕に靡く旗には袁の文字。おそらくあの『馬鹿』こと河北の雄、袁紹の物だろう。その横には荊州・南陽の太守にして袁紹の従妹に当たる袁術の旗が。その近くには俺にとって色んな縁のある恩人、曹操殿の旗があった。

鳳統「奥には江東の麒麟児、孫策さんの旗が見えますね……」

諸葛亮「西涼の馬騰さんや官軍に所属していた方の旗も、いくつか見受けられますねー」

劉備「あ！あっちにあるの白蓮ちゃんの旗だー！」

様々な勢力別の旗から誰の物かを考えていると、笑顔を浮かべた桃香の指差す所にまた恩人の旗を見つける。

趙幻「ふむ、まさに諸侯が集まる武の競演と言った所か」

言って、俺はクツクツと笑い心の底から湧き立つ言い知れない興奮を覚える。

子供の様なワクワク感。名のある武将が集まっているドキドキ感。たまらない。

趙幻「これは、心を落ち着かせるのは難しいな」

そう言った俺の顔はおそらく爛々として嬉々とした表情なのだろう。顔の感覚で分かる。相当にやけているという事が。

関羽「ふふっ。雅也、まるで子供のような笑顔を浮かべているぞ」

張飛「お兄ちゃんもまだまだガキなのだ」

趙幻「言っていろ。このワクワク、男として当然のことだからな」

微笑む愛紗と、自分はそうじゃないと言いたげな鈴々。俺は否定せず、肯定してまた笑顔を浮かべた。

劉備「でも、雅也君の気持ちもわかるなぁ。いつも噂でしか聞いた事のない人達に逢えるんだもん。このワクワク感は異常だよね」

一方、桃香は分かってくれるようで俺と同じく笑顔を浮かべてそわそわとしていた。

桃香、やはり貴女を主に選んで良かった。この気持ちを共有出来る人物が他にも居たこと、俺はとても嬉しく思うぞ。

趙雲「しかし、そうワクワクとしてばかりも居られますまい。……曹操に孫策。いずれも侮りがたい英傑。そして袁紹も袁術も、本人の能力は凡庸なれど、その財力と兵力は脅威の一言。そして尤も心配なのは……」

劉備「ま、まだあるんだ……」

趙雲「……白蓮殿の人の良さです。諸侯に付け入られるようなことがないと良いのですが……。ああ、心配だ心配だ……」

流石は様々な地を流浪していただけに、姉者の持っている情報と見解は見事なものだったが最後の杞憂は俺にとっても最もなものだった。

確かに、公孫賛殿の人の良さは俺達も良く知っている。自分の軍の兵士をさり気なく義勇軍を発足させた俺達に着いて行かせるように促したり、旅の準備の協力をしてくれたり……。

気の毒になるくらい、良い人なのだ。公孫賛という人物は。

趙幻「私達は公孫賛殿にひとかたならぬ恩がある。ならば、彼女に何かあれば私達がまっすぐ助けに行こうではないか」

劉備「うん！」

俺の言葉に、桃香は賛同の声を上げた。

桃香は公孫賛殿の親友でもあるからな、その返事は予想通りというものだ。

その時、金という派手な軍装に身を包んだ兵の１人がこちらへと向かってくるのが見えた。

「長の行軍、お疲れ様でございました！貴殿のお名前と兵数をお聞かせ願いますでしょうか！」

その兵士は俺達の前に到着するやいきなり労いの言葉と共に紙と筆記用具を取り出し、尋ねてくる。

劉備「平原の相、劉備です。兵を率いてただいま参陣しましたー。連合軍の大将さんへ、取次をお願いできますか？」

「はっ！しかし恐れながら現在、連合軍の大将は決まってはおらぬのです……」

袁紹傘下らしき兵士の言葉に、俺は耳を疑いたくなった。

愛紗と姉者も訝しげな表情を浮かべ、どういうことかと兵士に尋ねる。

『あの』袁紹のことだから率先して大将になっていると思ったのだが、そうではないらしいな。何か問題でも起こっているのだろうか……。

その答えは、意外な人物の登場により得られることになった。

「総大将を決める軍議をしているのさ」

劉備「白蓮ちゃん！」

背後から聞こえた聞き慣れた声に振り向いてみれば、そこには公孫賛殿が立っていた。

片手を上げ、軽く挨拶をしながら彼女は歩み寄ってくる。

公孫賛「よっ、桃香。久しぶりだなぁ」

劉備「お久しぶりだねー♪元気だった？」

公孫賛「おかげで、無病息災さ。……星も趙幻も久しぶりだな。元気にしていたか？」

趙雲「ええ。あれからあちこち放浪し、今は桃香様の下に仕えております。……白蓮殿も、お元気そうでなによりですな」

公孫賛殿の問いに、姉者はそう言って俺は何も言わずただ頭を縦に振り伝える。

彼女はそれに苦笑していたが、そのままま口を紡いだ。

公孫賛「ま、お前らの抜けたあとの穴を埋めるのは大変だったけどな」

趙雲「おお。厭味を言われるなどと、白蓮殿も成長されたようですなぁ」

公孫賛「ほざくな、バカ。それに趙幻、笑うな。わかっているぞ」

おっと、ばれていたか。しかし、姉者と公孫賛殿は口ではきつく言いつつも、互いに微笑んでいるあたり友情が垣間見える。

趙幻「時に、公孫賛殿？総大将がまだ決まっていないというのは本当なのかな？」

公孫賛「ああ。残念ながら事実だ……」

そろそろ気になって尋ねてみれば、その答えは想定していたものだった。

公孫賛殿は疲れた表情を浮かべ、その問題の面倒さをヒシヒシと伝えてくる。

諸葛亮「どういうことでしょう？やはり諸侯の主導権争いが泥沼化しているのでしょうか？」

公孫賛「それがなぁ。……実はその逆なんだよ」

朱里の見解に、嘆息と共に指先で眉間を押さえ、公孫賛は心底困った様な表情を浮かべて言葉を続ける。

公孫賛「一部を除いて、総大将なんて面倒はごめんだ、という人間が殆どでな。軍議が進まん」

その一部、というのは間違い無く袁紹の事だろう。確かに、総大将となると聞こえは良いが、それと共に集まった面々の責任が伴う。

失敗すれば、その諸侯の面目は丸潰れ。名を上げたい者も多い筈だから、面倒というのは些か間違いではない。

張飛「面倒なのがやだーっていうなら、やりたい奴にやらせればいいのだ。……違うのか？」

鈴々の言うことは、間違っていない。やりたくない奴にやらせるくらいなら、その面倒もひっくるめてやりたい奴にやらせればいい。これ以上ないくらい正論な意見だ。

だが、それで決まらないから軍議が滞っているのだろう。そう思い、とりあえず尋ねてみる。

趙幻「問題があるのだろう？」

公孫賛「ああ。やりたそうにしている人間が、自分から言いださなくてなぁ」

鳳統「……つまり、やりたそうにしている人間に押し付けるつもりなのに、やりたそうにしている人間が立候補せず、また他の諸侯も発言に対して責任を負いたくないから薦めない……ということですか？」

公孫賛「ぴったりその通り。腹の探り合いで疲れるよ……ホント」

雛里の考えがそのまま当たりらしく、公孫賛殿は肯定すると深い深い溜息を吐く。

そりゃあ、力の有る諸侯がここに何人もいるはずだから、今のうちに情報を引き出そうとする頭の良い輩もいるだろう。腹の探り合いも必然だが、どうやら公孫賛殿はそれに疲れて出てきたと見える。

公孫賛「あまりにも疲れるから、軍議を抜け出して気分転換をしようと思ってな。そしたら桃香達がちょうど到着してたって訳だ」

俺の読みは当たっていたらしい。しかし、総大将決めで滞っていて大丈夫なのだろうか、この連合軍は……。

趙幻「この間にも敵方は軍備を整えているだろうに……」

鳳統「そう思うと、ちょっとやりきれないかもですね……」

関羽「全く。英傑と呼ばれる人間が揃っていてこれか」

張飛「船頭を多くして、船は港でおねんね、なのだなぁ」

それぞれ思いつく悪態を吐き、揃って息を吐く。

趙雲「それぞれが自分の利益を優先すればさもなろう。……軍議に乗りこむか」

劉備「こうしている間にも、もしかしたら庶人のみんなが悲しん思いをしているかもしれないんだから……そうするしかないよね」

それしか選択の余地が見いだせない以上、そうするしかないわけであり桃香はズンズンと足音を響かせながら歩き始めた。

趙幻「仕方なし。愛紗、鈴々、姉者。見張りを頼む。朱里と雛里は天幕を張る兵士達に指示を出してくれ。私は桃香殿を追おう」

関羽「何か案はあるのか？」

趙幻「あるわけなかろう。だが、もしもの時に奥義を持って早々と離脱できる」

明鏡止水――トランザムはそれを可能にする我が奥義だ。桃香を担いで一気に脱出するのは容易いだろう。

趙幻「とにかく、頼んだ。早く行かねば何もなしに桃香が軍議に突っ込んで行きそうだ」

眉間に皺を寄せ、そうなった場合を想像すると頭が痛くなりそうだ。

愛紗達もなんとなく想像出来たのだろう、主ということもあって口には出さないがそれぞれが渋い顔をしている。

そういうわけで、彼女達にそれぞれを任せて俺は桃香の背中を追いかけた。

◇

趙幻「本気で軍議に乗りこむつもりか？」

追いついて開口一番、俺は隣を力強く歩く桃香にそう問いかける。

劉備「当たり前だよ。戦争を遊び感覚でやってる人達に、ビシーッと一言言ってやるんだから」

桃香は俺の問いに、怒っているのか整った眉を吊り上げてその心内を答える。

遊びでやってるんじゃないんだよ！そんな軍議、修正してやるーっ！ってところか。どこのキレやすい若者代表だ。

趙幻「待て。そんな事を桃香が言った所で取り次いでくれるわけがなかろう。冷静になれ」

劉備「むー……」

趙幻「私達はあくまで弱小勢力。兵力がないのはつまり発言による影響力の無さを意味する。諸侯の権力争いに口を出せるはずもない」

納得がいかないのか、桃香は頬を膨らませ不満を露わにする。

とは言え、これはどうしようもない事実。俺とて歯痒いが、兵力の多さは力における最初の、そして揺ぎ無い優劣に直結する。これは道理と割り切る他ない。

劉備「でも、それじゃあどうすればいいの？このままじゃ徒に時間だけが過ぎちゃうよ……」

董卓の圧政に苦しんでいる庶人の姿を想像したのか、桃香の表情は不安と悲しみの影が落ちた。

趙幻「ならば、その道理を私の無茶で押し開こう」

劉備「どうするの？」

趙幻「なに、単純な事。軍議で早く決めろと催促するのさ。そうすれば、恐らく総大将もすぐに決まろう。だが、こちらにその発言に対する責任が来るとは思うが……それでも、桃香の望む状況になるとは思うがね」

劉備「う～ん、大丈夫かなぁ……」

もしも俺達がその責任を被ることになれば、最悪の事態を想定すると自分達に着いてきてくれている兵達が心配になる。

桃香もそれを考えているのだろう、秀麗な眉根を顰ませて心配の表情を見せた。

趙幻「分の悪い賭けであるのは確か。しかし、現状を打破するにはこれが一番だろうと思えるが？」

口八丁で今の桃香を安心させるのは無理だろう。正直に言葉を並べて、可能性のひとつに縋るしか今の俺達には出来る事がなかった。

それで俺達が推した人物が感謝と共に俺達を援助してくれるなら尚良かったのだが、そんな思いを打ち砕くのは何時だって現実という大きな壁である。

軍議をしている場所に辿り着いた俺達は、参加の為その輪に入ったわけだが、その場では1人の女性が喋るだけという軍議としては非常に滑稽だった。

いや、軍議というのもはだはだしい。論外である。重苦しく呆れた雰囲気がこの場には充満している。

「さて皆さん。何度も言いますけれど、我々連合軍には効率良く兵を動かすにあたり、たった一つ、足りないものがありますの」

長い金髪をくるくると巻き髪にしている女性は、お嬢様然とした口調で他が沈黙を貫いているのに対し、1人喋っていた。

「兵力、軍資金、そして装備……全てにおいて完璧な我ら連合軍。而して、ただ一つ足りないもの。さてそれはなんでしょう〜？」

子供の発する謎かけよろしく、語尾を伸ばして尋ねてくるコイツ。

敢えて言わせてもらう。軍議解決に対する、速さが足りないっ！

ちなみに、この空気の原因を作っているこの女性こそが、河北の雄、袁紹その人である。記憶通り、某金ぴかよろしく派手な鎧を着込んでいて口調もお嬢様というよりも『馬鹿』としか思えない感じだ。圧倒的に頭が足りないとしか思えない。

思っていた通りだが、総大将になりたがっていながら立候補しないのはこの袁紹だろう。最早何も言うまい。

総大将になって当然、という顔をしているのだから俺達が推した所で感謝も援助も望めないだろう。桃香もあれだけ意気込んでいたのに既に消沈していて、口を開かない。

何やら袁紹が総大将になる為の条件らしき事を上げているが、ど

うでもよくて関係ないことだったので聞き流す。本気でどうでもいい。ほんっとうにどうでもいい。もうお前が総大将でいいから、この軍議―（と呼べるかもわからない何か）を早く終わらせてくれ。

曹操「……で？貴女の挙げたその条件にあう人間は、この連中の中に居るのかしら？」

袁紹「さあ？それは私の知るところではありませんけれど。でも世に名高いあなた方ならば、誰かお知りなんじゃありませんの？」

曹操「そうね。案外身近にいるかもしれないわね」

袁紹「ええっ。そうでしょう、そうでしょうとも。おーっほっほっほ♪」

高笑いをする袁紹とそれを呆れた表情で見る曹操殿を始めとした諸侯の姿に、もう勘弁して下さいと思う俺が居た。

胃が痛くなる。ホントに、溜息しか出せない状況というのに初めて出くわしたが、これほどまでに精神に来るとは予想外だった。

劉備「ねえ、雅也君。このままじゃ拙いんじゃないかなぁ」

趙幻「間違い無くな。仕方ない。開き直って、真っ向から意見しよう。寧ろ、そうしなければ私の我慢が限界に達しそうだ」

桃香の囁きに、俺はそう答えて腹の上から胃をさすった。

俺は我慢弱く堪え性もない男だ。最近はその本来の自分も形を潜めていたようだが、この女を前にして再び姿を現したようだ。そう

いう意味では恐ろしいな、この袁紹という女性は。

桃香もそうなのだろう。深呼吸をしてから意を決した表情になり、手を天に掲げた。

劉備「すみません！こんなことをしている間に、董卓軍は軍備を整えちゃうと思いますよ！」

袁紹「あら、そういう貴女はどなたかしら？」

劉備「平原の相、劉備です。……ねえ皆さん。皆さんは董卓さんと戦う為に集まった訳でしょう？なのにこんな所で味方の腹の探り合いをしていてどうするんです！こうしている間にも、圧政で苦しんでいる人達がいるかもしれないのに……！」

強い口調で訴える桃香を、1人を除いた諸侯の面々が冷ややかな目で見つめて来る。

……いや、違うな。曹操殿はその後俺を見てクスリと『嘲笑』していた。それを俺は気付かない振りをして、2人の会話に耳を傾ける。

袁紹「あらぁ、新参者は良いことを仰りますわね。じゃあ劉備さんとやら。あなたにお聞きしましょう。この連合を率いるのに相応しい人物はだぁれ？」

劉備「……もう袁紹さんで良いんじゃないです？だって袁紹さん、総大将になりたいんでしょ？」

袁紹「あらあら。この私がいつそんなことを言いましたか？だけど、

そうですわね……。なり手がいないのであれば私がやってさしあげてもよえおしくてよ？」

どの口がそう言うか。そう思うが口に出せばやっかいなことになるのは請け合いなので、言わない。桃香も呆れていているのか、小さく溜息を吐いていた。

曹操「なら決まりね。袁紹が総大将をやりなさい」

「我らも劉備の提案に異存はない」

「妾も問題はないぞよ」

曹操殿に始まり、他の諸侯の面々も漸く見えた終わりの一手に賛同する。

2番目の褐色の女性は……周瑜か。あの長い黒髪、利発そうな雰囲気、そして眼鏡。記憶の中に覚えがある。

3番目はおそらく袁術か。あの金髪に子供っぽい雰囲気ながら気取った口調。周瑜の隣に居たし、間違いないだろう。

袁紹「あらあら？皆さんそうですの？ならば決定ですわね。ではこの私……この三国一の名家の当主である私が、連合軍の総大将になってさしあげますわ♪」

自分の事をより強調して、袁紹は弾んだ様子でそう宣言した。

袁紹の宣言に、諸侯の面々が微妙な沈黙を提供する。ああ、本当にめんどくさかったんだろうな。総大将になるのも、アレの相手を

するのも。

公孫賛「おぉーい。まだ軍議は進んでいないのかー？」

そんな中で、気分転換が終わったらしい公孫賛殿の朗らか笑顔と共に軍議の席へと戻ってきた。

公孫賛「いい加減決めちまわないと、董卓軍が万全の態勢を敷いちまうぞー……って、あれ？」

そこまで言って、軍議を包む不思議な空気に気付いたのか気まずそうにする公孫賛殿。説明を俺達に求めて来るも、俺はもうなんだかなぁ、という気持ちが心の中に充満していて額に手を押し当てた。

趙幻「……今、その総大将が袁紹殿に決まった所だ。他の諸侯の方々も賛同してくれている」

公孫賛「おっ？そうなんだ。……んじゃ、これでようやく本題に戻ることができるな」

公孫賛殿は気分転換してきたせいか、妙にやる気になっていた。しかし、俺はそうもいかん。とっととこの場から離れて本陣に戻りたい。

曹操「その本題も、この連合軍の総大将である人が決めてくれることでしょうね。……私は陣に戻る。決定事項は後ほど伝えてくれれば良いわ」

周瑜「私も陣に戻らせてもらう。曹操殿と同様、作戦は後ほど通達してくれればそれで良い」

この2人も俺と同じ考えなのか、そう言い捨てると背中を向けて軍議の場から去って行った。

袁術「なんじゃあのふたりは。身勝手にもほどがある」

一方で、袁術はそんな2人にご立腹だった。両手を腰に当てて怒っている様は申し訳ないが威厳がなく、やはり子供かと密かに心を和ませる俺がいた。

公孫賛「あーあ……。どうするんだ、本初」

袁紹「ふんっ。私に任せると言った以上、私の指示に従って頂きますわ」

不満で頬を膨らませながら捨て台詞を呟いた袁紹は、どうしてか金髪を靡かせて俺達に振り向いた。

袁紹「さて、劉備さんとやら。あなたの発言のおかげで、私が連合軍の総大将という責任の重い仕事をすることになってしまったのですけれど……」

チッ。わかってるさ。そんな事をわざわざ言ってくるあたり、念を押してこちらに押し付けるつもりなのだろう。

袁紹「洛陽を不法占拠している董卓さんの軍勢は、私達連合軍とほぼ同等の規模。……となれば、如何に総大将が優れた人物であっても苦戦は必須でしょう」

趙幻「私達が、先頭に立ち戦えばよろしいのでしょう？」

言葉を遮り、彼女の言わんとした事を先に言えば袁紹は驚いた表情で俺の事を見る。

袁紹「あら、あなたは？」

趙幻「劉備様が家臣、趙幻と申します。三国一の名家である袁家の当主殿と共に戦えるとは、栄光です」

訝しげに尋ねて来る袁紹に対し、自己紹介と共に思ってもいないことを言う。

思ってもいないことだが、袁紹のようなタイプの人間はとりあえず褒めておけばいい。調子に乗らせておけば、あとはどうとでもなる。

袁紹「あら、分かっているじゃありませんの。劉備さん、良い家臣をお持ちですわね♪」

劉備「は、はい……」

即効で効果有り。やはりこいつ、典型的な馬鹿だ。

趙幻「先陣に立つは武人の誉れ。ありがたくお受けしたい所ですが、幾つかお願いしたい事がございます」

袁紹「なんですの？……一応、聞くだけ聞いてさしあげますわ」

ほう？お願いと聞いて表情と纏う雰囲気が少し変わったな。ただの馬鹿ならやりやすかったのだが、流石は名家の当主と言った所か。

劉備「……雅也君？」

趙幻「……大丈夫、任せてくれ」

そんな中で桃香が心配そうに呟いてくるが、俺は大丈夫だよと微笑んでその肩を優しく叩く。

聞くだけじゃダメ。呑んでもらわなければ此方が困るというもの。

趙幻「まず、一先ずは1ヶ月分ほどで構いません。兵糧を分けて頂きたい」

袁紹「兵糧を？何故ですの？自分達の食事くらい自分達でなんとかしらどうです？」

趙幻「呑んでいただかなければ、先陣には立てませんな。なれば、袁紹殿が総大将として先陣に立ち、兵達の士気を高めるが良いでしょう。もしくは、曹操殿か孫策殿に命令をしてみればよろしいのでは？それに、この程度の条件も飲めないとはいやはや。袁家の当主である袁紹殿とあろう者が、些かケチな人物と見えてしまう」

わざとらしく挑発を交えながら足元を見た事を言えば、袁紹は苦悶の表情を浮かべ俺を睨んでくる。

だが、そんなことで引いていられる立場ではないので俺は逆に笑顔を浮かべて返してやった。捨て石にされるなんて御免だ。ならば、この袁紹から出来るだけ援助をするよう交渉して引きだすのみ。

袁紹「……わかりましたわ。兵糧くらい、唸るほどありますもの。

恵んで差し上げますわ」

趙幻「ありがたい。……続いて、兵を貸していただきたい。なにぶん、我らは弱小勢力。かの誉れ高き袁家の兵が居れば、それこそ百人力というものです。故に、そのお力をお借りしたい」

袁紹「なかなか言うじゃありませんの♪それで、数の方はお幾つ？５００？それとも１０００？」

趙幻「５０００人。出来ればそれ以上を所望します」

袁紹の顔が、俺の提示した人数に歪んでいく。５００？１０００？足りないな。その程度で俺達は董卓軍の前には立てない。俺達を前に立たせたいのなら、提示した数かそれ以上を貸して頂かなければ。

不敵な笑みをもらし、俺は袁紹の不愉快さが露わになっている顔を見つめる。

趙幻「それに、袁紹殿にも悪い話ではないのですが」

袁紹「どういうことです？」

趙幻「我らに与えられたのは先陣に立つ誉れ高き場所。しかし、私達は先も言った通り弱小勢力にございます。ならば、袁紹殿が兵を貸して頂き、敵を打ち破ればどうなりますかな？我らの中に居て、戦果を上げるは袁紹殿の精鋭達。我らは袁紹殿のおかげで先陣を打ち破った。そうなれば、袁家の名も一層高まると思いませぬか？」

袁紹「……良いでしょう。貸して差し上げますわ。５０００ですわ

ね」

やはり中身を開けば栄誉ばかりに目が行く馬鹿か。

これが当主となると、袁家の未来は暗い絶望だな。

趙幻「流石は袁紹殿。総大将の持つべき懐の深さを持っておられる。器が大きい」

袁紹「当たり前でしょう。三国一の名家の当主である私の器は、それこそ三国一というものですわ♪おーっほっほっほ♪」

もう、何だか呆れを通り越して可愛く見えて来たのだから不思議なものだ。愛すべき馬鹿とはこういう奴の事をいうのか？

御世辞か挑発で、簡単に乗ってくれる奴は三国中を探してもなかなか見つからないだろう。そういう意味では、袁紹は間違いなく『貴重』な人材だと俺は思う。

劉備「ねえ、雅也君。袁紹さんって扱いやすい人だねー。……びっくりしちゃったよ」

この娘も、中々毒のある言葉を吐く。

趙幻「扱い易いならばそれで良い。他は気にしたら負けだ」

はぁ。と溜息を吐いてとりあえずこの先、なんとかなりそうだなと考える。

しかし、袁紹の財力と兵力は脅威と見て間違いないだろうな。こ

れが味方にならずとも、敵には回したくない。ならば、世辞も惜しまぬ。

劉備「じゃあ、袁紹さん。先陣は承るけど、作戦はどうするの？それを示してくれないと動きようがないと思うんだけど……」

桃香が今後の方針を聞こうと、袁紹の胸奥を叩いてみる。

すると、彼女の口からまた信じ難く、疲れる様な言葉が飛び出してきた。

袁紹「作戦？そのようなものありませんわ」

呆れたという表情と共に、何を言っているのだこいつらはという心の声が聞こえてきた気がするが気のせいだろうか？

有り得ん。絶対に有り得ん。ここまで馬鹿だとは思わなかった。作戦がないだと？そんな戦い方、黄巾党だって一部はしないぞ！？

劉備「作戦……考えてないんですかー！？」

袁紹「な、何ですの。何でそんなに驚くんですの？」

俺達からすれば、何故お前がそんなに驚いているのかが不思議だ。

劉備「だ、だって……普通、軍を動かす場合は作戦に沿って動かすじゃないですか？作戦が無いんじゃ、どうやって進軍すれば良いのか……」

袁紹「ああ、それならば決まっていますわ」

趙幻「で、ですよね……。作戦ぐらい、決めてありますよね。袁紹殿、お戯れもほどほどにしてくだされ。少し驚いたではありませんか」

劉備「ホントだねー。あははは♪」

……そうだよな。うん、そうであると信じたいが俺は何かを忘れている気がする。さっきの驚きのせいで、何かがすっぽりと抜け落ちた気がする。嫌な予感が止まらない。ロマンティック並に止まらない。

趙幻「……それで、作戦は？」

袁紹「雄々しく、勇ましく、華麗に進軍、ですわ♪」

閑古鳥が鳴いた。俺達は絶句した。やっぱこいつ馬鹿だ！！！

とりあえず、それからこの馬鹿から言質を取る為に質問し、『雄々しく、勇ましく、華麗に進軍』さえすれば後は個々の部隊で自由に動き回って良いと言わせ、後は兵糧と兵士の手配を確約させてから桃香と共に、その場を去ったのだった。

檄文。合流。反董卓連合。（後書き）

わかる人にはわかってしまうと思いますが、原作からほとんどセリフを借りております。
袁紹はやはり、バカ。書いていて思った感想はそれですね。
嫌いじゃないんですがねぇ・・・。
あ、姉者は何気なしに合流頂きました。
エピソード省いてすいません。

孫策。共同。シ水関

連合軍は今、複数の諸侯の集まりによりその兵力を董卓軍と同等程度とするも、あの袁紹の言った作戦のせいか各々で戦略を張り巡らさずを得ない状況もあり、まとまりというモノの『ま』の字すら伺えない。

各諸侯の首脳陣は上辺だけ袁紹を総大将としているが、結局の所他をどう出し抜くか。どうやって功を手にするかを考えている始末。

未だに連携を組もう、共に戦おうとする諸侯は現れず、とどのつまり腹の探り合いはあの軍議から続いていた。

そんな中で俺達には幸か不幸か戦陣に立つ事をかの『総大将殿』から言いつけられており、『戦果』を手に入れる可能性に最も近く、『敗走』の可能性を孕んでいる最も危険な場所に行かざるを得ない。

とりあえず、愛紗達には後ろ向きに考える事はせず、敢えて前向きに良かったと捉える事を勧めれば、「そうやって考えられるのはお前だけだ」と皆に呆れられた。

……一応断っておくが、俺は決して馬鹿ではない。馬鹿ではないと信じている。

兎にも角にも、俺達の抱えている問題と向かい合わなければ何も始まらない。

ちなみに、袁紹は約束通り５０００の兵と１ヶ月分の兵糧を此方に手配して送ってくれた。

やはり、そこは無駄にプライドの高い名家か。もし約束を反故すれば、その名に傷が付くからな。それを計算に入れての交渉だったわけだが。

というわけで、俺は朱里と雛里と共に部隊の編成や戦略、どうやって立ちはだかる難関の『シ水関』を突破するかを行軍が止る夜にこれでもかと論じていた。

そんなある日――。

「やっほー。ここが劉備の天幕で合ってる？」

今日もまた軍議をしようとしていた時、彼女は現れた。

身軽に、まるで旧友を遊びに誘うかの様な雰囲気を醸し出し、現れた。

褐色の肌に桃香よりも色素の濃い紫掛かった桃色の髪。露出度が高くて目のやり場に少し困る服。髪飾りは煌びやかで、その双眼は鋭くつり上がっており、整った顔立ちは美しい。

だが、雰囲気はフランクだった。軽やか過ぎて、口に出せなかった。

「あ、あれ？何でみんな私の事を見てるのかな？もしかして、間違えた？」

「馬鹿。違う。貴女があまりにも軽率だから、皆呆れているのだ」

その場に居た桃香傘下の面々はそんな彼女達のやり取りにただ呆然とするしかなく、後に現れた長い黒髪を靡かせる眼鏡を掛けた女性は最初に現れた彼女に呆れていた。

趙幻「あー、んん。して、こんな夜更けに何用かな？周瑜殿？」

そんな2人のせいでフリーズしていた思考を何とか動かし、わざとらしく咳払いをしてから尋ねる。

周瑜「お前は……」

趙幻「劉備様が家臣、趙幻だ。先の軍議では顔を出し、名乗る前に貴女は出て行ってしまわれたからな」

周瑜「ああ、劉備殿の後ろにいた者か。しかし、男だったのか。声を聞くまでわからなかったぞ？」

……はいはい。御約束御約束。

劉備「雅也君、ほら、落ち込まないで。仕方ないよ、雅也君綺麗だもん」

桃香、それは慰めちゃう。トドメや。

関羽「周瑜、という事は孫策軍の軍師の？何用でここに参った」

愛紗も思考を働かせ始めたのか周瑜殿に尋ね、少しだけ警戒しながらジッと2人を見る。

周瑜殿がここに来た理由、有り得なくもないが今一番排斥してい

た可能性かもしれないが……。

「そうね。少し劉備を見たかったから、かしら」

愛紗の問いに答えたのは、先程までフランクな雰囲気だった女性だった。

だが、今その身に纏うのは殺気であり、俺達を品定めする様な鋭い目つきが肉食獣を連想させる。

張飛・関羽・趙雲「ッ！！！」

その異様な気配に鈴々達はそれぞれ武器を構えるが、俺は前に出て右手で収めろと動きで伝え、彼女に殺気をお返しする。

趙幻「喧嘩を売りに来たのなら余所にしてくれないか？」

「あはは、冗談よ。冗談。挨拶が遅れたわね。私は孫策。一応、袁術ちゃんの客将をさせてもらってる者よ」

孫策。その名を聞いて、この場にいる周瑜殿を除く全員が驚いた。

周瑜「はぁ……。済まない、今更だが我が主の無礼を許してくれ」

孫策「ちょっと冥琳～。何でそこで溜め息吐くのよー」

周瑜「それで、此度ここを訪れた目的なのだが……」

孫策「めーいりーん？めーいりーん？」

周瑜「煩いぞ雪蓮。話が進まない」

一蹴の下、眼鏡を光らせた周瑜殿の言葉に騒がしかった孫策殿は小さくなる。

格好いいな周瑜殿。そして格好悪いな孫策殿。

劉備「な、仲良しなんですね……」

どう対応して良いかわかっていないのか、桃香は苦笑いで感想を漏らす。

愛紗達もどうするか決め倦ねているようで、相手が相手なだけに下手に動けないらしい。

孫策だもんな。各諸侯の代表様の1人だもんな。彼女は。

諸葛亮「それで、孫策さんと周瑜さんは何故この天幕に？」

そこで漸く、思考を取り戻したのか朱里が軍師らしく固い表情を浮かべて孫策殿達に問い掛ける。

周瑜「ああ、その理由なのだが。少し折り入った話でな。出来れば劉備殿や軍師の面々以外は外に出ていて欲しいのだ。それからでもよろしいかな？」

朱里の問いに、周瑜殿は眼鏡を指先でクイっと上げる仕草をしながら答える。

ふむ、どうやら他に聞かれてはマズい話なのか。愛紗達の表情は

怪訝そうだ。不満だらけ、という事だろう。

劉備「雅也君、どうしよう……」

そこで桃香は何故俺に尋ねて来る。信頼してくれているのは嬉しいが、俺よりも朱里や雛里に聞けば良いと思うのに。

趙幻「耳を立てられてはマズい話か？」

周瑜「少々、な」

趙幻「あいわかった。姉者、愛紗、鈴々。少しだけ席を外してくれ。耳があれば排除してくれると助かる」

趙雲「そうか。雅也に言われては仕方ないな」

関羽「桃香様！」

劉備「ごめんね愛紗ちゃん。鈴々ちゃんも良いかな？」

張飛「よくわからないけど、わかったのだ！」

愛紗はまだ不満気だが、姉者に連れられて天幕を出て行く。鈴々は素直に聞いてくれたので、良かったと心の中で呟いた。

孫策「あら、あなたは武官じゃないの？」

趙幻「私は武官兼文官です。これでも策を考える頭はありましてね。まあ、この２人には負けますが……」

孫策殿の問いに、俺は朱里と雛里に視線を送りながら答える。

すると、周瑜殿が何か俺を見定める様に見て来た。

周瑜「天は人に二物を与えんというが、それは嘘なようだな」

趙幻「周瑜殿に言われては、それは身に余る光栄ですな」

何か思う所があったのだろう、周瑜殿に溜め息混じりにそう言われてしまったが、誉め言葉だと解釈する。

呉の頭脳と言われる彼女に評価されるとは、ふふふ。嬉しいものだ。

孫策「魏には噂の天の御遣いが居て、劉備の所には優秀な将が沢山いて、何だか羨ましいわね」

趙幻「江東の麒麟児と称されるあなたが何を言う。優秀な仲間が多いのはそちらもでしょうに」

孫策「あら、慰めてくれるの？お姉さん嬉しいー」

世辞と取られたのか、孫策殿の反応は演技っぽかった。

周瑜「では、そろそろ本題としよう。劉備殿、差し出がましいとは思うが我等にも戦陣に立たせて頂けないだろうか」

劉備「それって……」

趙幻「共に戦ってくれるとか？」

周瑜殿は、俺と桃香が驚愕の声を上げると首を縦に振り、肯定する。

朱里と雛里もその申し出が予想外だったらしく、何かあるのではと怪訝の表情を浮かべていた。

それを読み取ったのか、孫策殿が大丈夫よ、と呟いてから溜め息を吐いて口を紡ぐ。

孫策「忌々しい事に、袁術ちゃんが『お主達も前に出て手柄を立てるのじゃー』って言って来たのよ」

趙幻「なる程……」

孫策殿の苦々しさを含んだ説明に、俺は何となく袁術の思っている事を何となく把握する。

袁紹に取引を引っ掛けた時、口を挟んでは来なかったが彼女はまだあそこにいた。

だから、俺の言った『袁紹の精鋭』が云々の件も聞き耳に挟んでいたのだろう。

その事をその場にいる全員に話せば、重々しい溜め息が孫策殿と周瑜殿から漏れた。

孫策「恨むわよ、趙幻」

それはお断りしたいものだ。

キッ、と恨めし気に睨んで来る孫策殿にそう心の中で呟く。

鳳統「とはいえ、お二人には悪いですがそのおかげで私達の負担が減る、というのは有り難いです」

周瑜「では、お受けして頂けると？」

劉備「はいっ。私達だけだと心細かったですし、お受けします」

そんな中で、雛里と桃香は周瑜殿と話を進め、協力する事に同意を示した。

趙幻「しかし、曹操殿と同じくそちらも最小限の損害で最大限の風評を得つつ、各諸侯の実力を量る事に徹するかと思っていたのだがな」

周瑜「それをさせないように仕向けたのは誰だかな」

趙幻「これは手厳しい」

ベッ、と舌を出しながらわざとらしくおどけて見せる。

図らずも、袁紹に対する袁術の見栄を刺激したのは俺だと言うのだから、口は災いを呼ぶモノだなと思う。

災いは己でなく、他人に降り懸かってしまったがそのおかげで協力体制が敷けるのであれば儲けだ。

こうして、俺達は思わぬ協力者を得る事になった。

その事を呼び戻した愛紗達にも説明し、その後は周瑜殿達とは協力を前提に置いて、作戦を練るという方針を決め、別れた。

◇

――シ水関とは、俺達連合軍が洛陽まで進軍する際に、東から向かう為に通る関の一つである。

その先には虎牢関と呼ばれる関もあるが、この二つが俺達に立ちはだかる要塞だ。両脇に崖がそびえ立ち、その特筆すべき地形は難攻不落と世に名高い。

そのシ水関はもう既に目と鼻の先なのだが、その大きさには思わず舌を巻いた。

以前から放っていた斥候の報告によれば、シ水関に立て籠もる董卓軍は、約五万。

そのうち強敵たり得るのは、猛将として名高い華雄将軍が率いる籠城軍の主力部隊で、約三万。

いずれも装備の質、兵の質共に高く、士気も大いに騰がっているらしく、戦いとしては厳しくなるのはどう見ても分かりきっていた。

劉備「ねえねえ、雅也君。そう言えば作戦が発表されてないけど、どうするの？」

隣で馬に跨り、不安そうな表情を浮かべている桃香が尋ねてくる。

そう。今回のシ水関攻略における作戦は未だ発表せず、桃香達に

は伝わっていない。

だが、それもその筈だ。功城戦の作戦など、端から考えていないのだから。

趙幻「功城戦の作戦など、ないぞ」

張飛「それってどういうことなのだ？」

俺の答えにいの一番で疑問を口にしたのは鈴々だった。

諸葛亮「作戦が無いわけではありませんよ。ただ、不安の気持ちもわかります」

鳳統「だけど、こと功城戦に限って言えば、作戦や策らしきものは必要ではないですから、雅也さんの言ったことは間違いはありません」

その中で朱里と雛里がフォローに入ってくれて、愛紗達はどういうことだとそれぞれ首を傾げる。

桃香がそうなの？と尋ねると、雛里が口を開いた。

鳳統「はい。功城戦はどう頑張ってみても、圧倒的に籠城側が有利ですから。……なので野戦とは違い、策というものは調略方面でしか活躍できないんです」

諸葛亮「それに今回は董卓さん一人を相手に、複数の諸侯が連合を組んでの戦いですから、挟撃される心配も少ないでしょう」

関羽「つまり……作戦無しで戦えということか」

愛紗の言葉に、朱里と雛里は申し訳なさそうに表情を曇らせる。

鳳統「戦況を見て、その都度即応する……ということしか言えませんです……ごめんなさい」

張飛「雛里が謝ることじゃないのだ。悪いのはアンポンタンな袁紹なのだ」

謝る雛里に、鈴々が袁紹への不満を口にしながらフォローに回る。

確かに、雛里が謝ることではないのは確かだ。全ての元凶は、鈴々の言うとおり袁紹にある。

アレが総大将と言うのは些か不満だが、流れとしては仕方ないと割り切る他なかった。

しかし、アレは本当に無能だ。確かに兵力、財力に置いては素晴らしいが本人に能力はない。

その兵力に圧されている現状には憤りを感じざるを得ないが、今は我慢する他ないのがまた悔しく思う。

今だって、袁紹は軍の真ん中を陣取りその兵力を誇示しているのだから面倒くさい。

俺達が逃げられない様にする為の牽制か。はたまた俺達を生きた的にして相手が弱った所を攻め込む為か。

どちらにせよ、他諸侯にとっては邪魔者以外の何でもないだろう。先陣を俺達に任せているのなら、後方で縮こまって居れば良い物を。卑しい奴め。

趙雲「しかし雅也よ。ならば何故夜な夜な軍議に勤しんでいたのだ？何か考えてはいるのだろう？」

そこで、姉者が疑問を俺に投げつけてくる。

趙幻「ああ。それについての説明をしよう。さっき朱里が言っていた通り、シ水関を守る将は華雄将軍だ。調べてみれば、華雄将軍は己の武に誇りを持っているらしい。故に、そこを攻めてみることにした」

関羽「ふむ。自らの武に誇りを持っている人間ならば、それを穢されることを嫌うはず。……彼奴を罵って関より引き出す、という事か？」

流石は察しの良い愛紗だ。そこまで理解してくれているのなら、後は補足をするだけだな。

趙雲「しかし一軍の将となっている者が、見え透いた挑発に乗るだろうか？」

そして、姉者の問いも尤もだ。そんな簡単な人間ならば、此方も苦労はしないだろう。

趙幻「華雄はその昔、孫策殿の母。孫堅殿に敗れているのだよ」

趙雲「ほう……」

趙幻「罵りには、孫策殿にしてもらおうと思っている。勿論、我々とて参加はするがな」

孫策殿の協力の申し出は、こういう意味ではまさしく僥倖だった。

元々は挑発で関から引き出す作戦だったが、孫策殿の協力があればその成功率はグンと上がる。

劉備「その作戦、大丈夫かなぁ……」

桃香の不安は、多分作戦自体が成功するかではなく華雄が出て来た時の事だろう。

もし作戦が成功して華雄が出て来たとして、それを受け止めるのは俺達と孫策殿達の役目だ。

趙幻「二軍で受けるにしても、相手の数を考えると些か心配になるか？」

桃香「うん……」

俺の読みは当たっていたのか、桃香に尋ねると心配そうに小さく頷かれた。

諸葛亮「全軍火の玉になって攻め立ててくる華雄将軍を、どういなすか……ですね」

鳳統「それも、雅也さんや朱里ちゃん。それに周瑜さん達とも話し合いました」

成功を仮定した場合、どうするかも既に決めてある。伊達に軍議をしているわけじゃない。

それに、相手が関に籠もっていられるよりはやりようだって幾らでもあるのだ。

通常、城や砦に籠もっている的にはその三倍の兵力を持ってして当たらねば勝てないと言われている。

その場合、俺達では現状打破出来る訳がない。だから、どうやっても結局引きずり出すしか手はないのだ。故に、その時の対処だってちゃんと考えてある。

趙幻「では唐突だが質問。鈴々だったらどうする？」

張飛「突撃、粉砕、勝利なのだ！」

どこぞの馬鹿が頭を過ぎった気がするが、考えない様にする。

趙幻「そう簡単に行けば楽なのだがね。……私達が考えたのは、華雄の部隊を袁紹になすりつけることだ」

関羽「なんと。それは可能なのか？」

鳳統「私たちの部隊の後ろには、中軍として袁紹さんと袁術さんの大部隊が控えてます。……押し込まれたふりをして後退すれば、充分に可能かと……」

雛里の補足説明に、皆が皆それぞれ賛同の意を表明する。

立場の弱さをつかれて先陣を押し付けられた恨みがあるからか。これは孫策殿達も先より同意してもらっていて、彼女も袁術に対する恨みがあるらしい。

趙幻「作戦の内容はこうだ。華雄将軍が突出した際、我々と孫策殿達はその攻撃を一度だけ正面で受け止め、押し返す」

諸葛亮「その後、再度押し出してくる華雄さんの攻撃を受け止めるふりをして……」

趙雲「なるほど。そこで後退すると」

鳳統「はい。でもただの後退では華雄さんも乗ってこないと思いますし、袁紹さん達にも気取られてしまう可能性があります。ですから、本気で戦線を崩さないと」

関羽「ふーむ……。戦線が崩れれば、そのまま一気に瓦解する可能性もある。危険な賭になるな」

趙幻「いや、そうでもないぞ愛紗。我々は連合軍だ」

愛紗の杞憂はわかるが、それで瓦解するというのは他の諸侯から見れば捨て置けない状況だ。

趙雲「つまり、他の諸侯が助け船を出すと？」

趙幻「姉者の問には肯定で返そう。他の諸侯とて、負けられない理由や思惑がある。それを達成させるには、助け船を出さざるを得ないだろう」

劉備「えーっと……。つまり、袁紹さん達だけを巻き込むんじゃなくて、みんなを巻き込むんじゃえってこと？」

桃香の言い方に難はあるが、つまりそういうことだった。

抵抗が無いわけではないが、しかして静観を決められては戦う俺達からすればあまり良い物ではない。

趙幻「私達だけが激戦を任されるのは我慢ならないからな。この際、巻き込める人間は皆巻き込んでしまおう」

趙雲「これはまた。なかなか乱暴な方針だな、雅也」

趙幻「姉者は反対か？」

趙雲「いやいや。大賛成だ。乱暴大いに結構。弱小の我らが生き残るために他者を利用するのは、正義というものだ」

自分の顎に手を当て、姉者はクスクスと笑い俺も両腕を組んでクツクツと笑う。

劉備「うわー、凄い黒い笑顔だー」

趙幻「そう言ってくれるな。……他は、異存はないか？」

半ば引き気味の桃香を横目に、フッと小さく鼻を鳴らした後そう尋ねる。

兎に角生き残る事を優先に考えると、と桃香が言えば他の面々も

賛成の意を示してくれた。

趙幻「決定だな。……愛紗は私と共に先陣の中の先陣に出てくれ。うまく戦線を崩すために一芝居打つぞ」

関羽「大任だな。任されよう」

趙幻「頼むぞ。雛里は私達の補佐を。姉者は右翼で孫策殿の軍と共に出てくれ。朱里はその補佐を頼む。連携の要だ。頑張ってくれ」

趙雲「あいわかった」

諸葛亮「はいっ！」

趙幻「鈴々と桃香は本陣で崩れてくる私達を援護出来るようにしてくれ」

張飛「嫌なのだ！鈴々も先陣が良い！鈴々だって暴れたいのだ！本陣で待機なんてつまんないのだ！」

趙幻「我が儘を言うな。それに、撤退してくる私達を援護するには桃香だけだと些か力不足。鈴々には切り札として、私達を助けて欲しい。これは、鈴々にしか出来ない特別な任務なんだ。だから、頼む」

張飛「特別……。わかったのだ！鈴々ね、桃香を守りながら、お兄ちゃん達も助けるのだ！」

趙幻「ああ、頼りにしているぞ」

張飛「任せろなのだ！」

どうにか上機嫌になってくれた鈴々を見て、ホッと一安心する。

彼女には悪いが今回は本陣で桃香を守ってもらわなければ困る。主の居る所を手薄にするわけにはいかないし、作戦の立案者の一人である俺が後ろで待っているわけにはいかない。

そこに戦いたいから、という自身の我が儘が混ざっているわけではないが……。戦いはただ敵を倒せば良いわけでもない。駆け引きだって必要なのだから。

関羽「……見事だな、雅也」

そんな事を考えていれば、愛紗から労いの言葉を掛けられた。

趙幻「いや、そうでもないさ。それに、桃香を守るのだって大事なことだ。鈴々にはそれをして欲しかっただけだよ」

口八丁で言いくるめたわけだから、鈴々に少し後ろめたい気持ちもあるけれど決して嘘ではない。

趙幻「それに、撤退の援護をしっかり出来るか否かが成否の要だから。桃香に鈴々の手綱が握れるかは少々不安だがな」

趙雲「ふふふ、雅也も人が悪いな」

姉者、それは心外だと言わせてもらおう。

関羽「しかし、あやつはたまに暴走しますからね。雅也の心配もわ

かる……」

趙幻「鈴々が我慢出来る事を信じよう。愛紗、背中は任せた。姉者、しっかりな」

関羽「ああ。雅也こそ、頼むぞ」

趙雲「任されよう。では、私は右翼側へと向かう。雅也、武運を」

趙幻「姉者もな」

それだけ言い交わし、姉者は朱里を連れて孫策殿が部隊を展開している右翼側へと走って行く。

趙幻「愛紗、行こう」

関羽「うむ」

そして俺達もまた、先陣へと駆けて行った。

シ水関。華雄。一騎打ち。（前書き）

シ水関攻防を一気に。

色々とやっちゃった感があるのを否めない。

シ水関。華雄。一騎打ち。

持ち場に着き、双眸に映る巨大な要塞を静かに見据える。

心を高ぶらせる絶対的な緊張感。愛紗の表情は固く、翅麒も小さく震えている。

デカいなんてモノじゃない。このシ水関は確かに難攻不落と言われるに相応しい形をしていた。

この壁は梯子を使っても登れないだろう。上から矢を射られれば部隊を退かざるを得ないかもしれない。

手に汗が滲む。願わくば、華雄が簡単に出て来てくれれば良いのだが……。

趙幻「来たか……！」

後方から鳴る銅鑼の後、桃香の発した号令が俺達に進めと命じてくる。

愛紗の顔を見れば、彼女もこちらを向いていて互いに一回だけ無言で頷くと、先陣としてゆっくりと兵達を率いて前進を始めた。

「趙幻様……」

趙幻「貴様は確かあの時の」

そんな中で、槍を携えている女性兵士が翅麒に跨った俺の横に着

き声を掛けてくる。

彼女は確か、双直刀が壊れて初めて弓で戦った時に矢筒を交換してくれた者か。弓兵だった筈だが……。

趙幻「そういえば、関羽の隊に組み込んであったな。名は確か……」

周倉「周倉です。真名は【皐】と申します」

趙幻「真名を授けてくれたならば、私も授けなければな。私は【雅也】だ」

周倉……皐は凛々しい顔をやや赤らめありがとうございますと呟くと、直ぐにまた真剣な顔付きに戻した。

周倉「この度の作戦は、雅也様も立案に関わったと聞きますが」

趙幻「ああ。そうだが」

周倉「ならば、成功します。華雄将軍は良き武将ですが猪突猛進な方ですから」

趙幻「ほう？何か心当たりがあるのか」

皐の言葉に、関心を寄せながら呟く。

周倉「私は元々涼州の出で、賊に身を落としいました。賊として各地を回っていた際、華雄将軍の部隊と戦った事があります。私達は敗れてしまいましたが……」

趙幻「なる程。経験から来る進言か。ありがとう」

そういえば、皐は黄巾党から降って来た兵士だったな。確か俺の殺気と気迫に耐えれた人物だった気がするが……。

趙幻「皐よ」

周倉「はい」

趙幻「武運を祈る」

周倉「……はいっ！雅也様も、御武運をっ！！」

そう言い合って、皐は自分の部隊へと戻って行った。

賊に身を落としていたと言っていたが、元々は良い娘なのだろう。話していて、そんな印象を持った。

俺達の軍には、黄巾党から降って来た奴らは少なくない。改心した者、黄巾党に嫌気がさしていた者、理由がある者など様々だが、今では立派な仲間であると胸を張れる。

ならば、より一層気合いを入れよう。そう思った俺は、眼前のシ水関を見て胸を熱くさせたのだった。

◇

シ水関にある門の前、五里程離れた場所に兵士達を停止させた俺達は、孫策殿と合流して様子を見ている。

これから挑発の時間なのだが、どうもシ水関の方の動きがおかしい。

城壁の上には兵が少数いるだけで、まるで出現を思わせる様な雰囲気が出ていた。

趙幻「おかしい」

孫策「そうね。敵の動きが変だわ」

孫策殿も気付いているらしく、秀麗な眉を顰めて表情を歪めている。

関羽「……まさか華雄が突出してくると言うのだろうか」

趙幻「そうなれば楽だが……。砦という絶対的に有利を捨てて出て来るなど、愚の骨頂だぞ？」

希望的観測はよろしくないが、愛紗の言った通りそのまさかに成り得るかもしれない可能性が出て来たのも事実。

孫策「そうだけど、なんかおかしいのよねー」

関羽「……とりあえず、様子見だな」

怪訝な表情を浮かべている孫策殿は、愛紗の言葉に同意しこの場はとりあえず静観する事が決まる。

その直後、シ水関から何か鈍く軋む轟音が響き、俺達は呆然としながら驚愕した。

孫策「ウソッ！？」

趙幻「開門してきた！？旗は……華、の一文字。華雄か……」

思わず、顔を両手で覆いたくなるような現実が目の前にあった。

この為に色々と考えて来たと言うのに、あの華雄は色んな意味でその全てを水の泡に帰して来たのだ。

関羽「……なぁ、雅也よ」

趙幻「言うな」

孫策「でもね、趙幻」

趙幻「頼む、何も言わないでくだされ」

二人の言いたい事は予想がつく。せっかく考えた作戦がこうも無駄になると、当然空しくもなるっての。

趙幻「……まあ良い。挑発する時間が省けた。相手が勝手に出て来たのだから、大助かりだ」

孫策「そうね。それじゃ私は自分の陣に戻るわ。今頃、冥琳が趙幻と同じように頭抱えてそうだし」

孫策殿はそう言って、馬を走らせ俺達から離れて行く。

……この頭痛は、多分この作戦の立案に関わった者ならわかって

くれるだろう。それくらい、俺達はこの作戦に頭を捻ったのだから。
しかし、そうやって頭を抱えている暇はない。敵は出て来ている。それもまた現実で、ここからが本番だ。
趙幻「では、雲長殿。私の背中、あなたに預けよう」
関羽「我が背中も同様だ、守殻殿。……参るぞ」
趙幻「応っ！」
小さく、愛紗とそう言い合い俺はクスリと笑みを零す。
そして一度深く息を吸い込み、頭を切り替えてから腰布の両脇に差してある干将・莫耶を抜いた。
愛紗も青龍堰月刀を構え、後方の部隊へと檄を飛ばす為に口を紡ぐ。
関羽「……聞け！勇敢なる兵士達よ！」
趙幻「いよいよ戦いの時は来た！この戦いこそ、圧制に苦しむ庶人を解放する、義の戦い！！」
関羽「恐れるな！勇気を示せ！皆の心にある思い、皆が持つ力……その全てを振り絞り、勝利の栄光を勝ち取るために！」
趙幻「我らは勝つ！我らは勝利を手にする！！それこそが、我らの運命！そして道理！！」

「「「「然り！！！然り！！！然り！！！然り！！！」」」」

関羽「我らに勝利を！」

「「「「勝利を！！！！」」」」

趙幻「我らに栄光をっ！！」

「「「「栄光を！！！！」」」」

関羽「全軍、抜刀せよ！」

趙幻「位置につけ！！」

関羽&趙幻「「皆の命、私が預かる！！」」

檄を飛ばし終えれば、我が軍から歓声に似た雄叫びが大気を震わせた。

孫策殿の軍からも同じように咆哮が起き、向こうも準備が整ったと察する。

対面の華雄軍も、こちらの突撃に対し正面から打ち合うつもりの様だ。

その意気や良し。だが、貴様の判断は城を出た時から間違っている！！

趙幻「来るぞ！……愛紗！」

関羽「ああっ！全軍魚鱗の陣に移行！敵の突撃に真っ正面からぶち当たり、孫策軍と連携してその勢いをもって敵を後退させる！」

気迫を纏い、武将然とした愛紗の指揮は続く。

関羽「その後はすぐに後退する！時機を見失うな！合図を聞き漏らすな！一瞬の油断が命取りになることを忘れるな！！」

趙幻「我らの旗に付き従えば勝利は間違いなし！勇を振るえ！名を惜しめ！勝利の栄光を掴むために！！」

関羽「全軍……突撃ぃぃぃぃぃぃっ！！」

魚鱗の陣に陣形を整えた兵士達と共に、愛紗の咆哮を合図にして突撃が開始する。

先の咆哮以上の声が兵士達から発せられ、目前に迫る敵兵とぶつかり合って人が宙を舞った。

全力で人間がぶつかり合い、後ろからは更に人が押し寄せて来るのだから、体は地面に付して押し潰されるか反動で上へと飛び上がるしかない。

鉄と鉄が打ち合わされる鋭い音が、肉体がぶつかり合う鈍い音が、戦場に不協和音を奏でていた。

趙幻「鈴々が我慢しているのだ。私が我慢せずして何とする……！」

鼻を突く火花の香り、兵士達の相手を殺すと決意した殺気と気迫、血と汗が混ざり合うえげつない匂い、その全てが俺の闘争本能を掻

き立てるが、理性でそれを抑えつける。

「死ねぇぇぇぇ！！」

「殺す！殺す殺す殺す殺す殺すっ！！」

死への恐怖を紛らわすために若き兵士達がまるで呪詛のように、死を齎す為の言葉を大声で喚き散らしていた。

関羽「皆、離れるな！三人一組になって敵の兵に当たるんだ！」

趙幻「友を守れ！守れば友がお前を守ってくれる！そう信じて突き進め！！このまま一気に、敵を押し返せぇぇぇぇっ！！」

俺達の指示に兵士達はそれぞれ三人で編成を組み、確実に敵を倒しながら少しずつ押し返して行く。

だが、やはり数の問題がある。幾ら二軍を合わせたとしても、前に居る我らよりも敵の数は圧倒的に多い。

しかし、それとて最初からわかっていた事だ。

関羽「雅也、相手は距離をとって突貫するつもりらしい」

愛紗の言葉に敵の全体を翅麒の上から見てみれば、確かに退いて陣形を組み換え始めている。

鋒矢の陣で突撃力を高め、俺達の軍を押し抜ける腹積もりか。

しかし、それは俺達にしても好機。

趙幻「ならば頃合いや良し。敵の突貫前に退くぞ、愛紗。誰かある！！」

「はっ！ここにっ！」

趙幻「敵の突撃前を見計らい、後退する！周瑜殿に伝えてくれっ！」

「御意！」

関羽「皆の者、秩序を守りつつ、作戦通りに後退する。我が旗に続け！」

「「「「応っ！！！！」」」」

愛紗の声に兵士達は陣形を整え、少しずつ後退の為に下がってくる。

それと同時に華雄軍は突撃を開始、俺達へと向けて勢い良く迫って来た。

相手からしてみれば、俺達は突撃を受けて敗走を始めた様に見えるだろう。

だが、それが作戦通りなのだから兵達も覚悟を決めて後退をしながら戦いを続けている。その分、心なしか起こる被害も通常よりも少なく思える。

雛里は先に桃香達の下へと戻っているだろうか。いや、戻っている筈だ。

後は本陣と合流し、袁紹の軍を巻き込んでから押し返すのみ。
ふふふ、袁紹よ。俺達を当て馬に選んだツケ、存分に払ってもらうぞ。

◇

†袁紹ｓｉｄｅ†

連合軍の中軍、袁紹様の軍の中で前線を眺めていた私こと顔良――斗詩は、その様子におかしなモノを感じていた。

顔良「あれぇ～……？」

「どうしたんだよ斗詩ぃ。変な声出して」
変な声なんて失礼な。そんな事を思いながら、両手を後頭部に回して組んで私に声を掛けて来た文醜――猪々子こと文ちゃんの方に顔を向ける。

顔良「……えっとね、何だか前線がすごく混乱してるような気がするの」

文醜「前線が？……んーどれどれ？」

私の言葉に、文ちゃんは額に手を当てながら目を細めて前線の方を眺める。

顔良「砂塵の舞いかたが尋常じゃない気がしない？」

文醜「んー……ありゃ？マジだ。めちゃくちゃ砂塵が舞ってるなぁ」

文ちゃんもその様子を眺めて気付いたのか、その口調は何時もより重くなっていた。

顔良「先陣は劉備さんだっけ？押されてるのかな？」

文醜「弱小だからなー、劉備ってお姉ちゃんのとこ。……こりゃこっちにまで流れてくるな」

そう言って、仕方なさそうに呟く文ちゃん。確かに劉備さんは弱小勢力だけど、そんなハッキリ言ったらさすがに可哀想じゃないかなぁ……。

顔良「……私、各部署に行って戦闘準備の指示を出しておくから、文ちゃんは姫への報告、お願いね？」

文醜「姫に報告ぅ～？そんなのしなくても、あたいたちでチャチャッとやっちゃったら良いじゃん」

それはさすがに駄目だと思うんだけどなぁ……。

顔良「またそんなこと言って～。のけ者にされたってあとで怒られるよぉ？」

めんどくさそうにする文ちゃんに、私はそう言って窘める。

姫はあれで、私達が勝手に何かしてると寂しがって怒るから手に負えない。そこが可愛い所でもあるんだけど……。

文醜「大丈夫大丈夫。どうせ戦況を姫に伝えたって、ちゃんとした指示なんて来ないって。『雄々しく、勇ましく、華麗に反撃なさい』……って言われるだけなんだから、報告したって無駄無駄」

文ちゃんはそう言ってから、はぁっと肩を竦めた。

わかってるけど、それもそれで酷い言い草だと思うのは私だけかなぁ。でも、文ちゃんって悪気なく本音を言っちゃう子だし、悪く言えないんだよね……。

顔良「もぉ～。仕方ないなぁ～。じゃあ姫には私から伝えておくから、文ちゃんは戦闘準備の指示、出しておいてね？」

文醜「ほいよー」

まったく、わかってるんだかわかってないんだか。でも、文ちゃんだって姫に仕える武将なんだし、ちゃんとやってくれるって信じてるからね？

そう思いながら、私は文ちゃんに部隊の指示を任せて姫を探しに行く。

顔良「姫ぇ～。姫ぇ～、どこですかー？」

袁紹「あら。何ですの顔良さん。情けない声を出して」

文ちゃんに続いて姫にまで言われてしまでた。傷付くなぁ……。

顔良「うっ……そんなに情けないですか、私の声」

袁紹「ええ。苦労しても報われず、涙を流すしかない庶人のように情けない声でしたわ」

……当たってるなぁ。だって、何時も姫と文ちゃんは私の苦労も知らないで好き勝手するし……。

袁紹「何か仰いまして？」

顔良「……ううん、何でもないです」

こういう事には耳聡いんだから、姫は……。

顔良「それより姫。前線の方で動きがあったみたいですよ」

袁紹「前線で動き？」

報告すると、姫は眉を顰めて表情をしかめた。

顔良「はい。砂塵の舞いかたからして、多分先陣が押されてるんじゃないかと思いますけど……」

袁紹「……はぁ、全く。何て役に立たないのでしょう、劉備さんは」

自分でむりやり先陣をやらせておいて、良く言うよぉ……。

さすがに劉備さんが可哀想に思えて、私は心の中で呟く。

袁紹「なんですの、斗詩さん。何か言いたそうな目をしてますわね」

顔良「あ、あはは、気のせいですよー」

やっぱり姫は耳聡いと思う。そう言う特技を別の所で発揮してくれれば、きっと今より勢力を伸ばせるのになぁ。

顔良「……とりあえず、前線の動きにどう対応します？一応、各部隊に戦闘準備を取らせてますけど」

袁紹「それで良いんじゃないかしら？」

顔良「……良いんですかね？」

袁紹「良いですわ。名門袁家に所属する兵士達は、一を聞いて十を知る精兵揃いなのですから、あとは上手くやるでしょう」

顔良「はぁ……」

溜め息が出る。そんなことで本当に大丈夫なのかなぁ。

袁紹「何ですの、その『そんなことで本当に大丈夫なのかなぁ』的な返事は。あなたも名門袁家の将なのですから、もっとシャキッとしなさい、シャキッと」

……三回も読まれた。姫は実は読心術が使えるのかな。それか私が顔に出やすいのかなぁ。

袁紹「お返事は？」

顔良「はぁ～い……」

袁紹「……顔良さん。あなた、お仕置き決定ですわ」

顔良「えーっ！なんでそうなるんですか！」

理不尽だと思います！不幸ですーっ！

その後、他愛もないやり取りをした後に姫が部隊の指揮を執ること決まり、私は文ちゃんの所に戻るのでした。

私って、そんなに無駄におっぱい大きいのかなぁ……。

◇

†趙幻ｓｉｄｅ†

後退中、殿に食らいついてる華雄の部隊を何とかうまくいなしてくれているが、後退戦闘故かやはりジリジリと兵力は削られている。

最初出て来た時はただの猪武者かと思ったが、猛将にして良将と呼ばれるだけはあるか。戦い方がなかなかどうして、上手い。

良質な傷薬のようにベッタリと張り付いて着ている。一度愛紗が反転して兵力を削るかと聞いて来たが、止めさせた。アレは簡単に

は止められない。

そんな中で、鈴々の援護は丁度良く、そして適度な物で俺達は助けられた。

彼女は戦の機微をちゃんとわかっている。愛紗は戦の天才だと言っていたが、俺も今までを見れば同感だと思わざるを得なかった。

趙幻「愛紗！鈴々！もう少しだ！みんな頑張れよ！！」

張飛「あいっ！」

関羽「応っ！！」

趙雲「雅也！」

趙幻「姉者か！朱里はどうした！？」

趙雲「先に本陣へと返した！孫策軍は既に受け流しを始めている！思った以上の手腕だ、アレは強いぞ」

姉者はそう言って後退する部隊に合流し兵を戦列に加えさせる。

孫策殿は強い、か。彼女とて江東の麒麟児と呼ばれる程の人物だ。そうでなくては困るし、今はそれが頼もしい。

趙幻「姉者と愛紗は先に本陣に向かってくれ！ここは私と鈴々任せろ！」

関羽「雅也！？」

趙雲「桃香様達の指示を仰いで伝えれば良いのだな？」

趙幻「流石だ姉者。だから、頼む。このままだとマズいからな……！翅麒を貸す！こいつならばどの馬よりも早く走れる筈だ！」

愛紗は俺の本意が読み取れなかった様だが、姉者はそれを理解してくれた。

俺は翅麒に二人を頼むと呟き、顔を優しく撫でてから飛び降り、両足を踏ん張らせて着地し、砂塵を巻き上げながら転けない様にして走るのを再開する。

愛紗と姉者は走りながら翅麒に飛び乗り、先へと駆けて行った。

張飛「お兄ちゃん、かっこいいのだ♪」

趙幻「そう言ってくれるのは嬉しいが、まずは部隊の指示と後退だ。ここで本当に突破されては困るからな」

張飛「了解なのだっ！！」

状況はあまり良くない。思った以上に華雄軍の士気が高く、強かなのが原因だろう。

殿の部隊は確実に削られ、このまま行けば本気で突破されるのは時間の問題だ。

趙幻「誰か弓を持て！私も射撃に参加するっ！」

周倉「雅也様！これを……！」

趙幻「皐か！助かる！」

指示を出せば兵の中から皐が弓矢を持って現れ、俺に差し出してくれた。

俺は干将・莫耶――双烈白虎を鞘に収めると受け取った弓を颯爽と構え、背中側の腰布に着けた矢筒から矢を取り出し、つがえる。

趙幻「弓隊は矢をつがえて一瞬反転！殿を援護するために斉射しその後また後退続けろ！！走りながらだが、撃たないよりはマシだ！！友を守る為、敵を倒す為に撃てぇぇぇぇっ！！」

俺の指示に、弓隊は各々の矢筒から矢を取り出して弓につがえ、一斉に振り向き走りながらだが殿を越えて敵を射殺す為に矢を放つ。

そしてまた前を向くと、また弓をつがええと後方を向いて矢を放った。

例え狙いが付けられずとも、とりあえず的は後ろにある。後退スピードを落とさない様にするためとは言え、俺達の仲間は俺の無茶な指示に良く応えてくれている。

趙幻「ありがたいことだ……！」

そんな仲間達と共にあることの何と嬉しく幸運なことか。思わず感謝の言葉が口から漏れ出してしまった。

そうやって後退をしていると、前方に矢をつがえ身構えている味

方部隊を見付ける。

そしてその手から一斉に矢が放たれ、俺達の遥か上空を飛び後方の敵部隊へと二回降り注いだ。

「伝令っ！これより槍隊による突撃がされます！部隊を二つに分け、やり過ごせとの事です！」

矢が飛んで行く中、馬に乗った伝令が走って来て俺達にそう伝えてくる。

愛紗と姉者は無事に本陣へ戻ったか。ならば、俺達も無事に合流しなくてはなっ！！

趙幻「あいわかった。此方もすぐに合流すると伝えてくれ」

「はっ！」

趙幻「皆の者！これから味方が前方より突撃して来るぞ！趙雲隊は張飛隊に着いて左翼側に行け！関羽隊は私達と共に右翼側に別れろ！味方に巻き込まれる様な愚行！決して晒すなよ！！」

「「「「「オォォォォォォォォォォォッ！！！！！」」」」」

張飛「来たよ！！」

指示を出した後、鈴々の言葉通り前方から砂塵が上がり、穂先を揃えた槍隊が突撃して来る。

俺は鈴々と一度顔を見合わせ、小さく頷くと互いに兵を率いて左

右に別れた。

劉備「雅也君！鈴々ちゃん！」

槍隊の突撃をやり過ごしながら走り、後退を続けていると部隊の指揮を執っている桃香に声を掛けられる。

劉備「二人とも、愛紗ちゃんと星ちゃんを連れてこのまま後方に駆け抜けて！私達の部隊で一度押し返したあと、そのまま袁紹さんの所に向かっちゃおう！」

張飛「了解なのだ！」

桃香の指示に、左翼を走っている鈴々がこちらにも聞こえる様な声で返事をする。

俺もそれに頷くと、鈴々達や愛紗、姉者と合流してまた後方へと走り始めた。

趙幻「桃香も早く後方へ向かってくれよ！」

劉備「うんっ！朱里ちゃん！雛里ちゃん！」

一度振り向き、桃香の返事を聞いた後また前を向いて走る。

朱里と雛里がその後指揮を取り、弓隊が弾く弦の音と矢が風を切る音を背中に聞きながら、俺達はただただ後方へと前進を続けた。

趙雲「雅也！」

その中で、兵達の中から翃麒に乗った姉者が俺に併走する様に現れる。

趙幻「さすがだな姉者！翃麒が認めたか！」

趙雲「いや、こやつは自然とお前の下へ走ったまでだ。良い馬だな。この馬に乗っていると、他の馬など乗りたくなくなりそうだ」

趙幻「やらぬぞ。翃麒は我が大事な相棒なのだからな」

趙雲「わかっているよ。だが、もうしばらく借りる」

趙幻「あいわかった。翃麒、姉者を頼むぞ」

そう伝えて翃麒を見れば、任せろと言わんばかりに嘶いて見せる。

こいつ、女を乗せているのを喜んでいるのか？何時もより走り方に力が入っているぞこん畜生めが。

◇

戦いはまさに混沌を極めていた。

俺達劉備軍が後退と見せ掛け、そのまま敵部隊を袁紹軍になすりつけたからだ。

桃香達と上手くいったと喜びを交わしたが、それも一時の事。俺達はこの混乱に乗じ、押し返すのもまた作戦の内だからだ。

各諸侯も、俺達の思惑通り総大将軍を救援しようと動いていた様だった。

だが、その中で曹操軍の動きは鈍く、俺は見抜かれていたかと舌打ちをすると共に流石だなと舌を巻く。

諸葛亮「孫策さんは、この混乱の内にシ水関を占拠するつもりみたいですね」

張飛「むーっ！ズルいのだ！せっかくなら最後まで協力してくれればいいのに！」

朱里が放っていた間者から受けた報告を話していると、鈴々が頬を膨らませて苦言を叫ぶ。

趙幻「そう言ってやるな鈴々。彼女達は彼女達でやることは果たした。ならば、その先の事をとやかく言う筋合いは私達に無いのだよ」

張飛「わかってるのだ……。でも、やっぱりズルいのだ！」

プンスカと怒る鈴々に、俺は苦笑する。

しかし、強かというか賢いな。実を言えば、共同戦線ではあったものの華雄の兵はこちら側に多く流れていた。

周瑜殿……いや、孫策殿の手腕には驚かされる。先陣の内でも最小限の被害で、最大限の利益を得る為に動いていたのだから。

してやられたと言っても良い。だが、認めなければならない。彼女達の方が一枚上手だったという事を。

劉備「上手くいったけど……このまま、連合軍壊滅～とかにはなら

ないよね？」

そんな中で、袁紹軍を眺めていた桃香が唐突に不安の声を出す。

だが、それは杞憂に終わるというものだ。大丈夫だ、問題ない。

諸葛亮「大丈夫です。ほら」

関羽「ん？あれは……」

朱里が指差す方を向いてみれば、そこには曹の牙門旗があった。

どうやら、彼女は実よりも名を取った様だ。華雄軍に横槍を入れてくれる様で、その動きに敵も動揺を始めている。

趙雲「ふむ……。このままだと、戦場は益々もって混乱するな」

張飛「ならその時を狙って華雄と一騎打ちするのだ！んでもってね、鈴々がドーンと勝って、ババーンって一気に形成逆転なのだ！」

鈴々も鬱憤が溜まっているのだろう。一騎打ちをしたいと気合いを入れて口を紡ぐ。

だが、俺はそれを止める。

趙幻「待て、鈴々。悪いが一騎打ちは私にさせてもらおう」

張飛「えーっ！？お兄ちゃんなんで！？ズルいのだズルいのだズルいのだ！！」

俺の言葉に機嫌を損ねたのか、鈴々は声を荒げて地団駄を踏む。

関羽「何かあるのか、雅也」

愛紗はそんな鈴々の気持ちを察しているのか、俺に疑問を尋ねてきた。

目線が俺に訴えている。鈴々にやらせないのかと。

趙幻「彼女は董卓軍の良将だ。ならば、殺すに惜しい。私はアレを生け捕りにして、情報を聞き出したいのだよ」

鳳統「……しかし、それでは他の諸侯に面目が立たないのではないでしょうか」

趙幻「確かにな。だが、どうしても気になる事があるのだ。だからこそ、殺すに惜しい」

関羽「どういうことだ？」

皆が皆、疑問があるのか俺に眼差しを向けて来る。

華雄には、どうしても聞かなければならない事がある。俺の記憶が正しいと判断するためにも、絶対に彼女の言葉は必要不可欠なのだ。

……それに、本心から殺すのに惜しいと思っている。甘い考えだが、それなら俺は手に入れてしまいたい。

趙幻「頼む。今はまだ言えないが、ここは我が命に掛けて聞き分け

て欲しい」

そう進言すれば、一同にどうしようという雰囲気が醸し出される。

趙雲「……わかった。私は雅也を信じよう」

関羽「そうだな。あの雅也が考えも無しにそんな事を言うはずがない」

劉備「そうだよね。私も雅也君を信じるっ」

姉者、愛紗、桃香の言葉に俺はただただ礼をするしか出来なかった。

諸葛亮「……ですが、それで問題が発生した時はお願いしますよ？」

鳳統「……雅也さん、ごめんなさい……」

趙幻「ああ。その時はこの趙守殻。命を差し出す覚悟もある」

張飛「……お兄ちゃんはズルいのだ。そう言われたら、鈴々は引くしかないのだ」

趙幻「すまないな鈴々。だが、もしこの命がここで果てなくば帰った後に鱈腹飯と酒を奢ろう」

張飛「約束だよ？」

趙幻「ああ、約束だ」

未だに納得いかないのであろう、鈴々の言葉に俺は膝を折って目線を同じにしてから約束を交わす。

さて、約束を交わしてしまったからには死ぬ訳にはいかないな。華雄を捕虜にした後どうするかは後にしよう。

……案外、袁紹なら簡単に見逃してくれそうだがな。

要は、袁紹をどうにかすれば良い。なら、やりようは幾らでもある。

劉備「じゃあ、華雄さんの事は雅也君に任せるとしてどう道を空けよう」

関羽「なら、我々が雅也の援護に回ろう。私達は部隊を率いて華雄隊の右翼を受け持つ」

趙雲「では私は左だな」

桃香の問いに、愛紗と姉者が自分から提案する。

朱里もそれで大丈夫と判断したのか、顎に手を当てながら頷いていた。

諸葛亮「お二人が左右から当たれば、一瞬ではあると思いますが、華雄さんの本陣の道が開かれることになるでしょう。そこを、雅也さんが突破してもらえば……」

趙幻「任せろ。私が責任を持って勝利を納める」

自信に胸を張り、俺は気迫を纏ってそう宣言した。

桃香達もそれを良しとして、首を縦に振る。

趙幻「鈴々」

張飛「どうしたのだ？」

趙幻「鈴々は隊を率いて華雄隊の後方に回ってくれ。退路を断てば、更にやりやすくなる」

張飛「……わかったのだ。鈴々はお兄ちゃんを信じるのだ」

鈴々は少しの間を置いて、そう返してくれた。

――鈴々には、今回随分と悪い事をしてしまった。先陣に立たせず、一騎打ちまで奪い、援護に回してしまっている。

彼女には、必ず何かで返そう。俺はそう心に誓い、深呼吸をしつ精神を研ぎ澄ました。

趙幻「それでは桃香。行ってくる。三人とも、任せたぞ」

俺の言葉に、一同がそれぞれの声で「応っ」と返答してくれる。

願わくば、上手く行く事を願いつつ。翅麒を姉者に預け、俺達は戦場へと舞い戻って行った。

◇

混乱する戦場。死神に魅入られた者は悉くその首を、体を、魂を刈り取られ、やがて死体は積み重なって行く。

俺達はその戦場を駆け抜け、董卓軍に対し大打撃を与える事に成功した。

董卓軍は一度敗走した俺達の反撃に気を取られ、陣を崩し掛かっている。

愛紗と姉者は上手くやっている様だ。鈴々も、大量の旗を掲げた部隊を率いて敵の混乱に一役買ってくれている。

アレは恐らく、雛里の策だろう。何とも、やはり彼女の知略と読みは恐ろしさすら感じるものだ。味方で良かったと心底思う。

やがて、敵を斬り伏せ続けていれば本陣へと道が見えた。

俺は敵兵の間を縫うように、そして出来る限り斬り捨て、その中を突き進んで行く。

そしてやがて、短く切りそろえられた灰色掛かった銀髪を持つ、巨大な斧の様な武器を持った女性を見つけた。

大胆な衣装は少々目のやり場に困るが、間違いない。アレが華雄だ。

華雄「全く……我が軍の質も落ちたものだ。このように無様な有り様を曝すとは……」

趙幻「何、それは間違いだ。関から出てこなければ、間違いなく其

方に形成は傾いていただろうに」

愚痴を垂れている華雄に対し、俺はゆっくりと歩みを続けながら言い放つ。

華雄「誰だ！」

趙幻「平原の相、劉備が一の家臣。趙守殻だ。華雄将軍とお見受けする」

華雄「……男？ふん、劉備の家臣と言ったな。どうやってここまで来た」

趙幻「何。仲間に部隊を引きつけてもらい、走り抜けて来たまで」

華雄「何だと……！ここまで単騎で来たのか……！」

趙幻「そういうことだ。……華雄よ。貴様は殺すに惜しい。投降するならば、部隊も貴様の命も我が名に誓い助けてやろう」

顔を前に向けながら体を水平にし、右手の莫耶を上段に、左手の干将を中段に構えながら俺は進言する。

……聞いてくれるとは思っていないが、取り敢えずだ。俺は彼女を見据えながら、その返答を待つ。

華雄「……ふっ。はーはっはっはっ！」

趙幻「何がおかしい」

華雄「優男が、この私に勝つと思っていてあまつさえ投降しろだと？これが笑わずに居られるか」

やはり、口で言っても聞いてくれるわけがないか。元々わかっていたが、やはり剣を交えるしか道はないと。

華雄「ほざくなよ青二才。単騎でここまで来た気概は誉めてやるが、その細い体で何が出来る。……怪我をする前にこの場から立ち去れい」

趙幻「……断ると言わせて頂こう」

華雄「貴様……！」

趙幻「たわけっ！私は断ると言った！！」

華雄「なっ……！」

まさか、相手にもしようとしないとは予想外だった。

ならば、その気にさせるしかない。俺は気迫と殺気を爆発させて、華雄を睨み付けた。

それを察したのか、華雄の顔が緊張に固まり俺を見返して来る。

華雄「……良いだろう。その気迫、しかと認めよう。我が戦斧の血錆にしてくれる！」

趙幻「ククク、言ったな華雄。だが、私は強いぞ？」

華雄「ほざくな、優男！！」

趙幻「では、華雄よ。いざ尋常に――勝負っ！！」

戦いの合図、とは言わないが宣言紛いの事を叫び俺は地面を力強く蹴り出す。

華雄はそれに反応し、戦斧を力任せに振り下ろして来た。

趙幻「遅いっ！」

それを右に跳んで回避し、俺が居た場所から土煙と土の破片が散らばる。

なんつー馬鹿力。鈴々とためを張れそうだな。

それから俺は莫耶を袈裟に振るうが、華雄はそれを回避。余裕の笑みを浮かべてくる。

まだまだ、これで終わりと思うなよ！

趙幻「せいっ！はぁっ！！でぁぁぁぁあっ！！！」

華雄「ぐっ……！！」

干将による斬撃と、莫耶による突きを組み合わせた手数にものを言わせる連撃。

だが、彼女は苦々しい表情を浮かべているもののそれを戦斧の柄で受け、流し、見事に防いで来た。

華雄「やられるままと思うなっ！」

その咆哮は、反撃の狼煙か。戦斧が自在に振り回され、まるで嵐の様になって俺へと襲い掛かって来る。

――一撃目、屈んで回避。二合目、干将で受け流す。三段目、莫耶で弾く。四つ目、頬を掠めたが体を仰け反らせて回避。五回目、振り下ろされた戦斧を双烈白虎を交差させて受け止め鍔迫り合いへ。

趙幻「流石は、猛将にして、良将と、名高き、華雄将軍っ！その武！交える事が出来て、身に余る光栄っ！」

華雄「貴様こそ、存外、やるではっ、ないかっ！ただの、優男かと、思えば、そうでは、ないらしいなっ！！」

趙幻「嬉しい事を、言ってくれるっ！！」

互いに力を押し合い、やがて俺は叫んでから戦斧をいなして後方へと跳ぶ。

手が痺れそうになっているが、まだ握れる。双烈白虎も刃こぼれ一つしていない。確認した後、俺はまた身構えて華雄を見据えた。

趙幻「それ程の実力者が何故圧政を敷く董卓などに加担し、守ろうとしている！その武を何故民の為に振るわない！権力に目が眩んだのか！華雄将軍！！」

華雄「……っ！違う！私とて、民の為に戦っている！！その民を脅かして居るのは、他ならぬ貴様等だ！！」

趙幻（やはり、そうか……）

華雄の口から出た怒号は、つまり董卓の圧政など虚言だということを示している。

刃を交えて感じたが、その言葉は本当だと感じるに偽りは無いと断言出来た。

薄々感づいていたが、この戦の元凶は此方にあるのだろう。恐らく、袁紹あたりの嫉妬が原因か……？

華雄「それに、董卓は……」

趙幻「ん？」

華雄「何でもない。敵である貴様等には元より関係ない事！趙守殻！来ないのならば、此方から往くぞ！！」

華雄は一瞬、忌々しそうにしながら主の名前を呟いた。

どうやら、まだ裏が有りそうだ。だが、それを聞くには戦わなければならない。

華雄「オォォォォォォォォオッ！！！！」

趙幻「ハァァァァァアッ！！！！」

戦斧による嵐を紙一重に避けながら、三次元的な動きをして反撃する。

受け流してから振り上げ、防がれ、なぎ払いをかわし、空中から体を捻らせ双烈白虎を振り下ろすも避けられ、火花を散らし、血を滲ませ、汗を飛ばす、決死の攻防。

油断すれば、死神の刃は命を刈り取りに来る。

趙幻「董卓はっ！やはりっ！圧政などっ！していないのっ！だなっ！」

華雄「分かっていて！何故！貴様は！攻めてくる！」

趙幻「此方にも！理由が！あるんだよ！！」

華雄「ならばっ！やはりっ！貴様は！敵だぁっ！！」

刃と刃が火花を散らし、途切れ途切れだが俺達は言葉を紡ぐ。

今は、ただ。その時間が楽しかった。心を踊らせるに充分だった。血が沸騰しているんじゃないかと思うくらい体が熱かった。興奮に鼻血が出そうだった。心臓が早鐘を打つが、苦しさを感じなかった。

趙幻「華雄！私はっ！貴様を！気に入った！」

華雄「なっ、何！？」

言葉と共に戦斧ごと華雄を押し飛ばし、笑みを浮かべる。

それがおかしかったのか、彼女は戸惑いの表情を一瞬だけ見せた。

趙幻「言葉で無理ならば、力でもって貴様を降させる！董卓も、圧政を敷いていないのならば必ず助ける！！」

華雄「何を世迷い言をぉぉおっ！！」

戦斧を構え、華雄は力を溜めてから突撃して来てその得物が一番威力を発揮するであろう攻撃の為、振り上げた。

俺はそれに対し『敢えて』双烈白虎を鞘に収め、精神を更に研ぎ澄ます。

我が精神はたゆたう水面。何時如何なる時も静かに、そして深く透明な泉。

瞬間、見えた。一筋の水の一滴！！

趙幻「ト　ラ　ン　ザ　ム！！！！」

華雄「っ！！」

増幅し膨張した内気が体を駆け巡り、髪の毛一本にまで意識が行く。

久方振りの発動だが、今がその時。瞬時に居合いの構えを取り、迫り来る凶刃に対して体の捻りを加えた抜刀で迎え撃った。

趙幻「瞬閃抜刀っ！！」

華雄「なにぃっ！？」

振り抜かれた干将の刃は華雄の戦斧を砕き、守るものがなくなった体は隙だらけ。俺はそのまま両手で干将を握り締め、勢い良く袈裟切りに――。

趙幻「連功の型！！！」

華雄「ッ！！！！」

――振り抜いた。

華雄は声に成らない声を出し、その体から大量の血を噴き出させる。

俺は目の前に居る為、その返り血を大量に浴びることになった。

華雄「……殺せ」

だが、華雄は死んでおらず息絶え絶えになりながらもそう言ってくる。

俺はそれを見下ろしながら干将に付着した血を振るって飛ばし、鞘に収めた。

趙幻「諦めろ華雄。私は貴様を生かす」

華雄「……私に、生き恥を曝せというのか」

趙幻「そうだ。貴様は言った。董卓は圧政を敷いていないと。民の為に戦っていると。そして私も言った筈だ。貴様を気に入ったとな」

俺が言葉を紡ぎ終えると、華雄はキョトンとした表情を浮かべ、目を丸くする。

そして、小さく笑うと両目を閉じた。

華雄「……最早、舌を噛み千切る力すらないか。私は生きるしかないのだな、趙守殻」

趙幻「恨んでくれても構わんよ。だが、私は一度決めた事はやり通さないと気が済まない男だ。故に……」

華雄「私を生かす、か。全く、おかしな男だ。……我が名は華雄。真名は【萌夏(ほうか)】だ。私を生かす責任、果たしてもらうぞ」

趙幻「我が名は【趙幻】。字は【守殻】。真名は【雅也】だ。任せろ。そして今は眠れ」

華雄「そう……させてもらう」

真名の交換をしてくれたという事は、大丈夫だろう。寝息を立て始めた彼女に一度礼をして、俺は萌夏の砕けた武器を手に掲げた。

趙幻「シ水関の猛将華雄、劉備が一の家臣、趙守殻が打ち勝った！！我を恐れるならば投降しろ！！そうでない者は、我が双烈白虎の血錆にしてくれる！！！」

自分が出しうる最大の殺気と気迫、そして覇気を交えた言葉に辺りに居た戦闘中の華雄隊の動きが鈍る。

その視線は自然と俺が掲げた壊れた戦斧と血まみれの体、そして

横たわる萌夏に向けられていた。

兵達は自分たちの将が負けたのを確認すると、それぞれの行動に出る。

その場に立ち尽くす者。一心不乱に逃げ出す者。素直に投降してくる者。敵討ちと言わんばかりに襲って来る者。

ちなみに、俺は明鏡止水……トランザムを解いていない。その俺にとって、襲って来る一般兵など赤子にも等しく、簡単に斬り捨ててまた返り血を盛大に浴びた。

一方、投降して来た兵には手厚く対応する事を伝え、自軍の兵と共に萌夏を本陣へ連れて言ってくれと指示する。

勝ち鬨は上げた。ならば俺はこの場ではなく、直ぐに袁紹の元に向かう事を決める。

トランザムを解かず、制限時間が来る前に俺は行かなければならなかった。

前髪と顔を返り血が滴り落ち、今の俺はきっと酷い格好だなと内心苦笑する。

趙雲「雅也っ！無事……！？」

関羽「どうしたのだ雅也っ！なんだその夥しい血は！全身真っ赤ではないか！！」

張飛「けっ、怪我したのか！？誰か！！誰かぁ！？」

趙幻「心配するな。これは殆ど敵の返り血だ」

走り続ければ、翅麒に跨る姉者と愛紗、そして鈴々とばったりと出会した。

どうやら華雄隊が大人しくなったのを機に一度集まった様だ。

趙雲「か、返り血か。何だ、肝を冷やしてくれる……」

関羽「まるで幽鬼の如くだったな。本当に大丈夫なのか？」

ホッと胸をなで下ろす姉者と、本気で心配してくれる愛紗。鈴々はジッと不安そうに俺を見つめている。

趙幻「だから大丈夫だと言っている。……愛紗、華雄を捕虜にした。だが、戦闘で大分傷を負わせてしまってな。早急に対処を頼むと桃香に伝えてくれ。くれぐれも、間者に見つからない様にとも頼む」

関羽「了解したが……。雅也はどうするんだ？」

趙幻「袁紹をどうにかする」

趙雲「ほう……。なる程な。その壊れた戦斧と夥しい返り血。そして明鏡止水を使っているのはそのためか」

張飛「そう言えば、お兄ちゃんの雰囲気全然違うのだ。……少し、怖いのだ」

趙幻「怖がらせて済まないな。だが、これは必要な事なんだ。時間

が惜しい。姉者、翅麒を返してもらうぞ」

趙雲「あいわかった。……雅也、くれぐれも無茶はするなよ」

わかっているさ。そう答えて苦笑を漏らすと、姉者は呆れた様に溜め息を漏らす。

その後、俺は姉者と乗り手を変えて翅麒に跨り、愛紗達と別れて本陣へと向かった。

その途中、刹那的だったが全身に痛みを感じたのは制限時間が迫っているせいか。

それを察したのか翅麒が心配そうに鳴くが俺はそれに大丈夫だと呟く。

……本陣の方も戦いが一段落着いていて、敵兵の死体と味方の死体が伏しているだけで軒並み静かだった。

その中で巨大な剣とこれまた大きな鎚を持つ金色の鎧を着た二人の少女を見つけ、俺は翅麒に駆け寄らせる。

趙幻「いきなりで済まぬ。袁紹軍の将と見受ける。袁紹殿に取り次ぎ願いたいのだが、よろしいか？」

二人は俺を見て絶句している様に見えた。

そりゃあ、そうか。いきなり血だらけの男が声を掛けてくれば驚くよな。

趙幻「もう一度聞く。平原の相、劉備が家臣。趙幻だ。敵将華雄に打ち勝った事を伝えに来た。袁紹殿に取り次ぎ願いたい」

顔良「……は、はいっ！わかりました！」

文醜「……おい、斗詩ぃ。良いのか？あれ絶対にヤバい奴だぜ？雰囲気怖いし、全身血塗れだしさぁ」

顔良「……だってぇ、案内しないと後が怖いんだもん」

文醜「……あたい、しーらねっと」

顔良「文ちゃん酷いよ～」

……全部聞こえてますよ、お二人さん。

しかし、このままだと埒があかないな。仕方ない、少々強引だが案内せざるを得ない様にするか。

趙幻「ふむ。お二人が文醜殿と顔良殿か。お噂はかねがね。お会い出来て光栄だ」

文醜&顔良「っ！！？」

どうやら、二人は俺が名前を知らないと思っていたのか顔をひきつらせて体を跳ね上がらせた。

趙幻「済まないが、頼む。少々急いでいるのだ。このまま二人に案内されねば、このまま軍内を駆け回る事になるのだが……」

まあ、それだと俺の悪評と劉備軍の風評に関わりそうだが……。今はそうも言っていられないか。

顔良「……どどどどうしよう、文ちゃ～ん」

文醜「……そんな事言われたって、でもアレが軍内を走り回るのはちょっとマズいよなぁ。仕方ねえ。腹括るしかないか」

趙幻「お二方？」

文醜「いや、わりぃわりぃ。趙幻って言ったか？あんたのその見え目と雰囲気に引いちまってな」

顔良「ちょっと文ちゃん！？」

いきなりストレートなことを言われた。

顔良が涙目になって文醜を窘めようとしているが、彼女に悪気はないのだろう。キョトンとしている。

趙幻「気にしないさ。そんな格好なのは、自覚している」

文醜「そりゃあ良かった。そんじゃ早速姫の所に案内してやっから、着いて来な」

◇

顔良と文醜に連れられ、俺は袁紹の元へと翅麒に跨ったまま歩かせる。

一応、二人には何故敗走をしたのかを説明すれば驚かれた。ついでに申し訳程度に謝っておいた。

その後、何故血で真っ赤なのか聞かれたのでそれにもふざけて答えておいた。そしたら別の意味で驚かれた。

そりゃあ、『白い服を血で深紅に染める為』と言えばドン引きするだろうな。うん、自分でもわかる。

そんな、他愛もないやり取りをしていると袁紹の所に着くまでの短い間だったが二人の人相というか、性格が何となく把握出来た。

顔良は苦労人。文醜はお気楽。何となく、薄れている前世の記憶のイメージと同じだったから安心した。その上で、顔良には心の中で同情した。

二人は良い娘であることがわかったから、それもまた収穫かもしれない。二人は何故あの馬鹿に付き従っているのだろうか、疑問である。

そんな道中（？）の話はさておき、今目の前にはその『馬鹿』がいる。

俺の見た目と雰囲気に圧せられているのか、表情は引きつっていた。

ちなみに、ちゃんと翅麒から降りて片膝を着いてはいる。

形だけでも敬っているのは見せないとな。一応総大将様だし。

袁紹「そ、それで趙幻さん？華雄さんを負かせたというのは、本当なのかしら？」

趙幻「はい。その証拠に華雄の武器をお持ちしました」

袁紹「武器？普通は頸を持って来るべきじゃありませんの？」

袁紹の疑問は尤もだ。敵将の頸は、それだけで死んだ事を雄弁に語るモノ。まぁ、殺していないのだからそんなモノない。

趙幻「単刀直入に申し上げれば、私は一騎打ちに勝っただけ。華雄は私が自ら捕らえました」

袁紹「捕らえた？」

趙幻「はい。敵方の情報を得られると思い、私の独断ではありますが」

袁紹の秀麗な眉がピクリと動く。

袁紹「……それで、趙幻さんはそれでどうするつもりですか？」

言葉の端に威圧を孕んでいるのを感じ、内心良く思っていないのだろうと察する。

彼女にとって、反董卓連合軍は大切な足掛かりになるものだ。その連合軍を結成するに当たる理由が、虚言であると知れれば瓦解するだろう。

董卓は実は圧政などせず、それに攻め入った連合軍は悪者だ、な

んて風評も出て来る可能性もある。

趙幻「何を異なことを仰いますか。袁紹殿、私が華雄に求めているのは『確実な敵軍の情報』ですよ？」

袁紹「なっ……！」

趙幻「別に袁紹殿を困らせる様なことなど致しません。それに、『董卓は悪者』であるというのは変えようもない事実ですからね」

袁紹の狼狽は、見ていて心をスカッとさせるものだった。

しかし、俺が言った通り董卓という人物は悪者だという事は変えようもないこと。例え、それが嘘だと『俺達』が知った所で所詮は弱小勢力。他諸侯に言い触らした所で、この中で一番力を持つ袁紹や曹操が世迷い言と一蹴すれば信じて貰えない。

だから、董卓には悪いがこのまま悪者であってもらう。非常に歯痒く、悔しく思うが言わば『必要悪』なのだ。俺達が力を付ける為にその波に乗らざるを得ない現実には、憤りを感じる。

袁紹「そ、そうですわね。趙幻さんの言うとおりですわ。私達はこのまま雄々しく、勇ましく、華麗に進軍するのです」

趙幻「ええ、そうです。ですから袁紹殿」

袁紹「何でしょうか、趙幻さん」

趙幻「華雄将軍への対応は、私達劉備軍が受け持ちますからそのつもりで」

袁紹「なっ……！」

ここが落とし時。そう思った俺は、覇気を放ちながら進言する。

趙幻「何をそんなに狼狽えているのですか？まさか、知られてはいけない事でも？」

袁紹「こ、この私が狼狽えるなんてあり得ません！……わかりましたわ。華雄さんへの対応は、劉備さん達に一任します。ですが、知った情報は全て知らせる事。よろしいですわね！」

最後の最後のささやかな抵抗か、袁紹はそう言い放ち、その場を去っていく。

相当虫の居所が悪くなったのだろう、その足取りに優雅さも気品もなく、ただ怒りが含まれていた。

袁紹からしてみれば、俺と萌夏を殺すのはマズい。先のやり取りは各諸侯の間者も聞いているだろうし、それで俺か萌夏の頸を跳ねれば内容の肯定に繋がるからだ。

董卓は悪者ではない。その肯定に。

俺は袁紹が完全に立ち去ったのを確認した後、トランザムを解き深く息を吸う。

頭が痛い。体がダルい。全身に浴びた返り血のせいか、気持ち悪い。

しかし、騙すというよりも脅すという方が合っていたな。ククク、袁紹はやはり将としては良くないだろう。

その後、俺は重い体を歩かせて翅麒に跨り、劉備軍の本陣へと向かった。

桃香達が俺を見て驚き、朱里と雛里が泣いてしまった時は焦った。

それから、袁紹とのやり取りを説明して萌夏への対応と投降してきた董卓軍兵士の処遇は俺が決める事になった。

言い出しっぺだしな。ま、妥当だろう。

萌夏の傷は見た目は派手だが命に別状はないそうだ。それにより、投降して来た華雄隊の面々から感謝もされた。

やはり、アレだけの軍を率いているだけに兵士達からの人気も高いようだ。

まあ、何にせよシ水関の戦いはこれにて終結。少しの休息を関内で過ごした後、俺達はまた次なる難敵、【虎牢関】に進軍しなければならない。

さて、董卓をどう助けるかも考えたり相談しないとな。やることは山積みだぁ。

シ水関。華雄。一騎打ち。（後書き）

というわけで、華雄さん仲間入りです。

華雄さん好きなんで、この際仲間にしちまえって感じでやっちゃいました。

真名は例によって例の如く捏造です。

それと、周倉さんをオリキャラで出してみました。

最初弓兵だったのは、人数不足だったからです。べ、別に後付けじゃないんだからね！？

……ごめんなさい。後付けです。

次話は虎牢関前、華雄さんに情報を吐かせる為という話し合いをする予定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9535w/

異界転生譚

2011年10月13日06時58分発行